

靈峰に抱かれ生きる人々と伝統

—立山町の調査記録—

地域社会の文化人類学的調査 27



2018

富山大学人文学部文化人類学研究室

はじめに

富山大学文化人類学研究室（富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野）では、1979 年の研究室創設以来、北陸の一地域で毎年調査実習（「文化人類学実習」1～4）を行い、得られた知見を報告書「地域社会の文化人類学的調査」にまとめてきました。本報告書はその第 27 巻になります。

県東部に位置する立山町については、これまで第 9 巻『猿害と地域社会』（1999）でとりあげました。ただし、同町の祭りや民俗芸能についてはこれまで一度も扱ったことがなく、今回初めてとりあげることができました。

2016 年秋、当時 2 年生だった学生たちと話し合っ て調査地域を立山町と決め、2017 年春より本格的に調査を進め、秋からその成果を各人執筆し、本報告書にまとめてきました。

このスケジュールは例年通りのものでしたが、今回はいつもと違ったこともありました。それは立山町でこのところ毎年開催されているインターカレッジコンペティションに参加したことでした。11 月に提案内容を記したレポートを提出し、12 月には他大学の学生たち 8 チームとともに立山町で提案内容についてのプレゼンテーションを行いました。本研究室ではこれまでこうした提案型の研究にはとりくんできておらず、ノウハウのない中でのものでしたが、学生たちは積極的にとりくんでくれました。私はこの準備に伴う学生たちの本報告書執筆への影響を懸念していましたが、両者を並行して進めてくれ、影響を感じさせないくらいのペースで学生たちは執筆してくれました。

思い返せば、昨年 8 月下旬に合宿形式で一週間立山町で集中的に調査を実施しましたが、彼らの積極的な様子にこちらは感心していました。例年調査がうまく進められず元気が出ない学生がどうしても出てしまいましたが、その時は違いました。皆自分たちのペースで調査を着実に進めているのが感じられ、頼もしく思われました。例年、合宿が終わる際、この後大丈夫だろうかという一抹の不安を抱えながら帰路につくことが多いですが、この時は油断しなければまず大丈夫だろうという印象を持ちました。おそらく夏場に例年以上に順調に進められていたおかげで、11～12 月にインターカレッジコンペティションがあっても、それに大きく左右されることなくやれたのでしょう。

一年前まではレポート用紙数枚程度しか書いたことがなかった学生たちですが、みな自分の関心にしがたってテーマを立てて調査に臨み、各自まとめた長さの原稿を執筆してくれました。指導に際して教員は何度も学生の前稿に目を通し、不明瞭・不正確な文章などないか繰り返しチェックしてきました。1 月に学生たちはお世話になった地元の方に原稿を見ていただき、間違いがないか確認してもらいました。好意的なコメントを多数いただきましたが、厳しい意見をもらった学生もいました。こちらの指導の至らなかった点であり課題と思っております。つたない点は多々あると思いますが、寛大に見ただけだと幸甚です。不十分な点については指導する私たちに責任があることをあらかじめお伝えいたします。忌憚のないご批判・ご助言をお聞かせください。

本報告書は各章のタイトルはもちろん、報告書のタイトルや章立て、表紙など、いずれも学生たちが話し合って決めたものです。教員は議論を聞きながら意見を述べることはあっても、学生たちが判断して決定していきました。そうした意味で本報告書は学生たちの手作りのものといえます。彼らにとって学生時代のいい思い出になることはたしかでしょうが、願わくは立山町の方たちにとっても印象に残るものであればと思う次第です。

最後になりましたが、このたびの調査では立山町役場の方々をはじめ、じつにたくさんの方にお世話になりました。ここにそのお名前を記すことはいたしません、この報告書は皆様のご協力あつてのものであることはまちがいありません。誠にありがとうございました。

2018 年 2 月 8 日

富山大学人文学部社会文化コース文化人類学分野
藤本 武／野澤豊一

追伸

本電子版では、先月発行の印刷版と異なり、写真がカラーであるだけでなく、巻末に昨年参加した立山町インターカレッジコンペティションの関連資料も掲載しました(3月15日)。

目次

はじめに（藤本武／野沢豊一）

地域の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第1部 今を生きる伝統

1. 浦田における獅子舞の継承—中申会の役割に着目して—（佐藤宏子）・・・・・・17
2. 利田荷方節の変遷と継承—地元で息づく民謡を伝えるために—（北原拓実）・・・・48
3. 受け継がれてきたお盆行事—オショウライと米道踊り—（伴聡一郎）・・・・・・69
4. 変化する布橋灌頂会とそれを支える人々（迫間唯）・・・・・・・・・・・・・・85
5. 在りし日の一大エンターテイメント、池田浄瑠璃（山本卓也）・・・・・・・・・・107
6. 地域に息づく工芸品 越中瀬戸焼について（福田響介）・・・・・・・・・・・・122

第2部 人々の営み

7. 五百石中央商店街の変遷と現状から見える地域交流（山浦裕稀）・・・・・・135
8. 地域ブランドの現状と課題—立山ブランドの事例から—（藤原倭太）・・・・・・169
9. 暮らしから見る立山町の大きな魅力（富奈緒）・・・・・・・・・・・・・・191
10. 目桑集落での人びとの暮らしと地名（深井美希）・・・・・・・・・・・・・・213

（資料）

- ・2017年度立山町インターカレッジコンペティション事前レポート
- ・2017年度立山町インターカレッジコンペティションプレゼンファイル

地域の概要

1-1. 立山町の自然と地形

立山町は、中新川郡に属し、県中央部から東南に細長く位置している（図 1）。北部は黒部市・上市町・舟橋村に、西部は常願寺川を境として富山市に、南部も富山市に接し、東部は立山連峰を経て長野県に接する。面積は 308.79 平方キロメートル（東西約 43 キロメートル、南北約 21 キロメートル）である。

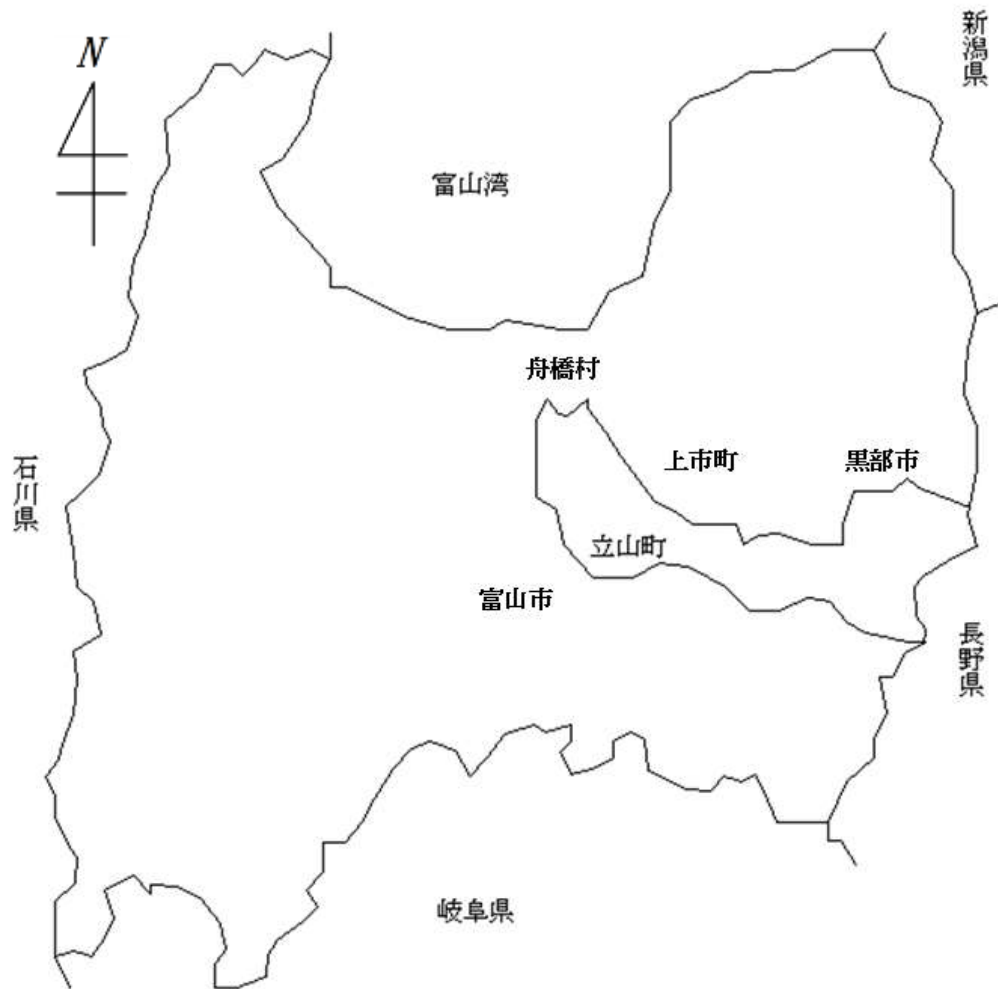


図 1. 富山県における立山町の位置

立山町の地形は、変化に富み恵まれている。河川は、主に白岩川、栃津川、常願寺川の 3 つがある（図 2）。町の北西部では、栃津川と白岩川により三角州が形作られ、その南には町民の大多数が暮らす常願寺川の扇状地がつづいている。この扇状地の東側には、もとの常願寺川の扇状地が隆起してできた河岸段丘が広く分布している。常願寺川は、「日本一の暴れ川」と言われるほど洪水氾濫を繰り返してきた川であり、砂防工事が 100 年にわたり

行われてきた。現在、町民が安定して暮らせるのは、長きにわたる自然との闘いがあったからである。また、当時建設された白岩砂防堰堤は落差が日本一で、平成 21 年 2009 年には国の重要文化財に指定されている（図 2）。

人々が暮らす扇状地や河岸段丘の後背地には丘陵があり、高度 3000 メートルにも達する立山連峰がひかえている。2500m 以上の代表的な山が 8 つ存在する。長野県との境にある針の木岳（2821m）、長野県と宇奈月町との境に鹿島槍ヶ岳（2889m）、上市町との境に剣岳（2998m）、そして、大汝山（3015m）、雄山（3003m）、別山（2885m）、天狗山（2500m）と連っており、北アルプスの一部を形成している（図 2）。

豊かな地形や自然から、観光地として知られる場所がいくつも存在する。代表的なものとしては、美女平^{びじょだい}、みくりが池、弥陀ヶ原、室堂、地獄谷などがある（図 2）。美女平は、国内でも数少ない天然性スギ巨木が立ち並ぶ。みくりが池は火山湖で、青く澄んだ湖面には雄大な山々が映し出される。弥陀ヶ原は約 8km²の大高原で、秋は紅葉で色づいた景観を楽しむことができる。室堂は標高 2,450m に位置する、アルペンルート¹の中心地で観光の拠点となっており、眼前には 3,000m 級の雄大な山々が迫る。地獄谷は、灰白色の山肌、吹き上げる水蒸気、ブツブツと泡立つ様は、まさに名前のとおり地獄のような景観である。大自然のなか幾多の困難を乗り越えてつくられた、日本最大のアーチ式ドーム越流型ダムである黒部ダム（写真 1）や、落差日本一を誇る称名滝（写真 2）、立山カルデラ¹が見られる展望台も観光地となっている。



図 2. 立山町の河川、山、観光地などのおおよその位置

¹ 輪郭が円形またはそれに近い火山性の凹陷地で、ふつうの火口より大きいもの。ポルトガル語の「大鍋」。



写真 1. 黒部ダム（福田撮影）



写真 2. 称名滝（深井撮影）



写真 3. 雄山神社（伴撮影）

1-2. 立山町の気候

立山町は標高 12m から雄山山頂の 3015m まで細長く位置しているため、温暖帯、冷温帯、亜寒帯、寒帯の 4 つの気候区分にまたがっており、地域によって寒暖差が大きい。温暖帯の前沢における平成 28（2016）年の年平均気温は 17.6℃、年合計降水量は 3165 mm、年合計日照時間は 1333 時間となっている。年間を通して降水量の多い立山町だが、特に山間部では降水（雪）量が多く、立山黒部アルペンルートを代表する雪の大谷は積雪が 20m を超えることもあり、世界に誇る観光名所となっている。

表 1. 立山町前沢の気象観測記録

要素 月別	平 均 気 温 (℃)	最高気温極 値 (℃)	最低気温極 値 (℃)	合計降水量 (mm)	合計日照時 間 (h)
1	1.2	13.3	-9.0	238.0	39.5
2	1.5	21.2	-8.7	258.5	80.1
3	5.0	20.6	-4.6	99.0	125.8
4	11.8	25.3	-1.2	248.5	155.8
5	11.6	30.5	7.3	156.5	191.7
6	19.8	28.3	7.6	153.5	136.9
7	20.3	34.5	16.3	473.5	117.3
8	20.5	32.6	17.4	215.5	151.1
9	18.0	31.1	11.7	486.5	79.4
10	10.3	31.6	2.5	197.0	100.3
11	3.8	21.8	-0.9	266.0	82.3
12	-0.4	22.7	-6.0	372.0	73.0
H26	16.2	35.9	-11.9	3287	1477
H27	16.8	36.3	-8.1	2992	1443
H28	17.6	34.5	-9.0	3165	1333

(統計たてやま 2017 より作成)

1-3. 立山町の歴史²

現在の立山町の地域が、人の活動の舞台となったのは数万年前とされる。立山町で最も古い遺物は、吉峰遺跡³から発掘された数個のナイフ形石器で、約 2 万年前の旧石器時代の遺物である。立山町には、縄文時代や弥生時代の遺跡もあり、地域で人々の活動が続けられた。

大宝元（701）年、立山信仰の開祖である佐伯有頼^{さへきありより}が立山開山をする。立山開山によって修験者が登山に来るようになったことにより、岩峠寺と芦峠寺は立山信仰の拠点となり栄える。近世末期には、禪定⁴を目指す人の数は、ひと夏に 3000 人以上を数えたこともあり加賀藩も無視できないほどの勢力を蓄えていた。

越中では 8 世紀には条里制⁵がしかれており、土地の区分けが成されていた。しかし、天

² 参考『立山町史上巻』、『立山町史下巻』、『五百石郷土史』

³ 立山町吉峰の西部にある遺跡。

⁴ 修験者が霊山に登って行う修行のこと。

⁵ 古代日本の土地区画制度。耕地を 6 町（約 654m）間隔に縦、横に区切り、その一区画を里または坊と呼んだ。

平 15（743）年の墾田永年私財法⁶によって、貴族たちが各地で土地を開墾し始めて荘園を造り、条里制は崩れていった。

越中で武家政治が見られるようになるのは鎌倉時代に入ってからで、源頼朝の命により、北条朝時が越中の守護になった。鎌倉幕府が滅亡した後、しばらくの間、越中は荒れることとなるが、室町幕府より興国 5（1344）年に桃井直常が守護に任じられ越中を治める。

戦国時代に立山町と関係のあった武将として、寺嶋職定^{てらしまもとさだ}と佐々成政を挙げる。寺嶋職定は、永禄 10（1567）年頃、越後の上杉から逃れるために池田城を築き、また永禄 11（1568）年、芦峯寺の百姓が信州へと渡ることを禁止した。佐々成政は、天正 11（1583）年に、戦乱で焼かれてしまった寺社や立山権現の堂社、祭礼の復興をし、また常願寺川の治水も手がけていた。

天正 15（1587）年に、新川郡は豊臣秀吉の直轄領となり前田利家にあずけられる。利家は慶長 4（1599）年に死去するが、前年に子の利長に封を譲っており、慶長 3 年以降、加・越・能の 3 か国が利長のものとなっている。それ以後、明治 4（1871）年の廃藩置県まで新川郡を含む越中は前田家の支配のもとにおかれる。

天保 7（1836）年には、現在の「五百石」にあたる「松本開」^{まつもとびらき}が、新堀村^{くちきひとう}の朽木兵左衛門^{ぐさねもん}によって切り開かれる。この土地は、地下水には恵まれていたが、土地が肥えておらず、松本開に来た人々は苦しい生活をしていた。そのよう中で、天保 8（1837）年に、商売の許可が下り、農業をするかたわら商売をする人が増えていった。明治になると、さらに松本開の開発が進み、明治 22（1889）年に、町村制施行により松本開は五百石と改められ、五百石は商業の中心として発展していく。

江戸時代の間に起きた出来事の中でも特に大きなものは、安政 5（1859）年 2 月 26 日に起きた大地震と大洪水である。飛越地方で発生した地震は、富山では推定震度 6、マグニチュード 6.8 であった。この地震は富山だけでなく、金沢や飛騨地方にもおよび、多数の家屋の全壊や死者が出た。また、地震の影響で立山カルデラの火口壁が崩れ、大量の岩石と土砂が常願寺川等をせき止めて水たまりを作った。この時の水たまりが同年 4 月 26 日に決壊して、さらに被害を拡大させることとなった。

この大地震以外の江戸時代の出来事としては、安永年間（1772～1781）に岩嶺寺衆人によって立山温泉が開かれたことが挙げられる。しかし、文化 11（1814）年にこの湯は岩嶺寺衆人の手から取り上げられる。また、安政 5（1859）年の大地震により、温泉が埋没してしまったため、営業中止となった。その後、文久 3（1863）年に温泉の復活を願い出たが許可が下りず、明治元年まで温泉は再開されなかった。

明治元年には、神仏分離令が明治政府から布告され、立山信仰に大きな影響を与えた。この影響で、岩嶺寺と芦峯寺で協力して仏像を取り壊すといったお達しが政府から通達された。また、芦峯寺の衆人は天台宗で、岩嶺寺の衆人は、坊主は天台宗で家族は真言宗であったが、芦峯寺の衆人は神道を継承したものと立山寺の檀家となったものがおり、一方

⁶ 一定の条件付きで、墾田の永世私有を認めたもの。荘園制の始まりとされる。

で岩嶺寺の衆人の大部分は真言宗の檀家となった。

明治 2 (1869) 年には、立山町を発端として、新川全域にばんどり騒動が起きた。ばんどり騒動とは、常願寺川流域の各村の人々が、凶作に対して救米を請願したことが始まりである。それが受け入れられず、それどころか年貢納入が開始されたため、農民の支配への不満が募り蜂起へと発展した。

ばんどり騒動の流れは 3 段階あるとされる。前期は、凶作に対して藩に救助を願う緩やかな動きであった。中期は、塚越村忠次郎が一揆引受人になったことで暴動が正当化され、騒動が一揆へととなった。しかし、忠次郎の指示を無視した暴動が頻発し破局する。後期は、藩の鉄砲隊によって数十人の死傷者を出して鎮圧され、忠次郎が責任を取って明治 4 (1871) 年に処刑される。ばんどり騒動後、政府は百姓の請願に耳を傾けるようになった。

表 2. 立山町の年表

年代	できごと
約 2 万年前	吉峰遺跡で人々が生活していたと思われる。
大宝元 (701) 年	佐伯有頼によって立山開山が行われる。
天平 15 (743) 年	墾田永年私財法が發布される。
貞応 2 (1222) 年	源頼朝の命のもと、北条朝時が越中の守護となる。
興国 5 (1344) 年	室町幕府の桃井直常が守護に任じられ越中を治める。
永禄 10 (1567) 年	寺嶋職定は越後の上杉から逃れ、池田城を築く。
天正 11 (1583) 年	佐々成政は寺社や立山権現の堂社、祭礼の復興をし、また常願寺川の治水も手がけた。
天正 15 (1587) 年	新川郡は豊臣秀吉の直轄領となり前田利家にあずけられる。
天保 7 (1836) 年	現在の「五百石」にあたる「松本開」が開墾される。
安政 5 (1859) 年	大地震と大洪水が発生する。
明治元 (1868) 年	神仏分離令により、立山信仰は大きな影響をうける。
明治 2 (1869) 年	ばんどり騒動が起きる。
明治 22 (1889) 年	「松本開」が「五百石」と改められる。
大正 7 (1918) 年	魚津町から米騒動が起きる。
大正 10 (1921) 年	五百石駅－立山駅間が開通。
昭和 29 (1954) 年	町村合併促進法により現在の立山町ができる。
昭和 38 (1963) 年	黒部ダム完成。
昭和 46 (1971) 年	立山・黒部アルペンルート全通。

(『立山町史上巻』(1977)、『立山町史下巻』(1984)、『五百石郷土史』(1944) より作成)

大正 7 (1918) 年には、魚津町の漁師の女房たちを発端として米の安売りを願う一揆が起き、それが各府県にも及び全国的に大きな騒動となった。後に米騒動と呼ばれる事件で

あるが、立山町を含む富山県内の農村地帯では米騒動が起きたという記録がない。富山県の米騒動は漁師や労働者、市民によって展開され、農村ではほとんど起きていないか、ごく小規模であったと考えられている。

昭和 29（1954）年 1 月 10 日には、町村合併促進法により利田村、雄山町、上段村、東谷村、釜ヶ渚村、立山村が合併して立山町が誕生する。同年 7 月 10 日に、隣接する新川村を編入し、現在の立山町となる。

立山町は純農村地帯であり、企業や工業といったものには縁がなかった。しかし、大都市における人口と産業の過度の集中を防ぎ、地域の格差を改善するため、主要道路の整備や工場の誘致、河川の総合開発等を実施する。これらの事業を進めた結果、多数の工場が進出し、商工業が発展していった。

昭和 31（1956）年から建設されはじめた黒部ダムの建設工事は、当時の金額で 513 億円が投じられ、述べ 1000 万人もの人手により、昭和 38（1963）年に完成した。それ以降、黒部ダムは立山町の財政をささえる重要な資源となっている。

また昭和 46（1971）年の立山・黒部アルペンルートの全線開通に伴い、大阪や名古屋から登山口の千寿ヶ原まで乗り入れることが出来るようになり、立山登山は観光としても活用されていく。元々、立山登山は立山信仰の修験者が行うものであったが、それが明治の神仏分離令の影響等により、一般の登山者も登山をする山となった。そして、現在では、観光としての立山登山という側面が強くなっていった。

1-4. 富山地方鉄道立山線の軌跡⁷

平成 30（2018）年現在、富山県内を走る富山地方鉄道は、主に富山地方鉄道本線（電鉄富山駅—宇奈月温泉駅）、立山線（寺田駅—立山駅）、不二越線・上滝線（稲荷町駅—岩嶺寺駅）の三つの路線から成る。ここでは、立山線の歴史を簡潔に記述する。

大正 2（1913）年に滑川駅—五百石駅間が開業し、立山線の歴史が始まる。大正 10（1921）年には五百石駅—立山駅⁸間が開通し、昭和 6（1931）年には、現在の立山線の始発駅である寺田駅と五百石駅間を結ぶ路線が完成した。それに伴い翌年（1932 年）、それまで使われていた上市口駅（現在の上市駅）—五百石駅間が廃線になっている。

岩嶺寺以南の路線に関しては、大正 10（1921）年に岩嶺寺駅—横江駅（現在は廃駅）間が開業した。さらに大正 12（1923）年には横江駅—千垣駅間も開業し、昭和 12（1937）年には千垣駅—^{あわすの}栗巣野駅（現在は廃駅）間の路線が通った。そして、昭和 30（1955）年に栗巣野駅—千寿ヶ原駅間が開業したことで現在の立山線に相当する路線が全通した。

昭和 46（1971）年に立山黒部アルペンルートが全通したことにより、立山線は立山登山客も乗せる路線として活躍している。

⁷ 参考『富山地方鉄道五十年史』

⁸ 現在の立山駅とは別。廃駅になっており、現在の岩嶺寺駅付近にあった。

1-5. 人口

平成 28（2016）年 10 月 1 日時点の立山町全体の人口は、26,161 人、世帯数は 9,277 世帯である。性別人口は男性 12,595 人、女性 13,566 人となっている。過去 15 年（平成 14 年から平成 28 年）の立山町の人口の推移を以下に示した（図 3）。平成 16（2004）年から立山町では人口が減少し続けており、平成 20（2008）年からさらに減少幅が大きくなっている。

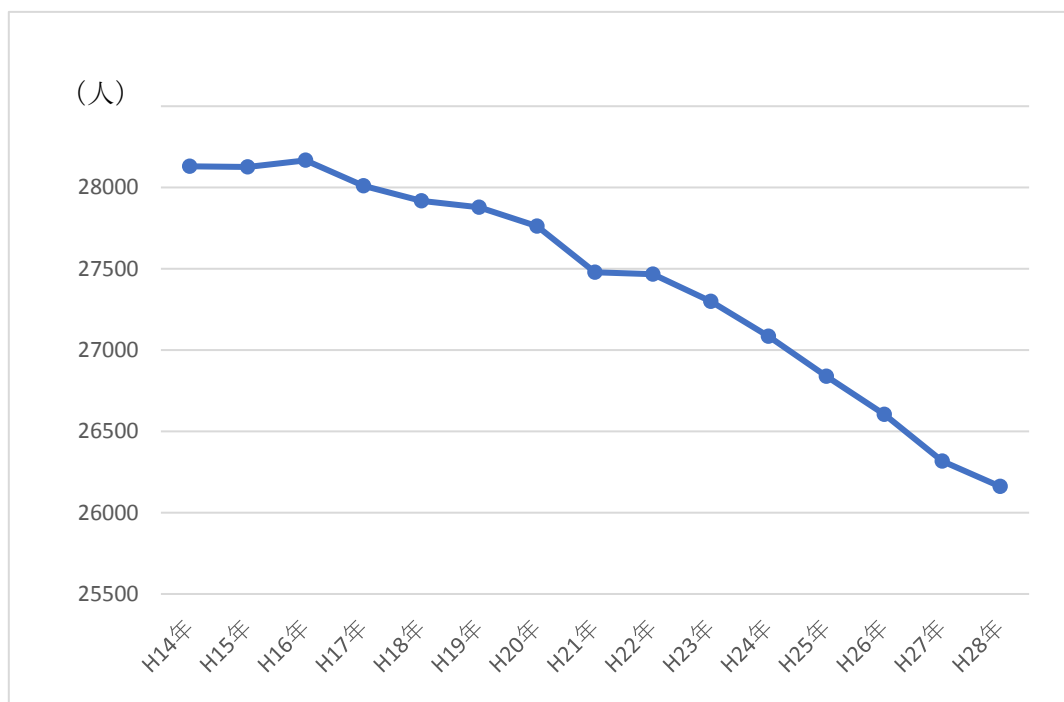


図 3. 立山町の人口の推移

次に、立山町における年齢別人口の割合とその推移を、図 4 と表 3 に示した。

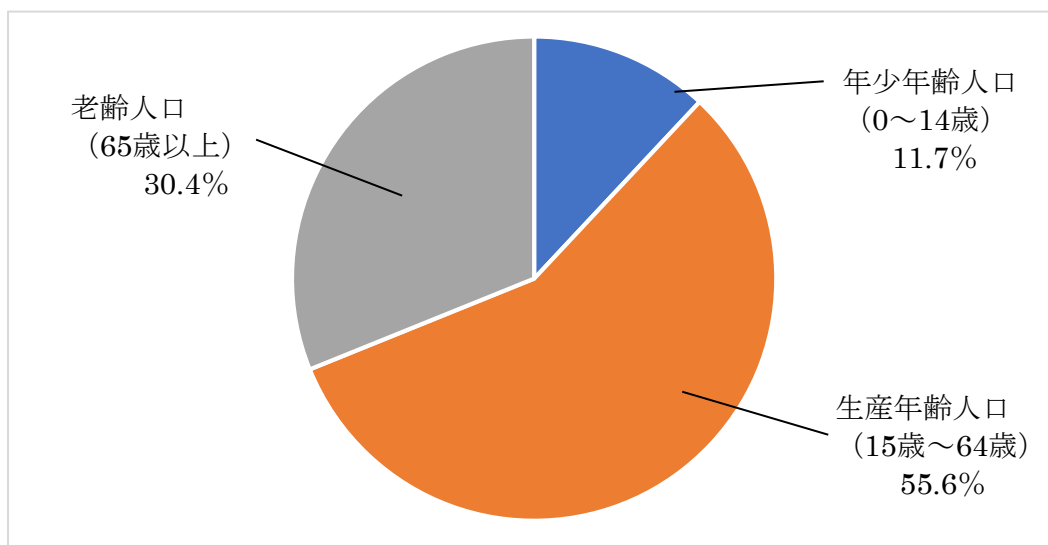


図 4. 立山町の年齢別人口割合（平成 28（2016）年 10 月 1 日現在）

表 3. 立山町の年齢別人口の推移

	幼少年年齢人口 (0～14 歳)	生産年齢人口 (15～64 歳)	高齢人口 (65 歳以上)
昭和 60 (1985) 年	5,623	18,623	3,728
平成 2 (1990) 年	4,665	18,253	4,319
平成 7 (1995) 年	4,077	18,143	5,224
平成 12 (2000) 年	3,923	18,046	6,025
平成 17 (2005) 年	3,914	17,556	6,541
平成 22 (2010) 年	3,719	16,574	7,164
平成 27 (2015) 年	3,131	14,745	7,891

平成 28 (2016) 年 10 月 1 日時点で、立山町は生産年齢人口 (15～64 歳) が全体の半分の割合を占めているものの、表 3 を見ると生産年齢人口は昭和 60 (1985) 年から確実に減少している。

昭和 60 (1985 年) の時点では、高齢人口 (65 歳以上) が幼少年年齢人口 (0～14 歳) よりも少なかったが、平成 2 (1990) 年にはほぼ横並びとなり、平成 7 (1995) 年には高齢人口が幼少年年齢人口を上回った。また、現在立山町は 65 歳以上の人口の割合が 21% を超えており、WHO や国連の定める定義では超高齢社会となっている。

1-6. 立山の産業

立山町の産業別就業人口の割合を示したのが図 5 である。第 2 次産業と第 3 次産業の割合が全体の 94% を占めている。各人数は、第 1 次産業が 917 人、第 2 次産業が 4496 人、第 3 次産業が 8660 人となっている。割合の最も高い第 3 次産業の内訳において、卸売小売業、次いで割合が飲食宿泊業である。

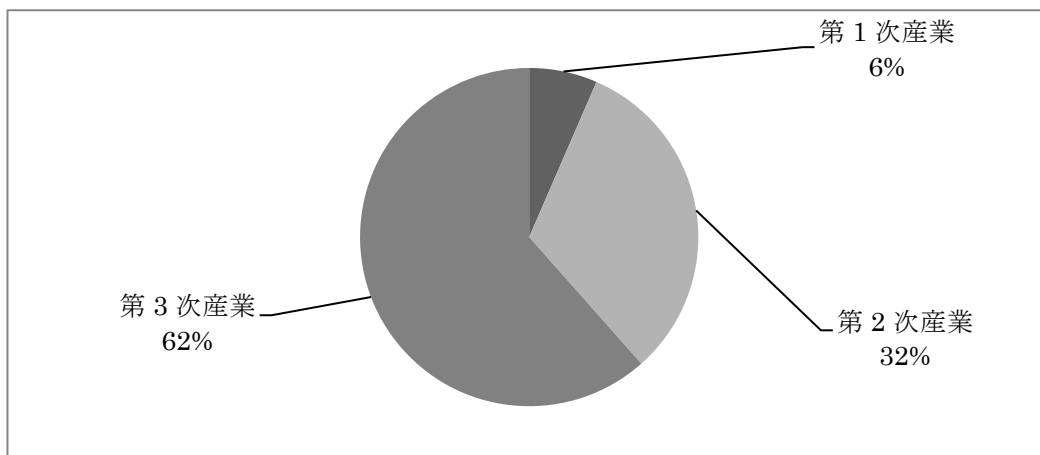


図 5. 平成 22 年度立山町産業別就業人口(統計たてやま 2016 より作成)

現在では6%に留まっているものの、かつては農業が盛んであり、立山町内でも米だけでなく、様々な農産物その他が生産されていた。立山町史によれば、かつては養蚕や製茶が行われていた他、竹細工や炭焼きも行われていた。現在では、米、大豆、大麦、ネギ、チューリップ、洋ナシなどが生産されている。

工業においては、利田地区に工業団地が存在しており、電子部品、鉄工、金属工業が盛んに行われている。その他、製紙工場、製菓工場なども所在している。

また、町では《立山ブランド》の認定の取り組みをしている。これは、年に1度、町内の生産者から「立山ならではの」の産品を公募し、その中から《立山ブランド》を認定するものである。現在では、桃、ミネラルウォーター、シフォンケーキなど様々なものが認定を受けている。

町名にもなっている立山は観光資源としての活用がされている。古くは、奈良時代から行者による登山が行われており、芦峯寺や岩峯寺に形成された宗教村落では「宿坊」という、住宅兼接客及び宿泊施設が設けられていた。

また、江戸時代に立山登拝登山者を案内しながら立山開山伝説などを語る「^{なかご}中語」は、明治時代以降「立山ガイド」として、スポーツ登山が注目されるようになるに伴い登山者の案内を行うなどしていた。

今日のように立山が観光地として脚光を浴びるようになったのは、大正時代に立てられた立山周辺の水力利用計画を起因としている。昭和20年代後半から観光地としての整備が進められ、昭和29(1954)年に立山ケーブルカー、昭和30(1955)年に立山高原バス、昭和31(1956)年に弥陀ヶ原ホテルが開業されている。さらに昭和46(1971)年には、今日の立山観光に代表される、富山から長野県の大町を直結する観光ルート「立山黒部アルペンルート」が開通した。その後今日に至るまで交通・宿泊設備の数々が整備されている。平成27(2015)年の立山黒部アルペンルートの観光入込客数は996,849人となっている。

1-7. 立山信仰

立山信仰の背景には山中には他界が存在するという、山中他界の信仰が存在する。人々は立山の雄大な姿に畏敬の念を向け、そこから立山を神聖視する立山信仰が生まれた。

平安時代の中期以降、浄土思想が広まる。浄土思想とは、けがれに満ちた現世と離れ、往生することで永遠の浄土を求めるという思想である。浄土思想が広まるにつれ、他界を求める人々は、立山に浄土を見出すことになった。立山に登拝することで死後の世界を疑似体験し、山中に入ることによって他界としての地獄や極楽に入り、登拝から戻ってくことで修行を積むことができ、法力を身に付けることができると考えられるようになった。立山信仰に基づいた行事に、布橋灌頂会というものがある。詳しくは、調査報告書本文で記述する。

修験道の山として栄えた立山だったが、やがて岩峯寺や芦峯寺などの山麓に寺社を中心

とした村落が出来上がり、修験者たちは社僧、宗徒などと称し、定住して生活するようになった。慈興上人（佐伯有頼）が建立したとされる芦峯寺、岩峯寺は鎌倉時代にはすでに立山信仰の重要な拠点となっていたようである。現在、芦峯寺、岩峯寺の地名は町名としてそのまま残っており、宗教村落としての面影が残る。

このような村落ができ、次第に芦峯寺の修験者は尾張国、信濃国などの地域に檀那場という、立山信仰の信徒がある程度集中して存在する場所を形成し、立山信仰の布教に当たった。こうした布教のなかでは、立山曼荼羅が大きな効果をもたらした。立山曼荼羅には、立山における立山地獄思想や浄土思想、立山開山縁起、布橋灌頂会などが表現されており、これを絵解きすることによって、多くの人々に立山信仰の存在を知らしめた。

岩峯寺の修験者たちは、芦峯寺修験者たちとは違った方法で、信徒を集めていたとされる。その方法とは、出開帳という、宝物を公開して利益を得る宗教活動である。また、出開帳においても宝物として立山曼荼羅が公開され、布教に使用されたとしている。

修験者による布教などによって広まった立山信仰は、現在も、芦峯寺や岩峯寺において信仰されている。

1-8. 立山町の年中行事・イベント

立山町では、1年間を通して様々な祭りやイベントが行われている。以下に主な行事やイベントをまとめた。

表 4. 立山町の年中行事・イベント

芦峯寺では毎年 12 月 28 日、朝から歳餅をつく。かつては雄山神社の境内で餅をついていたが、現在では集落の公民館で餅を仕上げている。元旦には、集落の人々が夜明け前に初詣に集まる。以前はお神酒と供物を持って参拝し、歳餅を受け取り家族で食べるというのが慣わしであった。

1 月下旬から 2 月上旬にはグリーンパーク吉峰にて、とやま鍋自慢大会が開催される。地元の食材をふんだんに使用

時期	できごと
12 月 28 日、1 月 1 日	芦峯寺のミヤマイリ
1 月下旬から 2 月上旬	とやま鍋自慢大会
3 月 9 日	芦峯寺の山の神の祭り
3 月 13 日	芦峯寺のおんば様のお召し替え
3 月 15 日	芦峯寺の涅槃会
3 月 21 日前後	数珠くり（ズズクリ）
4 月 8 日前後	宮路集落獅子舞
4 月 20 日前後	浦田山王社獅子舞
4 月 25 日	西大森の水神様の祭り
6 月 12 日	五百石天満社の春季祭礼 市姫神社の祭礼
7 月 1 日	立山夏山開き
7 月下旬の土曜日	立山まつり
7 月 25 日	立山頂上峰本社例大祭
8 月 13 日	芦峯寺のオショウライ
8 月 15 日	米道踊り

した鍋や、昔懐かしい
伝統の鍋などを味わ
うことができる。また、
立山ブランドの販売、
地元文化の和太鼓演
奏、吹奏楽団による演
奏などのイベントも
行われる。

3月9日には、山で
仕事をする男たちが
その年の無事を祈る、
芦峯寺の山の神の祭

8月下旬	たてやまドンドンまつり
9月1日	風の盆踊り
9月(3年に一度)	布橋灌頂会
9月25日	五百石天満社秋季大祭
10月10日前後	若宮獅子舞
10月20日前後	東大森獅子舞
10月23日 (日曜日の年のみ)	高原八ツ屋獅子舞
11月3日	泉獅子舞
11月下旬	東谷農産物フェア

(主に「立山町の観光情報」を基に作成)

りが行われる。この祭りは男性のみが参加するもので、山へ入っての仕事はこの祭りが終
わってからといわれ、そのしきたりが守られている。

おんば様のお召し替えは、年に一度、3月13日に閻魔堂で行われる行事で、木像のうば
尊(おんば様)の着物を、地区の女性たちが召し替える。うば尊は衣食の恵みを与えてく
れる豊穰の女神として、また、とくに女性を成仏に導いてくれる女性の守り本尊として信
仰されてきた。

涅槃会ねはんえは3月15日に閻魔堂で開かれ、堂内に釈迦涅槃絵図を掲げ集落の老若男女が集ま
って念仏を唱えた後に、紅・白・黄・緑のお釈迦の団子撒きが行われるというものである。
団子撒きは釈迦の骨を撒くという意味合いがあると伝えられている。団子は魔除けとして
食べたり身に着けたりされる。

数珠くりは閻魔堂で行われ、参加者が堂内いっばいに円になって座り、向かい合って念
仏を唱えながら数珠を回す。数珠の白い房を身体の具合の悪いところに当てると、ご利益
があるとされている。

4月8日前後に行われる宮路集落獅子舞は、宮路神明社の春の祭礼で行われる獅子舞であ
る。宮路の獅子舞は、飛騨地方を発祥とした金蔵獅子と呼ばれる獅子舞であり、大正13(1924)
年に現富山市の楡原から講師を招き習得したものである。

4月20日前後に行われる浦田山王社獅子舞では、全長7m、幅2mもの巨大な幕に20名
以上が入り練り歩く獅子舞が行われる。もとは宮の周りを回るだけであったが、集落内を
回る形に発展した。第1章で佐藤が報告している。

立山町西大森地内の堤防には、立山町指定天然記念物の大石がある。その大石は2回の
洪水を経て現在の場所まで運ばれ、流れ着いたことにより洪水の流れが変わり被害を少な
くしたといわれている。そんな大石への感謝をこめて護岸の神として祭るようになった。

6月12日は若者からお年寄り、家族連れと毎年多くの人で賑わっている五百石天満社の
春季祭礼と市姫神社の祭礼が行われる。かつては約300~500軒もの夜店が出店していたが、

現在でも 100～200 軒の夜店が出店している。また、昭和 45（1970）年ごろまでは獅子舞も行われていた。

立山夏山開きは毎年 7 月 1 日に立山駅前の広場で行われる。安全祈願の神事が行われた後、園児達によるくす玉割りや歌とダンスが披露される。また、立山権現太鼓、越中すえ太鼓などが演奏され、多くの人で賑わう。

毎年 7 月 25 日には立山頂上峰本社例大祭が行われる。これは立山の頂上で行われるもので、夏登山の無事故と商売繁盛を祈願する祭りである。25 日というのは佐伯有頼が立山を開山したといわれる日に因んでおり、山小屋関係者や観光、警備関係者だけで執り行われる。

7 月の下旬には立山まつりが行われる。これは立山舟橋商工会が主体となって行っているもので、露店商はいないが、地元の方や商工会、高校生が夜店を出店する。立山芸能百選や立山小唄町流しなどのイベントも行われる。

8 月 13 日のオショウライは芦峯寺の各家で行われる。オショウライとは先祖の霊を呼び寄せる意味の火祭りであり、富山県の各地で行われている。立山町では芦峯寺で行われており、麻殻の松明（現在は提燈）を持って墓まで先祖霊を迎えに行き、ローソクを灯して精霊を家に迎える。

米道踊りは 8 月 15 日に米道集落で踊り継がれている盆踊りである。戦国時代、上杉謙信に攻略され、落城した池田城の家臣加野半右衛門は歌舞音曲に長けていた。その芸を米道の村人たちに手ほどきしたのがこの米道踊りの始まりと言われている。オショウライと米道踊りは第 3 章で伴が報告している。

そして 8 月下旬にはたてやまドンドンまつりが行われる。この祭りはグリーンパーク吉峰で開催され、平成 28（2016）年で 10 周年を迎えた。打ち上げ花火の他グルメやイベントが開催される。

9 月 1 日には五百石の天満社で風の盆踊りが行われる。大正時代に始まった盆踊りで、誰でも参加可能である。

布橋灌頂会は江戸時代立山への登拝が許されなかった女性の救済措置として始められた。極楽往生を願う女性達が白装束姿で目隠しをし、布橋を渡る。明治期に廃絶したが、癒しの行事として 130 年ぶりに復活した。平成 17（2005）年からは 3 年に一度開催されており、この行事に参加するため全国から女性が集う。第 4 章で迫間が報告している。

9 月 25 日は五百石天満社秋季大祭が行われる。五百石の中心である天満社で行われ、当日は朝から夕方まで神輿と獅子舞が別々に五百石地区全体を回る。これについては風の盆踊りとともに、第 7 章で山浦が報告している。

10 月 10 日前後に行われる若宮獅子舞は明治期に上市町女川から教えを受けて発足した獅子舞である。途中 2 度休止したものの現在は復興を果たし、若宮社の秋の祭礼で披露されている。

10 月 20 日の東大森獅子は大正期に集落の有志によって発足した獅子舞である。五穀豊穡

を祈って秋の祭礼で村の全世帯を回っていたが平成 14（2002）年から休止していた。しかし、平成 23（2011）年に復興を果たし、八幡宮の秋の祭礼で披露されている。

10 月 23 日が日曜日の年にのみ披露される高原八ツ屋獅子舞は明治期に同じ立山町内の三ツ塚新から伝えられた。当日は地区内の民家などを回り、神明宮では 14 種類の舞が披露される。

11 月 3 日の泉獅子舞は日本海の荒波を越えて上陸した獅子を天狗が迎え撃つ物語になっている。祭礼当日、獅子は天狗や露払いのバチとともに、囃子に導かれながら集落の各家々を回る。

11 月下旬の東谷農産物フェアは立山元気交流ステーション会場で米や野菜、柚子、洋梨をはじめとする特産品の販売が行われる。新鮮で安全な果物や野菜を安く購入できると、毎年多くの人々が来場する。

参考文献

- 『立山町史上巻』 立山町 1977 年
- 『立山町史下巻』 立山町 1984 年
- 『富山地方鉄道五十年史』 富山地方鉄道株式会社 1982 年
- 『立山町商工名鑑』 立山町商工会 1991 年
- 『立山曼荼羅—絵解きと信仰の世界』 福江充 2005 年
- 『統計たてやま 2016』 立山町 2016 年
- 『立山をめぐる山岳ガイドたち』 立山カルデラ砂防博物館 2010 年
- 『わたしたちの立山町』 立山町教育委員会・立山町教育センター 1975 年
- 『五百石郷土史』 佐藤磯五郎・中川清邦 1944 年

参考にしたウェブサイト

- 「富山県ホームページ 人口移動調査」
(<http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/lib/jinko/index.html> 2018 年 1 月 12 日閲覧)
- 「統計たてやま-立山町-」
(<http://www.town.tateyama.toyama.jp/tokei/index.html> 2018 年 1 月 12 日閲覧)
- 「立山黒部アルペンルート公式ホームページ」
(https://www.alpen-route.com/enjoy_navi/snow_otani/ 2018 年 1 月 15 日閲覧)
- 「統計たてやま 2017」
(<http://www.town.tateyama.toyama.jp/tokei/toukeitateyama2017.pdf> 2018 年 1 月 8 日閲覧)
- 「アルペンルート-立山町-」
(<http://kanko.town.tateyama.toyama.jp/spot/index.html> 2018 年 1 月 8 日閲覧)
- 「富山県[立山博物館]」

(<http://www.pref.toyama.jp/branches/3043/josetu2.html> 2018 年 1 月 15 日閲覧)
「立山黒部アルペンルート 立山黒部貫光株式会社」
(<https://tkk.alpen-route.co.jp/company/development> 2018 年 1 月 22 日閲覧)
「年間イベント情報-立山町-」
(<http://kanko.town.tateyama.toyama.jp/spot/event.html> 2018 年 1 月 7 日閲覧)
「立山ガール日記」
(<http://tateyamagirl2450.blogspot.jp/> 2018 年 1 月 7 日閲覧)
「立山グリーンパーク 吉峰公式ホームページ」
(<https://www.yoshimine.or.jp/> 2018 年 1 月 7 日閲覧)
「立山町 東谷農産物フェア」
(www.town.tateyama.toyama.jp/pub/download/svDLElsDtl.aspx?servno=1126 2018
年 1 月 7 日閲覧)
「るるぶ.com」
(<https://www.rurubu.com/event/detail.aspx?ID=P31800> 2018 年 1 月 22 日閲覧)

第1部 今を生きる伝統

浦田における獅子舞の継承—中申会の役割に着目して—

佐藤 宏子

はじめに

私がこの浦田の獅子舞に興味を持つきっかけとなったのは、立山町がホームページ上で伝統行事を公開している映像の中に浦田の獅子舞を見つけたことである。私は地元の愛知県豊明市で獅子舞を見たことが無く、獅子舞に対して踊りながら子どもの頭を噛むというくらいの一般的なイメージしか持っていなかった。しかし、映像の中の獅子舞は私のイメージとは全く異なっており、大きな獅子がゆったりと歩くのみの神事だった。この行事を自分の目でも見てみたいと思い参加した春祭りで、この不思議な形態の獅子とそれを支える人々の熱い思いに魅力を感じた。もっとこの浦田の獅子舞について深く知りたいと思い、調査テーマにした。

調査を進めていると、活気のあるように見えた浦田の獅子舞にも実は後継者不足の問題があり、様々な人の努力によってこの行事が成り立っていることが分かった。本章では浦田での聞き取り調査で得られたことをまとめ、記述していく。

1. 富山県の獅子舞⁹

1-1. 獅子舞の形態

富山県は獅子舞の伝承数が日本一とも言われるほど、獅子舞の多い県である。40年前の昭和53年（1978）時点で1154カ所、休止中のものも含めればおよそ1300あると推定される。これらを大まかに分類すると、県西部では胴幕の中にたくさんの人が入る全国的にも珍しい形態の「百足獅子」が、県東部では2人で行われる日本の伝統的な獅子舞の形態である「二人立獅子」が多いのが特徴である（図1）。これらの獅子舞は派手な衣装で激しく舞い踊るものが多く、江戸時代中期以降に広まったとされる。

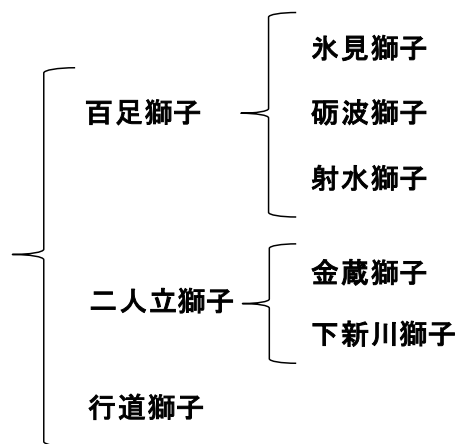


図1. 富山県の獅子舞の分類

他にも中世からの流れをくむ^{ぎょうどう}行道獅子があり、今回調査した浦田山王社獅子舞はこの行道獅子である。行道獅子は神輿行列の露払い役¹⁰として、芸能めいた所作はせず、静かに練

⁹ 「富山県の獅子舞」 富山県教育委員会 1979年より

¹⁰ 貴人や神霊など高貴な者を先導する役割。

り歩く。『富山の獅子舞 100 選』によれば、行道獅子は浦田以外に 4 つの場所で行われている。

1-2. 箱獅子

県内には、室町時代から江戸時代初期にかけて製作された「箱獅子」と呼ばれる古い型の獅子頭が 9 つ残っている。箱獅子は頭頂部と鼻の頭の高さがあまり変わらず、一見竜に見えるため、竜頭とも呼ばれる。この 9 つの中で昭和 54 年（1979）現在使用されているのは、射水市にある下村加茂神社のやんさんま祭、魚津市小川寺白山社の春祭り、そして立山町浦田山王社の春祭りで使われる 3 つのみである。これらに共通するのは、①箱獅子を使用している、②行列の先導をする、③宮の周りを回る、④芸能化した所作はない、⑤終わってからお祓いとして子どもや氏子の頭を噛む、⑥村共同体の行事というより大きな社寺の行事という面が強い、ということである。いずれにしてもこれらの獅子は県内で現在中心的な、芸能化した獅子とは全く別の伝播ルートをたどってきたと考えられる。

ただ、これらの調査はおよそ 40 年前に行われたものであるため、現在の状況とずいぶん変化しているはずである。今回調査した浦田山王社獅子舞でもこの 20 年ほどで大きく変化してきた。2 節からは、過去の調査と今回の調査で変化していることに焦点を当てていく。

2. 浦田の概要

2-1. 調査地「浦田」について¹¹

浦田の発生は古く、弥生時代に遡るといわれる。浦田には多くの遺跡が残されており、稚児塚¹²もその 1 つである。7 世紀ごろになると、条里制¹³が施行された。これは浦田の南に「乗田^{じょうでん}」という字があることからわかる。乗田とは口分田¹⁴を支給して余った土地のことを指し、これはその当時の地名の名残であると考えられる。

室町時代には浦田から水橋までは高野七郷 63 カ村と呼ばれ、細川家の家領であった。戦国時代になると、これを管理するために仏生寺村（現舟橋村）に城を築き、城主細川越中守曾十郎に治められていた。佐々成政の攻撃により細川氏が没落すると浦田も荒廃したと伝えられる。また、細川越中守の家臣に浦田という武士がおり、細川氏が没落した際、農民となり浦田に永住したことが浦田の地名の由来だとされている。

¹¹ 立山町 昭和 59 年『立山町史 下』、浦田山王社奉賛会 昭和 46 年 4 月『浦田村の発達と山王社』より。

¹² 稚児塚は高さ 7.5m、底部の直径 46.8m の円墳である。県下で最大の円墳であり、5 世紀中ごろの権力者の古墳と考えられる。古墳は現在雑木で覆われているが、かつては頂上に高さ 30m、周 7 m、樹齢 300 年の大杉がそびえていた。昭和 48 年の落雷で枯死し、現在ではその切り株と小さな祠が残っている。『立山町史 上』より。

¹³ 古代の律令制度下で行われた土地管理制度。土地を約 654m 四方に区画し、南北に 1 条、2 条…、東西に 1 里、2 里…と称し、何条何里と表示した。

¹⁴ 大化 2 年（646）の班田収授法により、農民の生活を保障し、税を徴収するために 6 歳以上の男女に与えられた終身使用できる田。

明治 17 年（1884）竹内村戸長の管轄区域に入り、明治 22 年（1889）寺田村の大字となった。そして昭和 16 年（1941）には新川村に、昭和 29 年（1954）に立山町に編入された。現在浦田は立山町の北部に位置し、舟橋村と接する。富山地方鉄道の本線と立山線の分岐点である寺田駅がある。白岩川と栃津川の合流点に近く、早くから開発の進んだ地域である（図 2）。

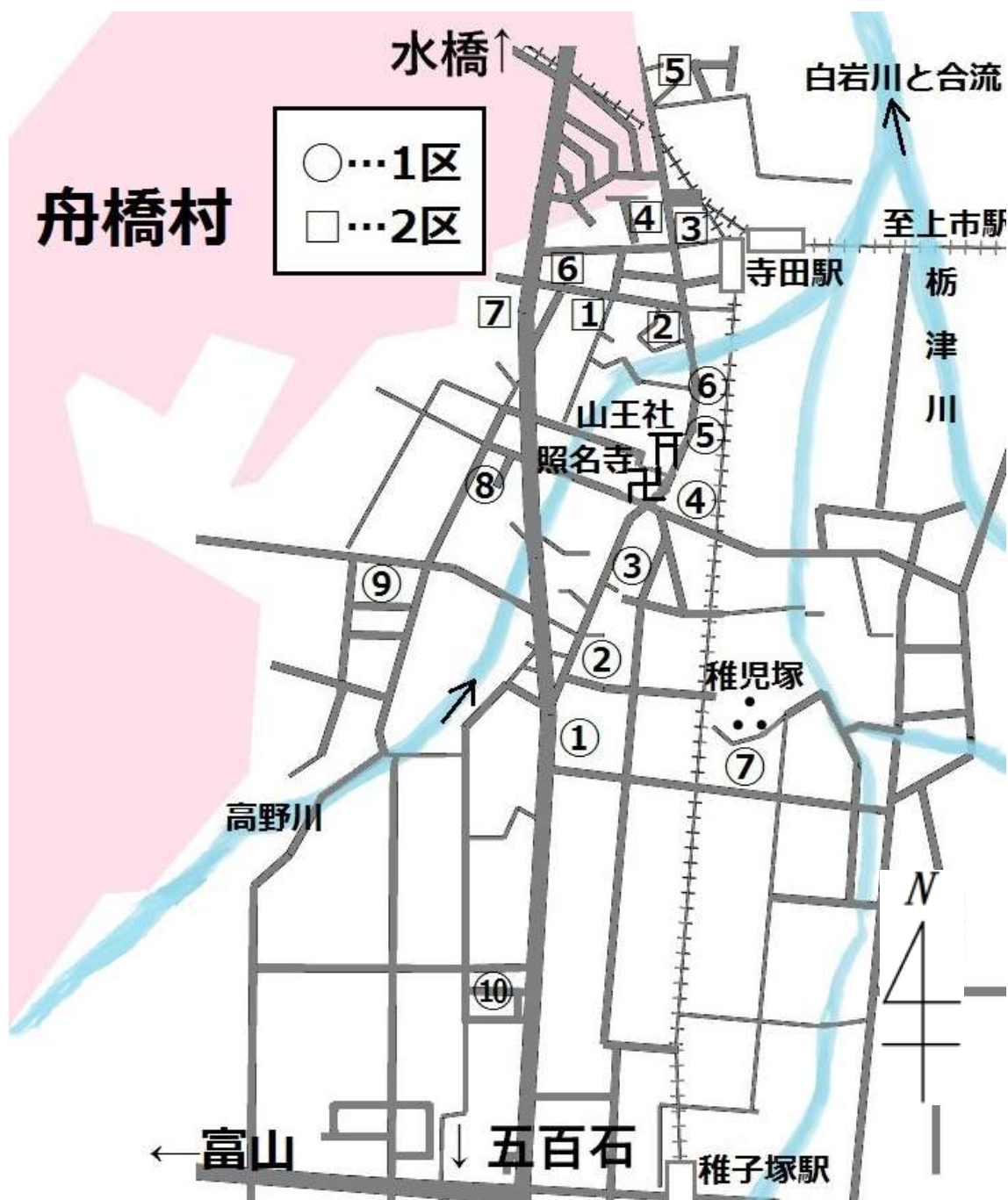


図 2. 浦田 1 区と 2 区（数字は区内の班の番号を表す）

2-2. 浦田の変遷¹⁵

明治初期、浦田村の戸数は 100 余りあった。道路が狭かった当時、米や肥料は高野川を利用して舟で運搬していた。米を水橋の浜の米屋まで運び、帰りは肥料となる鱈粕¹⁶を積んで帰ってきた。現在浦田山王社の氏子総代を務める野澤一成さん（78 歳）の父野澤勘男^{きだお}さんは、祖父の代から浦田で米や肥料の商売をしていた。昭和の初めに高野川を改修するまでは照名寺¹⁷のすぐ近くが船着き場だったため、そこまで米を運んでいき、毎日 12 隻の長舟¹⁸に 1 隻 16 俵の米を積んでいったという。少し離れた村の人たちは 1 本 25 貫¹⁹もする鱈粕を背中に担いで家へ持って帰ったそうだ。やがて水橋から岩峠寺までの県道ができると、米や肥料の運搬は安全な馬車での運搬に変わった。

明治 16 年（1883）、それまで石川県新川郡だった浦田が、富山県中新川郡となった。翌明治 17 年、1 石 9 円だった米が 2 円 70 銭に大暴落したことで、舟で米や肥料の商売をしていた人々は失業し、村を出て北海道開拓に行ってしまった。その結果 100 余りあった戸数も明治の末期には 80 余りに減少してしまった。野澤さんの家も倒産したが、家や畑、5 つの蔵を売って借金を返したという。

昭和のはじめに富山電気鉄道が開通すると、次第に浦田の戸数は増加し、特に戦後は他村からの移住者が増え、昭和 60 年（1985）には 1 区 150 戸、2 区 130 戸にまで増加した。富山電気鉄道が通ったことで、交通の要地となったためとみられる。

2-3. 浦田 1 区と 2 区

『浦田 2 区の軌跡』によると浦田地区には 1 区と 2 区があり、その大体の境目は高野川である。高野川の右岸側に 1 区が、左岸側に 2 区がおおよそ分布する（図 2）。1 区の戸数は現在 200 戸程度で、1 から 10 までの班がある。1~6 班には昔から浦田にいる人達が住んでおり、7~10 班には県内外の他の地域から来た人達が住んでいる。7・8 班は 30 年ほど前、9 班は 20 年ほど前に開発された。10 班は 10 年ほど前に開発され、30 戸以上が軒を連ねる。

2 区はもともと現在の 1 区の 6・7 班として発足したが、昭和 24 年（1949）に 1 区から分離した。1 区に住む人はもともと家の近くに田んぼを持っており、農家をしていた。一方 2 区は立山町の他村から来た人や、1 区から分家していった人たちで構成されていたため、

¹⁵ 『私たちの思い出 第 2 号』（昭和 60 年 11 月）長栄会 より。

¹⁶ 北海道から北前船で運ばれてきたもので、当時肥料として用いられていた。

¹⁷ 山王社の隣にある寺。創設年は不明だが、当初は「高野山照名坊」だったという。細川越中守が浦田に七堂伽藍を創設し、12 坊を置いた際、照名坊はその首座となった。山王社とともに細川氏の保護を受け繁栄した。

¹⁸ 杉板でできており、長さ 9.1m、幅 1.2m である。2 人の船頭が竹の竿で操船する。『立山町史 下』より。

¹⁹ 1 貫＝3.75 kg なので 25 貫は 94 kg である。また、米と肥料を区別するために鱈粕は 1 俵ではなく、1 本と数える。

田んぼを持っている人が少なく、農家はあまりいなかった。分離した最大の理由は、農家と非農家では生活環境が全く異なったためである。集落でかかる経費も違い、会合の内容もそれまですべて農家関係のことであったため、1つの集落としてやっていくことが難しくなったのだ。

野澤一成さんによれば、2区は誕生してから人口が徐々に増えていたが、その子供たちは浦田からほとんど出ていってしまい、現在では高齢化が進むとともに空き家も増えているという。現在の戸数は130～150戸程度で、1班から7班までであるが、1・2班は特に高齢化が進んでいる。また、1区の9班や10班には1か所に30戸近くの家が立ち並んでいる新興住宅地がある。「団地」と呼ばれるこれらの新興住宅地は元々1区の人たちが持っていた田んぼであったという。浦田では2区だけでなく、1区も高齢化が進んでおり、とくに5・6班は空き家が増えているため、現在は5班と6班は合わせて5班として扱われているようだ。こうした高齢化が進む中、9班や10班の新興住宅地の人々は浦田に活気をもたらす非常に大きな存在である。このことについては後に詳しく述べる。高齢化が深刻化している2区にも新興住宅を建てないのかと尋ねたところ、2区にある田んぼも所有者は1区の人たちであるため、それは難しいとのことだった。

2-4. 集落の運営

1区の区長の任期は2年間であり、区長に就任する1年前からは副区長として1年間区長見習いをする。2年間区長を務めた後、再び副区長として1年間新区長をサポートする。全部で4年間区長に携わるのだ。それに対して、2区の区長の任期は1年間で各班から代表者を出し、その中から選出する。また、2区にも副区長がいるが、1区のように2年間区長をサポートする仕組みはない。

表 1. 宮委員と氏子総代

役職	役割
宮委員	宮当番とも呼ばれており、定期的に山王社の掃除や管理を行う。 元々は1区から3人、2区から3人の計6人を選出しており、任期は3年であった。しかし、1区では任期が長いという声があり、平成8年から任期を2年にし、現在は1区から4人、2区からは3人（任期は変わらず3年）の計7人で宮委員を務める。
氏子総代	1区から3人、2区から2人選出される。任期は3年であるが、さらにその中から代表が選出され、現在の氏子代表総代は野澤一成さんである。区長経験者などがこの氏子代表総代を務めることになる。主に山王社の行事を取り仕切る。

集落にはそれぞれ総務などの役員がおり、1区ではこの役員を決めるための選考委員会が結成される。選考委員は各班の中から1人ずつ出し、次の役員を選んで役員をお願いする役割を担っている。役員の任期はおよそ2年間で、この任期が終わりに近づくと選考委員

会が動き出し、次の役員を選出する。集落の総会は 12 月半ばの日曜日に行われるが、選考委員会はそれまでに次の役員の目星をつけておかなければならない。また、この総会は 1 区の公民館で行われるが、この総会の日には 100 人ほどが公民館に集まるといふ。

また、2 区でも 12 月半ばにこのような総会が行われ、2 区の公民館で次期役員の選出などが行われる。

自治会計や総務以外にも浦田山王社に携わる宮委員や氏子総代という役割がある(表 1)。なお、浦田山王社の宮会計は 1 区と 2 区共に同じ人が務めるが、現在は 1 区の宮委員の中から選ばれる。

3. 浦田山王社

3-1. 山王社の概要

浦田山王社の登記上の正式名称は山王神社であり、主神は大山咋神(オオヤマクイノカミ)、相殿は天手力男命(アメノタヂカラノミコト)、大己貴命(オオナムチノミコト)である。神主は岩峠寺にある立山多賀宮^{たかのみや}の宮司であり、本社は大津市坂本にある日吉大社である。九曜紋を社紋とし、拝殿、本殿部分の微高地形の状況から古墳跡と推定されるところに立地している。敷地内には本殿、幣殿、拝殿の他、蔵や祭りの道具をしまっておく倉庫がある。

昭和 43 年(1968)、拝殿の屋根瓦の葺き替えをした際、棟板が発見された。それによると拝殿は明治 5 年(1872)に再建され、本殿は明治 40 年(1907)に改築されたそうである(図 3)。境内にある説明²⁰によると、創建は奈良時代初め、元明天皇の御代²¹とされている。また、当社所蔵の鰐口²²は永正 9 年(1512)の年号銘があり、昭和 39 年(1964)に立山町有形文化財に指定されている。

なお、この神社は立山信仰とのつながりもあると考えられる。昭和 40 年(1965)に初めて御神体が開帳された。調査により、

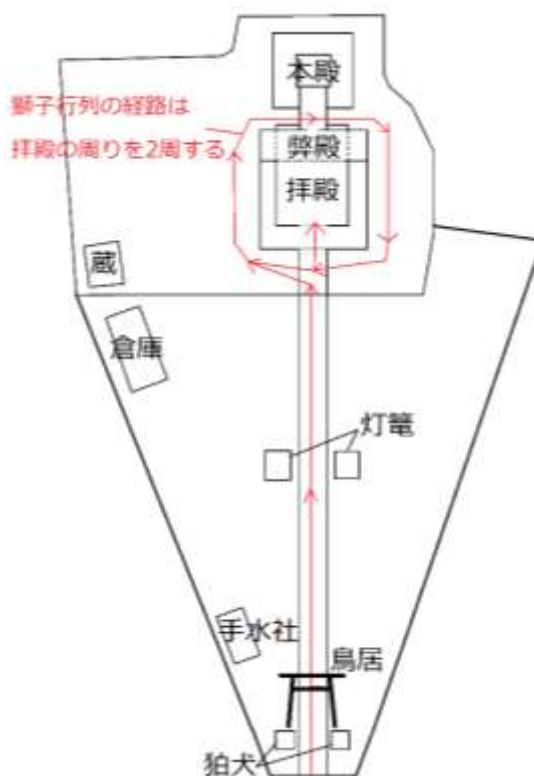


図 3. 山王社の見取り図及び獅子行列の経路
(浦田山王社修復事業竣工記念誌より作成)

²⁰ 浦田鎮座山王社御由緒より。

²¹ 今から約 1300 年前。

²² 寺社で用いる金属製の打楽器のこと。

御神体は真ん中に阿弥陀如来座像、右に不動明王半立像、左に宝生如来坐像の立山三像²³とともに高さ 15～20 cmの杉材の 1 本造りであることが分かった。『浦田の由緒と名勝史跡について』によれば、この三尊像は南北朝時代の作であり、室町時代や南北朝時代の文献にも立山信仰とのつながりを示す記述がある。さらに、浦田山王社獅子舞の奏曲が芦峠寺雄山神社の神輿練りの奏曲と同一であることも記述されており、これらを総合するとこの御神体は貴重な存在であることがわかる。

昭和 43 年（1968）の屋根の葺き替え工事で降小さな修理を重ねてきたが、特に拝殿の損傷がひどく傾いてきたため、旗竿につかっていた木をつっかえ棒にしていた。しかし、このままでは倒壊の危険性が大きいということで、平成 22 年（2010）に山王社の改修工事を行った。建て直しも検討したが、柱や桁に貴重な彫刻があり、これを残すべきだという専門家の指摘があったため、改修工事を行うことになった。

改修工事にかかった費用は約 3000 万円であったが、これは集落からの寄贈によってすべて賄った。修復準備委員会を結成し、公民館で何度も話し合いを重ね、1 戸当たり 10 万円の寄付をお願いすることにした。昔から浦田に住んでいる人はもちろん、他の地域から引っ越してきたばかりの人には特に寄付をお願いしにくかったという。しかし、ほとんどの人は寄付に協力的で、中には経済的な理由から半分だけという人もいたが、8～9 割の人は寄付に協力してくれたそうだ。

3-2. 山王社の行事

山王社の行事は主に 6 つある（表 2）。1 つ目は元旦に行われる元旦祭である。1 月 1 日に山王社でお神酒を配り、かがり火をたく（かがり火は夜通し交代で日の当番をする）。照名寺で元旦祭が行われた後、山王社境内で神事が行われる。

2 つ目は鎮火祭である。これは 2 月の第 4 日曜日に行われ、岩峠寺にある立山多賀宮^{たかのみや}の宮司が来て神事を行う。火災が起きないように祈願したり、火を大切にしようという祭りである。地元の方 30 人くらいは必ず参列する。

3 つ目は春祭りで、獅子舞が行われる最も大規模な行事である。獅子行列を作り、町内を練り歩く。春祭りについては後に詳しく記述する。

4 つ目は稚児塚祭りである。これは稚児塚で夜にかがり火をたく神事風習であり、1 区のみ祭りである。毎年 8 月 5 日に行われ、早朝から稚児塚の周りの草取りが行われる。草取りの後は山王社神主による神事が行われ、夜になると町内の方が太鼓をたたいたり、子供たちが花火をする。かつては各家々から藁を集め、かがり火を作っていたが、現在藁を用意できる家が少ないため代わりに薪を使っているという。

²³ 阿弥陀如来は立山の主神、天手力男命の本地、不動明王は剣岳の主神、素佐之男命の本地、宝生如来は大汝の主神、大日貴命の本地である。本地とは、神は仏の仮の姿だとする本地垂迹説によるもので、12 世紀ごろにはそれぞれの神に神本来の姿である本地仏を特定するようになった。

5つ目は秋祭りである。神輿行列を作って町内を練り歩くというもので、敬老の日が一番近い日曜日に行われる。獅子は出ないが、神輿と大うちわのほか、春祭りの獅子行列と同じようなバツ（鬼）や天狗、囃子方がおり、町内を回るルートもほとんど同じである。もともと1区と2区は別々に秋祭りを行っており、2区の秋祭りのみ神輿があった。1区では秋は収穫で忙しく、2軒ほどの屋台を呼ぶ程度であったが、昭和30～40年頃、山王社のご神体をめぐり問題になったため、1区と2区が一緒にお祭りをやるようになった。

6つ目は感謝祭である。毎年11月3日の文化の日に行われる。15年ほど前から行うようになった。各家から野菜を集め、肉など足りないものは買い足して、芋煮会を行う。集まる野菜は決まっておらず、大根、里芋、キャベツなどまちまちである。大きな鍋を使い、150人分ほどを作るそうだ。晴れていたら山王社の境内で行うが、雨の日は公民館の玄関で作る。

表 2. 山王社の行事

行事	日程	スケジュール
元旦祭	1月1日	00:00 初詣 04:00 照名寺で元旦祭 05:30 神事
鎮火祭	2月第4日曜日	13:00 準備 15:30 神事 16:00 直会
春祭り	4月中の申直近の日曜日	08:00 祭壇準備他 13:00 神事 14:00 獅子舞 16:00 直会
稚児塚祭り	8月5日	05:00 草刈り清掃 06:00 神事 19:00～21:00 かがり火
秋祭り	敬老の日直近の日曜日	08:00 祭壇準備他 13:00 神事 14:30 神輿 16:00 直会
感謝祭	11月3日（文化の日）	08:00 準備 11:30 神事 12:30 芋煮会

4-2. 伝承²⁶

今から約 1200 年の前聖武天皇（724 年－749 年）のころ、行基²⁷が上市のほとり広野の甘酒権現の岩に山王大権現と大岩山日石寺²⁸に不動明王を刻んだ折、3 体の獅子頭を作ったといわれる。このとき行基は浦田村のある家に宿を頼み、その際「これを山王大権現としてお祀りせよ」と言って泊まった。これが山王社に伝わる獅子頭である。行基が作ったもう 1 つの獅子頭は山王社の本社である大津市坂本の山王大権現に、残りの 1 つは大阪山王寺に収蔵されているという。

戦国時代には、浦田を治めていた細川越中守が篤く浦田山王権現を信仰した。七堂伽藍を創設し、山王社には 12 坊の社僧が奉祀した。毎年 4 月初めの未の日に城内に、村々には初めの申の日に神輿巡幸の神事を行ったという。これは明治維新まで続いたが、明治維新後、高野七郷内の神輿巡幸をやめ、浦田の春季祭礼を 4 月の中の申の日に行うことにした。

5. 春祭り

筆者は平成 29（2017）年 4 月 15 日、16 日に行われた前夜祭及び本祭に参加し、フィールドワークを行った。前夜祭や当日の様子は、フィールドワークでの聞き取り調査をもとに記述する。5-1 では前夜祭の様子、5-2 では獅子行列の構成と役割、5-3 では囃子方について、5-4 では春祭り当日の流れ、5-5 では祭りの際に打たれる花代について記述する。

5-1. 前夜祭

春祭りを翌日に控えた平成 29（2017）年 4 月 15 日（土曜日）、「触れ太鼓」と呼ばれる前夜祭が行われた。中申会が中心となって準備し、18 時半から 21 時 10 分くらいまで太鼓と笛を鳴らしながら浦田山王社を発着点として町内を回る。参加者は全員が法被姿の男性であった。太鼓は 2 台あり、太鼓を叩く人 2 名、太鼓の台車を引く人が 2 名、横笛が 4 名前後、照明係が数名、警護役が数名で町内を回る。交通規制などをしないため、交通整理をする警護役は必須である。また、町内には街灯がない道が多く、夜遅くまでやるので、足元を照らしたり、口上を読み上げるときに手元を照らす為の照明係も必須である。横笛や太鼓などの囃子方は中申会が担当し、交通整理などは青壮年会が担当する。「触れ太鼓」は山王社の境内前で一斉に二礼二拍手一礼してから始められる。1 区から順番に回っていくが、回る順番などは事前に回覧板が回してあり、おおよそ何時ごろにどこを回るというこ

²⁶ 『私たちの思いで第 5 号』（昭和 63 年 11 月）長栄会

『浦田村の発達と山王社』（昭和 46 年 4 月）より

²⁷ 奈良時代の僧。僧の資格を得ずに難民救済や布教、土木事業を行い、やがて政府から弾圧されたが、のちに聖武天皇の帰依を受け、東大寺建立に協力した。

²⁸ 神亀 2 年（725 年）行基が開いたとされる上市町の寺。本尊である大岩日石寺磨崖仏は行基が自ら彫り込んだと伝わる。

とが知らされている（図 5）。図 4 のコースと比べてみると、「触れ太鼓」では獅子練りのコースに加え、1、2 区の全ての班を回るコースになっている。1、2 区を合わせると浦田は大変広いので、道が二手に分かれているところなどは太鼓、横笛、警備、ライトも二手に分かれ大きな道で合流するなど、効率化を図っている。

住民が花を打つ場合は、その人の家の前で口上を読み上げる。口上を読む人は特に決まっておらず、警護役の人や手が空いた人が自主的に名乗り出て、口上を読み上げる。口上は紙の扇子に書かれており（写真 1）、口上を読む人は扇子をライトで照らしてもらいながら読み上げることになる（写真 2）。口上のパターンはいくつかあり、読む人のアドリブも入っているようだ。口上を読み上げているときは笛や太鼓は鳴らさず、合いの手のときのみ掛け声と太鼓を鳴らす。このような口上はごく最近導入されたもので、平成 27 年から始められたそうだ。花を打ってくれた人へのお礼として始められたが、祭りに活気も出るため毎年行うようにした。元々浦田にこのような口上はなかったため、隣の泉地区の口上のやり方を教わった。口上を扇子に書くというのは浦田オリジナルのもので、中申会の人たちが考えたようだ。

2 時間半以上も町内を歩き続けているとさすがに疲れてくる。聞き取りをしながら一緒に歩いていた私も疲れてしまったが、警護や囃子方をやっていた中申会や青壮年会の方たちは疲れた顔を見せず、最後まで笑顔で歩いていた。前夜祭では広い浦田を隅々までまわる。どうしてこんなに時間をかけて全集落をまわるのか尋ねたところ、たくさんの花を打ってもらうためでもあるが、隅々までまわることで浦田の端の方に住む人が喜んでくれるからだという。



写真 1. 口上に使われる扇子



写真 2. 口上の様子

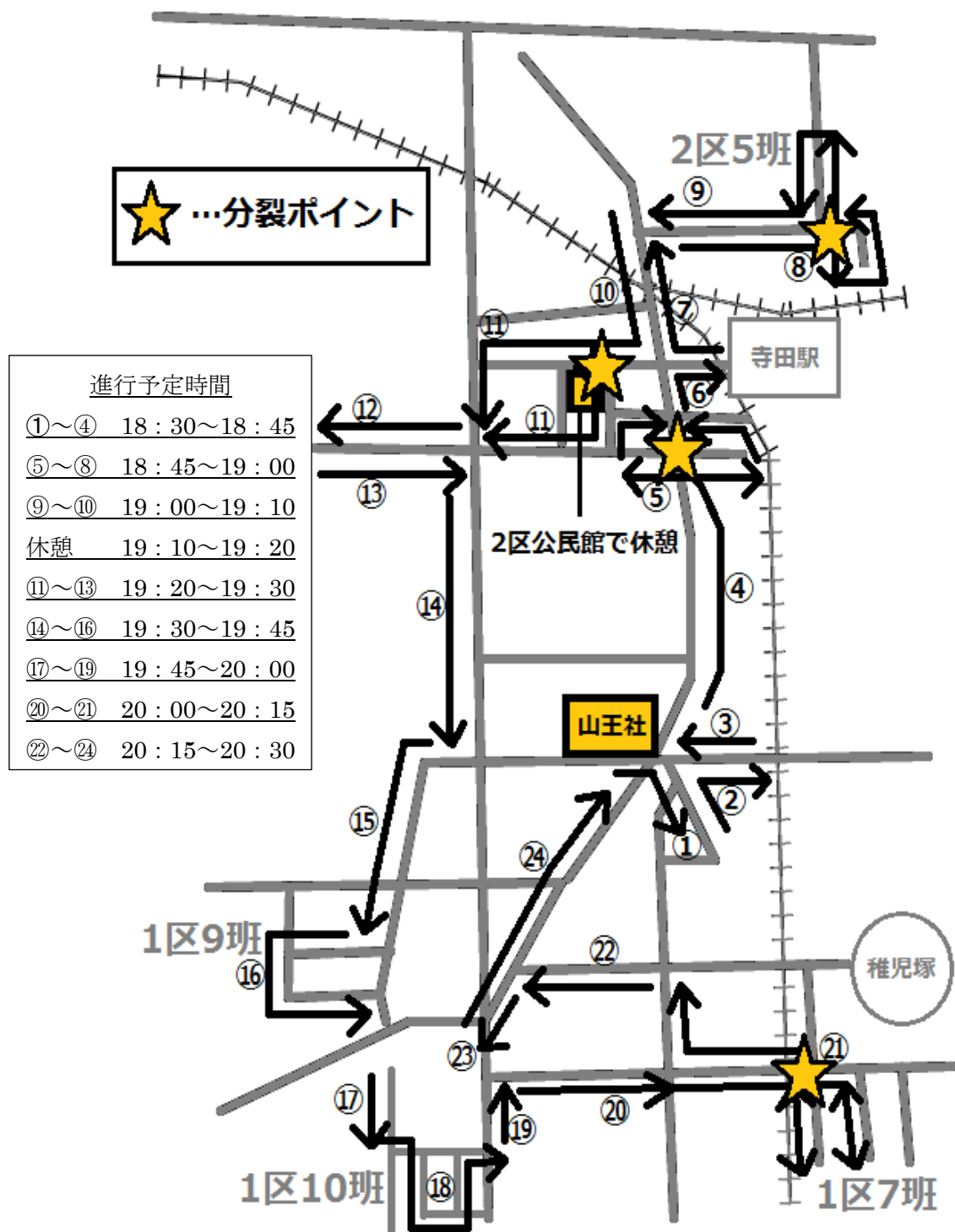


図 5. 春祭り触れ太鼓コース
(中申会資料より作成)

5-2. 獅子行列の構成と役割

獅子行列は、露払いと呼ばれる警護役の天狗を先頭にして先旗、旗持、後旗、マエダチ、獅子目隠し、獅子、囃子方、そして最後に露払いのバチ（鬼）という順番で構成されている（図 6）及び（表 3）。資料では、露払いである天狗とバチの位置は隊列の一番前と一番後ろとなっているが、実際に春祭りを見てみると先頭が先旗で最後尾が横笛であった。露払いの 2 人は列の中の適当な位置におり、隊列と一緒に練り歩いているようである。

露払いの 2 人は基本的に 42 歳の厄年の男性が担うことになっており、該当する人がいない場合は近い年齢の人が役を務める。天狗は黒衣にわらじ姿で、手には錫杖を持つ（写真 3）。髪は腰まである赤く染められた麻の毛である。また、バチと呼ばれる鬼は赤衣にわらじ姿で、手には斧を持つ（写真 4）。髪は天狗同様に腰まである白い麻の毛である。昔はこのような天狗やバチは無く、警護が 2 人だった。現在の衣装を考案したのは昭和 50 年（1975）前後であるという。



写真 3. 天狗



写真 4. バチ

先旗と後旗は 1 区と 2 区の副区長が担当する。先旗には「山王 21 社大権現」と書かれており、本来こののぼりを持つのは 13 歳の男子とされていたが、いつからか副区長が担っている（写真 5）。1 区を歩いている時は 1 区の副区長が、2 区を歩いている時は 2 区の副区長がこの先旗をもつ。また、後旗には「和光同塵者血縁之始²⁹」と書かれており、1 区と 2 区の境目で先旗と交代している（写真 6）。先旗の後ろを歩く旗持は小学生の男女 20～30 人が担当する（写真 5）。小若と書かれた青い法被を身につけ、赤や黄色、水色、緑といった色とりどりの流し旗を持つ。

マエダチは本来 25 歳の青年団団長が務めていた。中申会が出来てからは会員から出していたが、平成 27 年度春から人員不足のため、浦田全体から選出されている。衣装は紋付き袴に白足袋、桐以外の下駄³⁰を身につけ、御幣を胸のところに掲げて持っている（写真 7）。

²⁹ 仏自ら光をやわらげて、俗人に交わるということを意味する。

³⁰ 獅子頭が桐製であるため、同じ桐を使った下駄をはくのは禁じられている。

マエダチは神様であるため、前しか向くことができず、口をきくことも禁じられており、前進することしか許されない。そのため、実際にはマエダチを補佐して一緒に歩く人もいる。

マエダチの後に続くのが獅子目隠しの2人である（写真7）。これを担うのは小学校6年生の少年である。衣装は水干に烏帽子、白足袋、桐以外の下駄を身につけ檜の6尺棒を持っている。この檜の棒は獅子の眼光で人々が射抜かれないように獅子の目を隠すとされる。ずっと昔は1区の長男のみが選ばれたが、いつしか変化し、現在目隠し役は1区と2区それぞれから1人ずつ出している。



写真5. 先旗（左）と旗持（右）



写真6. 後旗



写真7. マエダチ（右）と獅子目隠し（左）

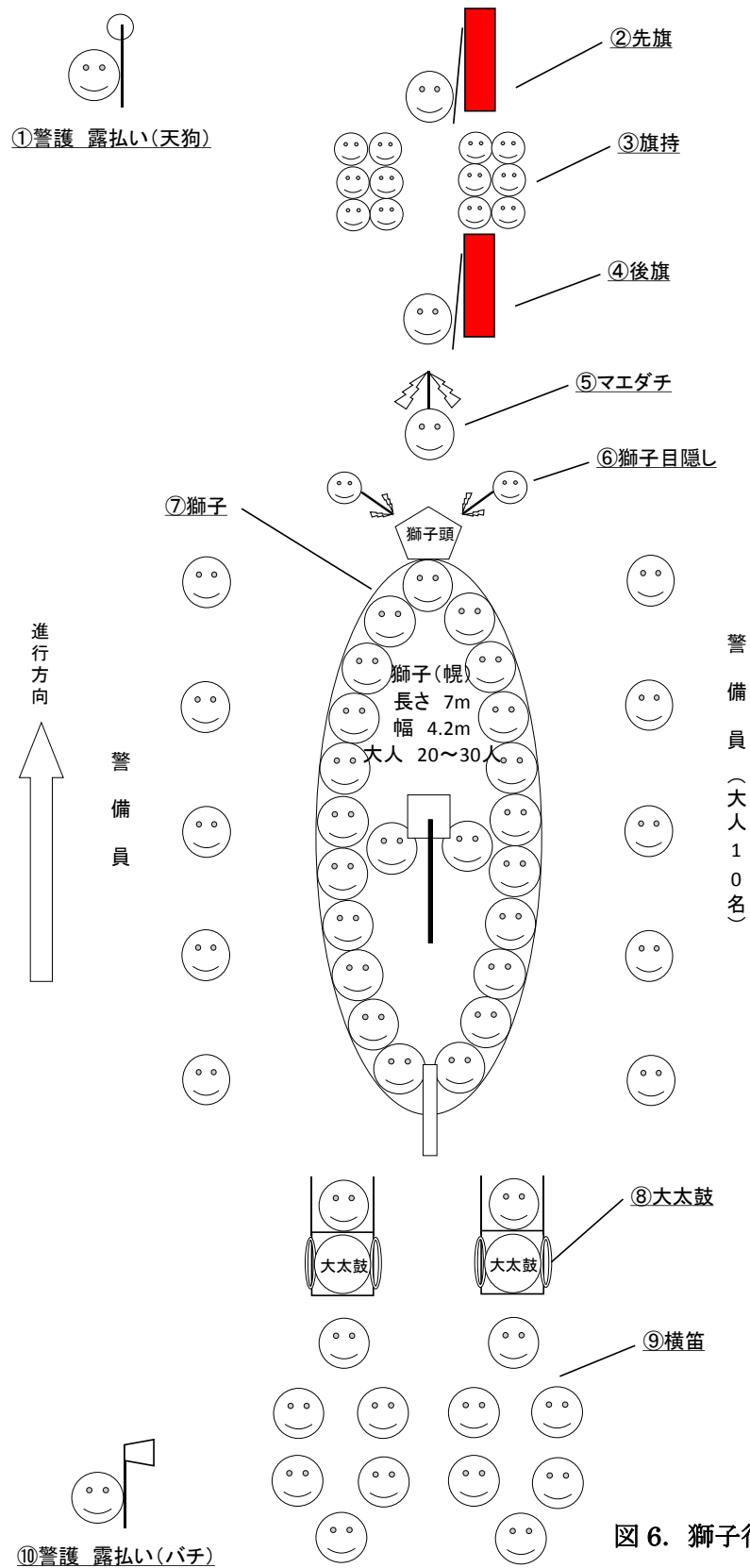


図 6. 獅子行列の構成
(中申会資料より作成)

表 3. 獅子行列の役割

役割		担い手	概要
① 警護 露払い(天狗)		42 歳の厄年の男性が基本だが、いない場合は近い年齢の男性	黒衣にわらじ姿で錫杖を持つ。赤麻毛。
② 先旗		本来は 13 歳の男子だが 現在は副区長	「山王 21 社大権現」と書かれたのぼりを持つ。1 区を歩くときは 1 区の副区長、2 区を歩くときは 2 区の副区長が先頭に立つ。後旗と交代する。
③ 旗持		小学生男女 20～30 人	小若と書かれた青い法被姿で、赤や黄色、水色、緑といった色とりどりの流し旗を持つ。
④ 後旗		副区長	「和光同塵者血縁之始」と書かれたのぼりを先旗ではない副区長がもつ。1, 2 区の境目で先旗と交代する。
⑤ マエダチ		本来は 25 歳の青年団団長	紋付袴、白足袋、桐以外の下駄を身に着け、御幣を胸のところに掲げて持つ。
⑥ 獅子目隠し		小学校 6 年生の少年 2 人	水干に烏帽子、白足袋、桐以外の下駄を身に着け、櫓の 6 尺棒を持ち、獅子の眼光で人々が射抜かれないように獅子の目を隠す。
⑦ 獅子		大人 20～30 人	衣装は普段着に法被姿。昔は長着物に下駄ばきであった。
囃子方	⑧ 大太鼓	中申会メンバーの 4 人(うち 2 人は台車をひく)	2 台あり、九曜紋の入った提灯が下がったリヤカーに乗っている。
	⑨ 横笛	中申会メンバーの 10～12 人	中申会の赤い法被姿
⑩ 警護 露払い(バチ)		42 歳の厄年の男性が基本だが、いない場合は近い年齢の男性	赤衣にわらじ姿で斧を持つ。白麻毛。バチとは鬼のことである。

獅子行列の真ん中に位置し、この祭りの主役である獅子は、胴体である幌の長さが 7m、幅 4.2m もある大変大きなものである。大人 20～30 人が幌の中へ入り、ようやく獅子の形になる。獅子の中には先頭で獅子頭を持つ人、側面を支える人（写真 8）、真ん中と後ろで

竹の柱を持つ人がおり（写真 9）、皆で息を合わせて動かないと綺麗な形にはならない。また、春祭りに使われる獅子頭は 2 つあり、1 つはオワタマシ³¹用に用いられ、約 1200 年前に行基によって作られたとされる獅子頭である（写真 10）。オトシヨリサンと呼ばれ、高さ 15 cm、長さ 25 cm、幅 30 cm である。もう 1 つは獅子練り用で獅子舞行列の際に使用されるものである（写真 11）。ゴシンゾウサン、ワカイシツァンと呼ばれ、オトシヨリサンをもとに昭和 40 年（1965）に富山市の木元博之さんによって作られた。高さは 14 cm、長さは 25 cm、幅は 20 cm とオトシヨリサンよりも一回り小さい作りになっている。

獅子は前進するだけでなく、前へ後ろへともみ合いながら進むため、獅子頭が傷んでしまうこともあった。貴重な獅子頭を保護するという目的もあってゴシンゾウサンが作られた。ゴシンゾウサンが作られた当時、獅子はまだ拝殿の周りを回るのみであったが、そのころからすでに獅子練りはゴシンゾウサン、オワタマシはオトシヨリサンというように役割が決まっていた。



写真 8. 側面を支える人



写真 9. 獅子の中で竹の柱を持つ人

³¹ お祓いとして、子どもや氏子の頭を噛む神事風習である。5 節で記述する。



写真 10. 古い獅子頭



写真 11. 新しい獅子頭

5-3. 囃子方

囃子方を担当するのは中申会のメンバー15、6人である(写真12)。囃子方には横笛と太鼓があるが、誰がどの楽器をやるかは本人の希望により決まる。それぞれ特定の先生はおらず、できる人に教わる。現在横笛を吹ける人は12人、太鼓が出来る人は7人いる。以前は共用の横笛を使っていたが、嫌がる人が多く、現在ではほとんどの人が個人の横笛を所有している。横笛だけでなく、太鼓のバチも個人で購入するが、その場合には中申会から補助が出るという。



写真 12. 太鼓と横笛

曲は全部で3曲あり、テンポの速い「はやし」から始まり、ゆっくりとした「宮まわり」、そして昔はめでたいことがあったときに演奏されていた「らんまる」である。この「らんまる」はしばらくの間演奏されていない時期があった。

「はやし」や「宮まわり」に比べ、1曲が長く難しいため、囃子方の継承者の減少と共に演奏されなくなっていたのである。しかし、中申会ができたときにせっかくだから「らんまる」をもう一度演奏しようということになり、浦田で唯一「らんまる」を覚えていた野沢静雄に協力してもらい、復活した。現在では獅子が練り歩いている間はこの3曲を繰り返し演奏し、祭りの最後に行われる中申会会長による口上の際に「らんまる」が演奏される。

また、楽譜は元々存在しなかったが、教えやすくするために指順が描いてある楽譜を作った(写真13)。初めて笛を教わる人に分かりやすいと好評で普及しているそうだ。

ずいぶん昔は正月が明けると練習として笛や太鼓を町内で流していたそうだが、現在では2週間ほど前に山王社の境内で週に2回ほど集まるのみである。初めての人も2週間ほど練習すれば一通り演奏できるため、それほど頻繁に集まって練習しなくてもよいそうだ。個人で笛やバチを持っているため、自主的な練習を行っている人もいるという。



写真13. 横笛の楽譜

5-4. 当日の流れ

平成29年4月16日(日曜日)の春祭り当日は、担当の役員の方たちを中心に朝早くから準備が行われた。山王社の入り口には大きなのぼり旗が掲げられ、色とりどりの吹き流しが山王社の前に立てられていた。

神事が始まるのは13時ごろからだ、12時30分ごろ



写真14. 公民館の中で衣装に着替える

にはたくさんの人々が集まりだし、公民館の中では慌ただしく準備が進められていた（写真 14）。子供たちはおそろいの水色の法被に着替え、獅子の目隠し役の男の子たちは白い水干姿になっていた。それぞれの衣装に着替え終わると、各々山王社の周りで遊んだり、喋ったりと思いつきの時間を過ごしていた。

13 時になると予定通り山王社の中で神事が行われた（写真 15）。神事に参加するのは主に区長やマエダチ、青壮年会や中申会、長栄会、寿会、婦人会などの会長や宮委員の代表である。境内の中に 30 人ほどが座り、神事がはじめられた。神事を取り仕切るのは多賀宮の宮司で、厳かな雰囲気の中祝詞が読まれた。その後横笛で 1 曲



写真 15. 神事の様子

奏で、玉串奉奠^{ほうてん}を行い最後はお神酒をみんなで飲み、神事は終了となる。箱に入った獅子は神事が終わるまでずっと山王社の中にある。神事が終わりひと段落ついた 14 時ごろ、皆で二礼二拍手一礼し、獅子舞が始まる。太鼓の後に獅子の入った箱を持った中申会会長、笛と続き、会長が山王社の外に出て、目の前にある大きな石の上に箱を置く。箱が開けられるとすぐ



写真 16. 口上

にマエダチに御幣が渡され、獅子の銅の中に人が入り、獅子の形になる。隊列が組まれると笛や太鼓とともにゆっくりと動き始め、山王社から駅前道を反対側の県道のほうまで練り歩く。また、この日も歩いている最中に花を打たれた場合は、前夜祭同様口上を行う（写真 16）。

獅子の中は獅子頭を持つ人、胴体側面の形を保つ人数人、胴の真ん中と後ろを太い竹の棒で支える人、各々 1 人ずつで構成されており、布の裾から足が見えないよう、常に中腰の姿勢で歩いていた。途中で私も中に入れてもらったが、常に中腰でかがみながら、且つ胴体の形を保ちながら歩くというのはとても大変である。途中 2 区の公民館と折り返し地点の 2 か所で休憩を取りつつ行われるが、祭り当日は最高気温が 26 度にもなり、獅子の中に入る人や囃子方などは大変辛そうだった。

囃子の 2 区切り毎に「スヨーノハヨーノショイ」という独特な掛け声かけられる。掛

け声をかけるタイミングは子供たちにも分かりやすいように、笛が鳴らされる。ただ、この掛け声の意味は分かっていないらしく、年配の方に尋ねてもこの意味は知らなかった。

獅子はただまっすぐ進むだけではない。前進と後退を繰り返し、獅子の横にいる人と押し合いながら前に進んでいく。中の人と外の人との駆け引きのようなものも面白いと年配の方は言っていた。山王社の前の道は獅子がやっと通れるくらいの広さだが、その両側には川が流れている。年によってはその駆け引きによって川へ落ちてしまう人もいるそうだ。また、所々で爆竹が鳴らされる。なにか決まりがあるのかと思って訪ねてみたが、これは単なる景気づけのためにやっているようである。はじめは爆竹の音にびっくりしたが、確かに大きな音は祭りを盛り上げる効果があるのかもしれない。

山王社に戻ってきて
も獅子練りは終わら
ない。今度はお宮の周りを



写真 17. 獅子は数人の手によって丁寧にしまわれる

まわるのである。鳥居をくぐり、階段を上ると山王社の境内があるのだが、鳥居をくぐる際と階段を上る際に獅子の動きが激しくなる。獅子をなだめながら階段を上らせて、お宮の周りを右回りに2周する。お宮を回り終えると獅子はゆっくりとお宮の中に入っていく、獅子練りは終了となる。獅子練りが終わるとお宮の中で年配の方たちが桐幕を丁寧に畳み、獅子を箱に収めて、次に行われるオワタマシの準備が行われる（写真 17）。

オワタマシの語源は「お渡りします」で「神様がお出ましになります」という意味であるようだ。マエダチの男性が手に持っていた御幣を首筋にさして獅子頭を扱う（写真 18）。資料によると獅子頭を扱う人は御幣を首筋にさしていなければ、目がつぶれるという言い伝えがあるそうだ。

境内では花代をくれた人への口上が行われ、大変にぎやかである一方、拝殿内では赤ちゃんを抱いたお父さん、お母さんが静かに列を作っていた。いくらかを包んで持っていくとこのオワタマシを



写真 18. オワタマシ

受けられるという。オワタマシは頭を獅子に噛んでもらうもので、誰でも参加してよく、大人でやってもらう人もいそう。頭を噛んでもらうと頭脳明晰になり、頭にデキモノができないとの言い伝えがある。年配の方に話を聞いたところ、オワタマシをされるのは赤ちゃんだけでなく、大人も大丈夫とのことで、自分も昔やってもらったといていた。

以前は長い行列ができるほど参加者がたくさんいたが、現在では 10 人ほどだという。清水正さんの話によると、「人数が減ったのはオワタマシという行事があることを知っている人が少なくなったためではないか」とのことだった。今でも浦田出身の女性は子供が生まれると、オワタマシをしに来る人もいそう。また、細川均さん（62 歳）の話では「オワタマシは子供が生まれたらやってもらうもの。参加者が減ったのは生まれる子が減ったからではないか」とのことだった。

オワタマシがすべて終わり、境内の外で行われていた口上も終わった午後 4 時ごろ、マエダチが挨拶をする。挨拶終了後、太鼓を連打し「ソイヤッ」という掛け声の後にクラッカーが鳴らされ、「ご苦労様」と一礼して春祭り終了となる。中申会を中心に片付けが進められ、片付けも終わると 1 区の公民館の 2 階で直会が行われる。

5-5. 花代

獅子が練り歩いている最中、地域の方が花を打っている場面に何度も出会った。以前は山王社の中だけを練り歩いていたため、獅子が練り歩く範囲を広げてから花を打つようになったのかと思っていたが、そうではなく花を打つ習慣は昔からあったようである。ただ、山王社の外も回るようになったため、花を打つ人が増えただけであるということだった。集めた花代が使われるのは主に獅子頭の修繕費などである。獅子頭はこれまでも何度か修理に出しており、10 年に 1 度のペースでメンテナンスを行っている。

6. 祭りを支える人々

本節では、祭礼の行事を支える組織について記述する。

6-1. 浦田の小若衆について³²

昭和初期の浦田では、小学 6 年生頃になる子供たちは正月早々の夕食後、小若衆の仲間入りをするため、夜学校³³へ連れ出された。夜学校では 17 歳になる小若衆頭が待っており、

³² 『私たちの思い出 第 2 号』（昭和 60 年 11 月）長栄会より

³³ 明治期、義務教育の普及が徹底していなかった為、政府は夜の時間を利用して勉強をする夜学校を開設するように奨励した。富山県中新川郡では浦田のある寺田村が最も早く、明治 24 年に寺田村夜学校を創設した（『立山町史 下』より）。本文中の夜学校は明治 28 年に建てられた寺田小学校の増築棟で、大正 10 年に寺田小学校が移築した後、夜学校として使用されていた。その後は移改築されて浦田公民館になった。

部屋の奥にいる小若衆頭 1 人 1 人に「〇〇ドンのアーハンよろしくお願いします。」と挨拶をする。挨拶を終えると、間もなく小若衆頭に小若衆に入った意義と守るべき規則を教え込まれる。規則には以下のものがあった。

- ①団則を守ること
- ②考え立てにならないこと
- ③朝晩の挨拶を守ること
- ④寄り合いにあったことを家や外でしゃべらないこと
- ⑤目上の人には君をつけること
- ⑥子供と遊ばないこと

これらの規則を守らないと次の寄り合いで体罰³⁴を受けたという。また、挨拶には独特な言い回しがあったという。以下にいくつか紹介する（表 4）。

表 4. 挨拶の独特な言い回し

〇〇（屋号） ドン	当時は家の階級ごとに屋号の後につける呼び方が異なっていた。裕福な家から順に〇〇ドン、〇〇サ、〇〇マとなる。
アーハン	長男のこと。次男は「オッサン」
オハヨウゴザンス	おはようございます。
ゴクロウハンデス	ご苦労様です。
オシマイナハンシタカ	こんばんは。
オヤスナハンセ	おやすみなさい。

（野澤一成さんへの聞き取りより作成）

このような小若衆制度は相当古くからあったもので、人間として、村の人間として一人前になる制度³⁵であると考えられていた。そして小若衆の上には青年団が存在する。小若衆の仕事は青年団の使い走りのようなもので、主に青年団の行事の連絡、祭りの準備、盆踊りの準備、稚児塚祭りで行われる焚火の藁集め等である。祭りでは主に流し旗をもって歩く旗持や獅子行列の獅子の目を隠す獅子目隠しなどを担当していた。野澤一成さんによれば、毎年夏になれば稚児塚で試胆会を行ったり、小学校で泊まりがけの集会もあったという。

³⁴ 腕立て伏せ、雪の上に座らされる、向かい合って顔面を殴り合う、重いものを持たされるなど。

³⁵ 浦田では 18 歳で幼名を改名し、元服する習慣があった。『私たちの思い出 第 2 号』（昭和 60 年 11 月）長栄会より

このような小若衆制度は昭和 10 年（1935）前後にはなくなってしまったが、今でも春祭りの獅子目隠し役は 14 歳の少年が担当しており、これは小若衆制度の頃から続く 1 人前になる制度の名残であると考えられる。

6-2. 青年団

小若衆の期間を終えると、20 歳～26、7 歳の青年は半ば強制的に青年団に入ることになっていた。青年団は浦田 1 区にしかなく、主な活動は行事の手伝いである。夏には学校で泊まりがけの集会を行ったり、春祭りの前夜には青年団員 5～6 人が山王社の拝殿に泊まり、山王社に保管されている獅子頭を守っていたという。また、野澤一成さんの話では、拝殿に泊まる際は布団がなかったため、祭りの日、山王社の入口に掲げる大きなのぼり旗を布団の代わりにし、それにくるまって寝ていたという。

しかし、次第に入団者が減少し青年団は衰退し始めた。そして昭和 47 年（1972）前後に浦田の青年団は青年会に名前を変えた。名前を変えた理由ははっきりとわからないが、活動内容は今まで青年団がやっていたことをそのまま引き継ぐ形で、現在でも活動が続いている。研修旅行などもあり、新川地区の運動会などでも運営に携わったりしているが、拝殿で獅子を守ったり、泊まりがけの集会は行われなくなった。

現在の青年会には 20 歳～40 歳までの男性が所属できる。青年会の上には壮年会があり、60 歳までの人が加入している。壮年会ができたのは比較的新しく、青年会に所属していた人が青年会を脱会する時の受け皿として昭和 47 年（1972）につくられたものである。しかし、青年会に入っている人が皆壮年会に入るとは限らず、会員数は青年会よりも少ない。主な仕事は祭りの際に青年会と共に行事の手伝いをしている。

浦田 2 区には青年会や壮年会のような組織はない。2 区だけの行事の際にはどのようにしているのか尋ねたところ、今は知人を集めて有志だけで行っているという。中申会の 2 区副会長である古本知也さん（35 歳）は「青年会のような組織を作っても、活動がその行事だけになってしまう。また、組織を作ってしまうと面倒なことも増えてしまう。今は有志だけで成り立っている」と語る。

6-3. 中申会

6-3-1. 中申会ができるまで

青年団が衰退し、青年会へと名前が変わった後も浦田の祭りは盛んに行われていた。その当時は祭り好きなお年寄りがたくさんいて、手伝いを頼まなくても自主的に協力してくれたという。若い人たちも祭りを楽しみながら参加しており、祭りのためにわざわざ組織を作らなくても、青年会や地域の祭り好きな人々が協力し合い運営できていた。しかし、そうした人たちがだんだん減ってきて行事の運営が難しくなっていたと中申会初代会長の細川均さんは語る。

細川さんは浦田の出身で、小学生くらいまでは浦田のお祭りに積極的に参加していた。

当時は現在よりも祭りに来る子供がたくさんおり、祭りの日には露天商も来ていた。そのころの春祭りは 4 月の中の申の日に行っており、平日に行われる場合は学校があっても、浦田地区に住む小学生は午前中で帰ることができた。また、祭りの日には親戚の人々が集まり、その間だけは集落の人口が増えた気がしたという。祭りの規模は現在のほうが大きい、当時の祭りには日常とは違う独特な雰囲気があったそうだ。

小学生のころは祭りに参加するのを楽しみにしていた細川さんも、中学生、高校生になると次第に参加しなくなった。結婚などでしばらく浦田を離れ、次に戻ってきたのは細川さんが 32 歳の時だった。昔と違い笛を吹ける人が少なく、また祭りの参加者も自分が子供のころよりもずっと少なくなっていた。

細川さんが子供のころ、浦田には農業を営む人が大勢いたため、祭りが平日であっても多くの人に参加することができた。しかし、だんだん外へ働きに行く人が増え、それと同時に祭りの参加者が減っていったのではないかと細川さんは語る。このように衰退していく地元の祭りに危機感を覚えていたのは細川さんだけでなく、同年代の他の人も同じであった。

このままではいけないと危機感がさらに強まった平成 11 年（1999）の秋祭りの後、今後どうするかという話し合いが行われた。まず、参加者を少しでも増やすため、春祭りの日程を平日から土日へ移すことが提案された。しかし、神主さんの都合等もあり、すぐに実現することはできなかった。それでもこのままの形で祭りを行っていくのは限界があった。当時太鼓を叩けるのは平田陽さんただ一人。まず笛・太鼓の後継者づくりをしようということで、笛の岩田清和さん、清水正さん、太鼓の平田陽さんを中心に、「祭りを盛り上げる会」を発足して、笛、太鼓の練習を始めることにした。

平成 12 年（2000）に入り、大勢の方に声をかけ参加を呼びかけたところ、思いのほか人が集まった。9 班³⁶や 2 区の若い人たちが積極的に集まってくれたという。また、彼らの小学生、中学生の子供たちも一緒に笛や太鼓を練習しに集まってきてくれた。これは思わぬことであった。そして、祭りをもっと活気のあるものにするにはどうしたらいいか話し合い、下記の 5 つのことを次の春祭りから行うことにした。

① 春祭りの日を中の申の日に最も近い土日へ移動させる

当時の氏子総代の神主への懸命な働きかけが実り、実現した。

② 「祭りを盛り上げる会」から「中申会」へ

そもそも中の申の日に祭りを行っていたのは、浦田山王社では猿が神の使いだからであった。春祭りの日を土日に移したが、その代わりに「中の申」を組織の名前に取り入れた。

③ 獅子を山王神社の外に出す³⁷

³⁶ 当時はまだ 10 班がなかった。

³⁷ 実は獅子を山王社の外に出したのはこれが初めてではない。平成 5 年（1993）の立山ま

当初「伝統を大切にしたい。獅子を山王社の外に出すのはよくない」と猛反対する人もいたというが、最終的には皆納得してくれたので祭りの際、獅子を山王社の外に出すことにした。



写真 19. 軒下に下がる提灯



写真 20. 歴代会長の名前が記されている法被

④ 前夜祭（触れ太鼓）を行う

夜、笛や太鼓の練習終わりに笛を吹きながら帰っているのを見て、細川さんが前夜祭を思いついたそうだ。もうすぐ祭りが始まるという合図である。

⑤ 各家に提灯を下げる（写真 19）

家紋入りの提灯を祭りの前夜から下げ、祭りの雰囲気盛り上げる。

こうした努力の甲斐があつてか、平成 12 年（2000）の春祭りにはたくさんの人が参加した。当時の区長村崎立翁さんの協力もあり、新聞にも取り上げられた。集落の人たちの働きかけのおかげで大きな成果が出たという。

6-3-2. 中申会の現在

現在の中申会には 20 歳～40 歳くらいの有志 32 名が所属している。青年会と違い、中申会は 1 区 2 区どちらの人も入会できる（図 7）。以前は年齢の上限があり、60 歳までと決まっていたが、平成 28 年（2016）の秋から制限をなくした。制限をなくした経緯は、もうすぐ 60 歳になる笛や太鼓の指導役が抜けてしまうと困るからである。女性も入ることができ、現在 1 名が参加している。また、原則成人してからの入会であるが、準会員として未成年も参加が可能である。一時期は女子高校生も数人お囃子を習いに来ていたそうだ。

つりで町制 40 周年を記念し、町内獅子舞共演会が行われた際、浦田の獅子舞も参加した。このような前例もあったため、獅子を山王神社の外へ出すことが実現した。

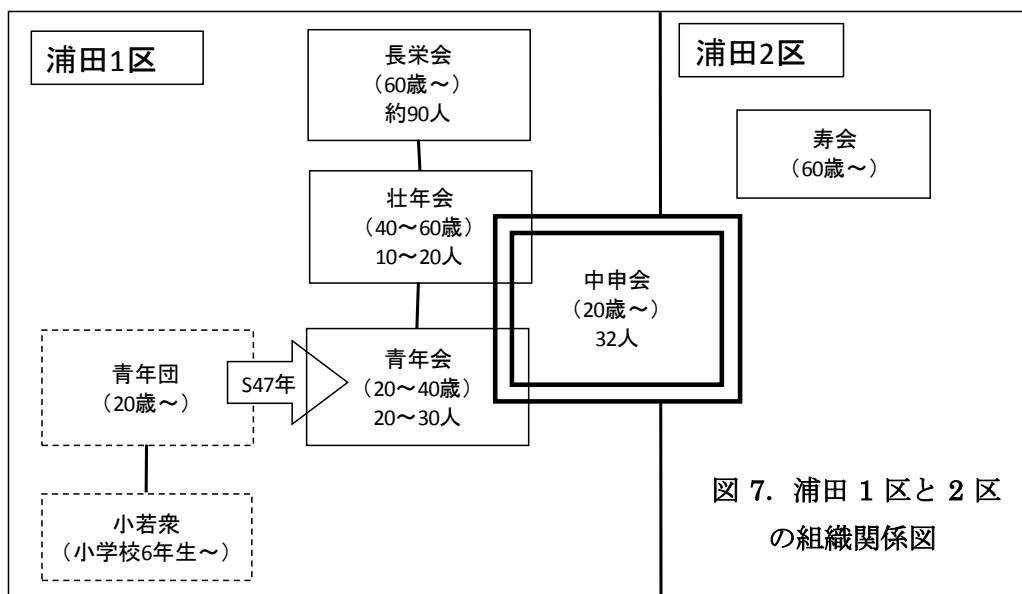


図 7. 浦田 1 区と 2 区
の組織関係図

中申会の主な活動は春と秋に行われる祭りの運営である。会長の任期は 2 年で、現在の会長の高橋一三さん（47 歳）は 8 代目の会長である。会長は前会長から指名される。副会長は、1 区と 2 区からそれぞれ 1 人ずつ選出される。2 人の副会長のどちらかから次の会長が指名されるという。会長になる人には歴代会長から受け継がれてきた法被が渡される。法被の左下には歴代会長の名前が金色で刺しゅうされており、就任したらそこに自分の名前を刻み、次の代へ引き継ぐという形である（写真 20）。

高橋さんは 15 年前に富山市から浦田地区に引っ越してきた。そしてその年に浦田の青年会に入った。その理由は「定年後も家でボーっとしているより、地域のことに携わっていたい。また、お酒の席が好きなため、地域の組織に所属していれば年齢を問わずいろんな人と関りを持てるのがいいから」と高橋さんは語る。高橋さんは青年会に入った同じ年に中申会にも所属している。中申会に入った経緯もお酒の席での流れだったそうだ。

釈永さん（30 代）も高橋さんと同じような経緯で会員になった一人である。釈永さんは平成 29 年（2017）の春祭りから祭りに参加しており、新瀬戸地区から浦田 1 区の 10 班に引っ越してきた。中申会に入る前まではこの会の存在どころか祭りの存在も全く知らなかったという。中申会に入った理由としては地域の人と関りを持ちたいからだそうだ。

高橋さんや釈永さんのように、中申会会員の多くが 9 班や 10 班に住んでいる。違う土地から引っ越してきた人はそこでずっと暮らす以上、地域の人と何らかの関りを持ちたいと考える人が多いようだ。そういう人たちにとって中申会はつながりを持つよいきっかけになっているのではないかと思う。

6-3-3. 課題

平成 12 年（2000）に発足し、平成 29 年（2017）で 18 年目を迎える中申会だが、現在の状況は必ずしも順風満帆という訳ではない。平成 29 年の春に入会した人は 1 名で準会員

も1名のみであった。それでも2〜3年前は25人しかいなかったが、この2、3年で7名増えた。浦田に若い人がいないわけではなく、お祭りになったら戻ってきてくれる人もいるが、会員になってまで祭りに協力してくれる人は少ないという。会員を増やすために浦田地区全戸に中申会のチラシを配るなどして、勧誘に励んでいる。古本知也さんもこういった勧誘で入った会員の一人である。古本さんは浦田2区の出身で幼い時から浦田にいますが、地域の行事に参加していたのは小学生までであった。5年前に中申会に入る前までは、地域の行事や団体には全く関心がなかったという。

平成29年の春祭りから祭りに参加している準会員の宮森瞬弥君（16歳）にも話を聞くことができた。9班に住んでいる宮森君が中申会に入るきっかけとなったのは、毎年9月に行われる新川地区の運動会の打ち上げだったそうだ。この打ち上げで中申会の人と知り合い、もともと囃子方に興味があったのもあって、中申会の準会員になったという。釈永さんや古本さん同様、それまでは中申会や青年会の存在も知らなかったという。中申会には友達のお父さんが2人ほどいるが、宮森君以外に10代の人はいない。友達を中申会に誘ってみても興味がないと言われ、現在は一人で打ち合わせや練習に参加している。両親は快く中申会への入会を認めてくれたが、両親や3人いる兄妹は中申会とは関りが無いとのことだった。

昔は地域で自主的に祭りを手伝ってくれる方がたくさんおり、祭りはそういった人々に支えられていたが、現在では自主的に参加してくれる人は多くない。1区には青年会、壮年会、長栄会、児童クラブ、婦人会という5つの組織が存在するが、それらの組織には自治会から補助金が出ている。元区長の富樫勉さん（68歳）は「補助金を出している代わりに行事に協力してもらおうという形。この補助金がないとなかなか協力してくれない」と語る。中申会にはこういった補助金が出ていないため、祭りを支える資金面でも多くの課題を抱えている。

浦田では毎年山王神社の経費として1戸あたり年間1200円を集めている。中申会ができる前は祭りの費用はこの中から賄っていたという。拝殿の周りを回るだけの祭りであったため、経費もそれほどかからなかったが、中申会ができてから集落からの補助がなくなり、祭りで打たれる花のみが収入源となった。しかし、花代だけでは資金が苦しいのが現状である。集落から補助をもらうために、山王社の経費を値上げしようという意見も3〜4年前から出ているが、値上げをしたら花を打つ人が減ってしまうとの声もあり、実現には至っていない。また、新しく来た人の中には祭りの開催自体に否定的な声もあるようで、祭りを守っていこうとする人と祭りに価値を見出せない人の温度差が感じられる。

高橋さんが会長になったのは平成28年（2016）の秋祭りの後である。まだ会長になって間もないが、会長になって一番大変なことは、やはり人を集めることだと語る。また、今後の目標としては高橋さんが会長を務めている間に新規会員を20名入れたいとのことだった。役員と話し合って人を集める方法を考えたり、親子で祭りを楽しめるような工夫をしていきたいという。

7. まとめと考察

以上のことを踏まえ、浦田の獅子舞を支えてきた人々の変化について簡単にまとめ、継承・維持について中申会を中心に考えていきたいと思う。

浦田山王社の獅子舞を調査するにあたっていくつかの文献を参考にしたが、そのほとんどが 30～40 年前までの記述であった。大まかな内容は同じでも 3～40 年前と現在では詳細はずいぶん変化している。

まず、1 節で述べた箱獅子と浦田の獅子舞の共通点であるが、当時とは異なる部分がある。6 つ目の共通点「村共同体の行事というより大きな社寺の行事という面が強い」という点がそれである。これは、現在では大きな社寺の行事という面が薄れ、村共同体の行事という面が強くなっているのではないかと思う。現在、山王社の春と秋の祭りは中申会を中心に行っている。伝統的な形式を受け継いでいくよりも、祭りを続けていくためにはどうするかということが重視されている。これに関連して 3 つ目の共通点「宮の周りを回る」も変化している。現在でも宮の周りをまわっているが、中申会ができてからは宮だけでなく、寺田駅の前まで回るようになった。

また、5 つ目の共通点「終わってからお祓いとして、子供や氏子の頭を噛む」もオワタマシとして現在でも行われているが、その規模は小さくなっていると考えられる。昔はこの 1 年間に生まれた幼児や新しく村に嫁入りした女性などが正装してオワタマシをしてもらいに来ていた。資料によると正装した女性も頭の櫛やかんざしなどは取らなければならないとされていたが、現在正装しているのはオトシヨリサンを扱うマエダチや年配の方のみで、オワタマシを受けに来る人たちは皆普段着であった。また、オワタマシを受けに来る人数も減っており、以前はオワタマシを目当てにする人で長い行列ができていたそうだが、今年は 10 名程度であった。

こういった変化は、獅子舞を支えてきた人々の生活の変化に起因すると考えられる。昭和初期に小若衆制度が消滅し、その後昭和 47 年前後までは青年団が浦田の行事を担う中心となる存在であったが、次第にそれらの組織は機能しなくなっていった。これはどこの地域にも共通して言えることだが、ライフスタイルの変化とともに青年団のような組織の社会的役割が失われつつあったためであろう。このような時期に衰退してしまった祭りも少なくないが、浦田では青年団の代わりに、青年会や地域住民が協力し合い、祭りの運営を行っていた。他の地域の獅子舞は 1 度途絶えて再興したものも多いが、この浦田の獅子舞が途絶えたことはないという。

日本の獅子舞に多く見られる激しく舞い踊る形の獅子舞は、多くの練習時間や踊りの技術を必要とするため、伝承が難しく継承できる人がいなくなって途絶えてしまうパターンが多い。一方で浦田の獅子舞は複雑な動きはないため、技術を継承するという点では難しくない。しかし、獅子行列は多くの人数がいなければ成り立たない。100 名近くの人員を要する大規模な祭りを何百年と続けてこれたのは、浦田に住む人の獅子舞に対する思いが強

かった証である。

しばらくは集落全体で祭りを支えていたが、やがてそういった体制にも限界が来た。このまま祭りを続けていくのは厳しいということで中申会が結成され、春祭りを土日に移動させる、獅子を山王社の外に出す、前夜祭を行う、各家に提灯を下げるなどの大規模な改革を行った。今まで春祭りは1区、秋祭りは2区が中心という風潮があったが、中申会は区を超えた組織であり、結成時には浦田に新しく越してきた人や2区の若い人たちが積極的に参加した。祭りの主要な担い手が、古くから1区に住む人から新しい若い人たちに交代したのである。中申会を中心に行った新しい取り組みは成功をおさめ、浦田の獅子舞は大きな盛り上がりを見せた。

しかし、現在の中申会には結成当時ほどの勢いはない。会が結成されてから20年を目前にして、新規会員の獲得に頭を悩ませている。この原因として挙げられるのが、中申会が若い人にまで知られていないこと、知っていても会の集まりや祭りの準備・片づけなどを組織に入ってまで手伝いたくないという人が多いことである。中申会に新しく入った人の中にも「地域の人と交流するために中申会に入ったが、祭りの準備など思っていたより大変だった」という声もあった。

また、最近の祭りでは子供たちが全然楽しそうじゃないという声もあった。たしかに長い時間をかけて町内を練り歩くだけの行事は、子供たちにとって退屈かもしれない。しかし、子供たちが担う役割は今も昔も変わっていない。それなのに子供たちが祭りを楽しめないのは祭りの特別感が薄れてきてしまっているからではないかと思う。調査中、祭りの日には親戚がたくさん集まったり豪華な料理が出たりと、祭りならではの雰囲気は昔はもっとあったということを何人かから聞いた。祭りの雰囲気を変えることはできないが、平成29年の春祭りからは、祭りの最後にお菓子を配ったりと、子供たちにも祭りを楽しんでもらう工夫をしている。

古くからある伝統を守っていくことも大切であるが、中申会がたくさんの変化をもたらしたように、時代の変化にそって伝統行事も変化させていかなければならない場合もある。伝統をそのままの形で継承することはもちろん難しい。時代が変われば生活も人々の考え方も変わっていく。地方の小さな祭りということであれば、担い手不足も避けられないだろう。そんないくつもの困難を乗り越えて浦田の獅子舞ははるか昔から受け継がれてきた。しかし、そんな伝統ある祭りを今までと違う方法で行うというのは、伝統をただ受け継ぐよりもずっと大きなエネルギーと勇気が必要であると思う。今回の調査を通して、祭りの改革を提案し、成功に導いた中申会をはじめとする浦田の人々の勇気と情熱を垣間見ることができた。今後どのような困難が待ち受けているかは分からないが、浦田の人々であれば、その時代に合わせた形で獅子舞を次の世代へと受け継いでいってくれるのではないだろうか。

謝辞

私の生まれ育ったところには大きなお祭りもなく、私は青年団や地域の組織がどのように構成され運営されているのか全く知りませんでした。この調査を通して地域の行事を支える人々がどのような活動をし、どんな気持ちで参加しているのか、また伝統行事がどのように守られてきたかというのをほんの少し知ることができたと思います。

春祭りに突然参加したにも関わらず、中申会をはじめとする浦田の皆様には本当に温かく接していただき、とてもうれしかったです。本調査をこうして報告書として形にすることができたのは、資料を下さったり、インタビューに応じてくださった浦田の方々のおかげです。本調査にご協力いただいた皆様方に心の底より感謝申し上げます。

参考文献

富山県教育委員会 昭和 54 年 『富山県の獅子舞』

立山町 昭和 52 年 『立山町史 上』

立山町 昭和 59 年 『立山町史 下』

浦田山王社奉賛会 昭和 46 年 4 月 『浦田村の発達と山王社』

浦田山王神社拝殿等修復委員会 平成 22 年 10 月 『浦田山王社修復事業竣工記念誌』

浦田 2 区 『浦田 2 区の軌跡』

山林信孝他 昭和 40 年 8 月 『浦田の由緒と名勝史跡について』

長栄会 昭和 60 年 11 月 『私たちの思い出 第 2 号』

長栄会 昭和 63 年 11 月 『私たちの思い出 第 5 号』

全国歴史教育研究協議会編 平成 25 年 『日本史 B 用語集 改訂版』

利田荷方節の変遷と継承―地元で息づく民謡を伝えるために―

北原 拓実

はじめに

筆者が正調利田荷方節を知ったのは、2 年次後期の実習の時であった。この時はまだ正調利田荷方節をテーマにするつもりはなかった。そのような中で、正調利田荷方節をテーマとするきっかけとなったのは、正調利田荷方節保存会が利田小学校の 3 年生を対象に正調利田荷方節の指導をしているということを知ったことである。これまで、筆者は民謡とは無縁であり、民謡を扱う団体がどのような活動をするのか全く知らなかった。そのため、正調利田荷方節保存会がどのような活動をしているのかについて興味を抱き、テーマとして調査することに決めた。

調査では、正調利田荷方節保存会の方々から聞き取りや活動の様子を見学させていただいた。また、いくつかの文献を参考に、富山県の民謡や正調利田荷方節の歴史を調査した。利田地域において、正調利田荷方節保存会以外の正調利田荷方節を練習する団体としてカトレア会についても取り上げた。

以上の調査をふまえて、この章では、第 1 節に富山県の民謡を取り上げ、第 2 節では正調利田荷方節の歴史及び各団体の概要について、第 3 節では正調利田荷方節保存会の活動、第 4 節でカトレア会の活動、第 5 節で正調利田荷方節保存会の方からの聞き取りを記述し、最後にまとめと考察を行う。

1. 富山県の民謡の特徴

本節では富山県の民謡の特徴について、『富山県民謡緊急調査報告書』（富山県教育委員会、1985 年）を参考にして記述していく。

まず富山県内で確認されている民謡の数について記述する。同文献には執筆された昭和 60 年（1985 年）時点で確認された民謡が記述されている。富山県は新川地区、富山地区、高岡地区、砺波地区の 4 つの地区に分けられており、本章もこの地区区分に準拠して民謡の数を数えたところ、新川地区は 68 曲、富山地区は 87 曲、高岡地区は 115 曲、砺波地区は 169 曲で、合計 439 曲であった（表 1）。

最も曲数が多いのは県南西部の砺波地区である。また、砺波市は市町村の中で最も曲数が多く 67 曲ある。民謡の中でも荷方節を数えると、富山県内では 17 曲あり、富山地区に 11 曲、高岡地区に 4 曲、砺波地区に 2 曲ある。調査対象である利田荷方節は、富山地区の立山町で唄われている唯一の荷方節である。荷方節とは、舟運業や陸運業の荷方たちによって唄われた労働唄である。富山地区に多く荷方節があるのは、富山地区には常願寺川と

表 1. 富山県内の民謡の曲数

地区	市町村	曲数	荷方節 の曲数
新川地区		68	
	魚津市	11	
	黒部市	34	
	宇奈月町	4	
	入善町	14	
	朝日町	5	
富山地区		87	11
	富山市	18	1
	滑川市	16	1
	大沢野町	14	1
	大山町	6	1
	上市町	6	2
	立山町	5	1
	八尾町	7	1
	婦中町	1	
	山田町	3	1
	細入町	11	2
高岡地区		115	4
	高岡市	21	1
	新湊市	12	
	氷見市	18	2
	小矢部市	29	
	大門町	21	1
	下村	3	
	大島町	1	
	福岡町	10	
砺波地区		169	2
	砺波市	67	2
	城端町	10	
	平村	20	
	上平村	21	

神通川が流れているためだと思われる。また、庄川や小矢部川が流れている高岡地区や砺波地区にもいくつか荷方節の存在が確認されている。

次に富山県の民謡の歌詞の特徴を記述する。資料には、富山県の民謡の歌詞にはいくつか特徴があると記述されている。その特徴の一つは、近世初頭に成立した七七五調の近世小唄調が多いという点である。利田荷方節の歌詞の中にも七七五調のものがある。中世末に成立していたと考えられているものの中にも七七五調のものがあるようである。このことから、近世になってから海や山を越えて民謡が運ばれ、それが根をおろして風土的、民俗的色彩を帯びるようになったと記してある。もう一つの特徴は、利田荷方節の歌詞には見られないが、富山県では浄土真宗が広く信仰されているため、富山県の民謡の歌詞は浄土真宗の信仰に関わるものが多いという点である。このために富山県には古い神を扱う民謡が他県に比べて少ないと記されている。

利賀村	28	
庄川町	4	
井波町	2	
井口村	2	
福野町	4	
福光町	11	
合計	439	17

(『富山県民謡緊急調査報告書』(1985) より)

2. 利田荷方節の概要

2-1. 利田の概要

この節では、利田地区の地理や歴史等を『ふるさと利田の今昔』（立山町利田自治振興会 史跡文化調査委員会、1995 年）、『立山町史下巻』（立山町、1984 年）を参考に記述していく。

利田地区は立山町北西部に位置し、北は舟橋村や富山市水橋開発、南は立山町大森、東は五百石、西は常願寺川をはさんで富山市と隣接している（図 1）。かなり勾配の強い地形で、北は標高約 12m、南は約 60m で、高低差が約 50m ある。利田地区はそれぞれ利田、日置、上野、立^{りゅうせんじ}泉寺、日水、横沢、五郎丸、塚越、浅生、^{ほこのき}銚木、曾我の 11 の地区がある（図 2）。



図 1. 立山町における利田地区の位置（「地理院地図」より作成）

現在の利田地区では、農業と工業の両方が行われているが、戦前までは農業が主な産業であった。また、利田地区には、常願寺川や八幡川があり、江戸時代にはこれらの場所で舟運業が始められた。いつ頃これらの舟運業が行われなくなったかは正確には分からないが、大正末には舟運の記録はない。常願寺川の舟運業は利田荷方節と関係が深く、「2-2. 利田荷方節の歴史」の中で、常願寺川で行われた舟運業と利田荷方節の関係について記述する。ここでは八幡川で行われた舟運業について記述する。

八幡川は、上流は西大森から始まり、そこから他の用排水を集めて八幡川となる。川幅は 3 間（5.4m.）あり、水量はそれなりにあった。舟着場は浅生にあり、そこから近隣の米を水橋港まで積み出し、帰りに海産肥料が運ばれた。八幡川の舟運業は、新しく道が作られて、荷馬車で運搬されるようになり廃れていった。



図 2. 利田地区と利田公民館の位置（「地理院地図」より作成）

江戸時代に起きた重要な出来事として、安政 5 年（1858 年）に起きた大地震がある。この地震は利田地区を含む当時の加賀藩や富山藩に甚大な被害をもたらし、『立山町資料』によると、被害集落 163 村、死者 1796 人に及んだ。生き残った農民たちも、種粃にさえ困る状況で、慶応 3 年（1867 年）は豊作であったが、明治元年（1868 年）は再び凶作となった。

そのような中で、政府は年貢を納めさせようとしたため、明治 2 年（1869 年）に新川郡でばんどり騒動が起きた。この騒動の中心人物は宮崎忠次郎であるが、その協力者として、浅生村の伊七郎や塚越村の宗二郎といった利田地区の人物も参加していた。ばんどり騒動自体は 4 日で鎮圧されてしまうが、農民たちに大きな影響を残すこととなった。

明治43年(1910年)には、利田地区の有志が働きかけ利田村青年団が結成された。また、大正10年(1921年)には、利田婦人会が結成された。この二つの団体では、利田荷方節が唄われており、「2-5. 婦

人会と青年団」で詳しく記述する。

昭和 29 年（1954 年）には、利田村、雄山町、上段村、東谷村、釜ヶ淵村、立山村の 1 町 5 村が合併し、立山町となった。それにより、利田村ではなく利田地区と呼ばれるようになった。また、昭和 42 年（1967 年）には、立山町が発足して初めての工業誘致も行い、現在のような農工一体の地区へととなっていた。

2-2. 利田荷方節の歴史

この節では利田荷方節の歴史について、『立山町史別冊』（立山町、1984年）と『ふるさと利田の今昔』（立山町利田自治振興会史跡文化調査委員会、1995年）、『立山町芸術文化協会創立四十周年記念誌』（立山町芸術文化協会、2017年）を参考に記述していく。

元々、利田荷方節は現在のような格式高いものではなく、江戸時代に常願寺川で行われた舟運業の作業中に唄われていた労働唄である。当時の常願寺川は川底が深く、流れもゆるやかであった。そのため、利田でも舟運業が行われていた。舟運業で運ばれていたもの

は、上りでは北海道からの^{にしん}鰯の魚肥や昆布、下りでは米や蕁製品であった。利田荷方節が唄われていたのは、舟を漕いでいる間や積荷の積み卸し作業の時だったとされる。それ以外の時も、仕事の休み時間や米の出荷を終えて殿様に年貢を納める時、冬の期間の慰めとしても唄われていた。

利田荷方節は荷方の腰につけた鈴や馬につけた鈴の音を伴奏にし、そこに唄を口ずさんでいたとされている。曲は余韻に富んでおり、北海道の「江差追分^{えさしおいわけ}」や青森県の「謙良節」、新潟県の「新保広大寺節」に似たところがある。そのため、利田荷方節は北前船の船乗り達から伝えられたもので、それに独自の歌詞が付けられて唄われたものと考えられている。

このように利田荷方節は労働唄として唄われていたが、江戸時代にはすでに会合やお座敷のようなめでたい場でも唄われる唄へと変化したと考えられる。『富山大百科事典下巻』には、婚礼や上棟式³⁸で唄われていたと記述されている。

そのような中で、安政 5 年（1858 年）に大洪水が起きてしまう。この大洪水によって、常願寺川の川底は高くなり、流れが速い川になってしまった。それにより、舟運業も行われなくなっていき、労働唄としての利田荷方節も唄われなくなったとされる。

しかし、昭和 28 年（1953 年）に利田荷方節を復活しようとする気運が利田で高まり、利田荷方節に振り付けが付けられた。この時の振り付けは花柳流³⁹であった。また、この時に新しい歌詞も加えられ、昭和 30 年代頃には、五七七五調、七七五調、文句入り⁴⁰の歌詞があった。昭和 40 年（1965 年）には、より一層の普及発展という気運が高まり、利田荷方節保存会が発足した。保存会が発足した確かな理由は分からないが、当時は人によって唄の節回しが違っていて、それを統一するために発足したのではないかと思われる。昭和 41 年（1966 年）に唄の募集をする。これは、利田荷方節保存会を発足した記念に行われたものであると思われる。また、この時の唄は保存会の総会で唄われていた。昭和 57 年（1982 年）には、立山町指定文化財に指定される。

昭和 63 年（1988 年）、立山町芸術文化協会の理事に就任した保正永美子さんを中心に、利田荷方節は正調利田荷方節へと改名された。また、これまで複数あった節回しや数多くあった歌詞は、採録された保正直次さんの唄を元に、平成元年（1989 年）に節回しを統一するための楽譜作成や 3 題目までの歌詞の選択が成された。さらに、振り付けも西川流⁴¹の新しい振り付けへと変わった。

³⁸ 家を建設する過程で行う祝いの儀式の一つ。棟を上げ終わった日の夕方に行われる。大黒柱の前に物を供え、棟梁が祝詞をあげて四方に米をまき、家主が玉串を捧げる。その後、職人や手伝いに来てくれた人を招き、祝宴を催す。

³⁹ 日本舞踊の流派の一つで、5 大流派の一つとされている。

⁴⁰ 江戸末期に都々逸坊扇歌（1804～1852）によって大成された口語による定型詩である都々逸の中に、清元や義太夫等の有名な曲の一節を挿入したもの。しかしここでは、民謡でよく使われる言葉を歌詞に含めているという意味であると推測される。

⁴¹ 日本舞踊の流派の一つで、5 大流派の一つとされている。

昭和 30 年代に唄われていた利田荷方節の歌詞（『ふるさと利田の今昔』より）

1. 五七七五調

- あら玉の 年はかわれど 変わらぬものは 主の心と わしが胸
- 夢なれば さめてくれるな いつまでも 二度と見られぬ この夢を
- あつかんで どうぞ一口 飲ませておくれ 正気で言われぬ こともある
- 朝咲いて 宵にしおれる 朝顔でさえ 離れまいとて 手をにぎる

2. 七七五調

- 地蔵尊なら あの利田の地蔵 わが子育ての 乳を出す
- 日置かわらの 一むらすすき いつか穂が出て 乱れ合う

3. 文句入り

- こなたのやかたは めでたいやかた 上から鶴が舞い下がり
下から亀が舞い上がり 鶴と亀との舞い遊び
- 世の中に めでたく咲くのはあの芋の花 茎は長くて葉は広く
朝晩 黄金の 玉をなし 孫子の末まで ごはんじょう

昭和 41 年（1966 年）に募集された唄の一例（『ふるさと利田の今昔』より）

1. 藤川忠則作

- くるかくるかと土堤まで出れば 川はつめたい 水ばかり
- 川は荒川 流れもすごい 渡す船頭の 竿まかせ
- 山にや初雪 祭も近い 稲を刈る手に 心もはずむ

2. 金代芳雄作

- 常盤 大日 二つの橋を 利田は 両手の花とする
- 水はうつくし 土地がらよろし 利田は ほんとに住みどころ
- 乳が欲したや 児持ちの親じゃ 地蔵へ通わにゃ 乳が出ぬ

利田荷方節は基本的に伴奏、踊り、唄に分けられる。伴奏に使われる楽器は時代ごとに変化していて、昭和までは胡弓、尺八、三味線と三種類あった。楽器は一つずつ使用することもあれば、複数の楽器を使用して伴奏する場合もあった。正調利田荷方節が作られると、伴奏は尺八に統一され、他の楽器は使われなくなった。ただし、現在は尺八で伴奏できる人がいないため、披露する際には、北陸秀城会⁴²の尺八演奏者に伴奏の依頼をするか、正調利田荷方節保存会会長の寺松弘義さんが三味線で伴奏している。

⁴² 公益財団法人日本民謡協会に所属している団体。富山県内で活動している。

平成元年（1989 年）に採択された正調利田荷方節の歌詞

ハアー	こなたの館は	目出度い館	鶴は高から	舞い降りる	亀は下から	はい上がる
	鶴と亀とが	舞い遊ぶ	チリン	チリン	チリン	
ハアー	世の中で目出度いものは	芋のずき	茎が長くて	末広で	朝晩こがねの玉を抱	
	き	末は孫子お目出度い	チリン	チリン	チリン	
ハアー	梅干が酒も飲まずに	赤い顔	年もとらずに	しわあれど	これでも昔	花の時
	驚なかせたこともある	チリン	チリン	チリン		

2-3. 正調利田荷方節保存会の概要

この項では、正調利田荷方節保存会の方からの聞き取り、『立山町芸術文化協会二十周年記念誌』（立山町芸術文化協会、1997 年）、『立山町芸術文化協会三十周年記念誌』（立山町芸術文化協会、2007 年）を参考に記述していく。

正調利田荷方節保存会は正調利田荷方節を保存するために平成元年（1989 年）に発足した。『立山町芸術文化協会二十周年記念誌』と『立山町芸術文化協会三十周年記念誌』にそれぞれ平成 9 年（1997 年）と平成 19 年（2007 年）の正調利田荷方節保存会の会員数が記載されている。それによると、平成 9 年の会員数は 39 人で、男性は 16 人、女性 23 人、平成 19 年の会員数は 26 人で、男性 12 人、女性 14 人であった。平成 29 年（2017 年）の会員数は 17 人で、男性 5 人、女性 12 人である。また、現在の正調利田荷方節保存会の会員の多くは 60 代から 80 代の方で、練習に参加している方も 60 代の方がほとんどである。

この数値を見ると、10 年ごとに約 10 人の会員が減少していることが分かる。10 年ごとに数名の加入者がいるため、実際に正調利田荷方節保存会を退会した人は 10 人より少し多い。また、男性よりも女性の方が多い。それは、正調利田荷方節は踊り手の数が多く、また女性が務めているためであると考えられる。なお、現在では男踊りも取り入れた振り付けも試みられている。

次に正調利田荷方節保存会の練習について記述する。詳しい練習の様子は「3-1 正調利田荷方節保存会の練習の様子」に記述する。正調利田荷方節保存会では、加入時に唄か踊りを選択してどちらかを練習し、毎月第 2 月曜日は踊り、第 3 月曜日は唄の練習をしている。それ以外にも、発表日が近い日には臨時に唄と踊りの合同練習をしている。練習の際には外部からの先生が来て指導している。また、練習する曲は正調利田荷方節だけでなく、他の民謡の練習もしている。これは、様々な曲を練習した方が楽しく、見識も広がるという考えで行われている。

練習以外の活動で平成 29 年度にすでに決まっているのは表 2 に記したものである。このうち敬老会は「3-2 敬老会での民謡披露の様子」で、利田小学校への指導は「3-3 利田小学校三年生への指導」で詳しく記述する。文化サークル発表会は利田公民館で活動しているクラブが集まり発表する会である。以前は文化の日の前日に行われていた。敬老会や文

化サークル発表会では正調利田荷方節だけでなく他の民謡も唄っている。謡納めと舞納めは12月末に行うその年を締めくくるときの最後の唄と踊りである。同様に、謡始めと舞始めは正月に行うその年最初の唄と踊りである。これは外部に発表するものではなく、正調利田荷方節保存会の中で毎年行っているものである。10年前までは、毎年利田地区の新年会で披露していたが、主催者側からの出演依頼がなくなったことから行われなくなった。

表 2. 平成 29 年度の正調利田荷方節保存会の活動

6 月	敬老会
11 月	文化サークル発表会
11 月	利田小学校での指導
12 月	謡納め、舞納め
1 月	謡始め、舞始め

正調利田荷方節保存会ではこれらの活動以外にも出演依頼がある時には民謡を披露する。過去には、立山まつり⁴³や富立大橋⁴⁴の開通式等の場で正調利田荷方節を披露した。自分たちから出演を希望することは、出演先との交渉や出演者の手配、経費等を考えると現状では困難だそうである。

2-4. カトレア会の概要

この項ではカトレア会のメンバーの方からの聞き取りをもとに記述していく。今回、カトレア会について記述するのは、カトレア会も正調利田荷方節を披露しているからである。

カトレア会は民謡を練習し、ボランティアとして老人ホーム等で民謡を披露しているサークルである。平成元年（1989 年）に発足し、利田公民館に所属している。発足当時の人数は 15 人ほどで女性の方ばかりであったそうである。現在は 12 人ほどで、男性 1 人、女性 11 人である。カトレア会では踊り手の方がほとんどで、唄い手の方は 1 人である。踊り手の方が多いのは、カトレア会の発足した当初の目的が踊りを楽しむためであったからである。代表の田村淑子は正調利田荷方節保存会で踊り手をしている。田村さん以外にも、正調利田荷方節保存会とカトレア会の両方に参加している方がいる。

カトレア会の練習は毎月第 2・4 木曜日に行われている。この練習以外にも、発表日が近づくと臨時で練習をすることがあり、これは正調利田荷方節保存会と同じである。初めの頃は、日本の古典的な舞踊を練習していたが、10 年ほど前からは流行歌に踊りを付けた新舞踊というジャンルも練習するようになった。

上述の通り、当初カトレア会では踊りを楽しむことが目的であり、民謡の発表も敬老会

⁴³ 7 月末に立山町五百石で行われる祭り。正調利田荷方節は、立山まつりの町流しの後に行われる芸能百選で披露された。

⁴⁴ 富山市と立山町を結ぶ橋で、県道 6 号線である。平成 17 年（2005 年）に開通した。

や出演依頼を受けた限られた時に行っていた。しかし、5 年ほど前から立山町のボランティア活動に登録し、現在では 1 年に 5 回ほど老人施設などでボランティア活動として民謡を披露している。発表する曲は指導する先生が決めており、正調利田荷方節を披露することもある。カトレア会では、民謡を披露する時には、唄い手の方が唄うか CD を利用している。曲は 1 つというわけではなく、複数の曲を披露し、また時には人形劇といった民謡以外のこともすることがある。

2-5. 婦人会と青年団の利田荷方節

聞き取りをする中で、利田荷方節保存会以外にも、かつて婦人会や青年団でも利田荷方節を披露していたことが分かった。現在ではどちらの団体もなくなってしまったが、当時はどのようにして利田荷方節と関わっていたのか、聞き取りをもとに記述していく。

婦人会の中で、利田荷方節の練習をしていたのは 20 人ほどで、同じ人が練習に参加していた。婦人会に所属していた全員が利田荷方節をしていたわけではなく、「利田荷方節をしたい」、「練習をしてもいい」と思った人が練習に参加した。

練習は利田小学校で行われ、踊りの練習のみをしていた。唄や伴奏はテープを使用していた。練習が行われたのは、年に何回かある発表の前の短期間のみで、定期的に練習をしていたわけではない。婦人会が発表をしていたのは、6 月に行われた敬老会や 3 月に行われた総会等である。これらの発表は練習に参加する人の中から 10 人ほど選んで行われた。練習の時には、利田出身の先生が来て指導した。

正調利田荷方節保存会が発足したのを機に、婦人会で利田荷方節を踊ることはなくなった。その代わりに、婦人会で利田荷方節を踊っていた何人かが正調利田荷方節保存会に加入した。婦人会は 20 年ほど前になくなってしまったそうである。

次に青年団での利田荷方節について記述する。青年団には 25 歳になった男女が加入していた。青年団で利田荷方節を実践する人は男性が多く、女性が少なかった。また、婦人会同様に唄は練習せず、踊りのみを練習し、唄等はテープを使用していた。青年団が利田荷方節を披露したのは、8 月に開催される「若人の祭典」のみである。若人の祭典は、立山町各地の青年団が集まり様々なものを披露する催しであった。若人の祭典は今から 30～40 年前に行われなくなったそうである。青年団が利田荷方節を練習していたのは、若人の祭典の前の短期間であった。青年団でも、正調利田荷方節保存会が発足したのを機に利田荷方節が実践されなくなった。青年団も婦人会同様に 20 年ほど前になくなってしまったそうである。

婦人会と青年団には三つの共通点がある。一つは踊りのみを練習していたということである。踊りのみを練習していた理由は、唄と比べて踊りの方が習得しやすいためではないかと推測できる。

二つ目は正調利田荷方節保存会の発足を機にこれらの団体で利田荷方節が練習されなくなったことである。これは、二つの団体の人数が減少し組織を維持できなくなったため、

また利田荷方節から正調利田荷方節に変化したことで、利田荷方節を続けるべきではないと判断したため、といくつかの理由を推測することができる。

三つ目は、婦人会と青年団はともに現在活動していないということである。これも団体の人数が減少してしまったことが原因の一つであると思われる。

3. 正調利田荷方節保存会の活動

本節では正調利田荷方節保存会の練習の様子や敬老会での発表の様子を、筆者の聞き取りや見学をもとにして記述していく。

3-1. 正調利田荷方節保存会の練習の様子

筆者が見学した正調利田荷方節保存会の練習は、平成 29 年（2017 年）6 月 12 日に行われたものである。これは、同年 6 月 18 日に利田公民館で行われる敬老会での発表に向けた練習であった。そのため、この日の練習は普段行われている練習とは異なり、踊りと唄の両方のグループの方が練習に参加していた。また、普段の練習では指導する先生がいるが、今回の練習では正調利田荷方節保存会の方たちのみで行われた。

練習は利田公民館で行われた。この日の参加者は 8 名で、うち踊り 5 名、唄 2 名、伴奏 1 名である。伴奏は正調利田荷方節保存会の会長の寺松さんが担当し、それ以外の踊りや唄は女性の方であった。練習に参加した方は 60 代の方が多く、若い方でも 50 代の方であった。芸歴はどの方も 10 年以上あり、何名かの方は正調利田荷方節保存会が発足した平成元年頃から正調利田荷方節に携わっている。

練習の開始予定は 20 時頃であるが、会長である寺松さんは 19 時 20 分頃から利田公民館に到着し準備を始めた。寺松さんが用意したのは三味線、調子笛、鈴、文化譜である。調子笛とは、弦楽器の音の高さを調整するための道具である（写真 1）。鈴は囃子の部分の「チリンチリン」という箇所でも鳴らすために使用する鳴り物で、以前までは鈴を鳴らす担当の人がいたそうであるが、現在は人手不足もあり唄の方が鳴らしている。今回の練習でも唄の方が囃子で鈴を鳴らしていた（写真 2）。文化譜は寺松さんが三味線で伴奏ができるよう



写真 1. 寺松さんの調子笛



写真 2. 演奏時に鳴らす鈴



写真 3. 寺松さんが作成した文化譜

田荷方節と現在の正調利田荷方節とでは衣装や扇子が異なっており、以前の利田荷方節では黄色と紫の着物と白い扇子を使用していたそうである。



写真 4. 踊り手が使う扇子

に自分の手で作成したものである（写真 3）。

少しすると他の方たちも集まり、各自の準備を始めた。踊り手の人たちは金色の扇子（写真 4）や各自で用意した羽織を着て練習に備えていた。この金色の扇子は練習だけでなく本番にも使用するものである。また、練習の時に羽織を着ているのは雰囲気を出すためであり、実際の発表を意識しているように思われた。また、この時に茶菓子や飲み物も用意していた。練習が始まる前に本番で着る衣装も見せていただいた。本番の衣装は女性と男性で異なり、女性の衣装は青を基調とした鶴の描かれた着物であり（写真 5）、男性の衣装は白と黒を基調とした松や亀の描かれた着物である（写真 6）。松や亀、鶴は正調利田荷方節

の歌詞にある単語で、めでたいものとされている。踊りの方によると、正調となる前の利



写真 5. 正調利田荷方節の女性の衣装



写真 6. 正調利田荷方節の男性の衣装

20 時頃になって合同練習が始まった。練習は正調利田荷方節の最初から最後までを通して 3 回行われた。1 回の演奏は約 5 分である。合同練習の時の配置は筆者から見て左側に踊りの方（写真 7）、右側に唄と伴奏の寺松さんとなっていた（写真 8）。唄と唄の合間に寺松さんが「オヤオヤ」と囃子を入れていた。以前の正調利田荷方節は伴奏で尺八を使っていたため、この囃子は別の人が行っていた。1 回終わるごとに全員で今の演奏の感想を言い合い、問題点や動きの確認がなされた。筆者には細かなことまでは分からなかったが、この時に話されていたことは踊り、唄、伴奏でタイミングが合っていないというものであった。その後の練習ではタイミングや動きを合わせるように練習していた。合同練習が終わった後は、唄・伴奏グループと踊りのグループに分かれて練習を始めた。



写真 7. 合同練習の様子（踊り）



写真 8. 合同練習の様子（唄・伴奏）

分かれて練習を始めた後、先に踊りのグループを見学した。聞き取りによると、練習のある日は茶菓子や飲み物を用意して、休憩中にそれらを食べておしゃべりをしているそうである。また、ただ練習をするだけでなくこのような時間をとってみんなでおしゃべりすることが楽しいとも語ってくれた。この休憩の後、踊りのグループは正調利田荷方節ではなく別の民謡の練習を始めた。敬老会では別の民謡も披露するためである。

唄と伴奏のグループは終わる寸前のところであったので、ほとんど見学することができなかったが、こちらでは敬老会での発表について声が届くかどうか等といったことを話し合っていた。

3-2. 敬老会での民謡披露の様子

平成 29 年（2017 年）6 月 18 日に行われた敬老会での正調利田荷方節保存会の民謡披露の様子を記述していく。敬老会の会場は利田公民館で、敬老会の開始は 14 時である。今回の敬老会で発表を行う団体はあおぞら保育園年長児、利田小学校三年生、正調利田荷方節保存会、カトレア会、盆踊り研究会である。この中で、正調利田荷方節保存会とカトレア会、盆踊り研究会は利田公民館に所属し、民謡の練習などを行っている団体である。敬老会では、前半にあおぞら保育園年長児や利田小学校三年生による歌等を発表し、休憩をはさんだのち利田公民館の所属の団体が発表した。そのため、前半までは利田公民館所属の団

体は控室で準備をしていた。敬老会の会場に来ていた人は、年配の方が約 50 名、来賓の方が約 10 名、スタッフ等が約 10 名で合計約 70 名ほどである。

正調利田荷方節保存会の披露が始まったのは 15 時頃である。今回の敬老会で正調利田荷方節保存会が披露するのは「正調利田荷方節」と福島県民謡の「黒田節」、宮城県民謡の「さんさ時雨」である（写真 9）。この中で、「黒田節」と「さんさ時雨」は唄と三味線のみで行われた。発表が終わった後は見ていた方たちから拍手が送られていた。正調利田荷方節保存会の発表が終わった後も、この後に発表を控えているカトレア会や盆踊り研究会にも参加している方たちは準備をするために忙しくしていた。正調利田荷方節保存会の後の発表も見学していたが、どの発表も会場にいる人たちに楽しんでもらうとともに自分たちも楽しもうとしている雰囲気が伝わってきた。敬老会が終わったのは 16 時頃である。



写真 9. 敬老会での正調利田荷方節の披露

3-3. 利田小学校三年生への指導

この節では、正調利田荷方節保存会による利田小学校への正調利田荷方節の指導について、保存会の方からの聞き取りをもとに記述していく。小学生への指導は、10 年ほど前まで行われていた全校生徒を対象としたものと、平成 28 年（2016 年）から行われるようになった小学三年生向けのものの二つがあり、それぞれについて述べていく。

3-3-1. 初期の正調利田荷方節保存会で行われていた小学生への指導

正調利田荷方節保存会の利田小学校への指導は保存会が発足した初期の頃から行われていた。小学生に指導をするようになったのは、保正永美子さんが学校側に指導することができるようにお願いしたためである。保正永美子さんは正調利田荷方節保存会前会長で、10 年ほど前に亡くなられるまで指導を続けられていた。この方が小学生への指導を始めた理由は聞き取りでは分からなかったが、当時新しくなった正調利田荷方節を地元の子供た

ちに知ってもらいたいという思いがあったのではないかと推測する。

次にどのような指導を行っていたのかを記述する。指導する人は保正さんを中心とし、そのお手伝いをする 2 名の方の計 3 名であった。利田小学校の生徒全員を対象とし、運動会での発表に向けて、体育の授業の時に指導していた。人数が多いため踊りのみを指導しており、その踊りも本来の振り付けより簡略化したもので、体操に似たようなものだった。また、本来の踊りでは扇子を使用するが、その代わりとして棒のようなものを使っていた。

この頃の小学生への指導の特徴は、指導の対象が利田小学校の生徒全員で人数が多かったこと、また本来の踊りよりもかなり簡略化したものであったということが挙げられる。

3-3-2. 平成 28 年（2016 年）から始めた利田小学校三年生への指導

前述したとおり、10 年ほど前に小学生への指導が行われなくなったが、平成 28 年（2016 年）に今度は学校からの依頼で小学生への指導を再開した。この時の指導は、10 年前に行われていたものとは異なり、三年生のみを対象とし、総合学習の時間の地元の伝統文化を学ぶ一環で行われた。この総合学習の授業では、三つの伝統芸能の中から生徒が学びたいと思ったものを生徒自身が選んで学習し、その成果を 12 月 6 日に行われる学習発表会で披露する。選ぶことのできる芸能は、平成 28 年（2016 年）では、「正調利田荷方節（唄）」、「正調利田荷方節（踊り）」「常願寺あばれ太鼓」、「盆踊り」の四つであったが、平成 29 年（2017 年）では、「正調利田荷方節（唄）」、「正調利田荷方節（踊り）」、「盆踊り」の三つとなった。ただし、「常願寺あばれ太鼓」も学習発表会で、創作ダンスとのコラボレーションで披露した。三年生は 40 名ほどで、以前の全校生徒を対象に指導していた時よりも人数ははるかに少ない。

次に平成 29 年（2017 年）に行われた小学三年生への指導がどのように行われたかを記述する。指導が行われたのは 10 月 25 日（水）、11 月 8 日（水）、15 日（水）、22 日（水）の 4 日間である。その後、12 月 6 日（水）に総合学習の成果として発表を行った。指導全体の流れは、まず 10 月 25 日に生徒たちにそれぞれの芸能を体験してもらい、それをもとに各自の学びたいものを選んでもらい、11 月 8 日以降に指導を受けるというものである。

今回の指導では、唄と踊りが明確に分けられていたため、それぞれどのように行ったのかを記述する。唄のグループで指導に来ていたのは 3 名で、6 月 12 日の練習と同じ方たちだった。10 月 25 日に行った指導は、利田荷方節の歴史の説明や唄の体験、和楽器の音色を聴いてもらうというものであった。歴史の説明の際には写真等を用いて説明し、和楽器は寺松さんが実際に弾いて生徒たちに聴かせた。使用したのは尺八と三味線で、尺八は 10 月 25 日に、三味線は 11 月 8 日に弾いた。本格的な練習は 11 月 8 日以降に行われた。

唄の指導で重点的に教えていたのは発声である。民謡を唄う時には母音を伸ばすことが基本であり、まずはその基本を身につけてもらうためにこのような指導をした。実際に生徒たちが正調利田荷方節を唄う際には、CD⁴⁵を流しながら指導した（写真 10）。また、大

⁴⁵ この CD は 10 年ほど前に正調利田荷方節保存会で制作されたものである。

きな紙に楽譜を書いて生徒たちが前を向いて唄えるような工夫もした（写真 11）。指導では唄うことだけではなく、唄う時の姿勢や態度も教えていた。指導者の方は、このような部分も民謡を学ぶ上では必要なことで、生徒たちにしっかり学んでほしいことであると語ってくださった。

11 月 22 日に最後の指導を行い、その時に修了証と鈴を記念に渡した。これは生徒たちに指導の思い出を残していつてもらいたいという思いで行ったことである。指導する人たちは生徒たちにただ指導するだけでなく、生徒たちとの交流も持ちたいという思いもある。



写真 10. 練習で使用した CD



写真 11. 小学生への指導で作成した楽譜

次に、踊りのグループの指導の様子について記述する。踊りのグループで指導に来ていたのは 5 名である。10 月 25 日に行った指導は、途中までは唄の方たちと一緒に利田荷方節の歴史等を生徒に教え、その後唄のグループと分かれ、踊りを生徒に体験してもらった。

本格的な指導は 11 月 8 日から始まった。踊りの指導では、唄の流れに合わせた踊りができるようにするとともに、しっとりとした踊りができるようにも指導した。また、踊りそのものだけでなく、お辞儀等の挨拶の仕方も生徒に指導していた。民謡では、踊りだけではなく、挨拶といった礼儀作法も大切であるため、指導する際にはその点も重要としている。

唄と踊りの方々が共通して思っていることは、指導した生徒が正調利田荷方節をまたしたいと思ってもらうことである。指導した生徒が何年後かに正調利田荷方節保存会に加入し、新たな担い手となってほしいという思いもある。そのようになれば現在の担い手不足も解消されていくと思われる。

4. カトレア会の活動

ここでは、8月24日に利田公民館で行われたカトレア会の練習での見学をもとに練習風景を記述していく。今回の練習では正調利田荷方節をすることはなかったが、正調利田荷方節保存会以外の練習の様子の一例として記述する。この時の練習は末上野の竜ヶ浜にある老人施設での発表に向けたものである。

練習に参加していたのは踊り手が9人、唄い手が1人で全員女性であった。踊り手は8人が60代であり、50代の方が1人いた。唄い手は30代であった。指導をしていたのは藤間流⁴⁶の先生であった。練習の開始時間は19時30分からであるが、練習が始まる前に皆で持ち寄った茶菓子を全員配っていた。3節でも述べたが、練習だからといって練習のみをするわけではなく、茶菓子を食べながら休憩をし、談笑することも練習の中には必要なのだと感じた。今回の練習では老人施設で披露する曲をまず決め、その後その曲を練習した。練習する予定となっていたのは、五箇山の民謡「こきりこ節」と演歌歌手の成世昌平が歌う「はぐれこきりこ」、山形県の民謡「花笠音頭」、八尾の民謡「越中おわら」、演歌歌手の五木ひろしが歌う「長良川艶歌」である。時間の都合上、筆者はこのうちの「こきりこ節」と「はぐれコキリコ」のみを見学した。

最初に練習したのは「こきりこ節」であった。「こきりこ節」は4題まであり、びんざさら⁴⁷を持った男性が前を踊り、その後ろにしで竹⁴⁸を持った女性が踊る。しかし、今回の練習は女性のみだったので、しで竹を持って踊る女性の踊りのみを練習していた

(写真12)。「こきりこ節」を練習したのは練習に来た踊り手の女性9名であった。練習では本番を想定して、本来の「こきりこ節」の動きに発表用のアレンジを加えた動きを加えて練習していた。発表用にアレンジされたと思う動きは①踊りながら舞台の左右から登場する、②唄の途中で左と右のグループで左右対称の踊りをする、③唄の終盤、前で踊っている女性2名が後ろに向かって踊る、④曲の終わりには踊りながら左右へとはけていく、という四つではないかと思われる。



写真12. 練習で使用されていたしで竹

⁴⁶ 藤間流とは、全国的に活動している日本舞踊の流派の一つである。

⁴⁷ 短冊状にした薄い木の板108枚を紐で結んだもの。両端を持ち、手首を利かせて板をこすることで音を出す。

⁴⁸ 「こきりこ節」のしで竹踊りで使用される道具。

練習の初めでは踊りの振り付けを確認し、その後アレンジされた部分を含めた本番で披露する踊りの練習を始めた（写真 13）。唄い手の方は踊りの練習に合わせて唄の練習をした。振り付けの確認をしているところを見学していると、しで竹を叩くタイミングを何度も確認する場面があった。



写真 13. 「こきりこ節」を練習している時の様子

た。また、しで竹を持つ手を上向きにしていなければならないが、下向きになっていたということもあった。しかし、何度も繰り返し振り付けを練習することで、全員の踊りが良くなり、全員のタイミングも揃うようになった。タイミングが揃い始めたところでアレンジ部分を含めた全体の動きの練習を始めた。この段階になると振り付けと立ち回りの両方をしなければならないので、先程までうまくいっていた振り付けでもミスが出てきた。特に②の左右対称に踊る部分は難しいようで、この部分は何度もやり直していた。その際に指導の先生は自分が躍ってしまうとそれを見て踊ってしまい、自分で動きを覚えられないと考え、自分ではこの部分は踊らずに指導した。そのようにして練習を繰り返していると、少しずつミスが減り、踊りもきれいになっていった。

練習を見ていて感じたことは、真面目に取り組みつつも楽しんで練習に励んでいることである。何度も指導を受けていたが、笑顔が常にあり、前向きに練習をしていた。厳しくなりすぎて萎縮してしまうということもなく、ゆるくなりすぎて意味のない練習になるということもなかった。カトレア会に所属している人たちは本当に民謡が好きだということが伝わってきた。

1 時間ほどして「こきりこ節」の練習が終わり、次に「はぐれコキリコ」の練習が始まった。「はぐれコキリコ」の練習をしたのは正調利田荷方節保存会に所属している 4 人であった。保存会に所属している人たちは他の会員の方よりも経験が多くあるのでその分多くの演目をするということだと思われる。踊りをする際に、頭に頭巾をかぶって練習をしていた。

5. 正調利田荷方節保存会の方からの聞き取り

現在正調利田荷方節保存会に所属している何名かの方に聞き取りを行った。その中でも、その方々がどのような経緯で正調利田荷方節保存会に所属することになったのか、披露の際に気を付けている点、継承についてどのような思いがあるのか記述していく。

寺松弘義さんからの聞き取り

寺松さんが正調利田荷方節保存会に加入したのは15～16年ほど前であった。元々、寺松さんは利田出身の方ではなく、利田に移り住んで母親から勧められたことと、自身も民謡が好きで地元の民謡を知っておきたいという考えから正調利田荷方節保存会に加入した。現在では、三味線を弾いて伴奏もしているが、加入当初は唄のみをしていた。寺松さんが三味線にも興味を持ったのは10年ほど前で、独学で勉強した。この頃は披露の際に三味線を使うことはなかったが、5年ほど前に尺八で伴奏をする方が亡くなってしまい、寺松さんが三味線でも伴奏できるように練習し、現在では三味線でも伴奏をしている。

寺松さんは三味線で伴奏する時、唄う人によって弦の張り方を変えているそうである。例えば、男性の場合は弦をゆるくして音を低くしたり、女性の場合は弦を強く張り音を高くしたりする。尺八でも唄う人によって長さの違う尺八を使い、唄う人の声の高さに合わせて伴奏を変化させている。このように唄う人によって柔軟に対応できる点が、和楽器の良さであると語ってくださった。

継承問題については「伴奏のできる人が1人しかいないことから伴奏のできる人に来てほしい」と語ってくださった。正調利田荷方節保存会の中で、現在伴奏のできる人は寺松さんだけである。しかし、本来の正調利田荷方節は尺八が伴奏であり、寺松さんは尺八を吹くことはできるが演奏できるほどの腕前ではない。そのため、寺松さんは正調利田荷方節保存会の中で尺八で伴奏ができる人がいない状態であることに苦慮している。

一方で、敬老会では三味線を伴奏としており、尺八から三味線へと伴奏を変えていったことについて聞いたところ「民謡は変化していくもの」と語られた。このような考えもあるが、「指定文化財としての正調利田荷方節の伴奏は、本来の尺八で伴奏するのが望ましい」という考えもあり、寺松さんは尺八で伴奏をすることが一番良いと考えているのではないかと推測する。

唄い手の方の聞き取り

60代女性の唄い手の方から聞き取りを行った。この方が正調利田荷方節保存会に加入したのは平成10年頃である。この方は正調利田荷方節保存会化に加入する前に、藤声会という民謡を学ぶ団体に所属していた。藤声会は正調利田荷方節保存会と同様に利田公民館で活動をしていた団体であったが、平成元年（1989年）頃になくなってしまった。その時、この方も一度民謡を辞めてしまうが、母親からの勧めで正調利田荷方節保存会に加入したそうである。

加入した当初は、藤声会に所属していた頃と唄い方が異なっていて、一年間ほどは活動に参加できなかったそうである。正調利田荷方節は藤声会で唄われていた利田荷方節と比べると鼻のかかった唄い方をしたり、節回しが違っていたりするためである。

現在、正調利田荷方節を唄う際に気を付けていることは、唄だけの場合、比較的緩やかなテンポで唄うが、踊り手に合わせて唄う場合は、テンポを速くすることで踊りが引き立

つようにすることであると語ってくださった。

継承問題についてお聞きしたところ、「民謡は唄われていた当時の様子とかを想うことができる。だから後世に残していく必要がある」と語られた。また、この方が加入した頃には少ないながらも男性の唄い手がいたため、男性の唄い手の加入も期待したいと語ってくださった。

踊りのグループの方々からの聞き取り

踊りのグループでは複数人から同時に聞き取りをした。踊りの方たちには婦人会や青年団に所属していた人たちが多く、その人たちがそのまま正調利田荷方節保存会に加入した。正調利田荷方節の踊りは、利田荷方節の頃の踊りと比べると、美しくなっていて、現代の人にも合うのではないかと語ってくださった。しかし、以前の踊りに親しんでいた方の中には、正調利田荷方節の踊りを嫌う方もいたそうである。

踊りをする時に気をつけていることは、全員の踊りを揃えることだと語ってくださった。タイミングを揃えることでより踊りを美しく見せることができるということである。

継承問題についてお聞きしたところ、地元の民謡を後世に残すことは大事であり、受け継がれていく必要があると語ってくださった。また、その上で自分たちも民謡を通じて活動を楽しむことが大切であるとも語ってくださった。実際、練習を見学させていただいた時、休憩中に茶菓子を食べて世間話を楽しんでいる時があった。

6. まとめと考察

まずは利田荷方節の変遷をまとめる。初期の利田荷方節は、舟運業の作業で唄われる労働唄であった。それが次第に、めでたい場で唄われる座敷唄や祝儀唄となっていく、安政 5 年（1858 年）の大洪水で労働唄として唄われることはなくなった。また、このように変化する過程で、利田荷方節は男性的な民謡から女性的な民謡へと変わっていった。

昭和 28 年（1953 年）になると、振り付けや新しい歌詞が加えられる。そして、昭和 40 年（1965 年）には利田荷方節保存会が発足する。この時期の利田荷方節は、めでたい場で唄う唄としてだけでなく、地元の伝統芸能としての側面も強くなったと思われる。特に、昭和 57 年（1982 年）に立山町指定文化財に指定されたことと平成元年（1989 年）に正調利田荷方節と改めたことで、後世に残していくべき地元の伝統芸能というイメージが確立したと思われる。

ここで簡単にまとめると、利田荷方節は労働唄→座敷唄・祝儀唄→伝統芸能と変化していき、高級な文化として認められていった。もちろん、現在の正調利田荷方節は祝いの唄であることに変わりはない。しかし、それは過去に唄われた祝いの唄とは異なっているのではないかとと思われる。それは、婚礼や上棟式のような祝いの場で唄われるものから、敬老会のような祝いの場であるとともに発表の場でもある舞台上で唄われるものへと、徐々に変

化していったことから推測できる。

次に継承問題について記述する。現在、正調利田荷方節は担い手が不足している状態である。特に、現在伴奏できる方は寺松さんしかおらず、伴奏者不足は深刻である。そのようになっている原因として、利田荷方節の頃にあった婦人会や青年団といった団体が現在には無いことが挙げられる。これらの団体は、保存会とは別に担い手を育成し、利田荷方節を保存することに役立っていた。また、加入していた人数も多く、その分利田荷方節に触れる人も多かったと思われる。実際に正調利田荷方節保存会の踊り手の中には、婦人会や青年団で利田荷方節をしていたから加入したという方がいる。

しかし、現在はこのように保存会以外で担い手を育成できる場がない。カトレア会でも正調利田荷方節を扱っているが、カトレア会の場合には他にも民謡を扱っており、正調利田荷方節の担い手の育成という側面はあまりないと思われる。そのため、担い手を増やすためには正調利田荷方節保存会に直接加入してもらうしかなく、敷居が少し高くなっているように感じられる。

このような中で、現在行われている活動で担い手不足を解消するのに効果的であると思われるのが、小学生への指導である。その上で正調利田荷方節の担い手を増やすことにおいて重要なのは、民謡は楽しいということを伝えることではないかと思う。正調利田荷方節となったことで格式高いものへと変わったが、このことが逆に、これまで利田荷方節や正調利田荷方節を演じたことがない人々にとっては参加しづらい要因の一つになってしまっているのかもしれない。しかし、第3節で練習風景を記述したが、休憩時間に茶菓子を食べながら楽しく会話をしている様子があり、民謡を学ぶことは楽しいということを小学生に知ってもらえたら、彼らが今後の新しい担い手となるかもしれない。

しかし、あくまでこれは何年も先の話であり、すぐに新しい担い手が増えるわけではない。今は現状の人数を維持しつつ、小学生に正調利田荷方節を知ってもらい、民謡の楽しさや大切さを伝えていくことが必要であると思う。地道な活動を続けていかなければならないが、新しい担い手が生まれ、その新しい担い手がさらに新しい担い手を生むこととなる循環が出来上がれば、正調利田荷方節を後世へとつなげていくことができるのではないかと筆者は思っている。

謝辞

今回の調査をするにあたって、正調利田荷方節保存会の方々やカトレア会の方々にご協力いただきました。特に、正調利田荷方節保存会会長の寺松弘義様、踊り手の皆様、唄い手の皆様には、何度も聞き取りにご協力いただきお世話になりました。練習や発表を突然見学させていただくこともあり、ご迷惑をおかけすることも多々あったかと思いますが、そのたびに温かく対応していただき、大変大きな励みとなっていました。当原稿を執筆することができたのも、皆様が快く調査に協力してくださったためであると感じています。本当にありがとうございました。

参考文献

- 富山県教育委員会 1985 年 『富山県民謡緊急調査報告書』
- 立山町 1984 年 『立山町史別冊』
- 立山町利田自治振興会史跡文化調査委員会 1995 年 『ふるさと利田の今昔』
- 立山町芸術文化協会 1997 年 『立山町芸術文化協会二十周年記念誌』
- 立山町芸術文化協会 2007 年 『立山町芸術文化協会三十周年記念誌』
- 立山町芸術文化協会 2017 年 『立山町芸術文化協会四十周年記念誌』
- 黒坂富治 1979 年 『富山県の民謡』

受け継がれてきたお盆行事—オショウライと米道踊り—

伴 聡一郎

はじめに

この章では立山町におけるお盆行事の現状を記述することで、現代まで続く貴重な風景を書き記しておきたい。具体的には芦峯寺^{あしくらじ}におけるオショウライと米道^{よねみち}における米道踊りの2つの行事について調査した。この2つの行事はともに歴史が長く、現在も続いている貴重な風習である。オショウライは『とやまの年中行事』百選⁴⁹、米道踊りは立山町指定無形民俗文化財、および『とやまの祭り』百選⁵⁰の2つに選ばれている。私自身（愛知県出身）がこれまでお盆行事として体験したことがあるのは、お墓参りや町内で行われる小さなお祭りに参加する程度で、地域に根ざした風習との関わりは希薄であった。そのような立場から調査を続ける中で、お盆行事の意味を見出すことが出来たように思う。本章では、前半に芦峯寺で行われるオショウライについて、後半に米道踊りについて記述する。

1. オショウライ

オショウライとは御精霊と書くように、お盆の時期に先祖を迎えるために行われる行事である。オショウライの形態は地域によって少しずつ異なるが、松明に火を灯したり櫓を組んで火を焚くことで、ご先祖様が無事にあの世から帰ってくる手助けをしようという意味を持っている。今回調査した芦峯寺のほかに、北陸では富山県の上市町や石川県の志賀町などで行われている。上市町のオショウライは芦峯寺のオショウライと同様に「とやまの年中行事」に登録されている。「とやまの年中行事」をまとめた冊子を見てみると、上市川の川べりに竹で組んだ櫓をたて、その周りに人が集まり読経しながら祖霊迎えをするそうだ。また世界農業遺産「能登の里山里海」情報ポータル⁵¹によると、志賀町では集落に近い海岸に高さ10メートルほどの柱松明をたてるそうだ。



写真 1. 芦峯寺で行われるオショウライの様子

⁴⁹ 富山県教育委員会が平成 16 年度から取り組んでいる「とやま文化財百選」事業のひとつ。

⁵⁰ 脚注 1 と同様に「とやま文化財百選」のひとつ。「祭り」「年中行事」のほかに「土蔵」「獅子舞」も百選として選定されている。

⁵¹ 平成 23 年(2011)、国際連合食糧農業機関 (FAO) から世界農業遺産に認められた「能登の里山里海」の資産を自然・歴史・祭礼などに分類して紹介したサイト。

1-1. 芦峯寺の歴史

富山県の東部、立山町にある芦峯寺は平野から立山へと続く途中にある小さな集落だ。この集落は立山信仰と結びついて発展してきた歴史を持っている。そのため今現在も様々な立山信仰に関わる行事が残っており、そうした土地柄のためかオショウライも現在まで途絶えることなく続いている。

福江充の『立山曼荼羅—絵解きと信仰の世界』（2005 年）によると、芦峯寺集落の成り立ちには立山信仰が大きく関わっている。大宝元年（701）、立山信仰の開祖である佐伯有頼^{さえきありより}が立山開山をする。立山開山によって修験者が登山に来るようになったが、芦峯寺は立山と町のちょうど中間の場所にあったため入山準備の場所として最適であった。そのため芦峯寺には当時、33 坊もの宿坊⁵²がつくられた。近世末期には、禅定⁵³を目指す人の数は、ひと夏に 3000 人以上を数えたこともあり加賀藩も無視できないほどの勢力を蓄えていた。

また芦峯寺は立山信仰布教の中心地としても重要な役割を持っていた。芦峯寺には「衆徒」と呼ばれる立山信仰を全国に広めることを仕事にしている人々がいた。彼らは「諸国檀那配札廻り^{しよこくだんないきつまわり}」を行い、全国に立山信仰を布教した。「諸国檀那配札廻り」とは全国にある檀那場^{だんなば}⁵⁴を衆徒が訪れ、護符などを配ることである。その際、立山信仰がどのようなものであるか迫力を持って伝えるために使われたのが立山曼荼羅である。このようにして芦峯寺衆徒は近世から既に全国にネットワークを張り巡らせており、それが富山の薬売りにも繋がっている。

現在の芦峯寺集落には佐伯姓と志鷹姓の 2 つの家系が大部分を占めている。戦後以降は外部から移住してくる人もいたそうだが、戦前はこの 2 家系だけで集落が構成されていた。佐伯家はもちろん立山開山の開祖である佐伯有頼から伝わる家系である。一方で、志鷹家は佐伯家が芦峯寺に入る前から住んでいる人々である。

1-2. 芦峯寺のオショウライ

芦峯寺では毎年 8 月 13 日にオショウライが行われる。芦峯寺集落のはずれに布橋⁵⁵という橋がある。この橋は生と死を分ける境界線と見なされており、橋を渡った奥には多くの墓が立っている。また芦峯寺集落の入り口すぐ右側には、集落を病気や災いから守るとされる青面金剛⁵⁶が安置された庚申塚がある。芦峯寺ではこの 2 か所が先祖を迎えに行く場所になる。集落の中心部には雄山神社という大きな神社があり、ここを境にして立山方向に立っている家は布橋へ行き、町側に立っている家は庚申塚に行く。調査では布橋へ行く志

⁵² 主に仏教寺院などで僧侶や参拝者のために作られた宿泊施設。

⁵³ 修験者が霊山に登って行う修行のこと。

⁵⁴ 宗徒が布教する際、よく訪れる得意先のこと。

⁵⁵ 布橋灌頂会という儀式が布橋で行われており、立山信仰においても重要な場所のひとつとなっている。

⁵⁶ 庚申信仰の際、「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿像と共に建てられる尊像。民間信仰として独自に発展した。

鷹新右衛門家の皆様に同行させてもらった。



図 1. 芦峯寺における庚申塚と布橋の位置について（国土地理院地図より）

1-2-1. 布橋でのオショウライ

オショウライはそれぞれの家ごとに行われる。平成 29 年（2017）に見たかぎりでは、夕方の 18 時前から 19 時過ぎまでに行う家が多かった。志鷹家は他の家よりも少し早めでまだ日が沈んでいない 18 時頃にオショウライを始めた。1 メートル弱ほどの松明を持って外に出ると、家の玄関先でライターやマッチで松明に火をつける。

松明は手作りする家と市販のものを使う家がある。手作りする場合、家ごとに作り方が違うようで、志鷹家の松明は採ってきた木の枝に新聞紙を巻いて燃えやすくしていた。秋に採ったススキを束ねて手作りする方法が伝統的なものだそうだ。また、スーパーでは長さ 1 メートルほどの藁を紐で束ねたものが売られている。

松明に火がつくと家族みんなで墓に向かって歩いていく。志鷹家の場合は 70 代ほどの女性 2 人と、50 代の男性に、30 代ほどの男性 2 人、女性 2 人の合計 7 人の家族でお墓に向かった。火が消えないように松明をぐるぐる回しながら墓まで持っていく。

布橋は直接渡るわけではなく、布橋を回り込むようにして作られた道を歩いて奥の墓場まで行く。墓まで着くとそこで松明を燃やしてしまう。松明から蠟燭に火をわけ、その蠟燭を墓に供える。皆で墓の前で手を合わせ、持ってきた提灯の中に蠟燭をいれて家まで持ち帰る。家に



写真 2. 芦峯寺の布橋（福田撮影）

つくと火を提灯から取り出し仏壇に供える。仏壇の前には墓まで歩いて行けなかったお年寄りの方も含めて家族全員が集まり、家主である 50 代の男性の読経を家族全員で正座をして聞く。こうしてオショウライの一連の流れを見ると火をご先祖様の魂と見立てていることがよく分かる。



写真 3. 墓へ祖霊を迎えに行く（伴撮影）



写真 4. 志鷹家の提灯（伴撮影）



写真 5. 松明から蠟燭へ火を移す（伴撮影）

1-2-2. 庚申塚でのオショウライ

次に庚申塚でのオショウライの様子について記述する。庚申塚へ行く人々も、布橋へ行く人々と同様に、家の前で火をつけた松明を振り回しながら庚申塚へ向かう。庚申塚に到着すると石仏の前に松明を置いて家族で手を合わせて帰っていった。以前は庚申塚に穴を掘りそこに松明を放っていたそうだが、今は地面に積み重ねるようにして松明が置かれていた。置かれた松明は燃えきるまで男性が残って見守るそうだ。

布橋と庚申塚でのオショウライで異なる点がいくつかあった。一番の違いはお迎えに行くのが墓ではなく庚申塚ということだろう。そもそも庚申とは十干十二支を日にちに当てはめたときに 57 番目に来る日のことを指す。中国道教ではこの日は三尸^{さんし}という虫が出てきて寝ている人間の寿命を食べてしまうという考えがあり、寝ずに夜を明かすために庚申塚に集まる庚申待ちという行事があった。日本には民間信仰として全国に根付いており、芦峯寺の庚申塚にある青面金剛には宝永 3 年（1706）建立と記銘されている。この庚申塚は芦峯寺の人々にとって布橋と同様にあの世とこの世を分ける境界と考えられているようで、オショウライでは庚申塚の前に松明を燃やし、手を合わせることで祖霊迎えをしていた。

布橋で行われたような提灯で火を持ち帰ることはない。その代わりに玄関先でつけた火をその場で蠟燭にも分け、仏壇に供えるそうだ。



写真 6. 庚申塚でのオショウライ（伴撮影）



写真 7. 芦峯寺の庚申塚（伴撮影）

1-3. 芦峯寺オショウライの過去と変遷

芦峯寺の様々な行事を取りまとめる佐伯照代さんから、オショウライやそれに伴う芦峯寺地域の歴史について教えていただいた。

芦峯寺集落はほとんどの家が道路沿いに建っているが、道路からのびる細い路地の奥に建つ家も何軒かある（図 1 参照）。そうした家はオショウライの際、道路に面した場所まで下りてきて松明に火を灯すそうだ。その場所は昔から決まっていると仰っていた。

オショウライの際にお供え物としてよく使われるものはナスビ、ミョウガ、キュウリ、サトイモ、そのほか特徴的なものとしてそうめんもお供えするそうだ。そして 8 月 13 日の夜に家族そろって供えたそうめんを食べる。同行させていただいた志鷹家もそうめんを供えていた。このそうめんは「足洗いそうめん」と呼ばれており、祖先を家にお招きする気

持ちの表れではないかと仰っていた。

16日の朝になると、おはぎを作る。それを13日のお供え物と一緒に、布橋の横に作られた道の窪みに置くそうだ。そして着物を着て正装し、家族のお墓から親戚のお墓まですべてにオショウライ花を供えてお参りする。そのため佐伯さんの場合は、1日で10～20か所のお墓に参るそうだ。大変ではあるが、親戚にたくさん会えるのは楽しいと仰っていた。

過去と現在でどのような変化があったのか聞いてみると、どれほど前か定かではないが、かつて、布橋の袂で施餓鬼供養⁵⁷を行っていたそうだ。この施餓鬼供養は考察の部分で詳しくみるが、お盆の祖霊迎えには様々な意味が含まれることをあらわしている。

また死者や祖先を送迎するときは玄関を通らず縁側から家の出入りをする決まりがあるそうだ。これはオショウライの時に限らず葬式でお棺を出すときなども縁側からだそうだ。現在は縁側がなく玄関だけの家も多くあるため厳密に守られているわけではないだろう。

かつては、お盆の8月14、15日の2日間にわたって、盆踊りが行われていたそうだ。現在、公民館が建っている場所には、以前は芦峠寺小学校が建っており、その運動場に人々が集まって踊った。その名残で現在も14日に公民館の駐車場で盆踊りがあるそうだ。また約40年ほど前までは風の盆も行われていたそうで、9月1日に立山町各地の青年団が芦峠寺に集まり相撲大会が行われていた。土俵場もあり、子供から大人まで参加して盛り上がったそうだ。現在は怪我をする危険もあるため廃止されてしまい、9月1日は何も行われていない。

芦峠寺に嫁いできたお嫁さんは、お盆の時期は実家に帰れなかった。芦峠寺はお盆には帰省してこなければいけないという考えが強かったらしく、各地方の親戚が一斉に帰省したため、芦峠寺のお嫁さんは親戚を迎える仕事がたくさんあった。そのため、芦峠寺の嫁が帰省できるのはお盆を過ぎてからだだった。現在は帰省しない人も多らしく、そうした風習は無くなったようだ。

佐伯さんはこれからもオショウライを残すために新しい試みを始めている。集落の人口減少に伴って、オショウライの規模も小さくなってきているそうだが、佐伯さんは出来るだけ多くの住民に参加してもらおうと4、5年前からオショウライに合わせて立山博物館の前に灯籠を置いてライトアップしている。また家ごとにバラバラにオショウライをするより一斉にした方が綺麗だということで、回覧板を回してオショウライの開始時間を合わせようと提案されているそうだ。こうした試みが定着していくように尽力されている。

1-4. オショウライの考察

この項では赤田光男の『祖霊信仰と他界観』（1986年）を参考にしながら、芦峠寺のオショウライについて考察する。

⁵⁷ お盆の時期に行われることの多い仏教行事のひとつ。餓鬼とは生前の悪行によって亡者の世界に落とされた魂のこと。飢えと渇きに苦しんでいる餓鬼に食べ物や飲み物を供物として施すことで得を積むことが出来る。

この著書で赤田は日本の葬送儀礼には蘇生・絶縁・成仏・追善の四つの儀礼があると述べている。これらの儀礼は霊魂が肉体から離れても存在し続けるという観念のもと行われる。

それぞれの儀礼を簡単に説明すると、蘇生儀礼とは息を引き取った人から抜け出た霊魂を肉体に呼び戻して蘇生させようとするもので、絶縁儀礼は抜け出た霊魂が肉体へ戻らないと分かったときに絶縁をはかる鎮魂儀礼だ。この絶縁儀礼は死者への恐怖の感情のもとに行われる。そして、成仏儀礼は死霊があゝの世へ行き成仏するようにはかるもので、追善儀礼とは死霊を供養して冥福を祈り、祖霊化をはかるための儀式としている。お盆の時期に行われるのは四つ目の追善儀礼であり、追善儀礼は仏教の布教と共に広まった。

仏教が布教する以前は、魂が抜けた遺体は人々にとって恐怖の対象だった。そのため遺体はぞんざいに扱われることが多かった。しかし仏教が民衆に浸透してくると、仏教の死生観に影響をうけ、遺体を装飾したり、極楽浄土へ導く儀式が行われるようになった。極楽浄土へ導く儀式とは、ここでいう成仏・追善儀式のことであり、これが蘇生・絶縁儀式にとってかわるものになっていった。つまり民衆の葬送儀式は、仏教と結びつくことで変化し、寺院の経済的基盤を築くことにも繋がったのだ。

では、追善儀式とはどのようなものだろうか。具体的には、死後 49 日間供養することで極楽往生できるとする中陰行事、また 100 日目、1・3・7・13・33 年忌に行われる法要、更にしょうつきめいにち祥月命日⁵⁸、がつき月忌⁵⁹、春秋の彼岸会、ひがんえ施餓鬼⁶⁰などが追善行事にあたる。

そんな追善行事の中でも最も大切なのが、お盆・正月に行われる先祖祭りだ。『阿波国あわくに高河原村風俗問状 答』⁶⁰によると、盆の時期、4 種類の霊が祀られるそう。つまり神々、先祖代々諸仏、無縁仏、新仏の 4 種類の神仏を区別して供養する。それぞれ 4 種類の神仏を詳しく見ていくと、神々とは彼岸に祀られる水神、農耕神や、正月に祀られる山の神、田の神、穀霊、火の神、水の神、恵比寿神、大黒神などを指すと思われる。

先祖代々諸仏の概念は過去帳や系図が発生したことにより、弔い上げがすんでも半永久的に死者の個性が失われなくなったことによって、祖霊や精霊を包括するようになった。つまり、先祖が祖霊となり、山の神、田の神などに神霊化するようになったのだ。

無縁仏とは外精霊のことで、例えば施餓鬼供養の対象となる餓鬼や、子孫が途絶えてしまった霊などを指す。そして新仏とは死んでまもない霊のことだ。阿波の高河原村では、新仏供養は 3 年間行われる。このことから霊は亡くなってから 3 年は新仏のとりあつかいを受け、その後 33 年忌の弔い上げまでは精霊、弔い上げがすむと祖霊となり神霊化していくという 3 段階の変化があることが分かる。

⁵⁸ 故人の亡くなった月日と同じ月日のこと。例えば 7 月 1 日に亡くなった場合、毎年 7 月 1 日が祥月命日になる。

⁵⁹ 故人の亡くなった日と同日の月違いのこと。例えば 7 月 1 日に亡くなった場合、毎月 1 日が月忌になる。

⁶⁰ 江戸末期に、幕府の御用学者であった屋代弘堅が、諸国（阿波の他に 20 種類ある）に、風俗に関する木版刷りの質問状を送り、返ってきた答えをまとめたもの。

以上のことを踏まえて、芦峯寺で行われるお盆行事を振り返ってみると、オショウライは先祖、祖霊を包括して祀ってお迎えしているように思われる。また庚申塚へ行くという行為から、民間信仰として根付いている庚申さまを家にお迎えし日頃の感謝をしているという意味もあるかもしれない。かつて布橋の袂で行われていた施餓鬼供養は、無縁仏や外精霊のタタリを防ごうという意味合いが込められていたのだろう。このように見ていくと、芦峯寺のお盆行事も形は違えど阿波の高河原村でのお盆行事と同じ意味合いを持っていたと言えるのではないだろうか。

また赤田は著書の中で、昔の日本人が抱いていた他界観についても記述している。オショウライにおいても、この他界観が影響している可能性が大いにあると感じた。

古来日本において、村の「外」「内」という意識はかなり大きかった。そして村に害悪をもたらすものは「外」からやってくると考えられていた。病気、不幸、病虫害、不作など悪神悪霊の仕業と信じられていたのだ。そこで、これを防ぐために、村境には様々な魔除けの神仏が祀られ、そこで儀式が行われた。芦峯寺にある庚申塚はまさに魔除けの神仏を祀っている場所なのだ。

また、村境に集まってくるのは悪神悪霊だけではない。嫁入りの時には嫁迎えの場所となり、出生児の命名の時には、ここにつれてきて最初に通рикかった人に名前をつけてもらう風習もあった。そしてお盆の時期には送迎の場ともなるのだ。このように古来日本において村境は多重の意味をもつ場所であった。図 1 に示した地図をみると、その 2 か所はちょうど芦峯寺の両端に位置する。つまり、庚申塚と布橋は芦峯寺の村境にあり、ここから祖霊を迎えたと考えることができる。

更に芦峯寺において、布橋はただの村境ではない。脚注 7 にも簡単に記したが、布橋は布橋灌頂会が行われる場所だ。立山は江戸時代まで女性が立ち入ることのできない女人禁制の山だった。そこで女性のために立山禪定の代わりとして行われたのが布橋灌頂会だ。この儀式は立山を地獄と浄土に見立てて行われる禪定にならっており、布橋を無事に渡れなければ地獄に落ち、渡りきることが出来れば浄土に行けるという信仰のもと行われた。この布橋灌頂会における考え方が、村境の多重な意味と合わさってオショウライに影響をあたえているのだろう。

2. 米道踊り

2-1. 米道の歴史

次に、お盆に踊られる米道踊りについて記述していく。米道踊りが行われている米道は、常願寺川右岸から栃津川（若狭川）流域にかけて広がる常願寺川扇状地の頂部にあたる釜ヶ淵地域に属している。

伝承によれば、米道という地名の由来は 2 説ある。もともとは末道村^{すえみち}と呼ばれていたが、「末」が「米」に転じて、米道になったという説と、立山信仰で繁栄していた頃、芦峯寺

や岩嶺寺へ米を運搬する道があったところから名付けられたという説だ。

米道は立山参道の1つにあたり、大伝寺⁶¹という寺があったことが確認されている。大伝寺の名は、鎌倉時代初期、寛喜2年（1230）につくられた立山神立像の中から、大伝寺のお経が発見されており、このことから米道は古くから開かれた場所であったと推察できる。



図2. 米道の地図（国土地理院地図より作成）

2-2. 米道踊り

米道踊りとは約450年前から米道に伝わる民謡で、胡弓・尺八・太鼓・三味線によって演奏される。「おけま」「追分」「甚句」「松坂」の四曲によって構成されており、盆踊り唄として長時間唄い継がれるように組み合わせられている。「追分」は高音で歌わなければならない難曲で、テンポも遅いため踊りが難しく現在では唄い手が居なく行っていない。

2-3. 米道踊りの発祥

米道踊りが始まったきっかけは、永禄11年（1568）越後の上杉謙信に、^{うわだん}上段にある池田城を攻略され、池田城の家老の次男である林権右衛門重正が米道村に逃れてきたことに由来する。重正の家臣である加野半右衛門は唄、踊り、管弦に堪能で、米道の若衆に伝えたことが米道踊りの発祥とされている。

当時の村民の生活は、朝早くから晩遅くまで農耕に追われるものだった。早朝から山間まで馬を連れていき草を食べさせる。また昼食と夕食分のかや（草）を刈り、馬の首にのせて持ち帰っていた。現代のように農耕が機械化されていなかった当時は、それが日常生活であり、米道踊りは村民の娯楽だったようだ。

⁶¹ 貞享2年（1685）の芦嶺寺文書中にある立山七か寺のひとつ。立山七か寺とは立山三光を本寺とした、山麓一帯にある霊場に建てられた末寺のこと。文殊寺、森尻寺、日中寺、大伝寺、千房ヶ原、岩嶺寺、芦嶺寺がこれにあたる。

2-4. 米道踊りの練習

ここからは平成 28 年（2017）8 月 12 日に行われた練習について記述する。12 日の練習は納涼祭前の最後の練習ということで多くの子供たちが集まった。19 時 30 分から 20 時過ぎまで 30 分ほど米道公民館で練習し、子供たちは 5 歳ほどから小学生までが 10 人ほど、その親たちも 6 人ほど一緒に練習に参加していた。伴奏は胡弓、尺八、三味線、太鼓で行われるが、この日は尺八の方が欠席しており、それ以外の楽器と他男性 3 人の唄によって練習がすすめられた。練習は終始賑やかに進み、米道踊り保存会会長の酒井孝さんをはじめ、唄い手の方々が指揮をとって小学生をまとめていた。また 60 歳ほどの女性が小学生の前に立ち、振付の模範となるように踊っていた。現在踊られている「おけま」「甚句」「松坂」の三曲はそれぞれ、手踊り、立山の文字が入った笠を使う踊り、日の丸の扇子による踊りという構成になっていた。また「松坂」に使われる扇子は、本番では池田城の家紋の入った扇子を使用する。池田城の家紋は黒い丸が 3 つ書かれたものだ。練習後にはお菓子が配られ終始和やかな雰囲気で行われていたのが印象的だった。



写真 8. 〈おけま〉を踊る子供たち



写真 9. 〈甚句〉を踊る子供たち



写真 10. 〈松坂〉を踊る子供たち

2-5. 善入寺での米道踊り本番

8 月 15 日、立山町の米道の善入寺で米道踊りが披露された。18 時 30 分から善入寺の周りに住民たちが 50 人ほど集まった。踊りの主役である小学生たちはハッピーを着て境内にず

らっと並ぶ。三味線や尺八などの伴奏者たちは本堂の階段を登り、高い位置から見渡せるようにして演奏する。唄 1 人、囃子 2 人、三味線 3 人、胡弓 1 人、太鼓 1 人の計 8 人による伴奏に合わせて、子供 15 人ほどと母親 5 人ほどが踊った。三味線を弾いていた方の 1 人は富山市から呼ばれたようで、三味線が好きで色々な行事に参加しているらしい。演奏は 10 分ほどで終わり、少し休憩した後にもう 1 度踊った。

本番には演者である小学生たちの親や親せきなどが集まり、子供たちの踊りをカメラで撮影する方や、顔見知り同士で世間話などをしながら見るなど、和やかな雰囲気で行われた。踊りを見に来ていた 50 代ぐらいの方にお話しを伺ったところ、昔は米道踊りの後に盆踊りがあったそうで、夜遅くまで賑わったそうである。盆踊りは近隣集落と共同で行われていたようで、13 日は道源寺、15 日は米道、16 日は上末（上段）で踊られていた。それぞれの集落の盆踊りの日は、他の集落から踊りの応援が来て盛り上げていた。また雨天時は順延で、これも又地域の暗黙の了解であった。約 10 年まえに、盆踊りを主催していた青年同志会、婦人会が解散し盆踊りは踊られなくなり寂しくなったと仰っていた。

踊りが終わった後、米道公民館で酒井孝さんに話を聞かせてもらった。酒井さんは胡弓を弾いており、米道踊りの継承に尽力された方だ。昔の米道踊りの様子を伺うと、そもそも米道踊りは座敷踊りだったようで、米道で結婚式があるとそこに赴き踊っていたそうだ。しかしどこにでも踊りに行ったわけではなく、踊れる広さがある家にしか行かなかったようだ。

以前は米道踊りも子供ではなく大人が踊っていたそうで、主に婦人会や青年団に所属していた人たちによって担われていたそうだ。婦人会や青年団を中心にやっていた頃は、人間関係でいざこざが起きることもあり、それが原因で練習に来なくなってしまう人もいたと語っていた。小学生が踊るようになったのは約 10 年前で、人口が減少した米道で米道踊りを継承するための苦肉の策だった。小学校の夏休みに合わせて 7 月から 8 月に練習があり、朝のラジオ体操に合わせた時間帯に練習する。しかし現在は小学生の人口も減少してきており存続が危ぶまれている。



写真 11. 善入寺



写真 12. 善入寺での本番

2-6. 米道踊保存会

米道踊保存会は大正 10 年（1921）に結成された。結成当時の様子は文献にまとまっておらず、結成された背景については知ることが出来なかった。

今日の保存会の基礎を築かれたのは、尾井清正（当時の小学校校長）という方だ。尾井さんは伝承を調べて整理することで今日に記録を伝えることに尽力された。また保存会の活動の中で、子供たちに、米道踊りを教え、継承に力をつくした。善入寺の仏様の前で、御礼をしてから踊りを教えられたことは、今も語り継がれている。

また、昭和 30 年（1955）に当時の釜ヶ淵小学校長であった石原与作さんによって米道踊りの伴奏が楽譜におこされた。それまでの演奏は聴いたものを真似する形で演奏されていたため、演奏者によって違うことがあったが、楽譜を作ることで正しい音が決まった。これが現在の米道踊りの原型になっている。

現在は、夏の時期に行われる納涼祭、善入寺で行われるもの、年に 1 回開かれる富山県民謡民舞連盟の発表会の 3 つが、米道踊りを披露する場となっている。

表 1. 米道踊りの出演の歴史（酒井孝さんにいただいた資料より作成）

昭和 12 年（1937）	富山市新富座で行われた富山県下民謡大会に出演し、県下にはじめて紹介された
昭和 27 年（1952）	県下 10 大民謡として発表会に出演し、県下の民謡保存会 ⁶² もこれを契機に生まれた
昭和 29 年（1954）	立山ケーブル開通記念祝賀会に出演
昭和 31 年（1956）	立山町無形文化財第 10 号に指定される
昭和 33 年（1958）	富山市公会堂で開かれた、NHKの全国民謡大会に出演し、表彰される
～平成 29 年（2017） 現在	納涼祭や、富山県民謡連盟の主催する大会に出場している

資料 1. 米道踊りの歌詞（『富山県の民謡』黒坂富治（1979 年）より）

【おけま⁶³】

- ・おけまヤー おけま踊るなら 板の間で踊れヨ （オーヤッサ ヤーッサ）
板のひびきで サーマ 三味やいらぬ （オーヤッサ ヤーッサ）
- ・金のヤー 金のなる木は ないとはいえどヨ （オーヤッサ ヤーッサ）

⁶² 昭和 27 年 12 月に「富山県民謡連盟」が設立された。富山県内の民謡民舞の保存を目的に 20 団体が加盟している。年に一度、富山県民謡民舞大会が開催されている。

⁶³ 昭和初年（1926）に流行した〈佐渡おけさ〉が〈おけま〉となって米道に伝わったと考えられる。「おけさ」の語源は当時の〈佐渡おけさ〉のはやしことばから来ていると考えられる。

<p>辛抱する木に サーマ 金になる (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>・雄山ヤー 雄山むらさき 剣はあかねヨ (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>村は夕餉の サーマ 煙立つ (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>・鐘がヤー 鐘が鳴るかや 撞木が鳴るかヨ (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>鐘に撞木の サーマ あいが鳴る (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>・酒とヤー 酒という字は 三水扁に酉だヨ (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>酔いがまわらにゃ サーマ うたやせぬ (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>・梅とヤー 梅と桜を両手に持てばヨ (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>どれが梅やら サーマ 桜やら (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>・岩とヤー 岩の下がり藤 手に取るばかりヨ (オーヤッサ ヤーッサ)</p> <p>人の妻なら サーマ 見るばかり (オーヤッサ ヤーッサ)</p>
<p>【追分⁶⁴】</p> <p>・イヤーナー 追分の身の毛もよだつ ナーヨー (コラセードンセ)</p> <p>身の毛ばかりか 髪の毛も (コラセードンセ)</p> <p>・イヤーナー 追分のますかたの茶屋に ナーヨー (コラセードンセ)</p> <p>中の三丁目がままにならぬ ナーヨー (コラセードンセ)</p> <p>・イヤーナー 槍や刀に未練をすてて ナーヨー (コラセードンセ)</p> <p>馴れぬ手つきで稲を刈る (コラセードンセ)</p> <p>・イヤーナー ここの館はめでたい館 ナーヨー (コラセードンセ)</p> <p>鶴が御門に巢をかける (コラセードンセ)</p> <p>・イヤーナー 月は袂に写れるけれど ナーヨー (コラセードンセ)</p> <p>空にまことはただ一つ (コラセードンセ)</p> <p>・イヤーナー 牛で落ちのび行方も知らぬ ナーヨー (コラセードンセ)</p> <p>池田城しゅ(跡) 風ばかり (コラセードンセ)</p>
<p>【甚句⁶⁵】</p> <p>・めでた めでたの今飲む酒は (コリャセー)</p> <p>天の岩戸に チョイト 湧き出ずる (コリャセードンセ)</p> <p>・酒という字は 三水扁に酉だヨ (コリャセー)</p> <p>酔いが廻らにゃ チョイト うたやせぬ (コリャセードンセ)</p> <p>・嫁に 行くなら米道村へ (コリャセー)</p> <p>稲に黄金の チョイト 波が打つ (コリャセードンセ)</p>

⁶⁴ 日本民謡の中で「追分」は、地方各地に広く分布している民謡のひとつ。元々は群馬県と長野県の県境にある碓氷峠で馬子唄として唄われており、それが中山道を通り日本海側まで伝わると、船によって北海道まで広がっていったとされている。

⁶⁵ 「甚句」と称する曲目は日本民謡の中に数多く見られ、特に新潟県には「米山甚句」や「両津甚句」など多くの曲目に「甚句」の名がついている。「甚句」の語源は明らかになっていない。

<p>・お酒飲む人 皆神さまか (コリャセー)</p> <p>お酒上がらぬ チョイト 神はない (コリャセードンセ)</p> <p>・池田山へは行きたはないが (コリャセー)</p> <p>瀬戸のろくろは チョイト 見たござる (コリャセードンセ)</p> <p>・ここは浄土か 善入寺さまか (コリャセー)</p> <p>盆の踊りで チョイト 夜を明かす (コリャセードンセ)</p>
<p>【松坂⁶⁶】</p> <p>・にがた、松坂習いたかござれ 金の四、五両ももってござれ (ソロセン ソロセン)</p> <p>もってござれ もってござれ 金の四、五両ももってござれ (ソロセン ソロセン)</p> <p>・茶屋に腰かけ小松原見ればヨ 松に小雪が降りかかる (ソロセン ソロセン)</p> <p>降りかかる 降りかかるヨ 松に小雪が降りかかる (ソロセン ソロセン)</p> <p>・傘を忘れたますがたの茶屋に 空が曇ればヨ 思い出す (ソロセン ソロセン)</p> <p>思い出す 思い出すヨ 空が曇ればヨ 思い出す (ソロセン ソロセン)</p> <p>・そろたそろた踊り子がそろたヨ 稲の出穂よりも なお揃た (ソロセン ソロセン)</p> <p>なおそろた なおそろたヨ 稲の出穂よりもなおそろた (ソロセン ソロセン)</p> <p>・親の意見と茄子の花は 千に一つのむだはない</p> <p>・牛で落ちのび行方も知らぬ 池田城跡風ばかり</p> <p>・槍や刀に未練をすてて 馴れぬ手付きで稲を刈る</p> <p>・槍や刀に未練が無いが 池田思い出しや目が曇る</p>

2-7. 米道踊りの考察

米道踊りはそもそも、酒井さんが仰っていたように座敷踊りとして存在していた。正月、作業はじめ、作業納め、婚礼など生活の節目になる宴の席で、祝いの気持ちを込めて踊られたものだったのだろう。実際に保存会の音頭取りが結婚式に招待されて唄が披露されたことは酒井さんも見聞きしたそう。また歌詞をみると「甚句」や「おけま」は酒を飲んだり、踊って楽しもうということが唄われている。宴会の席で場を盛り上げるために唄われていたことが窺われる。

米道踊りに限らず、元々民謡は正しい歌詞というものがなく、宴会などで唄われるたびに即興的に歌詞を変えて唄われることも多かった。それが時代を経るごとに米道踊りが踊られる場面も変わってきて、それに伴い現在の形になったのだろう。ただ、米道踊りは大正10年に保存会が結成されていることから、現在と大正当時でそれほど変化していないのかもしれない。いずれにしても、この踊りが450年以上も受け継がれ続ける影には、酒井さんのような米道踊りを大切に思う人達の努力があったに間違いない。子供達が踊りの担

⁶⁶ 「松坂」も各地に広く分布する曲目のひとつ。越後で祝唄として広まっていたものが、座頭や瞽女といった盲目の旅芸人によって東北一帯に広まったという説や、新潟県から「荷方節」という名で秋田や津軽に伝えられたという説など、伝播の経路は分かっていない。

い手になるなど、様々な試行錯誤が行われ現在も米道踊りは伝承されている。

現在の米道踊りは座敷踊りとしてではなく、盆踊唄として披露されている。戦後以降、米道の生活の中心が農業ではなくなっていったことで、村民の生活サイクルもそれぞれになった。そのため生活の節目ごとに集まり宴会をすることが難しくなり、座敷踊りとしてではなく、1年に1回の盆踊唄として踊られるようになったのではないだろうか。座敷踊りから盆踊り唄へ変化したのは戦前であり、確かな記録はないため分からないが、1年の大事な節目であるお盆の時期に人々が集まって、米道踊りを通して交流しているところに、日本人がお盆を大切に思っていることが表われていると思う。

おわりに

今回の文化人類学の実習では、お盆行事として芦峠寺のオショウライと米道の米道踊りの2つを取り上げた。この2つのお盆行事を通して日本人がお盆をどのように捉えているのか知ることが出来た。

お盆の時期に行われる行事は、祖先や祖霊にまつわる行事が多い。オショウライは、ご先祖様をお迎えするために行われるものである。また盆踊りも元々は念仏を唱えながら踊る念仏踊りから来ている。念仏踊りは祖霊を呼ぶために行われた宗教色の強いものだった。それが時代を経るごとに民衆が楽しむための娯楽的要素が強くなっていき、盆踊りへと繋がっている。このようにお盆の時期は、ご先祖様を1年で1番身近に実感できる時だったのだ。

生きている人々にとっても、お盆は人々を結びつけるための大事なもののだろう。佐伯照代さんも言っていたように、お盆の時期は家族や親戚に久々に会える時だ。オショウライや米道踊りは人々の絆を深める大切な行事でもあるだろう。

現代の日本は、お盆の重要性が下がってきているように思う。私自身、お盆を特別な節目だと意識したことは今まで無かった。この調査を通して、お盆が以下に大切なのか知ることが出来たように思う。オショウライや米道踊りがこれからも絶えずに継承されていくと欲しいと思う。

謝辞

最後に、今回の調査では多くの方々から貴重な話を伺うことができ、報告書をまとめることが出来ました。お忙しい中、時間を作っていただき、大学生活の中でかけがえのない貴重な体験をすることができました。特に、佐伯照代さん、米道踊り保存会会長の酒井孝さんには大変お世話になりました。

この場を借りて皆様に心からお礼申し上げます。ありがとうございました。

参考文献

- 赤田光男 1986 年 『祖霊信仰と他界観』
黒坂富治 1979 年 『富山県の民謡』
立山町 1984 年 『立山町史〈下巻〉』
仲井幸二郎 丸山忍 三隅治雄 1972 年 『日本民謡辞典』
福江充 2005 年 『立山曼荼羅—絵解きと信仰の世界—』

参考にしたウェブサイト

- 『世界農業遺産「能登の里山里海」の写真・映像資料の紹介サイト DIGITAL ARCHIVE』
(http://noto-satoyamasatoumi.jp/detail.php?tp_no=193 2017 年 12 月 15 日閲覧)

変化する布橋灌頂会とそれを支える人々

迫間 唯

はじめに

調査地選定のために訪れた立山町芦峯寺で、川に架かる朱い橋に目を引かれたことが、私が布橋灌頂会について調べるきっかけになった。調査地が立山町に決定し、町の人のお話を聞いたり資料を調べたりする中で、私たちが調査を行う平成 29（2017）年に、3 年に一度の儀式である布橋灌頂会がちょうど行われることを知り、興味を持った。

布橋灌頂会について調べる中で、私は、なぜ女性だけで儀式が行われるのか、長い間途絶えていた儀式がなぜ復活したのか、また、どうやって復活したのかという疑問や、3 年に一度しか開かれない儀式を自分の目で見てみたいという思いを持ち、布橋灌頂会について調査を行うことに決めた。

調査方法は、主に、立山町における聞き取りや、布橋灌頂会に関する文献、資料、行政が発行している広報たてやまなどからの調査による。

第 1 節では、布橋灌頂会の簡単な概要や儀式の流れ、儀式に込められている意味、なぜ布橋灌頂会が復活したのか、平成 8（1996）年に復活した際の布橋灌頂会の様子などを文献からまとめ、第 2 節では、平成 29（2017）年に開催された布橋灌頂会から本番の様子、第 3 節では、布橋灌頂会の変化、第 4 節では、布橋灌頂会という行事はどのような人たち、活動によって成り立っているのか、おわりに、布橋灌頂会についての調査から簡単な考察・まとめを記述する。

1. 布橋灌頂会とは

1-1. 芦峯寺の位置

芦峯寺は、北アルプス立山連峰の山麓、立山連峰を源流域とする常願寺川上流の右岸段丘上（緯度 36 度、経度 137 度）に位置している。

富山地方鉄道千垣駅から徒歩約 30 分、車で約 5 分、富山地方鉄道立山駅からは車で約 15 分である。



図 1. 芦峯寺の全体図と施設の名称・位置

1-2. 布橋灌頂会の概要⁶⁷

布橋灌頂会とは、江戸時代後期に芦峯寺において確立された立山信仰における儀式の一つである。内容としては、白装束に身を包んだ女人衆⁶⁸が、地獄に見立てられた閻魔堂から橋を渡り、姥堂⁶⁹（現在は姥堂はなく、遥望館⁷⁰が儀式に使用されている）で血脈⁷¹を与えられることで来世の浄土が約束されるというものであり、いわば“擬死再生”を表す儀式である。

当時は、女性は山岳に登拝できなかったため、その救済措置としてこの儀式ができたものと考えられる。明治初期の廃仏毀釈の影響を受け、以後行われなくなってしまったが、平成8（1996）年9月29日（日）、10月5日（土）～6日（日）にかけて行われた“第11回国文化祭とやま'96 立山フェスティバル”の中の9月29日に136年ぶりに復活した。以降、平成17（2005）年、18（2006）年、21（2009）年、23（2011）年、26（2014）年、29（2017）年に開催され、現在では3年に一度の儀式として芦峯寺において行われている。

1-3. 布橋灌頂会の儀式の流れ

儀式では、まず、姥堂と閻魔堂の間の谷川に架かる布橋（別名：天の浮橋）に、3本の白布が敷かれる。白装束に菅笠をかぶった女人衆たちは、閻魔堂で自分の行った悪事につい

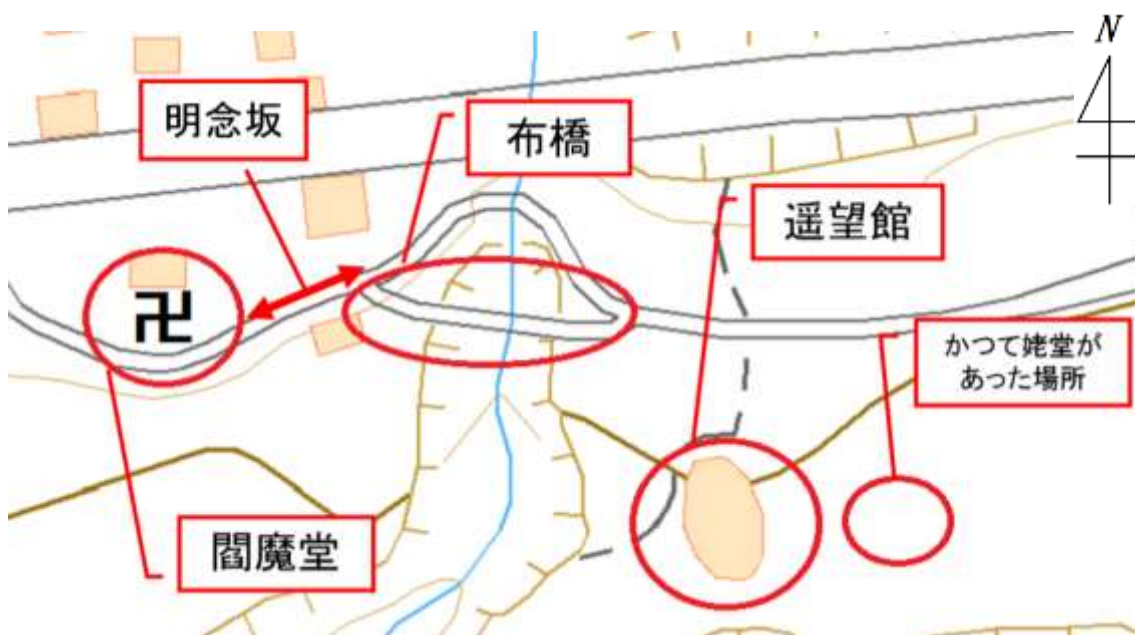


図2. 芦峯寺の全体図と閻魔堂・明念坂・布橋・遥望館・姥堂の位置

⁶⁷ 布橋灌頂会に関する資料より。

⁶⁸ 女性の信者。ここでは、立山信仰を信じる女性の信者、儀式に参加する女性のことをいう。

⁶⁹ “うば”という字は本来違う漢字が使われているが、ここでは便宜上“姥”を使用する。

⁷⁰ 立山博物館の体験型映像ホール。布橋灌頂会では姥堂の代わりに使用されている。

⁷¹ 仏教において、師から弟子へ教えが伝えられること。ここでは、^{しょうみょう}声明（僧侶）から女人衆へと教えが伝えられることをいう。

て懺悔する。懺悔を終えると、目隠しをされ、引導師⁷²に先導され閻魔堂から明念坂を下り、布橋に向かって歩く。布橋まで歩くと、女人衆たちは、布橋に敷かれた白布から外れないように慎重に橋を渡っていく。引導師が橋の真ん中まで来ると、そこには来迎師⁷³が待っており、修法⁷⁴が唱えられる。修法を終えると、今度は来迎師を先頭に再び歩き出す。橋を渡りだしてから渡り終えるまでの一連の流れを行渡講^{いさわたりこう}という。行渡講を終えると、女人衆は姥堂に順に入っていく。女人衆が正座をすると声明から血脈が与えられる。その後、目隠しを外し、正面の扉が開けられ、立山を拜んだ後、再度橋を渡ったところで布橋灌頂会は終了となる。

1-4. 布橋灌頂会の象徴的な意味・意義⁷⁵

布橋灌頂会には様々な象徴的な意味が込められている。

まずは、儀式の流れにおける象徴的な意味を述べる。女人衆が身に着ける白装束は左前となっており、これは女人衆が儀式において一度死んだ状態になっていることを表している。目隠しについては、目が見えないことで、自分の内面に気持ちを集中させることができるためといったような意味が込められている。頭にかぶる菅笠については、深く被ることとさらに目を隠すことができ、また、女人衆たちが地獄から天国、生まれ変わりの旅の途中であることを表現している。

これらの衣装を身に付けた女人衆たちは、閻魔堂で自分の罪を懺悔することで、地獄での裁きというものを擬似的に体験する。次に、極楽浄土に至る道、あの世とこの世との境目を表した白布が敷かれた布橋を渡ることによって仏の救いをうけ、姥堂で血脈を与えられることで、死から生への生まれ変わりを擬似的に体験しているといえる。

また、姥堂において視界を塞いでいた目隠しをはずすことで、暗から明へ移行する様を表しており、これも地獄から極楽浄土への生まれ変わりを表しているといえる。

また、儀式の舞台となる布橋も、仏教に関する数字を盛り込んで造られている。まず、橋の長さは25間（1間は約1.81m）であり、これは25菩薩⁷⁶を表す。橋の高さは13間、幅は2間、桁の数は48本となっており、それぞれ13仏⁷⁷、幅2間のうちの実質幅9尺は九品浄土^{じょうど}⁷⁸、阿弥陀如来の48願⁷⁹を表現している。釘・鍔^{かすがい}の数は38008本は法華經の文字数

⁷² 法会に際して中心となり、修法などを述べて人々を引導する師のこと。

⁷³ 来迎とは臨終のとき、菩薩が浄土の世界から迎えに来ることである。布橋灌頂会において

は、女人衆を浄土まで連れていく存在として描かれている。

⁷⁴ 除災、招福などを目的とする仏道の修行のこと。ここでは、除災、招福を与えるための文言のことをいう。

⁷⁵ 布橋灌頂会に関する資料・聞き取り調査より。

⁷⁶ 阿弥陀仏を念じて往生を願う者を浄土に迎える25体の菩薩。

⁷⁷ 人の死後初7日から33回忌までの忌日を司るとされる13の仏の総称。

⁷⁸ 極楽浄土。往生する者に9種の差異があるところからいい、また浄土にも9種の差異を立てていう。

となっている。

また、敷板の数は 108 枚となっており、これは人間が持つとされている煩惱の数を表す。煩惱を踏みしめながら渡るという意味が込められている。さらに、この敷板 1 枚ずつには梵字が書かれており、敷板 1 枚 1 枚が大仏様であり、橋を渡ることによって仏に守られることを象徴している。

また、擬宝珠^{ぎぼし}⁸⁰の数は 6 つであり、6 地藏⁸¹と 6 道⁸²を表している。儀式で布橋を渡ることによって 6 道を抜け出し、生まれ変わるという輪廻思想を象徴している。

儀式において敷かれる 3 本の白布については、浄土思想にみられる“二河白道”から、浄土へと至る白い道を表している。

1-5. 江戸時代後期の布橋灌頂会 ―なぜ布橋灌頂会という行事が確立されたのか―

布橋灌頂会という行事が確立されたのは、江戸時代後期のことである。当時、立山が女人禁制だったため、男子の禅定登山に代わるものとして女性の立山参詣者に対して用意された法会⁸³である。立山に登拝できなかった女性に対する救済措置の 1 つとして確立されたものだとしている。また、この儀礼は、女人衆たちが橋を渡ることによっていったん死んで蘇るということを表しているため、男性が当時山中に他界があると恐れられていた立山に登ったのと同じ効果を得ることができるとされていた。また、江戸初期の布橋灌頂会では、女性だけでなく男性も橋渡りに参加することが可能であったとされている。

この儀礼が確立されたきっかけとしては、この法会を行うことで、使用される金銭や、寄進される白布を目的とし、また、立山に登ることのできない“女性”をターゲットとした“村おこし”的な要素を持っていたとされている。

明治時代初期の廃仏毀釈により廃止され、以後、平成 8（1996）年に復活するまで 136 年の間途絶えていた。

1-6. 平成 8（1996）年に復活した際の布橋灌頂会

ここでは、平成 8（1996）年に布橋灌頂会が復活したときの様子を、当時の運営に深く関わられていた立山博物館前館長米原寛さんのお話や、当時の資料をもとに記述する。

⁷⁹ 阿弥陀仏が法蔵菩薩であったとき、人間を救うために立てた 48 の誓願。

⁸⁰ 建物の高欄や橋の欄干の柱頭部を飾る宝珠。

⁸¹ 六道のそれぞれにあって衆生の苦しみを救う六体の地藏菩薩。

⁸² 生存中の行為の善悪の結果として、人間がおもむく六種類の世界の状態をいう。すなわち、地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人間、天をいう。

⁸³ 仏教に関係した集会のこと。

(1) なぜ復活したのか・復活の際の苦労―立山博物館⁸⁴前館長米原寛さんのお話から―

布橋灌頂会が復活した理由としては、“第 11 回国民文化祭とやま’96 立山フェスティバル”を芦峯寺で開催するにあたって、大々的な行事が必要だったためだそうである。

136 年ものあいだ途絶えていた布橋灌頂会を復元させるのは容易なことではない。芦峯寺・博物館に保存されていた資料・文献から布橋灌頂会についての情報を読み取り、整理するのはとても苦労されたようだ。

また、国民文化祭での行事、つまり国の行事として復活させたため、政教分離の関係から、布橋灌頂会を宗教行事として扱うのではなく、文化行事として扱う必要があったようだ。そのため、江戸時代の布橋灌頂会から宗教的な部分を除くため、声明・雅楽に関して国指定の団体に行事参加を依頼したようだ。米原さんは、この布橋灌頂会を復元させることで、昔の日本人がどのような心でこの行事に参加していたのか、昔の日本ではどのような行事が行われていたのかを実際に体験・見ることで知ることができる、つまり文化を学ぶことができる良い機会を与えてくれる行事であるとおっしゃっていた。

(2) 復活した際の布橋灌頂会の行事内容

ここでは、平成 8（1996）年 9 月 29 日 9：30～16：00 に行われた第 11 回国民文化祭’96 立山フェスティバルの一環としての布橋灌頂会の行事内容を記述する（表 1）。

表 1. 平成 8（1996）年に行われた布橋灌頂会のタイムスケジュール

イベント名	開催時間
オープニング・セレモニー	9:30～10:00
布橋灌頂会	10:30～12:30
山岳修験 ―そのカタチとところ	13:00～13:40
曼荼羅音楽会	14:00～15:30
立山曼荼羅絵解き&トーク	14:00～16:00
食のバザール	10:00～16:00

まずは、オープニング・セレモニーが 9：30～10：00 まで行われ、芦峯寺権現太鼓保存会による立山権現太鼓や稚児舞などが披露された。

次に、10：30～12：30 まで布橋灌頂会の儀式が行われる。このとき、特別出演者として俳優の児玉清さん、作家の辺見じゅんさん、新潟県糸魚川市根知大字山寺の稚児たちが参加した。

次に、13：00～13：40 まで“山岳修験―そのカタチとところ”で伝統芸能が披露された。ここでは新潟県糸魚川市根知大字山寺日吉神社奉賛会による獅子舞、芦峯寺立山の舞社中（芦峯寺の中学生）による立山の舞、新潟県糸魚川市根知大字山寺日吉神社奉賛会によるおててこ舞、芦峯寺権現太鼓保存会による権現太鼓が披露された。

⁸⁴ 昭和 47（1972）年に設立された、立山の自然や文化についてを紹介している博物館である。立山信仰についての資料が多く展示されている。

次に 14:00～15:30 まで遥望館で“曼荼羅音楽会”が開催され、法螺、雅楽などが披露された。また、14:00～16:00 まで善道坊⁸⁵では“立山曼荼羅絵解き&トーク”が行われ、トークでは布橋灌頂会に参加した辺見じゅんさんの感想など、こころをテーマに当時の様々な社会的課題が討論された。

また、10:00～16:00 には芦峯寺婦人の会、芦峯寺青年団による郷土料理がふるまわれたり、観光協会などによる商品の販売が行われる食のバザールが開かれた。

この日の参加者は、女人衆が 28 名、運営・進行に携わった方は約 100 名、観覧者は約 4000 名とされている。

2. 現在の布橋灌頂会

ここでは、平成 29（2017）年に行われた布橋灌頂会の実際の様子や行事内容を、資料や観覧・体験を元に記述する。

2-1. 平成 29（2017）年 9 月 24 日に行われた布橋灌頂会

(1) 募集要項

募集人数は 110 名(内 50 名は旅行会社のツアーにて募集)、参加資格は女性、参加費用 2 万円(税込)、申込期限は 8 月 3 日(木)で、北日本新聞社営業局まで申し込みという形であった。応募多数の場合は抽選を行い、抽選結果は布橋灌頂会実行委員会により返信はがきか電話で知らされる。また、web ページ「北日本新聞イベント&キャンペーン情報」サイト (<http://www.kp-kikaku.jp>) 内の布橋灌頂会申し込みフォームからも応募が可能となっていた。

(2) 行事内容

ここでは、今年平成 29（2017）年に行われた布橋灌頂会の行事内容について記述する。布橋灌頂会は平成 8（1996）年に復活してから平成 17（2005）年、18（2006）年、21（2009）年、23（2011）年、26（2014）年に行われ、今年も平成 29（2017）年 9 月 24 日に行われ

表 2. 平成 29（2017）年に行われた布橋灌頂会のタイムスケジュール

イベント名	開催時間
オープニング・セレモニー	10:00～10:30
布橋灌頂会	10:00～12:30
一般橋渡し体験	13:00～14:00
一般橋渡し体験受付	10:00～11:45
ごつつお祭り	10:00～14:00ごろ
布橋カフェ	9:30～15:00ごろ

⁸⁵ 芦峯寺に残る数少ない宿坊建築の建物。

た。

行事全体の内容としては、まず、オープニング・セレモニーが 10:00～10:30 に行われ、芦峠寺権現太鼓と立山の舞が披露される。

次に、10:00～12:30 まで布橋灌頂会が行われる。

また、10:00～11:45 までは 13:00 から行われる、一般橋渡り体験の参加者を受け付けている。これは、女人衆のように白装束や菅笠を被ったりせず、目隠しだけをつけて橋を渡るという簡単な儀式体験である。12:45 には一般橋渡り体験の参加者が明念坂を下ったところにある受付場に集められ、13:00 から開始される。

さらに、9 月 24 日の一日中立山博物館前では布橋カフェが、広場ではごつつお祭りが開かれている。

2-2. 布橋灌頂会の様子

ここでは、平成 29 (2017) 年に開催された布橋灌頂会の儀式本番、一般橋渡り体験、ごつつお祭り、布橋カフェについて実際に見学し、その様子を記述するとともに、儀式に参加した女人衆の方たち、芦峠寺住民の方の語りについて記述する。

(1) 布橋灌頂会儀式の様子

儀式に参加する女人衆は、まず、芦峠小学校の体育館で芦峠寺女性の会の女性たちの手を借り、衣装となる白装束に着替える。このとき、女人衆は白装束を左前にして身に着ける。これは、儀式において女人衆は一度死んだ存在となることを表している。着替え終わると、バスで芦峠寺閻魔堂まで送られる。



写真 1. バスから降りた女人衆(左)とボランティアの雄山高校生(右)

私が当日芦峠寺に到着した 9 時ごろには、雄山高校の学生ボランティアが布橋灌頂会実行委員会隈上雅志さんから、女人衆の誘導についての説明を受けていた。雄山高校生のボランティアは、この日、儀式が始まり、女人

衆が目隠しをして歩き出した際、転倒しそうな人の手を取ったり、一般橋渡り体験の受付に参加したり、女人衆が、閻魔堂に入るため

脱いだ草履を並べたりと、様々なお手伝いをしていた。

9 時 30 分ごろになると、女人衆を乗せたバスが到着した。女人衆たちは、閻魔堂周辺に集まり、順に閻魔堂の中へ入っていく。このとき、運営スタッフの方は、スタッフ同士打ち合わせをしたりと忙しそうだった。

このとき気づいたことが、女人衆の帯の色には、紫、黄、赤、緑、青と、たくさんの色の種類があったことである。帯の色の種類を豊富にすることで、女人衆が橋を渡る際、赤

い橋や、カラフルな帯の色が相まって、色彩豊かなとても綺麗な光景を見ることができるのだろうと思う。

また、女人衆の年齢層としては、やはり、年配の方が多く感じました。しかし、年配の方がほとんどというわけではなく、20代～30代くらいの若い方もおり、様々な年代の方が参加しているということを実感した。参加者の中には外国人の方もおり、参加者が様々な地域からこの布橋灌頂会に参加しに訪れていることがわかる。

また、菅笠を持参してこられる方もおり、その方の布橋灌頂会に対する思い入れが感じられた。

10時ごろになると、閻魔堂から声が聞こえ始める。このとき、閻魔堂の入り口には白い幕が降ろされており、中の様子を見ることはできない。



写真2. 目隠しをし、頭に菅笠を被る女人衆

30分ほど時間がたち、声がやむと、心の中で懺悔を終えたであろう女人衆たちが閻魔堂から順に出てくる。この時点では、女人衆はまだ目隠しをしておらず、閻魔堂から出てきた人から順に、スタッフの手を借り、目隠しをつけ、頭に菅笠を被る(写真2)。全員が準備を終えると、指導師や洋遊会の奏でる雅楽に連れられ、いよいよ女人衆が歩き始める。

このとき私は、明念坂に建てられた地藏の後ろで観覧していたのだが、周りには一眼レフカメラを持った年配の方々がたくさんおり、女人衆の様子を撮影していた。その方たちは、カメラが趣味で、布橋灌頂会の儀式は綺麗だから前回、前々回も撮影しにきたとおっしゃられていた。布橋灌頂会の儀式の色彩豊かな美しさも、観覧者を増やす1つの要因となっているといえるだろう。

女人衆は3列になって明念坂を下っていくが、1人1人の様子を見てみると、しっかりと



写真3. 布橋を渡る女人衆

とした足取りで、手を合わせて下っている人もいれば、年配の方の中には、雄山高校生のボランティアの手をつかみ、不安そうな足取りで下っている人もいた。やはり、視界がないという状態は不安な心持ちになるのだろう。

明念坂を下り終えると、いよいよ女人衆の橋渡りが始まる。女人衆が橋の真ん中まで渡り終えると、来迎師が待っており、修法が唱えられる。修法を終えると、今度は来迎師を先頭に、女人衆たちは再び歩き出す。

このときの雅楽の音楽と、朱い橋を渡る女人

衆の光景は、日常的な雰囲気からはかけ離れ、とても幻想的で美しいものだった。静かな空気の中で流れる雅楽の音楽と、色彩豊かな布橋と女人衆の光景は、観覧者の心にも響いたことだと思う。

女人衆が橋を渡り終えると、先頭から順番に遥望館へと入っていく。全員が遥望館に入っていく、正座をすると、声明から血脈が与えられる。血脈を与えられたことで、女人衆たちが生まれ変わったということを表している。最後には、遥望館の幕があげられ、女人衆たちが前方に見える立山を拝み、12：30 ごろに儀式は終了となった。



写真 4. 通路に建てられた看板

儀式を終え、遥望館から出てきた女人衆は、どこか晴れやかな表情を浮かべているように見えた。1 時間以上も視界がない状態でゆっくりと歩き、やっと視界が開けたときに見えた立山にはやはり何か感動するものがあつたのだろう。出てきたときに感動して泣いている女人衆の方もおり、儀式が女人衆のところに与えた感動を少し感じることができた。

また、当日は、立山地獄の思想を活かしたユニークな看板が建てられていた（写真 4）。

(2) 女人衆、芦峯寺住民の方のお話

女人衆として布橋灌頂会に参加された 3 名の方からのお話と、誘導として布橋灌頂会の運営に参加された芦峯寺住民の方からのお話を聞き取り調査から記述する。

(2)-1. 女人衆の方への聞き取り調査

・ 30 代女性(富山県在住)

この女性が、布橋灌頂会を知るきっかけとなったのは、平成 8（1996）年に行われた国民文化祭での布橋灌頂会がテレビで報道されていたことだった。報道で布橋灌頂会の行事を見て、自分も体験してみたいと思ったそうだ。応募するのは今回が初めてであり、体験した感想としては、やる価値はある、素晴らしい経験になったとおっしゃっていた。

・ 30 代女性(千葉県在住)

この女性は、平成 26（2014）年に行われた布橋灌頂会が掲載された新聞を見て、布橋灌頂会に興味を持ったそうだ。北陸新幹線ができ、関東からも立山へと訪れやすくなったため、今回の布橋灌頂会に応募したそうだ。体験した感想としては、来てよかった、儀式の最後に目を開けて立山が見えたとき、その景色が素晴らしくとても感動した、なかなかない経験だったとおっしゃっていた。

・70代女性(東京都在住)

この女性が布橋灌頂会を知るきっかけは、立山曼荼羅だったそうだ。立山曼荼羅の絵解きに関心があり、立山信仰について調べていると、布橋灌頂会という行事があるということを知り、ぜひ参加してみたいと思うようになったそうだ。体験した感想としては、自分を顧みるいい機会になった、儀式を終えたときは感動したし、こころが癒される感じがしたとおっしゃっていた。

(2)-2. 芦峯寺住民の方への聞き取り調査

・70代男性

普段は布橋は、芦峯寺の一部で、日常的に存在するものであり、住民にとってはあまり特別な意味を持たない、とおっしゃっていた。しかし、このような行事を設けることで、布橋や芦峯寺が多くの人に知ってもらうことができ、また、運営として住民が参加することで住民同士の絆が深まることはとても良いことだとおっしゃっていた。

(3) 一般橋渡し体験の様子

一般橋渡し体験は当日の10:00~11:45のあいだに明念坂の下のテントにて受付が行われており、参加対象者は女性だけでなく、男性も可である。料金は1人2000円であり、こどもは半額となっている。



写真 5. 一般橋渡し体験の様子

体験の流れとしてはまず、12:45までに受付場所のテントに集合し、3列に並ぶ。参加者が並び終わると、それぞれが受付の際に渡された目隠しをつける。声明に連れられ、雅楽の音楽が流れる中で

橋を渡し、渡り終わると2列になり遥望館まで進む。このとき、参加者を先導するのは芦峯寺住民から選ばれた女人衆と立山小学校の児童である。遥望館まで進むと、かつて姥堂があった基壇に上がり、声明の合図をもって目隠しを取り、体験は終了となる。

当日は私も参加したのだが、まず、受付に行き、料金を払うと、体験の詳細が書かれたパンフレットや参加付録が入れられた袋が渡された。参加付録には、御朱印、錫杖の絵がプリントされた缶バッジ、当日開催されている布橋カフェの布橋コーヒーか布橋ソーダが一杯無料となる無料券が入っていた。

12:45に受付場所に集合すると、すでにたくさんの人が並んでおり、私もその列に加わり13:00になると列が出発した。目隠しをそのままつけると、視界は見えづらくなり、2つ折りにしてつけると、視界は完全にふさがれた状態になった。目隠しを2つ折りにした

状態でつけ、前に進むと、周りに何があるのか、自分がどこに進んでいるのか全くわからないので、とても不安な気持ちになった。途中、白布から足が外れないか心配だったが、無事渡りきれたときはなにか少し達成感を感じた。目隠しをつけてから外すまでの時間は15分程度だったので、1時間以上も視界がふさがれている状態の女人衆が橋を渡り終えたときの達成感は素晴らしいものだろうと感じた。橋を渡り終えると、参加者は姥堂壇上に集められ、目隠しを外して立山を拝み、体験は終了となる。

観覧によって感じるものと、実際体験して感じるものの差は大きい。このように、布橋灌頂会の儀式を多くの人に体験して知ってもらうことのできる機会をつくるという取り組みは、参加者の布橋灌頂会への理解を深めることに繋がるだろう。一般橋渡り体験の参加者は230名前後だったそうだ。

(4) ごつつお祭りの様子

(4)-1. ごつつお祭りについて

平成8(1996)年に布橋灌頂会が復活した際に“食のバザール”として開かれていたものが現在では“ごつつお祭り”と名前を変えて開催されており、主に芦峯寺女性の会が主体となっている。毎年11月頃に開催されており、布橋灌頂会が開催される年は同時開催されている。“ごつつお”とは富山弁で“ごちそう”という意味であり、内容としては、地元のお店が10店舗ほど出店し、つぼ煮、やきつけなどの芦峯寺の郷土料理やそば、立山の特産品などが販売されているというものである。郷土料理に使われる山菜などの食材は地元の方が春から夏にかけて採集したものが使われているものもある。

(4)-2. 郷土料理

今回のごつつお祭りで主に販売されていた郷土料理を二つほど紹介する。

・つぼ煮



写真 6. ごつつお祭りで販売されていたつぼ煮

芦峯寺において精進料理とされたきた料理。「つぼ碗」と呼ばれるふた付きの朱塗りのお碗に盛られたことから、そう呼ばれるようになったとされている。こごみ、にんじん、ぜんまい、サトイモなどの材料を昆布のだしで煮て、醤油と酒で味付けをする。こごみは、天日干しにして保存されているが、つぼ煮にするときは戻すため下準備を前の晩から行う。つぼ煮に使われた食材は地元の方が採集したものが使われている。食べてみると、どの山菜もとてもやわらかく、醤油の風味があつてとても食べやすくおいしい料理だった。

・やきつけ

餅米のくず米を粉にし、ヨモギを摘んでゆで粉と混ぜて団子にし、こんがりと焼いた郷土料理。昭和初期の頃から畑仕事や子どものおやつとして食べられていたそうである。おやつのような食べ物だと思っていたが、とてももちもちしていて、一個でもおなかいっぱいになるくらいだった。



写真7. ごつつお祭りで販売されていたやきつけ



写真8 (左)・9 (右). ごつつお祭りの様子



写真10. つぼ煮の作り方が書かれたパネル

布橋灌頂会当日、ごつつお祭りを見て、地元の方の活気があると感じた。お店の数としては5~6店舗ほどで郷土料理のつぼ煮、やきつけ、そば、甘酒、山菜おこわ、米粉パン・シフォン、特産品である立山のちから米や日本酒（立山）なども販売されており、それぞれのお店の方が声をだしてお客さん呼び込んでいた。中でもそばを出していたお店が人気で、お昼時になると15人ほどの行列ができ、込み合っていた。つぼ煮を販売していた女性にお話を伺うと、当日午前二時頃から起きて準備を始めていたそう。また、会場には買った食べ物を座って食べることができるスペースがあり、布橋灌頂会に訪れた人たちが話をしながら食事を楽しんでいた様子が見られた。

また、つぼ煮の作り方が書かれたパネル（写真10）などが置いてあったのだが、簡単に作り方を紹

介することで、自分たちの郷土料理に親しみをもってほしい、郷土料理をいろんな人に知ってもらいたいという思いが感じられた。

このような、立山の特産品や地元の料理を提供できる機会があることは地元のさまざまな料理を知ってもらえるという点で、とてもいい試みだと感じた。県外からもたくさんの人々が訪れる布橋灌頂会にこのような行事を付け加えることで、立山、ひいては芦峯寺の魅力を知ってもらうことのできる良い機会になるだろう。

(5) 布橋カフェの様子

平成 28（2016）年の立山博物館の企画展では、地獄にちなんだジュースやクッキーなどが販売される“地獄カフェ”が開催された。平成 29（2017）年の布橋灌頂会では、地獄カフェを参考に、“布橋カフェ”が立山博物館前で開催された。



写真 11. 布橋カフェのメニュー

ざくろ酢、目玉をイメージしたゼリー、チアシードで作られた、血の池地獄をイメージしたジュースや、すげがさをかぶった女人衆をかたどったクッキーが販売されており、150 円のジュースを一杯頼むとクッキーが一枚ついてきた。

また、先ほど紹介した、橋渡り体験の参加者には、布橋コーヒーか布橋ソーダが無料で一杯飲むことができる無料券がついていた。

ここにも食事スペースや、立山の特産品販売、立山博物館で販売されている商品が置かれているスペースが設けられており、布橋灌頂会を見学しに来た人たちや、立山博物館によった人たちが訪れていた。

(6) ごつつお祭り・布橋カフェの影響

このような、食事を提供する場所や、カフェ、立山の特産品を販売する場所を設けることは、布橋灌頂会に訪れた人が、食事を楽しんだり、休憩したりすることができるだけでなく、地元の郷土料理、特産品を知ってもらう良い機会になるだろう。また、郷土料理の作り方の紹介や、“地獄”をジュースで表現してみたりすることによって、訪れた人々に親しみやすさを感じてもらうことができ、立山や芦峯寺と布橋灌頂会に訪れた人々との距離が近くなることが考えられる。

3. 布橋灌頂会の変化

3-1.. 江戸時代の布橋灌頂会と平成 8（1996）年の布橋灌頂会との相違点・共通点

(1) 相違点

明治時代初期の廃仏毀釈により廃止されるまでの布橋灌頂会では、村おこしの側面もあっただろうが、やはり、宗教行事として行われていたものと考えられる。しかし、復活した際の布橋灌頂会では、1-6 の(1)でも記述したように、宗教行事としてではなく、文化を知る・学ぶための行事として行われた。

また、布橋灌頂会の儀式内容も、江戸時代のものとはやや違い、イベント性を重視し、簡略化されたものになっている。

(2) 共通点

共通点として挙げられるのは、2つの時代の布橋灌頂会が、どちらも“村おこし”的な側面を持っていることだろう。復活した際の布橋灌頂会は、国民文化祭で大々的な行事が必要だったため行われたという理由もあるが、やはり、行事を行ったことは芦峠寺の活性化にも繋がり、村おこしとしての側面も付け加えられたのではないだろうか。

3-2. 平成 8 年の布橋灌頂会から平成 29 年の布橋灌頂会までの変化

(1) 参加人数(女人衆、観覧者)の変化⁸⁶

表 3 は平成 8（1996）年、23（2011）年、26（2014）年、29（2017）年の女人衆への参加応募者数、県内と県外それぞれの参加応募者数、実際の参加者数をまとめたものである。表 3 からわかるように、過去 3 回の布橋灌頂会を通して、県内からも、県外からも参加応募者が増加していることが窺える。このことから、布橋灌頂会に対する関心が年々高まっているということが考えられる。

表 3. 布橋灌頂会女人衆への応募者数と参加者数

	応募者数	県内からの応募者	県外からの応募者	参加者数
平成8年(1996年)				28
平成23年(2011年)	142	125	17	75(県内58+ 県外17)
平成26年(2014年)	188	128	60	83(県内49+ 県外34)
平成29年(2017年)	229	146	83	110(県内62+ 県外48)

また、参加者についてだが、平成 23（2011）年の県外からの応募者数と参加者数を見ると、応募者数が 17 名、参加者数が 17 名となっている。つまり県外からの応募者は全員参加という形になっている。これは、平成 23（2011）年の布橋灌頂会開催時に、旅行会社のツアーを経由し応募者を募ったためだと考えられる。

⁸⁶ 布橋灌頂会実行委員会隈上雅志さんからの聞き取り調査より。

平成 23（2011）年の布橋灌頂会以降、旅行会社のツアー参加者用の女人衆参加枠を設けていることと、布橋灌頂会の認知度が上がっていることから、県外の参加者が選ばれる確率が高くなっていることが考えられる。

このように、旅行会社のツアーと連動して布橋灌頂会の応募者を募ったり、県内だけでなく県外での宣伝を行うことで、布橋灌頂会のことを知る機会の少なかった県外のより多くの方に、布橋灌頂会を知ってもらうことができる。

また、観覧者の視点から変化を見てみると、平成 8（1996）年の観覧者数が約 4000 人、平成 26（2014）年、平成 29（2017）年の観覧者数が約 3000 人と、平成 8（1996）年の際の注目度の高さがわかる。

(2) 運営人数の変化

平成 8 年の布橋灌頂会では、立山フェスティバル立山町実行委員会をはじめとした、立山町職員、立山博物館職員ら 100 名弱が運営に携わった。平成 26（2014）年の布橋灌頂会では、布橋灌頂会実行委員会をはじめとする立山町職員ら 110 名と芦峯寺住民、ボランティアの方 40 数名を含む約 150 人が運営・進行を務め、平成 29（2017）年の布橋灌頂会では、布橋灌頂会実行委員会をはじめとする立山町職員ら 140 名～150 名と、芦峯寺住民、ボランティアの方 40 数名を含む約 200 人が運営・進行に関わった。布橋灌頂会が回を重ねるごとに運営人数が多くなっていることがわかる。

また、運営スタッフの方にお話を伺ったところ、回を重ねるごとに規模が大きくなっていて感じるそうだ。注目度が年々高くなり、集まる人数も増えるにつれて、スタッフの数もその変化に応じて増えていると考えられる。

(3) 行事内容の変化

平成 8（1996）年に行われた布橋灌頂会ではメインの橋渡し儀式的他に、“山岳修験—そのカタチとところ〔伝統芸能の競演〕”や“曼荼羅音楽会”、“立山曼荼羅絵解き&トーク”などが行われていたが、平成 29（2017）年の布橋灌頂会に関してはそれらは行われていない。しかし、平成 8（1996）年に行われていた“食のバザール”は、現在も“ごつつお祭り”と名前を変えて続けられている。

“曼荼羅音楽会”に関しては、平成 18（2006）年においては開催されたそうだ。声明の会 HARUKA や雅楽団体洋遊会による、女人衆の擬死再生を祝うお経や舞楽が披露された。

また、伝統芸能を披露する機会が平成 8（1996）年に比べて平成 29（2017）年の布橋灌頂会では少なくなっているが、オープニング・セレモニーでの立山の舞、芦峯寺権現太鼓の披露は続けられている。

また、平成 29（2017）年の布橋灌頂会で行われた観覧者に向けた一般橋渡し体験だが、平成 8（1996）年においては行われておらず、布橋灌頂会が回を重ねるにつれて、新たに加えられた行事だということがわかる。

さらに、平成 18（2006）年には橋渡し体験がおこなわれており、その様子を見ると、参加者は目隠しの白布をつけていなかったが、平成 29（2017）年の橋渡し体験では参加者は白布で目隠しをし、参加していた。白布をつけることでより本番に近いかたちになり、臨場感を味わえるようになるだろう。このような変化は、より多くの参加者に“体験を通じて知る”という機会を与えることができ、布橋灌頂会への関心も高めることができるだろう。

平成 29（2017）年の布橋灌頂会では布橋カフェが開かれた。布橋カフェは、2-2 の(5)でも記述したように、平成 28（2016）年に開催された地獄カフェを参考としている。今回布橋カフェが開催されたのは、布橋灌頂会の世界観を理解し易くすることで、よりたくさんの人に布橋灌頂会を知ってもらうためだそうだ。

このように、平成 8（1996）年から平成 29（2017）年にかけて、計 7 回の布橋灌頂会が行われるなかで、行事内容も回を重ねるごとに変化している。また、布橋カフェや、一般橋渡し体験などが付け加えられたことによって、布橋灌頂会という行事がだんだん親しみやすいものに変化しているのではということを感じた。

(4) 意識の変化

江戸時代の布橋灌頂会は宗教的な意味合いが強い行事であったが、平成 8（1996）年以降の布橋灌頂会が、宗教色が薄められた文化財として復活したことは、“江戸時代初期の布橋灌頂会と復活した際の布橋灌頂会の相違点・共通点”でも記述した。このように、宗教的な部分が抜き取られることで、女性を救うという基本的な意識は変わらないが、癒しの行事という側面が新たに出てきたということが考えられる。

また、運営側の視点からは、立山博物館前館長米原寛さんのお話によると、平成 8（1996）年に布橋灌頂会を復活させようとした際は、布橋灌頂会という芦峯寺固有の文化をより多くの人に知ってもらいたいという意識があったが、年々参加者が増えてきたことにより、参加者をどう満足させるかという視点や、リピーターを大事にしつつより多くの人に知ってもらうためにはどうしたらいいのか、という様々なことに目を向けるようになってきたそうだ。

また、布橋灌頂会実行委員会の隈上雅志さんのお話しによると、年々参加者が増え注目度が高くなっていることを受け、海外の方にも知ってもらうということも視野に入れ始めたそうだ。

4. 布橋灌頂会に関わっている組織や人々、活動

4-1. 布橋灌頂会実行委員会について ―布橋灌頂会実行委員会隈上雅志さんのお話から―

布橋灌頂会実行委員会とは、平成 8（1996）年に 136 年ぶりに布橋灌頂会が復活し、9 年後の平成 17（2005）年にもう一度布橋灌頂会を行おうとしたときに立ち上げられた、主

に布橋灌頂会の実施、運営と PR を行う団体である。立山町観光協会、芦峯寺総代、芦峯寺女性の会会長、立山博物館学芸員、富山県知事、立山町長など、全員で 18 名から構成されている。さらに、実行委員会のなかにも幹事会があり、幹事会が主となり実行委員会の運営を行っている。幹事会は芦峯寺総代、芦峯寺婦人会会長、立山博物館学芸員、立山町、立山町観光協会を中心に構成されている。

(1) 布橋灌頂会実行委員会の主な活動内容

運営準備の面では、実行委員会は年明けから、指導師、来迎師の方と、雅楽を演奏する高岡の洋遊会とのスケジュール合わせという形で動き始める。布橋灌頂会はお彼岸の日に行われるため、僧侶の方々が忙しく、早めにスケジュールを決めておかなければいけないためである。

平成 29（2017）年の布橋灌頂会を行うにあたっての第 1 回の会議は 2～3 月のうちに行われ、これが、実行委員会の実質のスタートとなる。第 1 回の会議では、布橋灌頂会の女人衆への応募者が回を重ねるごとに増加していることを受け、女人衆の人数制限を前回の 80 人から、110 人へ増やすことを決定したそうだ。

8 月 16 日に行われた第 2 回の会議では、富山地方鉄道の列車のヘッドマークを布橋灌頂会仕様にすることや、橋渡り体験付き企画乗車券を販売することが決定された。列車のヘッドマークを布橋灌頂会使用にすることで、多くの人の目に布橋灌頂会がつくことになり、PR につながる。

このような、実行委員会の全員が集まる会議の他にも、幹事会のメンバーをメインとした細かなミーティングが月に何回か行われ、布橋灌頂会に向けて様々なことを詳細に決定していく。布橋灌頂会のメインイベントとなる橋渡りをする女人衆の白装束や菅笠を林きぬいとや（後述）に用意してもらうために連携をとったり、当日には観光客を含め 3000 人ほどの人が訪れるため、シャトルバスなどの手配や交通整理についての詳細が決定される。衣装においては芦峯寺女性の会（後述）に用意してもらうそうだ。

私が、実行委員会のメンバーである隈上さんにお話を伺った 8 月 21 日の時点では、女人衆への応募者に当落の連絡を入れるということを行っていた。また、当選した女性の方に連絡するときに、普段着ている服のサイズや、儀式で正座をしなければならないため、正座ができるかどうかということも質問するそうである。また、8 月 30 日には、指導師、来迎師を勤める声明の僧侶達と、洋遊会、平成 8（1996）年に布橋灌頂会が復活した際、運営の中心となった立山博物館前館長の米原寛さんを迎えて、当日についての詳細な打ち合わせが行われたそうだ。

PR の面においては、北陸地域だけでなく、首都圏の方にも布橋灌頂会を知ってほしいということから、東京でポスター広告を出したり、立山に訪れた旅行者や留学生に布橋灌頂会の橋渡りを簡単に再現したものを体験してもらうといったものや、本番が近付くと、富山地方鉄道の列車の中吊りに広告がでたり、富山駅に宣伝ブースを設けるなど、幅広い宣

伝が行われている。



写真 12. パリの芸術文化祭での
布橋灌頂会の様子

(<http://www.bbt.co.jp/bspe/index471.html>)

また、宣伝は日本国内だけでなく、フランス・パリで平成 27 (2015) 年 10 月 3 日に行われた芸術文化祭“ニュイ・ブランシュ”においても布橋灌頂会が披露された。ここでの布橋灌頂会は、芦峯寺で行われる布橋灌頂会よりも、芸術の面が強調されたものだったそうだが、行事を外国の方にも知ってもらうことができるという点において良い機会であろう。

このように、実行委員会の仕事は、運営準備、PR、地元の方や、祭りのメインとなる人たちやボランティア団体、メディア・マスコミとの連携、当日の仕切り・誘導など多岐にわたる。

4-2. 林きぬいとやについて —立山舟橋商工会女性部部長林邦子さんのお話から—

林きぬいとやは、五百石商店街に位置する呉服屋さんである。布橋灌頂会には、女人衆が頭にかぶる菅笠と足袋を用意するという形で関わっている。また、菅笠を用意する際は、ついている頭台をはずすという作業も加わる。これは、頭台がついたままだと、かぶったときに目が隠れるまで深くかぶることができないからである。



写真 13. 頭台がついた菅笠



写真 14. 頭台を取り外した菅笠

4-3. たてはく探検隊について —立山舟橋商工会女性部部長林邦子さんのお話から—

たてはく探検隊とは、平成 29 (2017) 年 8 月 5 日に行われた、小学生にまんだら遊苑⁸⁷やゲーム、クイズなどを通して、立山の自然や歴史について学んでもらうことを目的としたツアー形式の企画である。参加人数は小学生が 20 名、保護者 18 名の計 38 人となり、立山博物館とボランティアの方が主となって行われた。

この企画では、立山開山伝説を紙芝居で学び、まんだら遊苑を歩くことで、立山における地獄・天国観、立山の自然を知ることができる。また、プログラムのなかには“ミニ布

⁸⁷ 立山曼荼羅の世界を、広大な敷地に立体的に構築した立山博物館の施設。

橋灌頂会”というものが組み込まれており、ここでは子供たちが実際に目隠しをして布橋を渡し、布橋灌頂会の解説を聞くという内容となっている。

布橋灌頂会や、立山開山伝説などの立山の歴史は、立山町民なら誰でも知っているものと思っていたが、小学生や、年配の方の中にも知らない人は結構いるという風に林さんはおっしゃられていた。このような企画を通して、まずは立山町民の方に自分たちの町の歴史を詳しく知ってもらうことで、より、町に愛着、ありがたみが湧き、町の発展に繋がることを期待している。

4-4. 芦峯寺女性の会について —芦峯寺女性の会会長佐伯照代さんのお話から—

芦峯寺女性の会とは、戦後、芦峯寺婦人会として設立され、4、5年前に芦峯寺女性の会に名称変更し、現在も活動が続いている団体である。名称は変更されたそうだが、婦人会と女性の会のどちらの名前も使用されている。

現在は、会長を佐伯照代さんが務め、芦峯寺の女性 60 数名が参加しているそうだが、年々参加人数が減少の傾向にあるそうだ。



写真 15. お召し替え途中のおんば様

主な活動内容については、村の行事の企画・運営である。元旦には餅づくり、3 月にはおんば様のお召し替え、お盆には盆踊りなど、年間を通して様々な行事に関わっている。

ここで、3 月に開催されるおんば様のお召し替えについて紹介する。おんば様のお召し替えとは、年に一度、3 月 13 日に閻魔堂で行われる行事で、木造の姥尊（おんば様）の着物を、芦峯寺の女性たちが召し替えるという内容である。女性の会を中心とし、着物で使う白布の断

裁から縫い上げ、縫い上げた着物のお召し替えまでを行う。芦峯寺に伝わる姥尊信仰⁸⁸と深く結びついた行事である。

布橋灌頂会においては、女性の会を中心とした芦峯寺住民の方で、閻魔堂の掃除や女人衆の白装束の着付け、また、明念坂に置かれている地蔵の前掛けをつくり（写真 16）、新しいものに変えることや、女人衆の食事を作るといった形で関わっている。ある女性の方が地蔵の前掛けを作って来てくれたことをきっかけに、布橋灌頂会のときだけ地蔵の前掛けを新しく作り変えることになったそうだ。



写真 16. 前掛けをかけた明念坂の地蔵

⁸⁸ 鎌倉時代後期から室町時代にかけて、芦峯寺で信仰されはじめた。おんば様は、衣食住の恵みをもたらす神とされている。

4-5. 芦峯寺住民と布橋灌頂会

—芦峯寺女性の会会長佐伯照代さんと前芦峯寺総代佐伯信春さんのお話から—

布橋灌頂会の 1 週間前から前日にかけて、芦峯寺住民の男性は草刈り・掃除、会場設営などを行い、女性は先ほども述べたように、地蔵の前掛けを作ったり、閻魔堂の掃除を行う。当日には、男性は会場設営、観覧客の誘導、ごつつお祭りに出店する方は食事の準備などを行い、女性は女人衆の着付け、女人衆に振る舞う食事の準備、男性と同じく誘導や、ごつつお祭りの準備を行う。60 人前後の方が参加する。

また、当日の開会式にはオープニング・セレモニーとして立山の舞や芦峯寺権現太鼓が披露される。これらのセレモニーに参加する子供たちは地元から選ばれる。選ばれた子供たちには、やりとげなければ、という地元の子供としての義務感があるそうだ。

また、女人衆の先頭に立って歩く女性 3 人は村の方から選ばれるそうである。このように、実際に体験して歴史を知ってもらうことで、地元の方はより深く地元について知ることができ、愛着も深まる。佐伯照代さんは、地元の人に村の行事や企画を通して村の歴史を知ってもらいたいという理由から、村の方々と町の間につ存在として、様々な企画を提案したり、布橋灌頂会という行事のなかで村の方々に仕事を割り振ったりということをしているそうだ。しかし、村の住人の少子高齢化や人口減少などで、体験してもらって歴史を知ることがだんだん難しくなっているのが現状である。

そのような厳しい現状があるとはいえ、このような行事に村単位で参加することで、村の人同士の結束が深まることが感じられるそうだ。

おわりに

今回の調査を通して、文献調査から布橋灌頂会の歴史を、聞き取り調査からは、なぜ布橋灌頂会が復活するに至ったか、また、参加した女性の思い、1 つの行事を行政や地元住民、ボランティアが協力して作り上げ、活気づける様子を知ることができた。

江戸時代には、宗教行事として行われていた布橋灌頂会だが、平成 8（1996）年には昔の日本の文化を学ぶ行事として復活し、近年では女性のこころの癒しの行事としての側面も生まれてきている。また、平成 8（1996）年に復活してから、平成 29（2017）年に開催されるに至るまで、“一般橋渡し体験”、“布橋カフェ”が加えられた。このような変化を経て、私は、布橋灌頂会は、時代に合わせて、より親しみやすい行事になっていると感じた。時代に合わせて変化することにより、その時代に生きる人々のこころを掴むのだと考える。

また、布橋灌頂会という行事が成り立つには、布橋灌頂会実行委員会、ボランティア、芦峯寺住民の方々、洋遊会、僧侶など、たくさんの方の協力が不可欠である。準備面においては、打ち合わせ、宣伝、衣装・足袋・菅笠の用意。前日や当日には、会場設営、儀式で使う建物の掃除、ごつつお祭りの用意、誘導など、たくさんの仕事を、協力してこなさなければ布橋灌頂会は成立しない。このように、布橋灌頂会は変化しながらも、たくさん

の人々の、“布橋灌頂会という行事を盛り上げよう”という思いから、成り立っている。

また、女人衆として参加したり、一般橋渡り体験で体験することで、布橋灌頂会に対する関心が高まり、理解も深まることと思う。“体験を通して知る・感じる”ということは、スマホ一つでなんでも知ることのできる現代では、少なくなってきた。布橋灌頂会という行事は、そのような体験を与えてくれる場所でもあるということを感じた。

また、芦峯寺住民の方からは、このような行事でみんな協力することで、住民同士の絆を深めることができるというお話をよく聞くことが多かった。布橋灌頂会を行うことで、村おこし、町おこしというプラスの側面だけでなく、住民同士の絆を深めてくれる機会という側面をも、発見することができる。

このように、行事の持つ意味や内容は少しずつ変化しながらも、長年続けられている。たくさんの人に支えられながら、続けられていくことで、今までにはなかった意味や、文化が生まれることもある。今後も、少しずつの変化をしつつも、布橋灌頂会が続けられていくことを願っている。

謝辞

今回の調査にあたって、布橋灌頂会実行委員会の皆さまをはじめとする、立山博物館、芦峯寺住民の方には、本当にお世話になりました。資料を見せてくださったり、貴重なお話を聞かせていただき、感謝しております。

とりわけ、隈上雅志様、佐伯照代様、佐伯信春様、米原寛様、林邦子様にはお忙しい中お時間を割いていただきました。皆さまのご厚意で今回の調査を無事終えることができました。本当にありがとうございました。

参考文献

第 11 回国民文化祭立山町実行委員会『『第 11 回国民文化祭とやま'96 立山フェスティバル 報告書』大東印刷株式会社、1997 年。

福江 充『立山信仰と布橋大灌頂法会 加賀藩芦峯寺衆徒の宗教儀礼と立山曼荼羅』桂書房、2006 年。

富山県立山博物館『立山の地母神 おんばさま』能登印刷株式会社、2009 年。

富山県立山博物館『女性たちの立山 近世から近代へ…』北日本印刷株式会社、2015 年。

富山県立山博物館『立山と帝釈天 一女性を救うほとけ一』北日本印刷株式会社、2013 年。

参考にしたウェブサイト

「立山歳時記 おんば様のお召し替え」

(<http://www.town.tateyama.toyama.jp/pub/guide/svGuideDtl.aspx?servno=3205>
2017 年 12 月 28 日閲覧)

「富山県 立山博物館へようこそ」

(<http://www.pref.toyama.jp/branches/3043/sisetu/g-mandaraen.htm> 2018 年 1 月 5 日
閲覧)

「立山の歴史・立山信仰」

(<http://ww2.ctt.ne.jp/~douzou/rekishi.htm> 2018 年 1 月 12 日閲覧)

在りし日の一大エンターテイメント、池田浄瑠璃

山本 卓也

はじめに

「浄瑠璃」と聞くと多くの人のはかの有名な近松門左衛門や人形浄瑠璃をイメージするだろう。広辞苑には浄瑠璃という言葉の説明がこうある。

“三味線伴奏の語り物音楽の一つ。室町末期、無伴奏（時に琵琶や扇拍子）で語られた、「浄瑠璃物語」⁸⁹が始まりで、広く他の物語に及ぶ。江戸時代の直前、三味線伴奏が定着し、後には歌舞伎とも結合して庶民的娯楽として大いに流行する。”

私の浄瑠璃に対する認識も、調査を本格的に開始するまでは、それとほとんど変わらなものであった。その認識は全容を知っていくにつれて変化していくこととなる。

私が「池田浄瑠璃」と出会ったのは平成 29 年度（2017）の夏に入った頃であった。調査テーマを決めかね、立山町に関する新聞記事の切り抜きを漁っていたところ、この池田浄瑠璃に関する記事を発見した。それまで見聞きすることのなかった、人形によるものでなく、人が演じる浄瑠璃が珍しかったことから興味を持ち、調査に踏み切ることとなった。

本稿ではこの「池田浄瑠璃」についての、概要、特性、変遷を、比較的古い時代から戦後すぐまでと、近年までとの二つの時代に分けて述べていく。

1. 池田という土地と浄瑠璃

1-1. 池田概要



図 1. 池田周辺の地図

⁸⁹ 室町時代の御伽草子である、『十二段草紙』の別称。浄瑠璃姫と牛若丸の恋物語を描いた作品。

池田は立山町の中心から南東部にある上段地区^{うわだん}に位置し、上瀬戸と隣接している。かつては、池田城と呼ばれる山城が存在していた。城主は、富山城主であった神保長職^{じんぼながもと}（生年不明～1572?）の家臣にあたる寺嶋職定^{もとさだ}（生没年不明）と考えられているが、現存する資料がほぼ無く定かではない。しかし、この地が立地上、大きな動きを悟られることなく山越えが可能であったために、戦略的重要拠点であったことは確かである。またかつては、立山登拝の主要道の途中に位置しており、宿坊も存在していたことから人の往来が盛んであったようである。

戦前には 20 戸程の家々が存在し、戦後すぐは疎開を含めて 28 戸があった。その後徐々に過疎化が進み、昭和 56 年時点で 8 世帯、人口 26 人であり、現在では写真 1 のような廃屋が多く、確認することのできる人が住めるであろう家屋は 3 棟ほどである。その中でも定住している世帯は一つのみとなっている。



写真 1. 現在の池田に残る廃屋（筆者撮影）

1-2. 池田浄瑠璃の興り

池田浄瑠璃の興りに関する直接的な史料は現在確認されていない。現在この池田浄瑠璃の興りの説明として使用されている説は、400 年程前に池田城主を楽しませるため演じられていた村芝居が始まりとするものである。これは約 30 年前の通説となっている。

昭和 63 年に制作された、新瀬戸地区池田浄瑠璃文化財保存会編集の資料、『池田の浄瑠璃について』では、戦国時代から村の慰みとして演じられていた法楽芝居が、江戸中期以降に盛行した歌舞伎浄瑠璃の台本を取り入れたことで成立したものという旨が記述されている。この“なぐさみ”の記述部分を曲解してしまった結果、現在の池田城主の

ために演じられていたという説が生まれたのではないかと考えられる。

また地元住民からは、当時の村民の多くは専業農家であったことから、雪深い立地上、農閑期にできる作業が限られていたために、その余暇に行う村民の楽しみの一環として芝居が演じられるようになり、今日の池田浄瑠璃に繋がったのではないかという声が伺えた。その村芝居である池田浄瑠璃が今日のものへと続いている。

1-3. 池田浄瑠璃のあゆみ

確認できた池田浄瑠璃の資料で最古のものが大正 7 年のものであり、それより古いものは確認できていない。しかしながら、前述のとおり池田浄瑠璃は 400 年前から続いてきたものとされている。その後、今日に至るまでに 2 度途絶えていることが確認できる。

1 度目は、太平洋戦争の激化に伴い、浄瑠璃が演じられなくなった際であり、2 度目は戦後すぐのテレビ、ラジオの登場による大衆娯楽の多様化によるものである。

その後、昭和 63 年に再興されるまで演じられていなかった。この昭和 63 年に再興したものが、平成 28 年まで続いていた。そして現在に至るのである。

2. 旧池田浄瑠璃

本節からは、戦前に 1 度途絶え、戦後すぐに演じられ再び途絶えた池田浄瑠璃を「旧池田浄瑠璃」、昭和 63 年から再興したものを「新池田浄瑠璃」とカテゴライズし、その形態等を述べていく。以下の情報は、池田浄瑠璃保存会会長の高嶋清光氏と中西友幸氏からの聴き取り及び、資料『池田の浄瑠璃について』によるものである。

2-1. いつどこで演じられたか

昭和以前の池田浄瑠璃は主に 9 月 16 日に行われていた秋祭りの際に演じられていたようである。その際に会場として使用されたのは集落の中でもとりわけ大きい家とされる、中西家、丸山家、村上家、であった。『池田の浄瑠璃について』においてこの会場となった家は“宿”と記されている。

この会場は家ごとの持ち回り制であり、中西家、丸山家、村上家の順で会場として使用されたということである。

最盛期は昭和初期とされており、この頃には集落内にとどまらず、立山町の五百石にかつて存在した松山座という劇場や、現在の富山市に存在していた新富座での公演も行われた。その他にも、記念行事の余興としても行われていたという記述が同資料にある。

2-2. 舞台演出

前述のとおり、大きな家の家屋を用いて、その中で浄瑠璃は演じられた。その際、家の戸を取り払うことで、演じるのに十分な広い空間を作り出していたとのことである。客は

家の外からそれを楽しむといった形態である。

また、家屋からはみ出す形で花道が設けられていた。この花道は長い梯子の上に板を渡すことで作られていたという。

演者が身に付ける衣装は、現在の富山市にあった貸衣装屋から借り入れていたという。貸衣装屋は前述の新富座の隣にあり、そこから馬車で衣装・小道具が運ばれた。その際に、演者に化粧や着付けをする、現代でいうところのスタイリストも随伴したという。

通常の浄瑠璃には三味線による囃子が伴うのが一般的である。しかし、池田浄瑠璃においては伴奏楽器が古くから存在していなかった。そもそも三味線の演奏ができる人間が集落にいなかったことが要因のようである。

しかし、全く伴奏が存在していなかったわけではない。かわりに太鼓や拍子木で拍子をとっていた。その拍子は拍子木が用いられていた他、床や戸の裏といった家屋の一部を手で叩くことで音を出すこともあった。

2-3. 演者・台本

浄瑠璃を演じたのは村の青年が主であった。人数は 20 人ほどであったようであり、初期のものは男のみで演じられていたようである。しかしながら、婦人会の女性のみで演じられる浄瑠璃もあった他、昭和 12～13 年の時点では演者に男女が混ざって演じられている。10 歳手前の年齢から浄瑠璃への参加の声がかかっていたようである。また、女性の登場人物であっても配役を男性の演者が務めることもあったという。

浄瑠璃の稽古は盆を過ぎたあたりから毎晩行われていたという。稽古の会場となっていたのも、先述の三家であった。戦前に使われていた台本は、以下の写真 2,3 のようなものである。



写真 2. 阿波の鳴門台本の原本表紙（左）



写真 3. 台本の内容（下）



写真 4. 台本巻末

この台本は巻末の右ページの印刷（写真 4）から、明治の末に発行された、活版印刷の書物であることがわかる。書かれている内容は、この台本の出版社が出している他の台本の目録である。

また、左のページには覚え書があり、“富山県中新川郡上段村 大字池田 中西嘉一”と記されている。それ以降の文字については一部判読できないが、この台本が大正 7 年 8 月 15 日に購入されたものであり、当時 28 銭であったことが読み取れる。この中西嘉一という人物については以降の節で述べる。

このような台本の数を決して多くはなかったようである。また、このような台本は変体仮名で書かれていることもあり、当時でも一般の村民には読むことができなかったという。この変体仮名は、異体仮名とも呼ばれ、明治 33 年の小学校令施行規則改正にあたって、学校教育で用いられなくなった平仮名である。

このような台本とは別に、浄瑠璃を演じる集落の住民はそれぞれが独自の台本を所持していた。

以下、筆者が撮影したそれらの台本である。

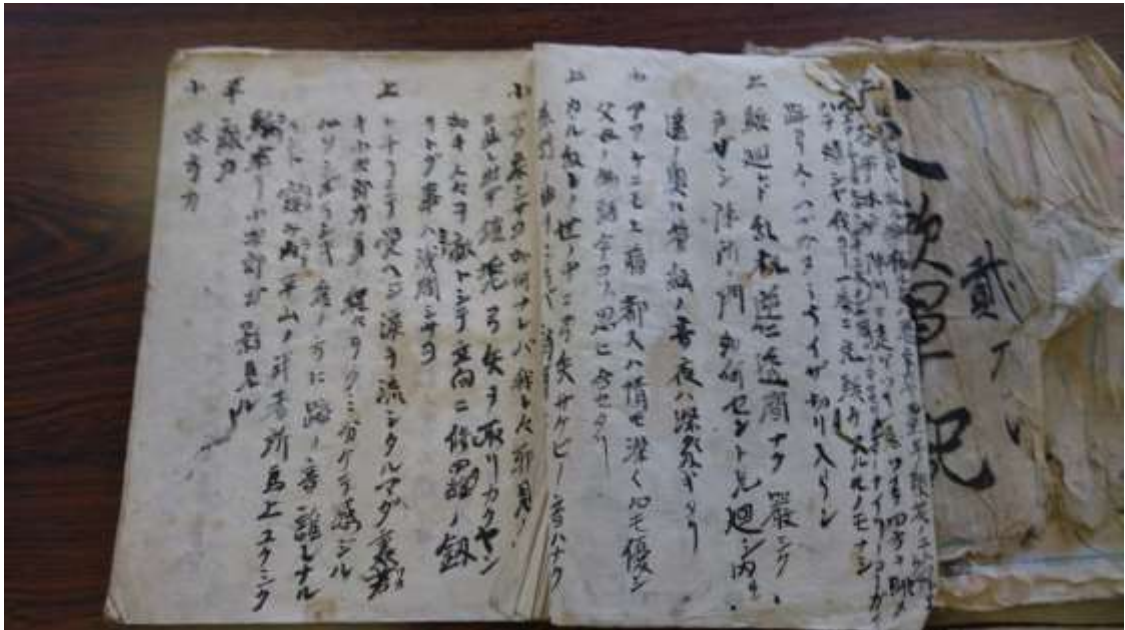


写真 5. 一谷嫩軍記写し
台本内容 (上)



写真 6. 同じ演目の別写し
台本表紙 (左)

これらの台本は浄瑠璃の演技指導をしていた村民によって、一般の村民でも読めるように書き直された台本を写本したものである。浄瑠璃を演じた村民は各人で紙に書き写し、自分の台本としていたとのことである。また、原本の内容をそのまま全部書き写したわけではなく、自分の配役の台詞や関連する場面といった部分のみを写していたという。

これらの台本は、原本の台本と併せて、約 16 冊が現在新瀬戸地区にある新瀬戸小学校⁹⁰に保管されている。頻繁に使用された古い書物ということもあり、表紙の欠落や傷みが激しいものがほとんどである。

2-4. 演目

浄瑠璃の脚本はいくつもの段から成っている。池田浄瑠璃では一つの作品の段をすべて演じるのではなく、一つの作品の中から二つ程度の段を演じていたようである。先述の当時販売されていた台本も段ごとで製本されていたようである。

以下、現在確認することができる池田浄瑠璃の演目と演じられた段とその作者である。

これらの作品はどれも 17

世紀頃、元禄文化が栄えた時代に作られたものや、その時代の作品を源流としたものであり、上方で町人達に親しまれていたものである。浄瑠璃だけでなく、人形浄瑠璃や歌舞伎としても演じられている。中でも、

表 1. 主な演目

作品名	作者	演じられた段
イチノタコタダンキ 『一谷嫩軍記』	並木宗輔	二段
オオミゲンジセンジンヤカタ 『近江源氏先陣館』	近松半二、他	九段
ケイセイアワノナルト 『傾城阿波鳴門』	近松半二、他	巡礼歌の段
エホンタイコウキ 『絵本太功記』	近松柳、他	十段
カ ナ テホンチュウシングラ 『仮名手本忠臣蔵』	二代目竹田出雲、他	五段・九段

『一谷嫩軍記』と『近江源氏先陣館』は“義太夫節”と呼ばれる作品群の一つである。

次に一部作品の概要を述べていく。

・『一谷嫩軍記』

平家物語になどの軍記物にみられる、平敦盛と熊谷直実、平忠度と岡部六弥太らの話を脚色し、平家方に寄せる源義経の温情と、それを汲み取った直実、六弥太の苦衷を描く作品。今日では歌舞伎の主要演目となっている。宝暦 1（1751）年大阪豊竹座初演。

・『傾城阿波鳴門』

徳島藩 10 代藩主蜂須賀重喜をモデルとした玉木家と玉木家お家騒動の解決に奔走する阿波の十郎兵衛、お弓夫妻を中心に描かれた作品。巡礼歌の段では顔も知らない母を訪ねて来たお鶴が、誤って父に殺される話である。明和 5（1768）年大阪竹本座初演。近松門左衛門の同名の歌舞伎狂言の改作といわれている。

⁹⁰ 新瀬戸地内に所在する公立小学校。児童数の減少に伴い、平成 28 年 4 月より休校。

池田での公演では、一つの公演につき、これらの演目から 3～4 つが選ばれて演じられていたとのことである。また、浄瑠璃を演じていた村民には、いわゆる“持ち役”があり、一つの作品の一つの役を専任で務めることもあったという。

2-5. 中西家

中西家は池田城主の家臣を先祖に持つ家柄とされており、政務を担当する役職である奉行役に就いていたという。近代においても村会議員を務めるなど、池田集落における重要な政治的役職を務めていた。そのような家柄ということもあり、池田城に伝わる古文書、文物の他に、池田浄瑠璃に関する品も保管・管理をしていたようだが、昭和 38 年（1963）10 月 1 日に家屋が火災に遭い、そのほとんどが焼失しているという。

資料によると、近代の池田浄瑠璃において、中西家の分家にあたる中西家の二代目である、中西嘉一氏（1887-1970）が池田浄瑠璃に大きく関わり、演じられるにあたっての大きな役割を果たしていたようである。池田で同氏は前述の台本を購入した人物であるだけでなく、村民が使った写本台本の原本を制作した人物でもある。その他に、演技の指導も行っていたようであり、同氏無しには浄瑠璃の公演ができなかったと言える。また、同氏は村議会議員を務めるなど、亡くなるまで村の世話役としても積極的に活動していたようである。

3. 衰退と再興

3-1. 池田浄瑠璃の衰退

村の一大エンターテイメントとして栄えていた池田浄瑠璃であったが、昭和 12 年（1937）ごろから、太平洋戦争の激化に伴って次第に興行がされなくなっていく。

その後、終戦からすぐの昭和 20 年（1945）に、“オオミヤ”と呼ばれる池田にあった神社の再建の際に演じられていた記録が残っている。碑には神明社とある。その際の花代名簿が現存しており、かつて池田に住んでいた人々からも寄付金が集められており、総額 5495 円との記載がある。これは現在の価値にすると約 500 万円になる。この寄付金が公演のために使用されたようである。

資料には中西嘉一氏の晩年まで時々公演されていたとの記述があるが、昭和 21 年



写真 7. 写真 8. 池田に残るオオミヤ

(1946)にあった公演が戦後すぐの旧池田浄瑠璃において現在の人々の記憶に残る最後の公演である。ラジオやテレビといった娯楽の登場と大衆への普及が始まったこともあり、その後、昭和 62 年（1987）に再興するまでの約 40 年間、大々的に演じられることはなかった。

3-2. 池田浄瑠璃の再興

池田浄瑠璃は昭和 62 年に再び多くの観衆の前で演じられることとなる。同年 12 月 14 日に行われた新瀬戸小学校の新校舎及び、新体育館の竣工式の余興として演じられた。

再興することとなったきっかけは同小学校の校長に着任した、堀源郎氏の働きかけによるものである。同氏が着任した際に、池田浄瑠璃の存在を知り、当時消えかけていた池田浄瑠璃をそのままにしておくには惜しいと声を上げたとのことである。

また、当時立山町教育員会が地域の伝統文化の保護を行う事業を行っており、池田浄瑠璃は申請によって金銭的な援助が受けられたこともきっかけとなっているとのことであった。

3-3. 池田浄瑠璃保存会の結成

池田浄瑠璃の再演にあたって、池田浄瑠璃文化財保存会が結成されている。この会は昭和 62 年の公演に際して結成された文化財保存会準備委員会を前身としている。同会の初期役員名簿を見ると、役員は池田の住人の他に、他の地域に住んでいるが、かつて池田に在住していた人々で主に組織されている。また、新瀬戸小学校の校長・教頭も役員として名前を連ねている。

初代会長である大畑利隆氏は、当時の新瀬戸地区において熱心な文化財の研究・保護活動を行っていた人物であり、住民からの人望も篤かったこともあり、保存会会長に就いたとのことである。現在同会長は当時副会長であった、高嶋清光氏が務めている。

3-4. 再演・台本

新瀬戸小の竣工式の際に上演された浄瑠璃の演目は、『仮名手本忠臣蔵・五段目』と『傾城阿波の鳴門・巡礼の段』の二つであった。主な演者は、加藤四佐光氏、高嶋作次郎氏、高嶋清光氏と小学生 4 名であったという記録が残っている。

この時の台本は、戦前のものをそのまま使用せず、戦前台本を改めて解読し、それを元に少し改変された新しい台本が使用された。新瀬戸小学校が制作した記録には、昭和 62 年（1987）に元となった台本が発見されたとの記述が見られる。この台本は再興を計画した際に、台本を保管していた村上家から提供されたものである。戦後も台本などの浄瑠璃に関する資料を保管していたのは中西家であったが、池田に在住する中西家の人数が減り、保存・管理することが難しくなったことから、当時池田にまだ住んでおり、戦前に浄瑠璃に関わりがあった村上家に管理が委任された。このような経緯で台本が村上家で保管され

ており、再興の際には提供されたのである。

この台本の解説を担当したのは当時、富山大学の教員であった畠山良平氏であった。台本の内容が原本から改変された理由としては、演者に小学生が混じっていたことから、登場人物が死亡するなどといった暴力的な場面が相応しくないとされたからであったとのことである。

この再興から平成 28 年（2016）まで毎年新瀬戸小学校とその児童を中心として演じられていくこととなる。

4. 新池田浄瑠璃

この節では再興した池田浄瑠璃を「新池田浄瑠璃」とし、旧池田浄瑠璃からの変容や新たな特徴について述べていく。

4-1. 舞台・演者

前述のとおり、旧池田浄瑠璃は池田集落だけで演じられていたため、演者は池田の村民のみであり、前述のように村の青年が主な演者であった。また、秋祭りや大きな祝い事が主な公演の場であった。再興後に、演じられる拠点が新瀬戸小学校に移行したことで大きな変容が見られる。

まず、演じられた場であるが、毎年 11 月に行われた学習発表会が主に演じられた場であった。その他には新瀬戸地区の近隣にある老人ホームで慰問として演じられることも多かったようである。学習発表会で演じられる際には、体育館の壇上を舞台としている。

演じていたのは新瀬戸小学校の児童のみである。再興時の初演では大人も同じ舞台上に立っていたが、同年に行われた学習発表会では児童のみで演じられているようである。最初期は六年生の児童のみで演じられていた。児童の数が少なくなると 5、6 年生が合同で演じるようになり、新瀬戸小学校が休校する直前の平成 27 年（2015）では全校児童で演じられた。その翌年に有志で演じられた際には小学生だけでなく、かつて新瀬戸小学校で演じた経験のある中学生、高校生も演じている。

4-2. 演目・台本

新瀬戸小学校の再興してからの各年の演目を記した文書によると、昭和 62 年（1987）から平成 27 年（2015）まで演じられた演目は次のようになっている（表 2）。

表 2. 各年の演目

年度	演目1	演目2	演目3
昭和62年	仮名手本忠臣蔵・五段目	傾城阿波の鳴門・巡礼の段	
昭和63年	仮名手本忠臣蔵・五段目	傾城阿波の鳴門・巡礼の段	絵本太功記・尼ヶ崎の段
平成元年	仮名手本忠臣蔵・五段目	傾城阿波の鳴門・巡礼の段	
平成2年	絵本太功記・尼ヶ崎の段		
平成3年	傾城阿波の鳴門・巡礼の段		
平成4年	仮名手本忠臣蔵・九段目		
平成5年	傾城阿波の鳴門・巡礼の段		
平成6年	傾城阿波の鳴門・巡礼の段		
平成7年	玄海婆物語		
平成8年	傾城阿波の鳴門・八段目	傾城阿波の鳴門・巡礼の段	
平成9年	絵本太功記・尼ヶ崎の段		
平成10年	仮名手本忠臣蔵・九段目		
平成11年	絵本太功記・尼ヶ崎の段		
平成12年	手作り浄瑠璃		
平成13年	傾城阿波の鳴門・巡礼の段		
平成14年	仮名手本忠臣蔵・九段目		
平成15年	絵本太功記・尼ヶ崎の段		
平成16年	傾城阿波の鳴門・巡礼の段		
平成17年	玄海婆物語		
平成18年	傾城阿波の鳴門・巡礼の段		
平成19年	絵本太功記・尼ヶ崎の段		
平成20年	仮名手本忠臣蔵・九段目		
平成21年	傾城阿波の鳴門・巡礼の段		
平成22年	傾城阿波の鳴門・親子愛感動の段		
平成23年	仮名手本忠臣蔵・五段目		
平成24年	傾城阿波の鳴門・巡礼お鶴親子愛		
平成25年	傾城阿波の鳴門巡礼お鶴 前編		
平成26年	傾城阿波の鳴門巡礼お鶴 後編		
平成27年	傾城阿波の鳴門巡礼お鶴	仮名手本忠臣蔵・五段目	

(新瀬戸小学校文書より作成)

演目は旧池田浄瑠璃でも演じられていたものとほぼ一致している。この中に、旧池田浄瑠璃に見られなかった演目として『玄海婆物語』がある。この演目は、立山に伝わる『言海婆』の伝説を脚色し、堀源郎校長によって新たに作られたものである。以下、この伝説の概要である。

時代設定は天正年間(1573-1593)、上杉氏が池田城を攻略しようとした時のことである。上末に住んでいた池田城主の家臣である“言海婆”には息子がおり、息子は夜明けの太鼓打ちが役目であった。その息子が朝に太鼓を鳴らすのを忘れたことで、城主の怒りを買ってしまう。その結果、息子は油を飲まされ殺されてしまうのであった。それを恨んだ言海婆は城主への復讐のため、上杉氏と内通し間道(抜け道)を密告し、池田城は上杉氏に攻め落とされることとなった。その後、不忠の臣として言海婆は処刑されてしまう。

このような、池田や池田城に関わりある伝説を新たな浄瑠璃の演目として加えたのであった。しかし、古くからあった既存の演目の方が好評を博したようである。

4-3. 舞台美術・演出

写真は平成 28 年（2016）に池田浄瑠璃が演じられた際に撮られた写真である。演者が身に着けた衣装は、市販のものが使用されているが、個人製作されたものも使用されているという。製作は後述する小俣笑子氏によるものである。同氏は平成 19 年（2007）頃から浄瑠璃の演技指導も行っている。



写真 9. 平成 28 年池田浄瑠璃（新瀬戸公民館提供）

この他、舞台上で使用される小道具は、ほとんどが市販のものを使用しているように見られる。旧池田浄瑠璃では小道具・衣装などは業者に借りていたが、新池田浄瑠璃では新瀬戸小学校としてそれらを所持・保管していたようである。現在でもこれらは新瀬戸小学校に保管されている。以下、筆者が撮影した衣装・舞台道具の一部である。



写真 10. 小道具（物入）



写真 11. 小道具（鉞）



写真 12. 小道具（傘）



写真 13. 小道具（模造刀）



写真 14. 舞台衣装

旧池田浄瑠璃では、楽器の使用は殆どなく、拍子木や太鼓で節を打っていた。新池田浄瑠璃も同様であり、楽器の使用は拍子木程度であった。しかし、平成6年度（1994）の浄瑠璃保存会の計画書の中には三味線の項目があり、楽器の導入も検討されていたようである。三味線が高額であったこともあり、導入は断念されたとのことであった。

4-4. 継承

池田浄瑠璃の稽古は学校行事の一環として行われており、総合的な学習の時間が練習に充てられるなどしていた。児童には夏休みに入る前に台本が渡され、夏休みが明ける9月から本格的な稽古に入ったという。基本的な演技や役の割り振りなどは小学校の教諭が担当していたが、池田出身の浄瑠璃に関わった人々も演技の指導を行っている。

当初の新池田浄瑠璃の指導は、戦前戦後共に池田浄瑠璃について関りがあった中西千鶴氏によって行われていた。中西千鶴氏の義理の母親にあたる中西キクエ氏は戦前に浄瑠璃に直接参加しており、千鶴氏自身も浄瑠璃の世話を行っていた。平成19年（2007）頃からは体調不良を理由に、指導は小俣笑子氏が行っていた。小俣氏は幼少期に実際に池田浄瑠璃の公演を見ていた経験があり、そのことから、現保存会会長の高嶋氏からの要請で指導を行っていた。小俣氏は新瀬戸公民館で詩吟と剣詩舞の講師としても活動している。

その他小俣氏は、浄瑠璃を演じていた中西友幸氏と演技指導における参考意見を仰いでいたという。

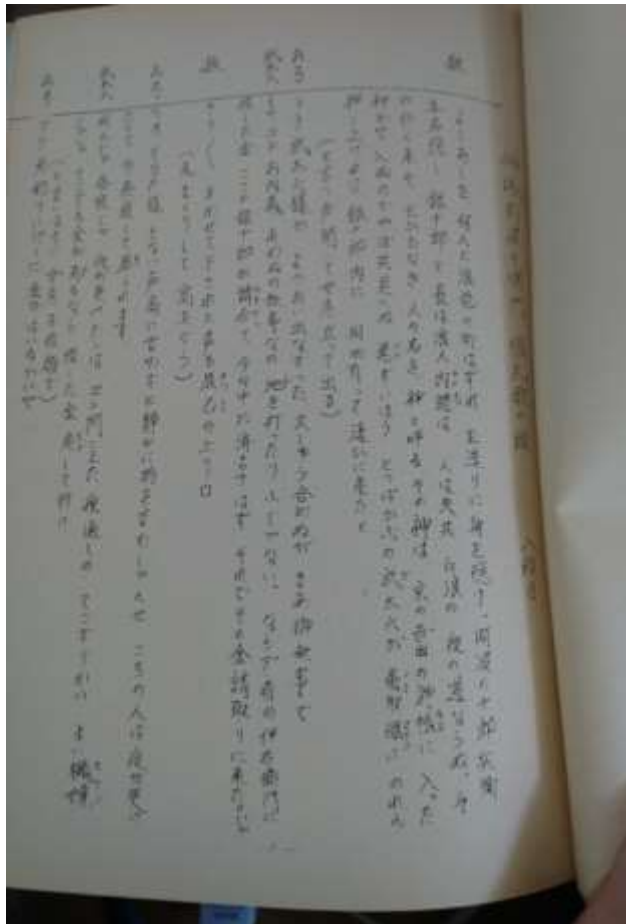


写真 15. 児童が使用した台本表紙 (右)

写真 16. 台本内容 (左)



4-5. 地域の楽しみとしての新池田浄瑠璃

新池田浄瑠璃は学校行事として行われていたが、学習発表会では、父兄の他、かつて池田浄瑠璃に関わっていた池田の住人が訪れ、観劇をすることも多かったようである。また冬季には、地域の養護老人ホームでも公演が行われている。演者も新瀬戸小学校の児童である。このように、旧池田浄瑠璃ではほとんど池田の中だけで完結していたが、再興した新池田浄瑠璃では、必ずしも池田にゆかりがある人間のものだけでは無くなっている。

演じる児童は、高学年が学習発表会で浄瑠璃を演じる姿を見て、自分たちも高学年になったら演じてみたいという意識を持っていたという。

5. 池田と池田浄瑠璃のこれから

平成28年度、上演の拠点としていた新瀬戸小学校が休校になりつつも、有志によって上演された池田浄瑠璃であるが、本稿を執筆している平成29年度は、様々な理由から演じる子供を集めることができなかったために上演を断念している。この背景には、新池田浄瑠璃は学校行事としての枠組みでのみ取り組んできた側面が強く、自主的に“やりたい”と

いう子供を集めることが、かなり難しいという事情がある。その結果、一地域の保存会だけによる文化財の維持が難しくなっているのが現状である。

しかしながら、浄瑠璃に関する会合がしばしば開かれているなど、積極的な活動が見られ、池田の住人、元住人の池田浄瑠璃を絶やしてはなるまいという意味と郷土愛は強く感じられることができる。現在、ほぼ無人に近い状態の池田が荒れ果ててはおらず、池田の神明社も整備が行き届いていることから、元集落の整備が定期的に行われていることがうかがえる。

おわりに

池田浄瑠璃は新旧ともに、池田、新瀬戸の住人にとってなくてはならない芸能であったことがうかがえる。しかし、その意味合いは、青年らによって演じられる、村民にとっての一大エンターテインメントであった過去から、小学生によって継承され、かつての池田を懐かしむだけでなく、伝統芸能として保存を推進するものへと変容している。

新池田浄瑠璃では、再興にあたって演者を新瀬戸小学校の児童のみにしてしまい、継承を小学校に依存してしまったことが、休校となった今では結果として、存続を困難にさせたと考えられる。

しかしながら、今まで 30 年間、新瀬戸小学校で浄瑠璃を演じた児童がいたという事実はある意味で貴重な財産となっているのではないだろうか。

これからさらに存続が難しくなるかもしれないが、その財産を有効活用することで、再び活発化できる道が拓かれることもあるのではないかと考える。

謝辞

本調査を進めるにあたって、ご協力していただきました全ての方々にお礼を申し上げます。新瀬戸公民館のみなさんをはじめ、貴重なお話してくださった、池田浄瑠璃保存会会長の高嶋さん、中西さん、小俣さんにはお忙しい中、快くご協力していただきました。

冒頭でも述べましたとおり、池田浄瑠璃のような芸能が立山町にあり大変驚きました。これが何らかの形で広く人々に知られていくことで、現状を打破し、永く池田浄瑠璃が受け継がれていくよう願っております。

参考文献

『立山町史』上巻・下巻・別冊 立山町

『ブリタニカ国際大百科事典』

『池田の浄瑠璃について』 池田浄瑠璃保存会編

地域に息づく工芸品 越中瀬戸焼について

福田 馨介

はじめに

立山町新瀬戸地区では越中瀬戸焼という陶芸品が造られている。その歴史は古く、430年前から加賀藩の保護を受けて発展してきた。その歴史の長さや越中瀬戸焼の陶芸家たちの集まり「かなくれ会」の活動に、私はフィールドワークを通じて次第に心惹かれていくようになり、調査を行くにあたった。

調査では4人の陶芸家の方々に製造過程や知名度向上についての活動について話をお聞きした。歴史については富山市民俗民芸村の学芸員である高木好美さんからお借りした『越中瀬戸焼四百年の変遷 須恵の里』の資料と陶芸家の方々からのお話を参考にした。

以上の調査をふまえて、本章では越中瀬戸焼の歴史、その作陶過程、かなくれ会の活動、現在抱えている問題について記述し、第2節では越中瀬戸焼の概要と歴史、第3節では製造過程を記述する。第4節ではかなくれ会の活動について記述し、第5節ではかなくれ会のリーダーでもある釋永さんからの話、第6節で考察しまとめていく。

1. 新瀬戸地区について

陶芸家たちの活動拠点である新瀬戸地区は立山町の中心市街地の五百石から南東に位置する地区である（図1）。山と田んぼに囲まれた自然豊かな土地で、この周辺では越中瀬戸焼の原料となる粘土質の土を豊富に採取することができる。また文化交流施設である陶農館もこの地区にあり、シンボリック的存在となっている。



図1. 国土地理院地図から筆者が加工

1-1. 陶農館について

陶農館とは瀬戸新に所在する越中瀬戸焼と農業の「陶農一体」の文化を発信することを、目的に建てられた施設である。陶農館では陶芸体験ができ、越中瀬戸焼の各窯元の作品が展示販売されている。また陶農館のスタッフによって製作されている箸置きや小皿の販売がされている。さらに、かなくれ会茶会や講演会といったイベント会場ともなっている。



写真 1. 陶農館



写真 2. 陶農館のうつわ

2. 越中瀬戸焼について

2-1. 越中瀬戸焼の概要

越中瀬戸焼とは立山町、新瀬戸地区で焼かれている焼き物である（写真 3）。約 430 年の歴史をもつこの焼き物の大きな特徴は全て手作業で造られているという点である。他の焼き物の産地でも手作業で行われているが、焼き物の産地と呼ばれている場所の多くは分業体制が取られている。例えば、粘土を採取し陶芸家たちに売る原料屋がいるし、作品を売る時には他の業者に頼むといった体制が取られている。

しかしこの新瀬戸地区の窯元たちはすべて自分たちの手で、越中瀬戸焼の 1 から 10 までを行っている。越中瀬戸焼の原料となる粘土は新瀬戸地区のあらゆる所で採れるので、窯元たちは自分の持っている土地から粘土を採取して作品を造る。全工程を自分 1 人で行うことに対して、窯元の 1 人である加藤聡明さんは、逆にこれが越中瀬戸焼の魅力で大量生産との差別化につながると話す。



写真 3. 越中瀬戸焼

2-2. 越中瀬戸焼の歴史⁹¹

越中瀬戸焼の歴史は大きく 4 つに分類することができる。以下の項では歴史にそってそれぞれ説明していく。

2-2-1. 越中瀬戸焼の成り立ち

8 世紀後半から 10 世紀にかけて現在の^{うわすえ ぼ ち こうえん}上末墓地公園（図 1）のあたりに「末の庄」と呼ばれる須恵器を焼く工人の村があった。末という文字は須恵・陶の当て字であり、焼き物の産地であった証拠でもある。近隣では須恵器の破片や窯跡が見つかっている。

この地域では須恵器を焼くのに適した木材や土、そして窯を造るのに適した斜面があったからだと考えられている。須恵器を焼く窯は穴窯と呼ばれ、斜面を掘って天井だけを取り付けたものがある。現在その窯跡は「^{うわすえ こう ちやう ちやう ぐん}上末古窯址群」として町の文化財に指定されている。

2-2-2. 加賀藩による保護と発展

16 世紀末に時代が移り変わると、当時加賀藩が尾張から陶工・小二郎を現在の瀬戸地区に呼び寄せ、製陶させた。安勝が近隣の住民にあてた書状が現在でも残っており、その内容は、小二郎に土を採らせて、他の者が土を採ってはいけないこと、小二郎の面倒は近隣の住民が良く見ることと書かれている。当時小二郎は加賀藩に向けて茶器を造っていたため、土を独占させていたのである。しかし、その腕前の良さを知った近隣の住民たちは、小二郎の作品を勝手に持っていくことがあったため、書状をさらに出して、勝手に持っていく者がいたら報告するよう小二郎に通達している。



写真 4. 陶公園内にある慰霊碑

小二郎の次に招かれたのが彦右エ門と孫市である。彼らも同様に加賀藩から手厚い保護を受けて越中瀬戸

焼のはじまりを支えた人物であった。彼らの功績は讃えられ、現在^{すえ}上末の陶公園には地元の有志たちによって造られた慰霊碑が建っている（写真 4）。

2-2-3. 越中瀬戸焼の発展

江戸時代に入ると瀬戸村が形成されてくる。この村が出来てから越中瀬戸焼と呼ばれるようになったと考えられる。小二郎の家や小二郎の後に呼び寄せられた彦右エ門や孫市の

⁹¹出典：『越中瀬戸焼四百年の変遷 須恵の里』

窯が出来ており、それを中心にして村が形成された。1665 年の小物成の取り決め⁹²を見ると、上瀬戸村・下瀬戸村・新瀬戸村に焼き物の税、すなわち瀬戸役がかかっている。この時代になると限られた技術を持った人のみが製陶していたのではなく、村全員が作陶に携わっていた。しかしこれらの村の人々が本業で瀬戸焼を焼いていた訳ではない。農業のかたわらで陶器を焼いていた。胴窯と呼ばれる、高さ 1.8 メートルの円筒型の石積みに、炉内を土で固めた簡単な窯を使用したので、簡単に製陶業を営むことができた。また陶器だけでなく、城の瓦も製造していた。その証拠に金沢城の瓦も越中瀬戸焼で造られたものであった。城の瓦となると大量に造らなければならないため、村全体でこの作業に当たったと考えられる。

窯元である加藤さんや、釋永さんの話からも、大正・昭和初期に越中瀬戸焼は隆盛を誇り、立山町のなかで納税額が 1 番多かったという。

2-2-4. 越中瀬戸焼の衰退

江戸時代後期になると越中瀬戸焼は徐々に衰退していく。理由は九谷焼の再興と磁器の流行である。九谷焼は 18 世紀初頭に一度廃窯するが、その 100 年後再興する。加賀藩はその再興九谷焼に力を入れ、1820 年には他国からの陶器輸入を禁止した。またほぼ同時期に、輸入に頼っていた磁器を、伊万里焼を中心として日本各地で生産することが可能になり、磁器の流行が起った。陶器を中心とした瀬戸地区の陶芸家たちはこの流行にのることができず、衰退する要因となった。

しかし完全に越中瀬戸焼が廃絶したわけではなく、日用雑器の生産や瓦産業に力を移していった。明治中ごろから昭和中ごろまで瓦の需要は高まっていたため、新瀬戸の人々は生活に困るわけではなかった。1953 年には瓦工場が 21 軒あったようでその需要の高さを窺いしれる。しかし瓦産業も新しい建築様式の流行や県外産品におされるようになり、1985 年頃になると、瓦工場は見られなくなってしまった。

2-2-5. 復興から現在まで

明治・大正時代は瓦産業に力を入れていた新瀬戸地区であったが、昭和になると越中瀬戸焼復興の動きが地元の人たちの間で高まり、地元の有志たちのもと、1930 年に越中瀬戸焼保存会が発足した。さらに県行政に働きかけて、補助費や越中瀬戸焼研究所 3 の設立など援助をもらっている。第二次世界大戦後の 1960 年には越中瀬戸焼保存顕彰会が発足し、



写真 5. 越中瀬戸焼保存顕彰碑

⁹²小物成とは、問屋、市場、製造業などの営業収益を対象とした税。当時どのくらい税を納めればよいのか決まっていた。『越中瀬戸焼四百年の変遷 須恵の里』に記述されている。

陶公園に記念碑が建立された（写真 5）。しかしいずれの保存会も釋永さんの祖父、庄二郎さんが亡くなると同時に自然消滅してしまい、今でも残っている団体はないという。

現在越中瀬戸焼の保存に努めている団体はかなくれ会のみである。かなくれ会については第 5 章で詳しく記述する。

3. 越中瀬戸焼の作陶

この節では越中瀬戸焼の素材や道具などに関して記述する。

3-1. 釉薬について

陶器は素焼きのままだと水分を吸収しやすい。それを防ぐために塗られる液体のことを釉薬という。釉薬を掛けることにより耐水性が増すだけでなく、光沢や色、模様をつけることができる。しかし釉薬は窯焚きの過程で科学反応を起こし、色や模様が変化する。したがって、思った通りの色や模様が必ずしもできるわけではない。しかし思い通りにいかないことを楽しむ陶芸家もあり、窯元の 1 人である加藤聡明さんも窯の焚き上がりを見るのが楽しみで、1 点でも自分が満足したものが出来上がれば上出来だと語っていた。

釉薬は木灰や藁灰によって作られる。越中瀬戸焼に用いられる釉薬は、全て立山町で採れたものが原料である。まさに立山産というにふさわしい。

3-2. 成型道具について

・とんぼ（写真 6）

とんぼとは、器を大量生産するときに繰り返し深さや口径を測らずに済むよう、竹で簡単に寸法揃えることのできる道具である。道具を見せて頂いた吉野香岳さんの工房には、吉野さんの祖父が実際に使っていたとんぼが何本も保存されており、昔から使われていた道具であることがわかる。越中瀬戸焼に限らず多くの焼き物で使用されている。

また成型段階ではまだ粘土には水分が含まれており、乾燥させるとすこし縮んでしまうため、乾燥後の大きさも考えられてとんぼは作られている。

・きごて（写真 7）

サクラなどの硬い木でできた焼き物の形を整えるための道具。器の中に入れてろくろでの成形に用いる。手作りの道具で、作品によって木ごての大きさは異なる。こちらの道具も越中瀬戸焼に限らず、他の焼き物にも使用されている。



写真 6. とんぼ



写真 7. 木ごて



目盛り棒

写真 8. 目盛り棒

・目盛り棒（写真 8）

木の棒に目盛りのように溝が掘ってあるのが目盛り棒である。この道具は土を均等に切るための道具である。粘土の横に平行に棒を 2 本立てて棒の横に糸をかけて、粘土をスライスするように切る道具である。

・ろくろ

現在使われている一般的なろくろは電動ろくろ（写真 9）である。電動ろくろの良い点はずっと同じ力でろくろが回り、効率的に大量の物を造ることができる。

またろくろでの成型時に土の削りカスがでてくる。この削りカスも集められて粘土として再利用される。



写真 9. 電動ろくろと削りカス

・薪と窯

越中瀬戸焼の特徴の 1 つとして挙げられるのが薪による窯焚きである。薪による窯焚きは温度がすぐに上がるわけではない。温度の状態を見ながら最終的に 1300℃まで温度を上げなければならないので、朝 4 時から窯焚きが行われる。ここでは窯についての概要を記述するにとどめる。次の節で 2017 年 10 月 21 日に陶農館で行われた窯焚きについて具体的に記述する。使用される薪はアカマツである。なぜアカマツが使用されるのかというと、アカマツは樹脂を多く含み、火の付きやすさと燃焼速度が他の奥にたまった燐は少量ならば窯の保温に役立つが、大量に出てしまうと窯の温度を下げてしまう。なぜアカマツが使用されるかというと、アカマツは樹脂を多く含み、火の付きやすさと燃焼速度が他の樹木と比べて優れているからである。また燐⁹³が少ないことも使用される理由である。窯の奥にたまった燐は少量ならば窯の保温に役立つが、大量に出てしまうと窯の温度を下げてしまう。

窯の大きさによって消費される薪の量はことなるが、陶農館の登窯では約 3 t の薪を 1 回で使用するという。

現在の立山カントリークラブ⁹⁴の周辺に昔はアカマツが豊富に自生しており、そこから採取できたという。さらにマツタケも自生していたようで、アカマツと一緒にマツタケも取っていたそうだ。現在は山の手入れをした時に伐採したものや農林試験場などからアカマツをもらっている。アカマツはそのままでは水分を含んでいるため、薪としてすぐ使用すると良く燃えない。そのため、窯焚きの 1 年前からアカマツの切り株を外にだして乾燥させておく（写真 10）。

そうして十分乾燥した切り株を適度な大きさに割って薪として使用するのだ（写真 11）。電気窯や油窯は時間もかからず場所も取らないので最近では多くの陶芸家たちが使用するようになったが、しかし薪窯で焼かれた作品は薪の灰を被ることで化学反応が起こり、いわゆる自然釉の模様を楽しむことができる。

⁹³薪が燃えた結果、炭になったもの。

⁹⁴立山町上末字三坪 1 番地に所在するゴルフ場。1975 年に開場された。

このように広い土地や人手や時間、資材が薪窯では必要になるが、その土地のものを使得焼き上げ、自然の恵みに感謝することが薪窯の魅力とも言える。



写真 10. 乾燥させているアカマツ



写真 11. 薪

3-3. 陶農館での窯焚き

陶農館では登窯（写真 12）での窯焚きを年 1 度おこなっている。1997 年に建てられたこの窯には約 500 点の作品を入れることができるそうだ。作品のほとんどは陶農館で陶芸を習っている方たちの作品であるが、登窯で作品を焼いて欲しいという方への一般募集もしている。

2017 年の窯焚きは 10 月 20 日から 21 日に行われた。20 日は湿気を抜くために窯を焚く。湿気抜きの際は徐々に温度を上げていく。いきなり窯の中の温度を上げると窯が傷んでしまうからだ。そして 21 日から 1300℃を目標に温度を上げ始める。

窯焚きを見に来る人たちのほとんどは陶農館で陶芸を習っている人たちである。当日は 30 名ほどが陶農館に来ていた。未来の窯元ということもあって薪を入れるのは研修生が主であったが、他の人の役割は具体的に決まっているようではなく、積極的に窯焚きに関わりたい人が手伝いをしているようであった。

加藤聡明さんは窯焚きが陶農館の年 1 度の祭りのようなものとおっしゃっていた。陶農館での窯焚きは作品の完成を心待ちにするだけではなく、他の陶芸家や陶芸を趣味とする人たちとの交流を深める場でもある。



写真 12. 陶農館の登窯

4. かなくれ会

本節では新瀬戸にある陶農館を活動拠点とするかなくれ会について紹介する。

4-1. かなくれ会の概要

かなくれ会とは 2011 年に結成された越中瀬戸焼の窯元たちの集まりである。結成のきっかけは埴安社（図 1）の例祭のため窯元が集まった草刈であった。図 1 で示した陶公園とは上末にある公園である。その公園には第 1 節で示した陶魂不滅の文字が刻まれた記念碑や慰霊碑が建てられている。その陶公園の頂上に土の神様を祀った埴安社があり、毎年秋に作陶中の安全を祈願するための例祭が行われている。越中瀬戸焼の窯元たちは定期的に埴安社の掃除をするために集まり、そのあと食事会を開いていた。そうしたあるとき釋永由紀夫さんが、越中瀬戸焼の窯元たちで集まって何かをしようと言ったのがかなくれ会の始まりである。会の名前である「かなくれ」とは窯で焼いたときに失敗してしまった陶器の破片を指す言葉である。元々は「かまくれ」といったそうだが徐々にそれが訛っていき、「かなくれ」と言うと言われる。

現在のかなくれ会のメンバーは 5 人である。このことについて釋永由紀夫さんは人数が少なく誰がリーダー役というのも決まっている訳でもないので物事がスムーズに決定すると語る。またメンバー全員で越中瀬戸焼に対する思いが決まっているのも、かなくれ会がうまく活動できている要因であると語っていた。

4-2. かなくれ会の活動

かなくれ会が結成されて初めて行われたのが結成された年に開催された合同の展覧会である。1 週間で 1200 人もの人が陶農館に集まるほどの大盛況だったという。かなくれ会は展覧会以外にもお茶会、講演会やシンポジウムを開催するなど精力的に活動している。例えば、かなくれ茶会はかなくれ会が結成された当初から毎年行われている。毎回予約がいっぱいになるほど好評を博している。また窯元たちと陶芸について話をする貴重な場となっている。

また陶芸という芸術の分野を越えた、暮らしについてのシンポジウムも開催されている。2013 年 2 月 3 日に、かなくれ食堂が開催された。これはかなくれ会と AnT という富山の建築家の会のメンバーとともに食事しながら、冬の立山の暮らしについて話すというものであった。また 2017 年 6 月 18 日に開催され、私自身も参加した。「立山町の伝統工芸・地域活性化講演会」には約 80 名の参加者が集まり、地域資源をどう観光に活かしていくのか、衰退しつつある伝統工芸品の問題点を窯元たちと、蛭谷和紙の製作者である川原隆邦さん、日本陶磁協会常任理事の森孝一さんとで話し合われた。

これらの活動は富山県や立山町に協力を仰ぎながらもかなくれ会が自主的に企画、運営を行っているものである。人数が少ないと企画がうまく成立しないと思われがちであるが、

それを強みと考える運営していることが今までの活動がうまくいっている要因の 1 つとして挙げられるのではないだろうか。



写真 13. かなくれ食堂のポスター



写真 14. 伝統工芸・地域活性化講演会ポスター

5. 釋永由紀夫さんからの話

釋永由紀夫さんは 1954 年生まれで、上末に工房をかまえている。かなくれ会の中でも年長者であり、かなくれ会のリーダー的存在である。幼い時から祖父の窯で遊んでいて、土と窯が身近にあった生活をしていた。由紀夫さんの祖父、庄次郎さんは越中瀬戸焼の復興に力を入れていた人物であり、越中瀬戸焼保存会の中心メンバーであったという。その保存会には当時の富山県知事も名を連ねていて、1950 年に県知事の命名のもとに庄楽窯^{しょうらくかま}を造った。庄楽窯とは庄次郎さんが楽しむ窯という意味で名付けられたそうだ。由紀夫さんはその後庄次郎さんの後を継ぎ、作陶活動が続けている。由紀夫さんの人脈の広さの例としてスティーブ・ジョブズ⁹⁵氏との交流が挙げられる。

1996 年に由紀夫さんが京都で個展を開いた際に、京都を旅行中のジョブズ氏が立ち寄り、作品を何点か購入していった。さらに 1 週間の開催期間のなか何回か個展に足を運び、個展が終わったあとにも注文を受けるといった交流が続いた。

⁹⁵ アメリカ合衆国出身の実業家。アップル社の共同設立者である人物。2000 年にアップル社の最高経営責任者になると iPhone や iPad を生み出した。



写真 15. 釋永さんの作品



写真 16. 釋永さんの作品

(柿傳ギャラリーホームページより)

越中瀬戸焼に対する思い

自分の焼く焼き物の個性を魅力として顧客に発信していかなければ、この世界では生き残れないという。また、全て作り手が材料を選んで、1つ1つ作っているということをむしろ強みにしていきたいという。

6. 考察とまとめ

現在多くの伝統工芸品が廃絶の危機に瀕しているが、越中瀬戸焼はそこまで深刻な後継者不足というわけではなさそうである。かなくれ会の最年少のメンバーには北村さんという比較的若い窯元もあり、また現在研修生として2人の女性も陶農館で働きながら、越中瀬戸焼を学んでいる。

研修生の1人である山田智子さんは千葉県出身である。山田さんは京都で焼き物の修行を経たあと、都内で陶芸の助手をしていたところ立山町の研修生募集を知り、移住してきたという。現在は陶農館の職員として働きつつ作陶をしており、いずれかは越中瀬戸焼の窯元として活動していきたいと語っていた。

最初は小二郎という1人の陶工から始まった越中瀬戸焼は、加賀藩の保護を失い衰退しながらも地元の有志によって再興し、430年という歴史を経て富山県を代表する焼き物になった。

普通は長い歴史を重ねると楽な方へ流れたり、売れる方へ流れたりするが、越中瀬戸焼は地元で採れた原材料を使い、1つ1つの作品を手作業で造っていくことにこだわっている。越中瀬戸焼は地元で採れたもので、手作業で造られるからこそ越中瀬戸焼であると語られているように窯元たちのこだわりと情熱が1つの1つの作品に込められている。

しかし越中瀬戸焼の歴史の深さや小二郎の意志を継ぐかなくれ会の活動は残念ながらまだあまり知られていない。この焼き物を後世まで受け継いでいくにはかなくれ会の活動が

非常に重要になっていく。

かなくれ会は結成以来 6 年たち年々進化しつづけている。焼き物だけではなく、地域活性化や新瀬戸の暮らしなど、このような陶芸の枠を超えたテーマでイベントを開催している。新瀬戸で生活し愛する人たちだからこそ、越中瀬戸焼の発展だけではなく、地元のことを考えた活動ができるのではないだろうか。

謝辞

今回調査を行うにあたって、越中瀬戸焼の窯元の方々には大変お世話になりました。何度もお忙しいところへお邪魔させて頂いた陶農館の皆様をはじめ窯焚きの際にお話を聞かせていただいた地元の皆さま。快く資料をお貸しくださった学芸員の高木好美様。そしてお忙しいところお時間を割いて私の質問や話に対して丁寧に答えてくださった釋永由紀夫様。加藤聡明様。吉野香岳様。皆さまのご協力なしではこの報告書を書き上げることはできませんでした。改めて感謝申し上げます。

参考文献

越中瀬戸焼発祥四百年記念顕彰会実行委員会 『越中瀬戸焼四百年の変遷 須恵の里』
1988 年

参考にしたウェブサイト

「柿傳ギャラリーホームページ」

(<http://www.kakiden.com/gallery/archives/21808/> 2017 年 12 月 24 日閲覧)

第2部 人々の営み

五百石中央商店街の変遷と現状から見える地域交流

山浦 裕稀

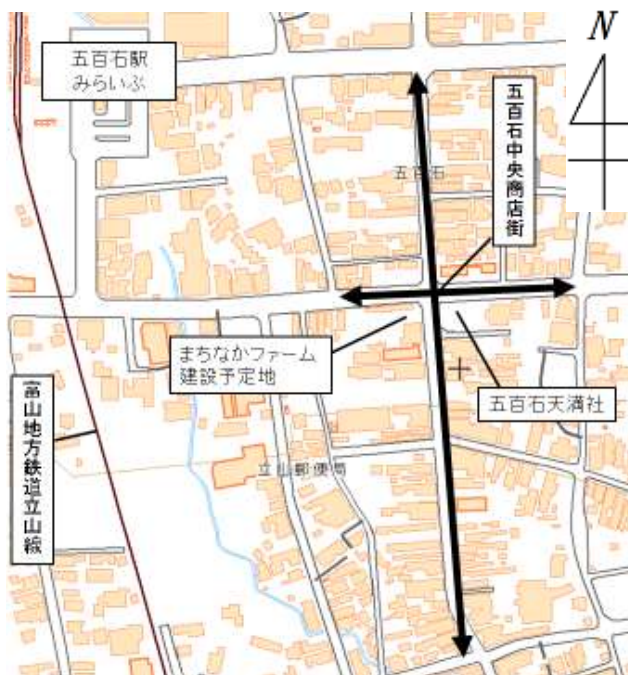
はじめに

私は初めて五百石中央商店街（地図1）を訪れたとき、全国的にみられる商店街とは違い、商店全体を覆うような大きなアーケードがなく、民家の間に商店が点在し、商店と民家が一体となっている様子に興味を持った。商店街の方にお話を伺いに行くと、お仕事中にも関わらず快く招き入れてくださり、多くの方から色々なお話をお聞きすることができた。商店街の方々は、かつての五百石中央商店街は現在からは想像がつかないほど、多くの商店で賑わっていたと語った。また、五百石は開拓されてから年月が比較的浅い町ということが分かった。商店街の方々の温かさに親しみを覚えるとともに、なぜ五百石中央商店街が急速な発展と衰退を遂げたのか疑問に思い、今回調査を行うことに決めた。

調査では、五百石中央商店街で商売をしている方や地域住民を対象に聞き取りを実施するとともに、五百石で行われているお祭りも見学した。以下ではそれらを報告し、今昔の比較によって見えてきた地域交流についてまとめていく。



写真1. 現在の五百石中央商店街（上手⁹⁶）



地図1. 五百石中央商店街の位置

⁹⁶ 五百石を二分割した時の呼び名。五百石天満社を境に北側を下手、南側を上手という。常願寺川の下流が北、上流が南にあることが由来である。

1. 五百石の歴史⁹⁷

1-1. 五百石（旧松本開）の起こり

江戸時代の末ごろになっても高原野には未開拓の土地が存在したが、ことに常願寺川がつくった扇状地で馬背状⁹⁸の微高地には、松林が一面に広がり住む人もいない原野が存在した。延徳 3（1491）年 3 月、北方の野口新の一角に高原野の最初の地が開かれると、これを皮切りに徐々に入居する者が増えてきた。この頃には常願寺川周辺の大森、利田あたりから寺田にかけては、すでに豊かな水田が一面に続いていた。

文化 11（1814）年、加賀藩政のもと新田畑の開発が推奨されると、当時町を治めていた新堀村の十村役⁹⁹の朽木兵左衛門は、加賀藩主に申し出て高原野に残る最後の地の開拓をスタートさせた。まず兵左衛門は近くの農民に入植を勧奨した。文政 3（1820）年、高原野の開拓に加わっていた甚七^{じんしち}と権蔵^{ごんざう}の両者が発起してお宮を建て、菅原天神を祀った。これが現在の五百石天満社（天満宮）である。そして兵左衛門は新堀天満宮のご分霊を勧請して村の鎮守とし、自らはその前に隠宅を構え、息子の兵三郎と協力して開拓の指揮を執った。しかし、治水技術の未熟さから、急流の常願寺川の氾濫をとめることができず、氾濫の度に田畑が水につかってだめになってしまい、開拓は遅れていた。

天保 7（1836）年 11 月、かねてからの願いであった町建が藩から許可された。兵左衛門は松林を切り開いたので高原野の中心を「松本開」と名付けた。また、この地は草高が「五百石」であったことから、松本開はのちに五百石と呼ばれることになる。地下水は不足していなかったものの、用水路を作るような灌漑水には恵まれず、地面も肥えていなかったもので、開拓の最初の入居者は何を植えても成功しなかった。そのため、松本開に移住して来た人は苦しい生活を強いられた。そうした中、天保 8（1837）年 5 月 2 日、松本開において商売が許可された。すると松本開は市場として発展していき、農業のかたわら商売をする人が増えていった。天保 9（1838）年の『新川郡高原野組八拾貳ヶ村並に松本開戸口等』によると、この頃の松本開の戸数は 57 軒で、男性が 109 人、女性が 78 人であった。

安政 5（1858）年、安政の大地震が富山平野を襲い、常願寺川は大氾濫を起こした。するとこの氾濫によって松本開の痩せた土地に肥沃な土壌がもたらされ、作物が立派に育つようになった。また押し流された砂によって、常願寺川の河床が高くなり、微高地の松本開にも水を引くことができるようになった。すると上段方面に避難していた人々や洪水で土地を失った人々が、この新しい松本開の地に移り住むようになり、町並みが形成されていった。文久 3（1863）年になると戸数 116 軒、男性 176 人、女性 177 人に増加した（表 1）。

⁹⁷参考『五百石郷土史』、『立山町郷土資料館企画展リーフレット』、『立山町史下巻』

⁹⁸ 尾根道で両端が急に下がっており崖状になっている地形のこと。

⁹⁹ 加賀藩だけに作られた役職で、豪農が十の村を単位に治める地方の代官所。

表 1. 五百石の起こり

和暦	西暦	出来事
延徳 3	1491	「高原野」最初の地が開拓される
文化 11	1814	朽木兵左衛門が高原野の開拓を始める
文政 3	1820	五百石天満社が創建される
天保 7	1836	町建が許可される。松本開と称される
天保 8	1837	諸商売が許可される
天保 9	1838	戸数 57 軒
安政 5	1858	安政の大地震が富山平野を襲う
文久 3	1863	戸数 116 軒

1-2. 明治時代の五百石

明治に入ると松本開はさらに開発が進み、町としての機能を整えるようになった。明治維新後、各地で次第に寺子屋が増加していったが、松本開では明治 5 (1872) 年、酒井周斎^{さかいしゅうさい}によって天満社前に最初の寺子屋が開かれ、30～40 人の子弟を教えていた。周斎はその後、五百石の教育に力をそそいだ。明治 6 (1873) 年 8 月に寺子屋は松本小学校となり、男女 100 人余りが在籍した。明治 12 (1879) 年、松本開戸長役場が設けられ、酒井小平^{さかいこへい}が戸となる。小平は、開拓の始まった松本開の一本松¹⁰⁰の下で酒屋の長男として生まれた。彼の温かい人柄は人々の信頼を集めると、明治 13 (1880) 年 5 月、五百石郵便局が小平宅に設置され、明治 17 (1884) 年、私立文学舎、のちの私立松本開高等小学校を設立するなど、五百石の発展におおいに貢献した。そして明治 20 (1887) 年、坂井喜一郎^{さかいきいちろう}が初めて人力車数台を購入し、交通文化が開かれた。その後、喜一郎によって立山軽便鉄道^{けいべん}（後述）の開通にいたるまで、幾多の文化施設が創られていった。明治 22 (1889) 年、町村制施行により松本開は五百石町と改称され、その役場は酒井小平宅に置かれた。同年 6 月には第 1 回町会議員選挙が行われるなど、地方自治体としての体制の基礎を確立した。明治 24 (1891) 年 3 月 31 日に、五百石町の 81 戸を焼失する大火が発生した。その後、五百石町は再び繁栄することとなる。

こうして町の機能が整うと、次の五百石の発展は商業へと移行していく。明治 30 (1897) 年、羽二重^{はふたえ}¹⁰¹を織る企業経営が盛んになると、明治 37 (1904) 年 7 月 13 日には現在、駅前のむらいスーパーがある辺りに芝居や映画を上映する松山座（旧立山劇場）ができ、人々の娯楽の中心となった。明治 45 (1912) 年 1 月に立山軽便鉄道株式会社が発足する（表 2）。

¹⁰⁰ かつての下町（脚注 140）のネオンアーチの横にあった一本の老松。五百石が松林だった頃の面影を偲ばせ親しまれていたが、枯れてしまったため昭和 47 (1972) 年ごろに処理された。

¹⁰¹ 平絹^{へいけん}ともいい、経糸・緯糸^{たていと よこいと}に良質の撚りのない生糸^よなどを使用した、主として平組織の後練り織物。

表 2. 明治時代の五百石

和暦	西暦	出来事
明治 5	1872	酒井周斉が寺子屋を開く
明治 6	1873	酒井周斉の寺子屋が松本小学校となる。松本開消防組が発足する
明治 9	1876	芦峯寺の堂の大鏡が五百石天満社に寄進される
明治 12	1879	松本開戸長役場が設けられ、酒井小平が戸長となる
明治 13	1880	五百石郵便局が酒井小平宅に設置される
明治 17	1884	酒井小平が文学舎（のちの私立松本開高等小学校）を設立する
明治 18	1885	松本小学校の校舎を五百石天満社の東側に新築する
明治 19	1886	富山始審裁判所松本開登記所が設置される
明治 20	1887	初めて人力車が導入され、交通文化が開かれる 五百石警察署が五百石天満社の北側に設置される
明治 22	1889	町村制施行により五百石町となり、その役場を酒井小平宅に設置される 第 1 回町会議員選挙が行われる
明治 24	1891	五百石町大火により 81 戸が焼失する
明治 28	1895	新川銀行が設立される
明治 30	1897	羽二重を織る機業経営が盛んになる
明治 34	1901	五百石郵便局が電信業務を開設する
明治 37	1904	松山座ができ娯楽の中心となる
明治 40	1907	五百石小学校校舎を前沢新に新築する
明治 43	1910	五百石町青年会発足する
明治 45	1912	立山軽便鉄道株式会社が発足する

1-3. 大正時代の五百石

大正時代には、五百石が商業の中心地として発展するにはかせない、交通事業が整備された。大正 2（1913）年、五百石郵便局に電話局が併設され、また大岩電機株式会社が発足して五百石町に電灯がついた。そして立山軽便鉄道が五百石一滑川間を開通した。大正 6（1917）年、立山軽便鉄道が立山鉄道へと名前を改称する。大正 9（1920）年、五百石一富山間を乗合自動車が運行すると、大正 10（1921）年には、立山鉄道が五百石一立山（現在の岩峯寺）まで延長開通した（表 3）。

1-3-1. 立山軽便鉄道

立山軽便鉄道は、普通の汽車よりも一回り小さい汽車であった。幅 76.2 センチメートルのレールの上を、もくもくと煙を出した黒い機関車が、客車や貨車を引いて走っていた。大正 2（1913）年、立山軽便鉄道が五百石一滑川間の 14.2 キロメートルに開通した。甲高

い汽笛を鳴らして走る汽車が開通したこの年は、お祝いの花火を上げたり村の人たちが駅前に集まったりと大騒ぎだったそうだ。

五百石―滑川間はそれまで大人の足で歩いて 3 時間かかり、人力車では 2 時間で 1 銭かかっていた。それが立山軽便鉄道に乗ると、50 分で 21 銭とお金はかかってしまうが、時間は大幅に短縮された。何よりも立山軽便鉄道は米の輸送に大活躍した。米の輸送にかかる運賃は生産者が負担していたが、それまでの 1 俵につき 11 銭かかった馬車輸送に比べ、立山軽便鉄道は 2 銭 5 厘の運賃で運べるようになった。また、原料や製品、燃料の輸送も便利になったことによって、大正 7（1918）年、立山製紙株式会社が発足するなど、五百石の商業の発展に大きな影響を及ぼした。大正 10（1921）年には、立山鉄道と名前が改称され、五百石―立山（現在の岩峠寺）の 6.9 キロメートルが延長開通した。しかし、長年親しまれ走り続けた立山軽便鉄道も、昭和 6（1931）年に富山電気鉄道が五百石―寺田間に開通すると、同年に富山電気鉄道と合併し惜しまれながらも機関車は姿を消していった。

表 3. 大正時代の五百石と立山軽便鉄道

和暦	西暦	出来事
大正 2	1913	五百石郵便局に電話局が併設される 大岩電機株式会社が発足し、五百石町に電灯がついた 立山軽便鉄道が五百石―滑川間を営業開始
大正 6	1917	立山軽便鉄道が立山鉄道に改称する
大正 7	1918	立山製紙株式会社が発足する
大正 8	1919	五百石町処女会（婦人会の前身）が発足する
大正 9	1920	五百石・富山間を乗合自動車は五百石自動車株式会社によって運行される
大正 10	1921	立山鉄道が立山駅（現在の岩峠寺）まで延長営業
大正 11	1922	町役場を前沢新地内に新築する

1-4. 昭和から現在の五百石¹⁰²

昭和 17（1942）年、五百石町、高野村、下段村、大森村が合併し雄山町となった。そして昭和 29（1954）年、雄山町、上段村、釜ヶ淵村、立山村、東谷村、利田村が合併して立山町が誕生した。商業の中心地として発展を続けた五百石は商店が建ち並び、多くの人で賑わった。昭和 57（1982）年 8 月 7 日、五百石中央商店街協同組合が設立され法人化する。翌年の昭和 58（1983）年 7 月 14 日には、五百石中央商店街の 2 か所に取り付けられたネオンアーチ（地図 6）の点灯式が行われた。

平成 20（2008）年、商工交流館「休んでかれや」が現在の富山信用金庫の南側に設立さ

¹⁰² 現在五百石は 1 区から 5 区、36 区（新町）、37 区（曙町）の全 7 区から成る。

れると、平成 24（2012）年 9 月 4 日、全国各地の特産品約 80 品目を展示販売するアンテナショップが休んでかれやにオープンした。平成 24（2012）年 6 月 1 日には五百石駅が立山町元気交流ステーション「みらいぶ」¹⁰³を併設し、リニューアルされた。現在みらいぶは子供からお年寄りまで多くの人が利用し、人気の施設となっている。平成 25（2013）年、五百石中央商店街協同組合は任意団体化され、五百石中央商店会となった。平成 26（2014）年から、休んでかれやに関西方面からの観光バスが立ち寄るようになると、平成 27（2015）年 11 月に立山町初の「まちの駅」として認定を受けた。建物の老朽化に伴い平成 29（2017）年に取り壊されたが、その機能は新休んでかれやとして、来年度休んでかれや跡地にオープン予定のまちなかファーム（後述）に整備され、新たな賑わいの創出を目指している。また、平成 24（2012）年から始まった立山インターカレッジコンペティションは、平成 29（2017）年で 6 回目を迎え、地域内だけでは解決できない課題を学生の持つ専門的知識やアイディアで解決し、地域活性化を図っている。



写真 2. 立山町元気交流ステーションみらいぶ

1-5. 五百石の人口の推移

『統計たてやま』をもとに、昭和 35（1960）年から平成 27（2015）年までの 5 年おきの人口の推移と平成 29（2017）年の人口を表 4 にまとめた。しかし平成 2（1990）年から平成 16（2004）年までは資料不足のため除くものとする。表 4 を見てみると、五百石の人口は昭和 35（1960）年に 3051 人であったが徐々に減少していき、平成元（1989）年では 1909 人にまで減少した。平成

表 4. 五百石の人口

17（2005）年になると人口が大幅に増加しているが、これは統計をとる五百石の範囲が拡大したためと思われる。平成 22（2010）年から平成 29（2017）年までは多少の人口増加はみられるものの、全体的に五百石の人口は減少傾向にあることが分かる。

和暦	西暦	人口(人)	和暦	西暦	人口(人)
昭和 35	1960	3051	平成元	1989	1909
昭和 40	1965	2754	平成 17	2005	5641
昭和 45	1970	2540	平成 22	2010	5325
昭和 50	1975	2364	平成 27	2015	5236
昭和 55	1980	2221	平成 29	2017	5379
昭和 60	1985	2039			

（統計たてやまより作成）

¹⁰³立山町の保健福祉の総合的な機能を集約し、立山図書館や交流センターなど暮らしに役立つ公共施設と富山地方鉄道五百石駅が一体となった複合施設。

2. 地方商業都市¹⁰⁴としての五百石

五百石はかつて地方商業都市として、町および付近の農民の生活必需品の製造や中継ぎ販売、生産品の収集出荷という役割を果たしていた。なぜ、他の村より開拓が遅かった五百石が、地方商業都市の役割を果たすようになったのか。これには大きく 2 つの要因が考えられる。1 つ目は安政の大地震による被害、2 つ目は交通上の好位置であったことが考えられる。ではまずこの 2 つを説明する前に、五百石の商業の始まりをみていく。

2-1. 五百石の商業の始まり

五百石の商業の始まりは、まだ五百石が松本開と呼ばれていたころに遡る。文化 11(1814)年、朽木兵左衛門によって開かれ始めた松本開であったが、扇状地の中央に位置し水利が悪かったことや、土壌が作物に向かない腐植土であったことから、定住者は少なく他の町よりも開拓が遅れていた。この状況を何とかしようと思った兵左衛門は、山室の十村役であった金山十次郎の力を借り、天保 8(1837)年、「高野組松本畑新開所之義」を郡奉行所に提出した。これは松本開に移住してきた人々に、山村の村々より富山ならびに水橋の通り筋につき、商売の許可を求めるものであった。同年 5 月 2 日、郡奉行所から菓子、塩、油、炭、醤油、小間物¹⁰⁵などの店屋や大工、木挽^{こびき}¹⁰⁶、桶屋、鍛冶屋、綿打¹⁰⁷などの営業が許可され、市場として発展していくこととなった。こうして松本開(五百石)に地方商業都市の生命が誕生した。

嘉永 7(1854)年松本開商買賣上申上帳による職業調査では、32 種類の職業があり、その軒数は 48 軒であった。中でも、豆腐や小菓子、味噌など食品を扱っている商店が多い。また、紺屋¹⁰⁸や茜染、綿打や太物^{ふともの}¹⁰⁹など織物業も盛んであった(表 5)。

しかし、安政年間(1854-1860)に入るとこの商店の軒は 28 軒と、嘉永 7(1854)年の半分近くに減ってしまう。何年かして生活が楽にならないのをみると、また元の場所に帰ってしまう人が多かったからである。中でも織物業の減少は大きく、嘉永 7(1854)年に 6 軒あったものが安政に入るとわずか 1 軒となってしまった。生活が苦しかった人々は洋服や織物を買うよりも、食料品や生活必需品を優先してそろえていたため、織物業が衰退してしまったと考えられる(表 6)。また、地図 2 より北西側に商店が多く並び、江戸時代(1603-1868)の五百石の商業の中心地であったことがわかる。東側には仁右衛門用水¹¹⁰

¹⁰⁴ 加賀藩の呼び名では、在町又は在郷町という。在町とは江戸時代の農村における小都市集落のことで、近隣の村々と交易をし、市場町としての性格をもつ。

¹⁰⁵ 日用品、化粧品、装身具など日常で用いるこまごまとしたもののこと。

¹⁰⁶ 木材を大鋸でひき切ること。またそれを職業とする人。

¹⁰⁷ 綿を糸に紡げる状態にまでほぐすために、綿弓ではじき打って打ち綿に仕上げること。

¹⁰⁸ 染物職人の総称。

¹⁰⁹ 綿織物、麻織物など太い糸の織物の総称。

¹¹⁰ 常願寺川の分水用水で、大森村泊新より取り入れられたのち下段村、高野村、五百石村

が通っていたため水田が広がっていた。一方で、南側にはまだ竹やぶや松が残っていたため、北西側に商店が集中したと考えられる。

表 5. 嘉永 7 (1854) 年の職種一覧¹¹¹

職種	主業 (軒)	兼業 (軒)	職種	主業 (軒)	兼業 (軒)
酒造	1	1	サメ	1	
油	1	1	小菓子	10	
野道具	1		茜染	2	
ぬし 塗師	1		桶屋	4	
質屋	1		こびき 木挽	2	1
豆腐	4		紙すき	1	
紺屋	1	3	手間綿打	1	
塩賣物	2		馬仲人	1	
きざみたばこ 刻煙草	1	1	石工		1
へぎや 批屋	2	1	大工		1
干肴	2	1	八百屋		1
醤油	1	2	なかがい 仲買		1
ふるて 古手	1		きちん宿		1
髪結	2		こんにやく		1
小間物	3	1	ふともの 太物		2
ローソク	1		味噌屋	1	
			計	48	20

(松本開商買賣上申上帳より作成)

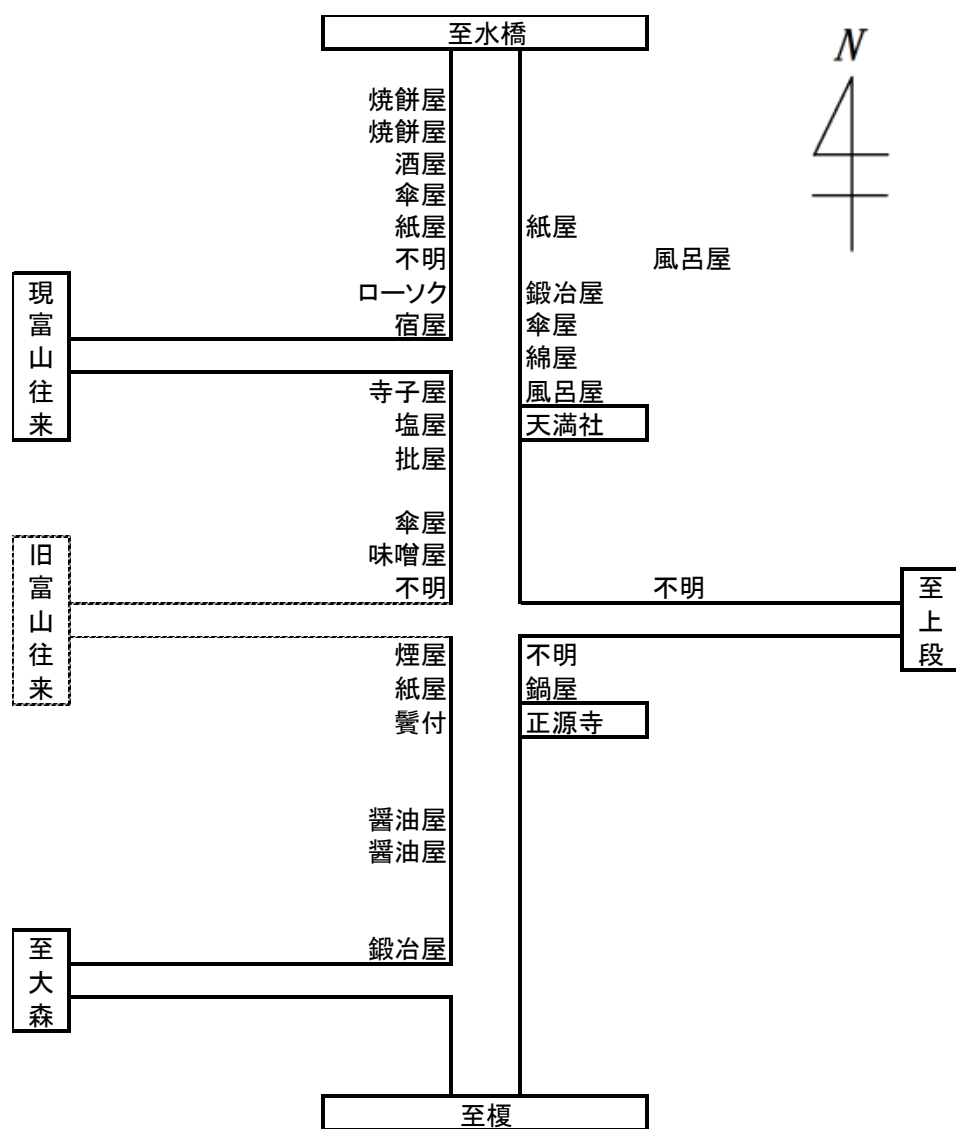
の各町村を経て、寺田や浦田の部落の中央を貫流して若狭川に注がれていた。

¹¹¹ 表中の「野道具」とは葬具を扱う店である。「批屋」とは倉敷料をとって貨物を置かせる場所で主に給人米を管理していた。「古手」とは古着や古道具扱う店である。「きちん宿」とは旅行者自身が食料を持参して薪炭代（木賃）のみを支払う旅宿のことである。「サメ」は不明である。

表 6. 安政元（1854）年～安政 4（1857）年の職種一覧¹¹²

職種	店数(軒)	職種	店数(軒)	職種	店数(軒)
紙屋	4	焼餅屋	2	味噌屋	1
風呂屋	2	ローソク	1	煙屋	1
鍛冶屋	1	酒屋	1	鬘付	1
傘屋	3	宿屋	1	醤油屋	2
綿屋	1	塩	1	不明	4
鍋屋	1	批屋	1	計	28

(地図 2 より作成)



地図 2. 安政元（1854）年～安政 4（1857）年松本開商店地図（石原与作¹¹³原図より）

¹¹² 表中の「鬘付」とは鬘付油の略で、日本髪用の油を扱う店のことである。

2-2. 商業の発展要因① 安政の大地震

五百石が地方商業都市の役割を果たすようになった要因の1つ目は、安政の大地震である。安政の大地震で松本開にも肥沃な土壌がもたらされたことや、水を引くことができるようになったことによって、土地を亡くした多くの人々が松本開に移住してくるようになった。田畑の増加と共に、米や他の農作物も豊かに収穫されるようになってくると人々の生活に物を買う余裕ができた。それに伴って多くの商店が集まり、安政に入り停滞していた松本開の商業も、再び活気を取り戻し始めた。

衰退していた織物業は3軒になり回復の兆しを見せた。また、鍛冶屋や鍋鋤商^{なべすきしょう}¹¹⁵などの製鉄業が増加し、桶屋が誕生した。桶屋は7軒と1番多い職種となっている(表7)。常願寺川の氾濫によって松本開にも水を引くことができるようになったことや、流れ込んできた肥沃な土壌により農業が盛んになり、桶と農工具の需要が増したからと考えられる。中でも水は生活にも農業にも必要不可欠なため、桶屋の数が1番多くなったのではないだろうか。

安政の大地震によって活気を取り戻した松本開は、五百石天満宮を中心に付近から移住してきた人々によって賑やかな商店が軒を連ねるようになった。

表7. 安政6(1859)年の職種一覧¹¹⁴

職種	店数(軒)	職種	店数(軒)
室屋 ^{むろや}	2	油屋	1
醤油屋	3	紺屋	1
紙屋	2	塩屋	1
紙漉 ^{かみすき}	2	批屋	1
大工	1	茜染屋	1
傘屋	2	鍋鋤商 ^{なべすきしょう}	1
鍛冶屋	2	酒屋	2
桶屋	7	焼餅屋	1
煙屋	1	綿屋	1
米屋	4	鋤柄屋 ^{くわがらや}	1
鬘付屋	1	不明	1
木挽き	1	計	40

(地図3より作成)

2-3. 商業の発展要因② 交通上の好位置

五百石が地方商業都市の役割を果たすようになった要因の2つ目は、開拓された地が交通上の好位置であったことである。松本開は原野を東西に横切る富山から上段・東谷方面への道路と、南北に貫く水橋・立山間の道路が交差する場所に位置する。このように松本開は交通上の中心に位置しており、中継ぎ販売、生産品の収集出荷の役割を担うのに絶好の条件にあった。

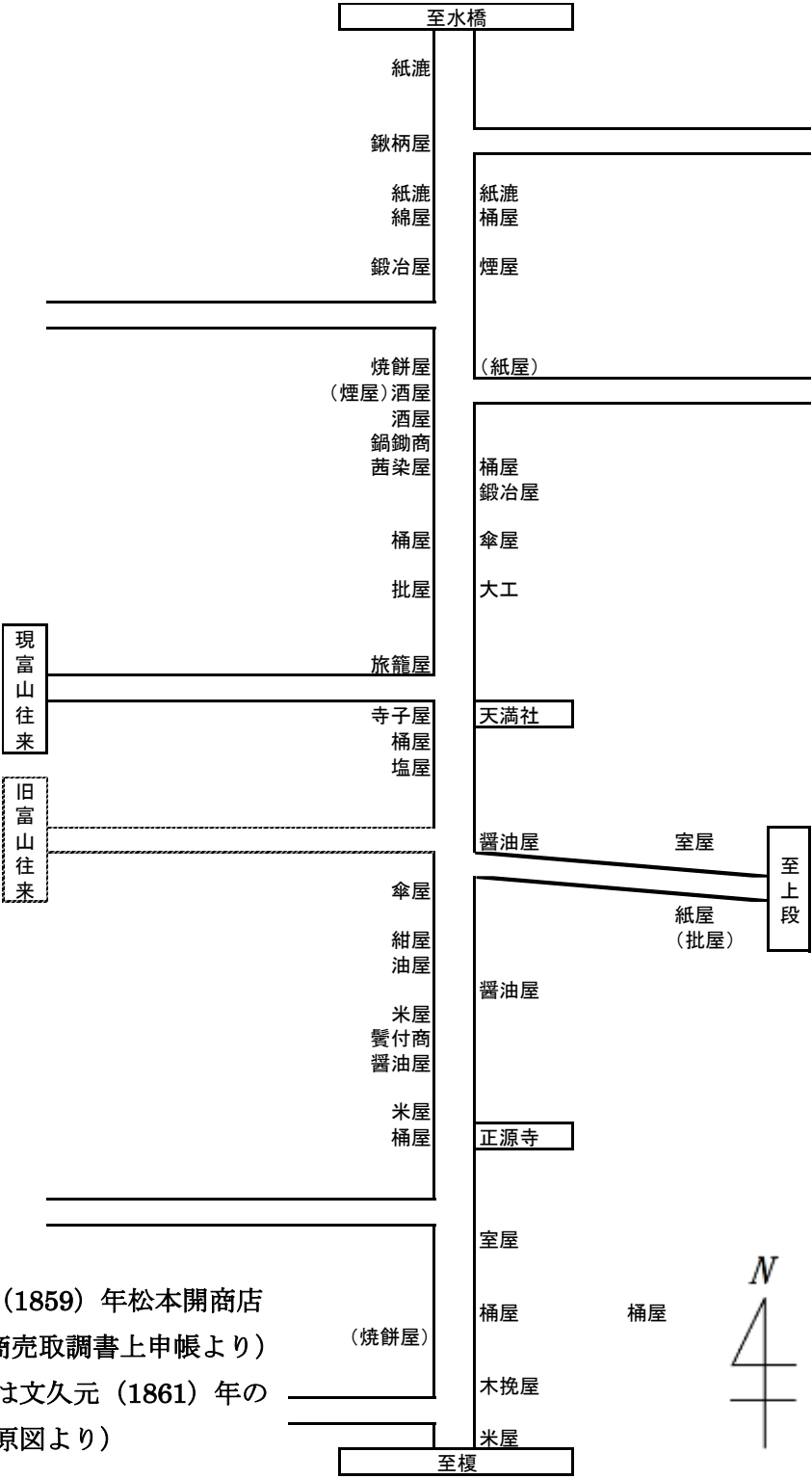
明治20(1887)年、坂井喜一郎によって初めて人力車が導入され交通文化が開かれると、地方商業都市として町はさらに発展した。中でも立山軽便鉄道は、大きな影響をもたらした。立山軽便鉄道によって五百石―滑川間の移動時間は、徒歩の約3分の1、人力車の約半

¹¹³ 五百石や他の市町村の歴史に詳しく、立山町史の編纂委員の仕事をしていた方である。すでに亡くなられている。

¹¹⁴ 表中の「室屋」とは藁などで編んだ敷物を作る店である。「鋤柄屋」とは鋤の柄を作る店である。

¹¹⁵ 農作業や土木工事に使用されていた道具を扱っている店。

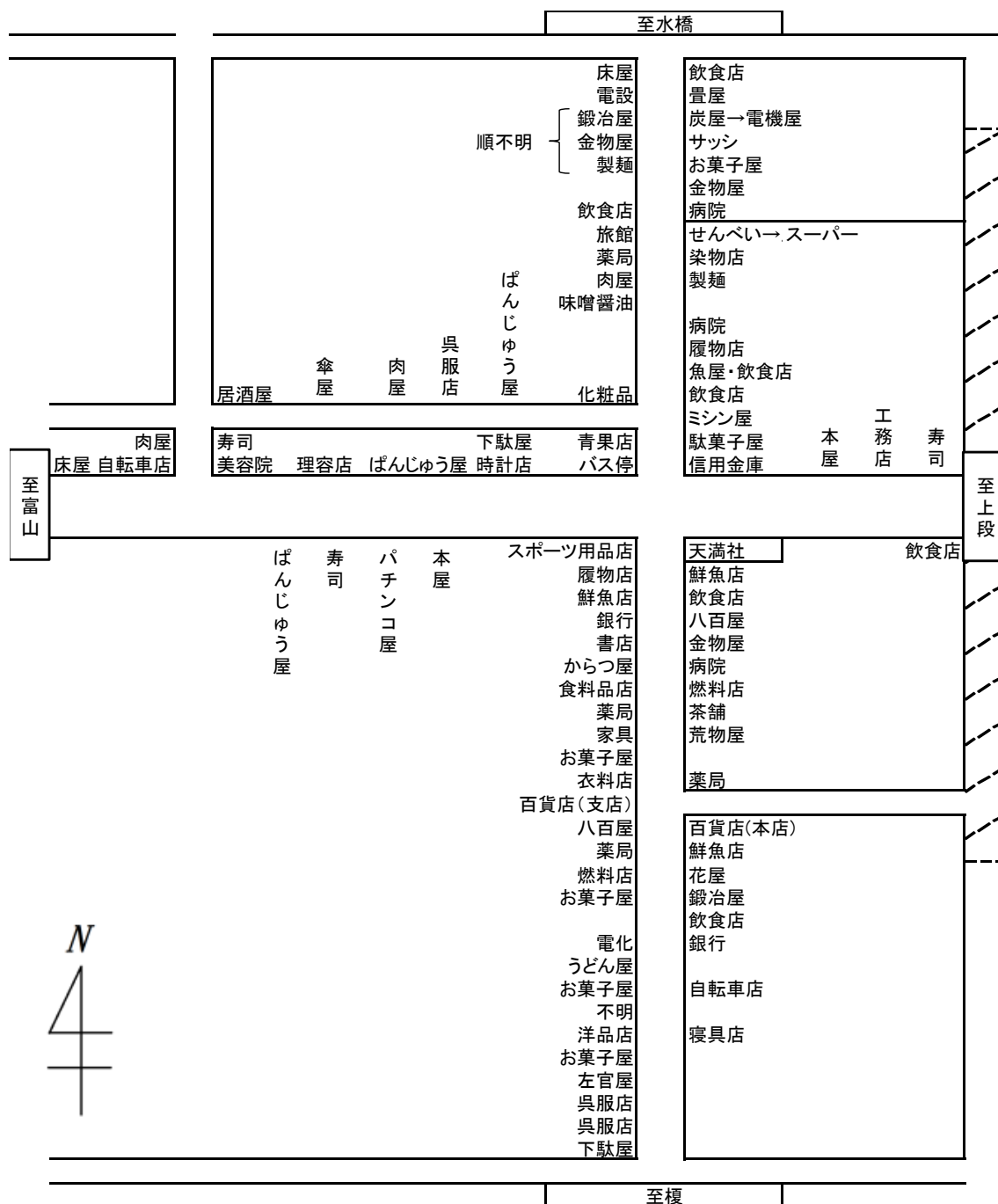
分となり、米の輸送にかかる運賃も馬車輸送の約 5 分の 1 となった。原料や製品、燃料の輸送が便利になり、立山製紙株式会社が発足するなど五百石の諸工業が、立山軽便鉄道の開通に伴い次々と設立された。交通文化の発展は五百石の商業と工業の発展を助け、相携えて地方商業都市としての発展を促した。



地図 3. 安政 6 (1859) 年松本開商店
 図 (安政 6 年諸商売取調書上申帳より)
 地図中 () の中は文久元 (1861) 年の
 商店 (石原与作原図より)

3. 昭和の五百石中央商店街

現在、五百石中央商店街で商売をしている人やその付近に住んでいる人に、昭和 45(1970) 年頃の商店街の様子を聞き取り調査し、それをもとに天満宮前交差点を中心とした十字路に沿って商店を復元した。しかし聞き取り調査によるため、時代等に多少のずれはあるものと思われる。



地図 4. 昭和 45 (1970) 年頃の五百石中央商店街 (聞き取りをもとに作成)

復元した範囲だけでも計 88 軒の商店が並んでおり、地図には記載していない周辺の通りの商店を合わせるとその数は優に 100 軒を超す。今まで商店が少なかった下手東側にも商店が増え、上手西側は今まで以上に発展した。表 4 をみると、すでに昭和 45（1970）年は五百石の人口が減り始めてから少なくとも 10 年はたっている。このことから、この時期にはすでに商店数のピークが過ぎていることが考えられるが、それでもこれほど多くの商店が軒を連ねていたことがわかる。また、商店数だけでなくその種類も江戸末期の頃と比べ物にならないくらい豊富になり、鮮魚店、肉屋、八百屋などの食料品から、金物屋¹¹⁶、荒物屋¹¹⁷、からつ屋¹¹⁸などの日用品、床屋や呉服店、薬局など生活に必要なほとんどのものが商店街で揃った。中央商店街は 100 年あまりの間に大発展を遂げたのである（表 8）。

表 8. 昭和 45（1970）年頃の職種一覧¹¹⁹（表中（ ）は建て替わった商店）

職種	店数(軒)	職種	店数(軒)	職種	店数(軒)
飲食店	12	荒物屋	1	青果店	1
畳屋	1	薬局	4	下駄屋	2
炭屋	1	百貨店	1	時計屋	1
サッシ	1	燃料店	2	理容店	1
お菓子屋	1	花屋	1	美容院	1
金物屋	3	鍛冶屋	2	パチンコ屋	1
煎餅	1	自転車店	2	スポーツ用品店	1
染物店	1	寝具店	1	からつ屋	1
製麺	2	床屋	2	食料品店	1
履物店	2	電設	1	家具	1
魚屋	4	旅館	1	衣類店	1
ミシン屋	1	肉屋	3	電化	1
駄菓子屋	5	味噌醤油	1	洋品店	1
本屋	3	化粧品	1	左官屋	1
工務店	1	ぱんじゅう屋	3	不明	1
八百屋	2	呉服店	3	(電機屋)	1
茶舗	1	傘屋	1	(スーパー)	1
				計	88

(地図 4 より作成)

¹¹⁶ 鍋、釜、包丁、金具などおもに金属製品を扱う店。

¹¹⁷ 家庭用品の雑貨を扱う店。

¹¹⁸ 茶碗や、焼き物などの陶器を扱う店。

¹¹⁹ 表中の「ぱんじゅう屋」とは、ぱんじゅうという七越焼きから派生した、たこ焼きよりも少し大きめの半球状をした焼き菓子を販売する店である。

現在、商店街で商売をしている女性（75 歳）によると、この商店街の通りはかつて一等地とされていたそう。交差点にバス停があったため、芦峯寺や白岩、目桑^{めづか}などの山村部からも買い物にくるお客さんが多く、商店街は多くのお客さんで賑わった。また現在、商店街で商売をしている女性（70 代）は、「日中は自分のお店があって夜しか出られないから、近所で買い物をしていた」とおっしゃっていた。このように朝早くから夜遅くまで 1 日中営業をしているためなかなか遠くに買い物に行けない商店街の人々にとっても、近所で生活必需品が揃うことは非常に助かるものであった。

五百石中央商店街は、飲食店と呉服店や洋品店の衣類を扱うお店の軒数が多いのが特徴である。飲食店は 12 軒、呉服店や洋品店は合計 6 軒であった。飲食店が多い理由として大正から昭和初期にかけて、天満社の東側に遊廓が栄えていたことが挙げられる（地図 4 斜線部）。料理飲食貸席業が 16 軒、芸妓置屋が 5 軒あった。聞き取りを行った男性（72 歳）は「料理屋が多いのは花街の名残。水橋の船にお米を持っていくのに五百石が通り道だったから、花街が栄えた」とおっしゃっていた。呉服店や洋品店が多い理由は、嘉永 7（1854）年松本開商買賈上申上帳でみたように、五百石ではかねてより織物業が行われていたためである。明治 30（1897）年には羽二重を織る企業が盛んになったことや、立山軽便鉄道によって原材料や製品の輸送が便利になったことで、発展を続けることができたためとも考えられる。また、商店街最初のスーパーが 1 軒できたが、このスーパーについて商店街で商売をしている男性（65 歳）は「安かったが品数がなかったから、スーパーの影響は少なかった」とおっしゃっていた。



写真 3. 昭和 47（1972）年頃のいしはら百貨店
本店の様子（いしはら百貨店より）

4. 平成の五百石中央商店街

平成に入り商店街の商店数は減少し続けている。平成 11（1999）年の住宅地図によると、その店舗数は 55 軒となっている。食料品の中では八百屋やばんじゅう屋、日用品の中では炭屋、畳屋、鍛冶屋、荒物屋、からつ屋など、またその他にも花屋や下駄やなどの昭和まであったお店はなくなってしまっている（地図 5）。

1970 年代以降、モータリゼーション¹²⁰が進展し、自動車で買い物に行くという生活スタ

¹²⁰ 自動車が一般家庭にも普及した現象。高速道路が整備され便利になる一方で、公害や交通事故などの問題も招いている。

イルが定着し始めた。こうした生活スタイルの変化によって、戦後、全国各地で成立、発展した商店街は衰退し「シャッター商店街」と呼ばれるようになった。現在、商店街で商売をしている女性（60代）は商店数の減少について、「スーパーが近くにできたことよりも、車社会になったことや高齢化が進んでからの影響が大きい」と語り、モータリゼーションの影響を実感していた。五百石中央商店街は全国各地の商店街に比べ、モータリゼーションの影響が大きかったのではないかと思われる。2・3で五百石が地方商業として発展した要因のひとつに、五百石が交通上の好位置に開かれたことを述べた。しかしそれは自動車の普及が進むと、富山市街への流出を増加させ、商店街の利用客の減少を促したと考えられる。交通上の好位置のため地方商業都市として発展した五百石であったが、交通上の好位置がゆえに商店数の減少の原因となってしまった。

また自動車の普及に伴い、駐車場の整備の問題も浮上してくる。平成13（2001）年の住宅地図によると商店数は39軒となり、2年間で16軒の商店が減少している（地図5）。昭和45（1970）年から平成11（1999）年の29年間で33軒減少したのに比べると、かなりの速さで減少が進んでいる。平成12（2000）年、大規模小売店舗法が改正され、全国各地の郊外に大型ショッピングセンターが建設されるようになり、百貨店や専門店など、それまで商店街で買いそろえていた商品が手ごろな価格で購入できるようになった。大型ショッピングセンターには、大規模な無料駐車場が併設されている。それに対し五百石商店街には大きな駐車場がなく、ほとんどの人が路上駐車をして買い物をしている。五百石駅の近くには駐車場があるものの、1回の買い物で多種の商品を買うとなると、商店街の通りを歩いて往復し、それぞれの商店で買い物をしなければならない。町の人に行った聞き取りによると、女性（32歳）は「昔は商店街に行っていたが、今は家の近くに大きなスーパーがあり、そこは広い駐車場もあるし日用品は足りている」とおっしゃる方や、40代から50代の女性3人は「昔は魚屋とか薬局とかお菓子屋とか商店街に行っていたけど、今は駐車場がないから行かない」とおっしゃる方もいた。

加えて表4をみると昭和から平成にかけての人口の減少は著しく、昭和45（1970）年の五百石1区から5区の人口は2540人であった。しかし、その人口は徐々に減少していき、平成元（1989）年には1909人まで減少している。現在、商店街で商売をしている女性（75歳）は、「商店街の人口は減っている。人が変わらない」とおっしゃった。この語りは、商店街の人口が減っているだけで新しい人が入って来ていないことを意味する。また山村部の人口減少も著しいと考えられる。これらのことから、モータリゼーションや郊外の大型ショッピングセンターの進展により、全国の商店街から客足が遠のき商店街数が減少していったが、中でも五百石中央商店街は交通上の好位置という五百石独自の地形のため、その影響を受けやすかった。また、五百石の人口減少も相まって、商店数の減少を加速させたとみられる。

一方で飲食店は昭和45（1970）年に12軒だったものが平成11（1999）年になると10軒、平成13（2001）年では8軒と減少はあまり大きくない。現在、商店街で商売をしてい

◆印は平成 13 (2000) 年までになくなった商店
 ※印はのちに商工交流館「休んでかれや」に改

至水橋

電設

◆飲食店

薬局

◆肉屋

◆醸造元

呉服店

化粧品

飲食店

電機屋

◆金物屋

病院

染物店

飲料販売

信用金庫

寿司

至上山

飲食店

新聞店

寿司

美容院

理容店

◆手芸店

◆呉服店

時計店

青果店

◆商店

居酒屋

◆衣類雑貨

スポーツ用品店

◆履物店

鮮魚店

※郷土資料館

書店

家具

お菓子屋

◆衣料店

◆燃料店

お菓子屋

◆電化

衣類・飲食店

お菓子屋

不明

洋品店

お菓子屋

呉服店

◆呉服店

天満社

鮮魚店

◆飲食店

居酒屋

病院

燃料店

茶舗

◆薬局

飲食店

百貨店(本店)

鮮魚店

銀行

自転車店

寝具店

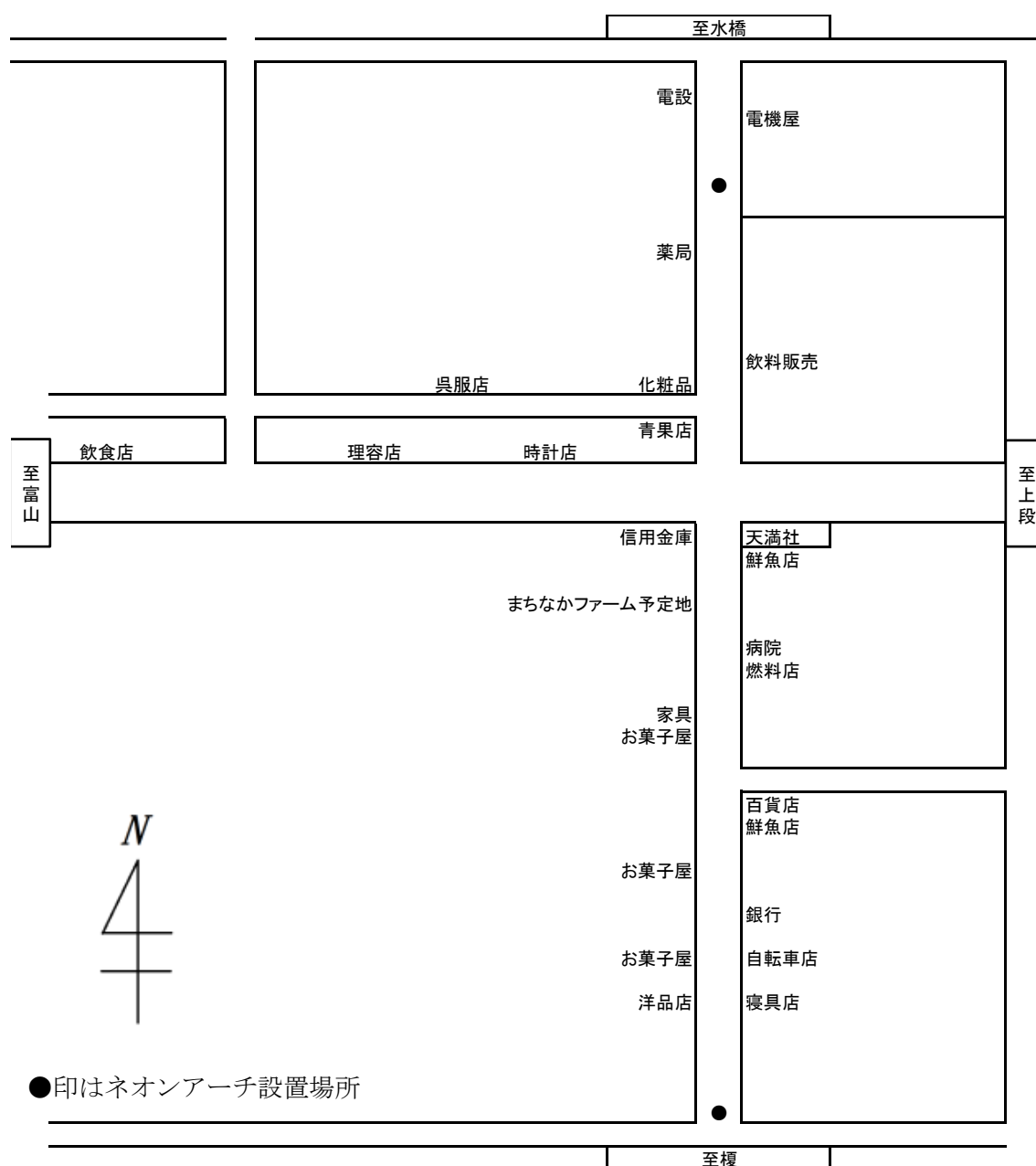
◆肉屋

至榎

150

5. 現在の五百石中央商店街

平成 29（2017）年現在、五百石中央商店街の商店数は 21 軒である。平成 13（2001）年から約 46%、昭和 45（1970）年から約 76%もの商店が減少した。ずらりと建ち並んでいた商店も今では住宅の中に商店が混在している状況で、活気があるとはいいがたい。昭和 58（1983）年に通りの 2 か所に設置されていたネオンアーチは老朽化のため 5、6 年前に取り外されてしまい、夜になると人もほとんどおらず真っ暗になってしまう（地図 6）。



地図 6. 平成 29（2017）年の五百石中央商店街地図（筆者フィールドワークより作成）

5-1-1. 商店街の衰退要因① 後継者問題と高齢化

商店街の衰退要因の 1 つ目として後継者問題と高齢化がある。これは全国の商店街でも大きな問題となっている。商店の多くは家族経営で営んでいる。そのため自分の子供が跡を継がない限り、商店を継続させていくことは難しい。また、実際にお店を閉じられた方の中には自分が 70 歳になったのを機に、腰も悪く年だからお店を閉じたという方がいた。しかし、商店街で商売をしている人のほとんどが 50 代から 70 代の方で、聞き取りを行っている後継者がいないという商店がいくつかあった。中には自分の子供には後を継がせたくないという方もいた。その男性（63 歳）は「自分は長男で定年後に跡を継いで、いかにうまく商売をするか考えるのが楽しい」とおっしゃっていた半面、後を継がせたくない理由として「朝早くから長時間仕事に拘束されるけど、サラリーマンのようにボーナスが出るほどの利益はないし、時代の流れもあるから」とおっしゃっていた。お店を継ぐ側の問題だけでなく、栄えていたころの商店街を知っているからこそその継がせる側の思いも、後継者問題の中には絡まっているのである。

また、平成に入ってもしばらく減少傾向が緩やかだった飲食店だが、現在では 2 軒となってしまった。以前までは地域住民によって支えられていた飲食店であったが、高齢化に伴い利用客が減少してしまったことが原因であると考えられる。



写真 4. 現在の五百石中央商店街の様子
(上:上手、下:下手)

5-1-2. 商店街の衰退要因② 店舗併用住宅

五百石中央商店街の特徴は店舗兼住宅である。五百石の商店街を初めて見たとき閉まっている商店が多いと感じたが、いわゆる「シャッター商店街」というには違和感があった。シャッター商店街となっている商店街の多くは、貸店舗で経営している方が多いため、お店を閉じてしまうとそこは空き店舗となり、シャッターを下ろして次の借主を待つ。一方で五百石商店街は閉じているお店は多いが、シャッターは閉まっていなかった。これは商店を営んでいたその場所に今も住んでいる店舗併用住宅であるためである。五百石中央商店会（後述）会長の男性は「商店は減るが増えることはない」とおっしゃっていた。この語りのように、店舗併用住宅のため一旦お店を閉じてしまうと住宅となってしまう、その住人も外部からもまた新しく商店を始めるのが難しい。一度衰退を始めてしまった商店街は、そのまま商店数を減らし衰退し続けることになったと考えられる。

5-1-3. 商店街の衰退要因③ ベットタウン的役割

五百石は交通上の好位置から、富山市街のベットタウンとしての役割を担っている。そのため、商店街が営業をしている日中に富山市街へ出ていく人が多く、五百石に人がいなくなってしまうのである。昭和 45（1970）年頃にあった商店について聞き取りを行った際に、「富山市街に勤めに出ていたからよく分からない」と答える方が何人かいた。また男性（72 歳）は富山市街に勤めていたが、定年後、商店街を利用するようになったという。人口の減少に加えベットタウン的役割を担うことで、五百石全体の総人口が減ってしまい、商店街の利用客の減少、衰退につながっていると考えられる。

5-2. 五百石中央商店会の活動

五百石中央商店街にはかつて中商スタンプ会とブルーチップの会という 2 つの組織が存在した。この 2 つの会が合わさり立山ファミリーカード会となった。その後、昭和 57(1982) 年 8 月 7 日に五百石中央商店街協同組合となり法人化された。しかし、商店数の減少により、会費が集まらなくなってきてしまったため、平成 25(2013) 年から任意団体の五百石中央商店会となった。

主な活動は共同売り出しを行っている。共同売り出しとは、立山ファミリーカード（写真 5）のポイントを利用した活動である。立山ファミリーカードは平成 7 年から発行されているポイントカードで、町内 43 軒のお店で利用できる。100 円の買い物で 1 ポイントが付き、400 ポイント貯まると 500 円として使用できるほか、公共料金の支払いや税金の納付にも利用できる。

五百石中央商店会はこの活動を通し、商店街の活性化に努めている。



写真 5. 立山ファミリーカード

5-3. 五百石中央商店街の特徴

商店街には細川大日堂、北海屋菓子舗、和洋菓子ながかわの 3 軒のお菓子屋があり、商店街の中でもっとも多い職業である。節分や七夕、七五三などの様々な年中行事にもお菓子は多く用いられる。特に年間を通し様々な行事の際に餅を食べる習慣は、立山町だけでなく富山県に広くある。また、北海屋菓子舗に表 9 のような、月ごとのお菓子をまとめたお菓子の歳時記が張られていた。このように古くからお菓子は四季折々の商品が楽しむことができるため、年間を通して需要がある。

なぜお菓子屋が多く残っているのかについて、地域の人からお話をお聞きした。するとお菓子屋を営む女性（70 代）は「祝いごとの時にお餅を近所の人に配る習慣があるからではないか」とおっしゃっていた。また、和洋菓子ながかわで主力商品の変化についてお聞きすると、最初はまんじゅうなど和菓子を中心に売っており、立山町にまだ洋菓子があまり

流通していない頃から徐々にケーキなどを卸すようになると、50 年ほど前に洋菓子へ主力商品が変化した。しかし、コンビニのデザートが充実してくるようになると、また和菓子の方が売れるようになったという。再度、和菓子に主力商品が戻った理由について、まんじゅうやどら焼き、お餅は冠婚葬祭でも使われるからということ を挙げていた。このように祝いごとの時や冠婚葬祭にお菓子が用いられることが多いため、今でもお菓子屋が残っている要因だと考えられる。祝い事にお餅が用いられるものとして、誕生餅や3 日の団子¹²¹がある。誕生餅とは、1 歳の誕生日の時に丸いお餅を背負う行事で、地域によっては一升餅、立ち餅、一歳餅とも呼ばれている。丸いお餅を背負う行為には、「一生（一升）食べ物に困らないように」「一生（一升）健康であるように」「円満な人生が送れるように」といった願いが込められている。北海屋菓子舗でお聞きした誕生餅は黒豆の入ったお餅と白いお餅

表 9. お菓子の歳時記¹²²

月	お菓子
1 月	お雑煮、ぜんざい、氷餅
2 月	桜餅、うぐいす餅、ひし餅
3 月	桃の節句（節句餅）、御釈迦の団子、春分の日（おはぎ）
4 月	おやき、草餅、あんころ餅、春祭（赤飯）
5 月	端午の節句（節句餅）、柏餅
6 月	あやめの団子、ささぎ餅
7 月	土用餅、あべかわもち
8 月	お盆の供養物、豆餅、
9 月	秋分の日（おはぎ）、秋祭（赤飯）
10 月	秋祭（赤飯）
11 月	針歳暮
12 月	針歳暮、ちん餅（お正月餅）

（北海屋菓子舗より作成）

¹²¹ 「3 日の団子」とは 団子、油揚げ、鯉節、ささ、ごぼう、ズイキ（ズキ）を煮込んだものを、赤ちゃんが産まれてから 3 日後に食べる行事のことである。病院で出されることもあり、母乳がよく出るようにという願いが込められている。

¹²² 表中の「氷餅」とは冬に凍らせておく餅のことで、寒い地方の保存食の一種である。うぐいす餅とは餅または求肥^{ぎゅうひ}という白玉粉に砂糖と水飴を加えて煮つめながら練り上げた菓子であんを包み、うぐいすの形に似せて青きな粉をまぶした餅菓子のことである。「御釈迦の団子」とは 3 月 15 日のお釈迦様の命日に行われる法要で参拝者に配られる団子のことである。団子はお釈迦様の舍利（ご遺骨）に例えられ、無病息災や交通安全、厄除けなどにご利益があるとされる。「あやめの団子」とは串に平たい団子をさしたもので、黒蜜がかかっている。「土用餅」とは丑の日に食べるあんころ餅のことである。「針歳暮」とは針供養の際に用いる大ぶりの大福餅のことである。

を背負うもので、このお持ちの注文を受けることもあるという。このお餅は祝い事の後に近所の人たちに配るそうだが、最近では誕生餅をやる人は少なくなっている

また他にもお菓子屋が多く残っている理由について、女性（60代）は「手土産の習慣があるから」とおっしゃった。手土産の習慣は日本独自の贈答文化である。日本では誕生日や記念日などの特別な日以外にも、久しぶりに会う親戚や友人のお宅を訪問する際や、旅行のお土産、お中元やお歳暮など1年の中で実に多くの贈り物をする。海外では記念日以外で物を送ったり受け取ったりという習慣はほとんどない。また、贈り物の中身やその際の作法なども、日本より寛容である。これらのことは、バレンタインデーのお返しとしてホワイトデーがあるのは日本だけと言われていることからもうかがえる。

商店街のお菓子には細川大日堂の雄山最中¹²³（写真6）や立山くる美¹²⁴、北海屋菓子舗のらい鳥っ子¹²⁵（写真7）や立山さんぼ道¹²⁶、和洋菓子ながかわの立山とうふ¹²⁷（写真8）やおにぎり地蔵¹²⁸など、立山町ならではの独自のお菓子が多数ある。細川大日堂と北海屋菓子舗にも主力商品の変化についてお話しをお聞きした。細川大日堂では品数は減ったものの主力商品は、雄山最中や立山くる美であり、昔から変わっていない。北海屋菓子舗では、昔は嫁いだ先に配ったり葬式の際に用いたりすることが多かったため、まんじゅうやお餅が主力商品であったが、今ではケーキなどの洋菓子のほか、立山やらい鳥、雄山など名物の名前が付いた自分たち独自のお菓子が主力商品となっている。このようにお菓子はそのお店独自の商品を作り易く、そのようなオリジナルな商品は贈り物に喜ばれやすい。また、保存期間の長い商品や和菓子から洋菓子と多種多様な商品が揃っている。商店街に独自性のあるお菓子屋が多く残る要因の一つに、お菓子はオリジナルな商品を作り易く、また贈答文化による影響があったものと考えられる。



写真 6. 雄山最中



写真 7. らい鳥っ子

¹²³ あんこと白餡の2種類の餡を使用し最中には砂糖で立山が描かれている。1個 110円。

¹²⁴ 甘さ控えめで、上にクルミがのっているのが特徴的な和菓子。1個 110円。

¹²⁵ らい鳥のかわいらしい形をした和菓子で、中には白あんが入っている。1個 150円。

¹²⁶ コーヒーとラム酒の風味がする大人向けの洋菓子。1個 150円。

¹²⁷ 黒ごま、栗、抹茶、苺、梅、チョコの6種類の味があり、生地には豆乳が使用されている。1個 162円。

¹²⁸ 米粉が使用された生地の中に餡が挟まれており餡には梅、昆布、わかめの3種類がある。1個 162円。



写真 8. 立山とうふ（左：チョコ味、右：栗味）

5-4. 商店街の方の語り

1 日中商店街で商売をしている人にとって、商店街は生活必需品の供給の場であり、仕事終わりにみんなで飲みに行く憩いの場でもあった。現在、商店街で商売をしている方に、商店街の他のお店を利用しているかお聞きしたところ、「昔は八百屋や肉屋に行っていたが、最近では品揃えが悪く欲しい物がないから、あまり利用しない」と答える方がいる一方で、「協力したいから、なるべく商店会で買う」、「お得意のお店は今でも利用している」、「スーパーにはないオリジナルな物を売っているから利用している」など、今でも積極的に商店街の商店を利用する方が多かった。商店街の 3 軒のお菓子屋で利用客についてお話しをお聞きしていると、3 軒ともほとんどが昔からの固定客とおっしゃった。商店街の利用客が減少し衰退している中で、商店街の方同士で互いに協力し合い商店街を存続させているとともに、昔からの地域交流が今もなお行われている。しかし女性（70 代）は、お店を長年続けることができた理由として「古くからのお客さんに恵まれたから」ということを挙げていたが、その一方で「逆に言うと古くからのお客さんがいるため、お店を閉じることができない」ともおっしゃっていた。

5-5. 聞き取りを基にした五百石中央商店街の利用状況

主に五百石駅にいる 10 代 10 人、30 から 50 代 5 人、70 から 80 代 5 人の計 20 人に対し、現在の五百石中央商店街の利用状況について聞き取り調査を行った。

10 代の中高生のほとんどが、お祭り（後述）で訪れる以外は商店街を利用していないという結果が出た。その理由として、魅力がない、興味があるものがない、年齢層に合わないという意見が多かった。普段の買い物はコンビニやスーパー、富山市街で行っており、商店会のどこにどんなお店があるのかわからない人が多い。中には商店街の存在すら認識していないという人もいた。一方で、今は自主廃業されたが、駄菓子屋に行っていたという女性（15 歳）が 1 人いた。しかし若者の商店街離れは深刻である。賑わっていた頃の商

店街の様子を知らない人が多く、商店街に対するネガティブなイメージが根強いと感じた。

30代から50代の方は、自分たちが学生のころはよく商店街を利用していたが、今ではほとんど利用していない。その原因は、自動車の所有と駐車場の不足である。聞き取りを行った5人全員が、「自動車があるため他の大型スーパーに行く」、「駐車場がないから行かない」とおっしゃった。やはりモータリゼーションによる影響は大きいと考えられる。また男性（30歳）は「むらいスーパーがなくなってしまったら、代わりになるものがない」とおっしゃった。むらいスーパーは五百石駅の近くにあるスーパーであり、多くの地元住民が利用している。以前の商店街には肉屋や八百屋、お惣菜屋があり、普段の食事に必要な材料はほとんど揃ったが、今では鮮魚店や青果店が残っているだけである。また、五百石の街中には他に大きなスーパーもない。もしむらいスーパーがなくなってしまったら、商店街の近くによる人も減ってしまうため、ますます商店街から利用客が減ってしまうだろう。

70代から80代の方は、昔ほどではないが今でもたまに商店街を利用しているという結果が得られた。中でも病院や薬局のついでに寄っていくという人が多い。しかし、足腰が悪く自動車にも乗れず歩いて行くのが大変なため、利用する商店は駅や病院の近くの商店やむらいスーパーに限られている傾向にある。

どの年代も商店街の利用状況が良くないという結果が得られ、多くの人が「活気がない」という言葉を口にした。

5-6. 地域住民の交流の場としての商店街

私がフィールドワークで商店街を訪れていると、必ずと言っていいほど、毎回どこかの商店の中で近所の方たちが集まっておしゃべりをしている姿を見かけた。立ち話をしている人やお菓子を食べながら座っておしゃべりをしている人など様々であった。私が商店の方にお話を聞きに行った時も、お茶やお菓子を出してくださる方が多く、時には近所の方同士のおしゃべりの輪に入れてくださる時もあった。生活必需品の製造、販売という本来の商店街としての機能が衰退している中で、地域住民の交流の場としての商店街は今も存続していると感じた。

五百石駅に併設されている立山町元気交流ステーション「みらいぶ」は、図書館や文化会館を利用する人はもちろんだが、みらいぶに設置されている椅子に座っておしゃべりをしている人が多くみられた。10代から80代まで幅広い年齢層の方がおしゃべりをしていた。また、5-4で聞き取りを行ったどの年代からも共通して「商店街にカフェや定食屋などの飲食店がほしい」という要望が出た。他にも「みらいぶのような公共施設がほしい」という声も多かった。これらのことから、現在の人々は誰かと一緒に食事をしたり、ゆつくりとおしゃべりをしたり、そういった人々が交流する空間に対する需要が幅広い年齢層から高まってきているのではないかと考えられる。

6. まちなかファーム¹²⁹（図 1）

まちなかファームは天満宮前交差点にある富山信用金庫の南側の休んでかれや跡地に、新しく建設される町の交流施設である。平成 29（2017）年に工事を完了し平成 30（2018）年度中のオープンを目指している。まちなかファームには大きく分けて 3 つの魅力がある。

① 地元食材が味わえる。

まちなかファームには地元で育てた野菜や果物で作った生絞搾りジュースが味わえるカフェスタンドや、パン工房が併設されたベーカリーショップの設置が予定されている。このパン工房では米粉パンが作られる。立山町では地元産のコシヒカリのおいしさを知ってもらおうと、平成 21（2009）年から米粉の普及に努めてきた。パン工房の大きなガラス面からは米粉パン作りの様子が伺え、焼きたてパンの香りが人々を惹きつける。他にも地元産の野菜や加工品を販売するアンテナショップもあり、生産者の熱意と情熱が感じられる。

② 充実したくつろぎスペース。

まちなかファームと富山信用金庫は^{ひきし}庇をつなげて作られるため、その庇下に広がるたてやまマルシェ¹³⁰やデッキテラスなど、爽やかな風を心地良く感じながら過ごせるスペースが作られている。他にもベンチや子供が安全に遊ぶスペースがあり、焼きたてパンや生絞搾りジュースを片手にゆっくりとくつろげるスペースが完備されている。

③ 誰もが気軽に立ち寄れる。

まちなかファームは明るく、外から中の様子が分かる見通しの良い外観となっている。また、たてやまマルシェやデッキテラスなど屋内外がゆるやかに繋がっているため、どこからでも出入りが自由な構造になっている。他にも駐車場やサイクルピットも整備されたり



図 1. まちなかファーム完成予定図（まちなかファーム計画資料より）

り Free-WiFi¹³¹や自習スペースが設置されたりと、人々が気軽に立ち寄ってみたいくなる工夫が施されている。

これらの他にもまだまだたくさん魅力がまちなかファームには詰まっている。5-4 で聞き取りを行った方にまちなかファームを紹介してみたところ、10代から 80 代のほとんどの方が「行

¹²⁹ 参考『まちなかファーム完成予定資料』立山町役場から頂いた、まちなかファームについての説明や完成図予定図が載せられているもの。

¹³⁰ 天満宮前交差点のたまり空間と富山信用金庫のオープンスペースとつながる広場。露店が出店し、飲食ができるオープンスペースとなっている。

¹³¹ 外出先でスマートフォンやタブレット端末などを使って、無料でインターネットに接続できるサービスのこと。

ってみたい」、「魅力がある」と回答した。また「街並みがそろっていい。」という声も聞こえた。

まちなかファームには、カフェが設置されたり充実したくつろぎスペースが完備されたりと、5・6 で記載した人々が交流する空間の需要が満たされるのではないかと考えられる。また、これまで駐車スペースが少なく、かつ駅から少し離れており利用しづらかった五百石中央商店街特有の問題も解消される。そのためこれまで商店街をあまり利用していなかった、10代から50代の集客が見込まれる。まちなかファームはかつての賑わいが失われた中心商店街で、町の魅力を活かし、誰でも気軽に立ち寄れる新しい交流の場、みんなの居場所の創出が期待される。

7. お祭り

五百石では年間を通し多くのお祭りが行われている。本節では春季例祭、立山まつり、風の盆踊り、秋季大祭の4つのお祭りについて記述する。初めに祭りを紹介するにあたり、五百石にある2つの神社を紹介する。

7-1. 五百石天満社（天満宮）（写真9）¹³²

五百石中央商店街の中央交差点に位置する五百石天満社は、文政3（1820）年、松本開の開拓に加わっていた甚七と権蔵の両者が発起してお宮を建て、菅原天神を祀った。同年、朽木兵左衛門が新堀村のご分霊を勧請して村の鎮守としたが、これが現在の天満社である。その後、明治15（1882）年、天満社の拝殿が再造営され、末社の市姫神社も境内に移されると、狛犬・石灯籠・手水舎なども次第に備えられていった。

天満社には、立山御うば尊御宝前鏡が大切に保管され



写真9. 天満社



写真10. 立山御うば尊御宝

¹³² 参考『立山御うば尊御宝前鏡紹介パネル』立山御うば尊御宝についての説明が書かれたパネルで、天満社にある立山御うば尊御宝の前に置かれている。

ている。もとは芦峯寺のうば堂に置かれていたが、明治初めの神仏分離政策に伴う廃仏毀釈運動により、うば堂が破却された際に芦峯寺を離れ、明治 9（1876）年には五百石天満社に安置されたと考えられている。この鏡はうば尊^{れいいづん}の霊験と反応し、映し出された女人を救済する鏡であった。直径 106 センチメートル、重さ 112 キログラムで、和鏡としては現存する日本最大級の鏡である（写真 10）。

7-2. 市姫神社¹³³（写真 11）

市姫神社は五百石天満社の境内にある。^{おおいちひめのみこと}大市比売命 や^{かむおおいちひめのみこと}神大市姫 命 と標記され、またの名を^{おおとしみおやのかみ}大歳御祖神とも^{ちまた}言われている。神大市とは「神々しい立派な市」という意味で、古来、道と道が交差する場所・^{ちまた}衢・街・町に人々が集まり、物が集散し市場が形成されたことによる。市の中心は食物（穀物）であり、そこから市姫も発生した。そのため市場守護の神・商売繁盛・開運招福・女性守護・百貨店の神などの神徳があるとして、日本の商業神として存在する。大市比売命は従来、五百石町松本字東中割 208 に鎮座していたが、天保 2（1831）年、村が岩峯寺より水橋に、上段より富山に出る要路にあたるので、市姫社を道の中央に奉斎した。そしていつしか 2・7 の六斎市¹³⁴が立つようになり、天保 12（1841）年に別に厨子を造営し、天満社の末社とした。



写真 11. 市姫神社

7-3. 五百石天満社の春季祭礼、市姫神社の祭礼

五百石天満社の春季祭礼と市姫神社の祭礼は、かつては 6 月 15 日に行われていたが、滑川市の祭りと日付が重なっていたため、昭和 29（1954）年から 6 月 12 日に変更して行われている。若者からお年寄り、家族連れと毎年多くの人で賑わっている。春季祭礼の見どころは露店の数である。現在約 150～200 軒の夜店が出店しているが、かつては約 300～350 軒もの露店が出店し、商店街の通りを埋め尽くすほどであった。扱う商品も花火・花・茶碗・植木・工具など多種多様な商品を扱っていた。しかしどれも今では以前に比べて容易に手に入るようになったことや、生活スタイルの変化、跡継ぎの問題などから現在ではほとんど見られず、食べ物を扱う露店が主流となっている。また、昭和 45（1970）年ごろまでは 5 区の住民による獅子舞も行われていた。

¹³³ 参考『五百石地方郷土史要』、『富山県神社祭神御事歴』、『日本の神がわかる本』

¹³⁴ 毎月 2 と 7 のつく日に開催される市で、月に 6 回開かれることから六斎市と呼ばれる。

7-4. 立山まつり

立山まつりは、立山舟橋商工会が主体となって、毎年7月下旬の土曜日に行われており、平成29（2017）年で62回目を迎えた。雨天の場合は翌日の日曜日に延期される。立山舟橋商工会前の東西にのびる道がメインの通りとなり、15時～23時の間、歩行者天国（地図7斜線部）になっている。立山まつりの露店は露店商ではなく、商工会や高校生、地元の方によって出店される。かき氷・焼き鳥・唐揚げ・野菜などが売られている。また他にも、立山芸能百選や立山小唄町流し、その他のイベントを行っている。今年は立山町を舞台にした物語を連載する、町田翠¹³⁵さんとのコラボ企画も特設ブースにて行われた。



写真12. 立山まつりの露店の様子



地図7. 立山まつり会場地図（立山まつりポスターより作成）

¹³⁵ 立山町出身の漫画家で、立山町を舞台に描かれている『ようことよしなに』は、自由奔放な「ようこ」と彼女に振り回される「マキ」という2人の女子高生が、ユニークな日常を繰り広げる青春コメディである。

立山芸能百選は立山舟橋商工会前に設けられた特設ステージで行われる。基本的には地元の人だけが参加可能で、持ち時間 10 分の間に歌や踊り、演奏を披露する。毎年 7、8 組が参加している。



写真 13. 平成 29 (2017) の立山芸能百選の様子

立山小唄町流しは、立山小唄に合わせて踊りながら 300～400 メートルの歩行者天国を踊り歩く (写真 14)。立山小唄は 8、9 年前に一旦かわさきに変わったが、やはり情緒がある立山小唄の方がいいとのことで、3、4 年前からまた立山小唄に戻ったそうだ。参加者は各地区の公民館から参加しており、今年は最多の 284 人が参加した。町流しは女性によって行われていたが、昨年から立山町役場の男性職員による男踊りも始まった (写真 15)。五百石公民館で女性も一緒に踊りの練習会を行い、パワーアップした町流しとなった。



写真 14. 立山小唄町流し



写真 15. 男踊り

7-5. 風の盆踊り

大正時代から始まった盆踊りで、毎年 9 月 1 日に中正会¹³⁶が中心となって天満社で行われており、だれでも参加可能である。夜店はなく、中正会の方が焼きそばや焼き鳥、飲み物を用意している。盆踊りは主に 2、3 区の方や、地区外の長年の付き合いがある方の寄付金によって行われている。そのためこれらの食べ物や飲み物は無料で配られている。盆踊

¹³⁶風の盆踊りを始めたころに設立し、3 区の方を中心に組織されている。風の盆踊りの運営の他にも、害虫駆除や五百石地区の住民運動会の企画も行っている。住民運動会は毎年 10 月に雄山中学校で開催され、リレーやムカデ競争、綱引きなどで競い合う。小学生から 70 代の方まで数百人参加する。

りは18時～21時まで行われ、19時ごろから踊りだす。平成29（2017）年は30人以上の方が参加した。音頭取りの方が中央にあるやぐらの上で音頭を取り、そのやぐらの周りを囲うようにして円になって踊る（写真16）。盆踊りは全3曲の5種類ある。2曲目の川崎踊りは小学校でも教わるもので踊れる方が多かったが、地元の人でも5種類すべての盆踊りを踊れる人はなかなかいない。そのため、踊れる演目だけ参加して、参加しないときはおしゃべりをしたり食べたり飲んだりしている方や、見様見真似で踊る方など様々に終始賑わっている。また自己流にアレンジして踊る方など、同じ曲でも踊り方に個性が出るのも面白い。

音頭取りは、盆踊りの歌が好きな人たちで集まってできた会の方たちに依頼している。やぐらの上で全員が交代しながら途切れることなく、2時間ほど歌い続ける。以前は14、5人いたメンバーも、今では女性1人、男性4、5人に減ってきている。音頭取りの方も踊り手も高齢化が進み、盆踊りへの参加人数も減ってきている。盆踊りに参加されていた男性は「昔は23時や24時ごろまでずっとやっていた。人も今よりずっと多くて、天満社の周りを二重三重になって踊っていた」とおっしゃっており、現在よりも活発だった様子がうかがえる。平成16（2004）年以降、天満社の拝殿の中や休んでかれやで踊りの講習会を何回か行ったが、あまり人数が集まらなかったため今はもうやっていない。また、世帯数も減ってきているので、お金もなかなか集まらない状況にある。



写真16. 盆踊りの様子

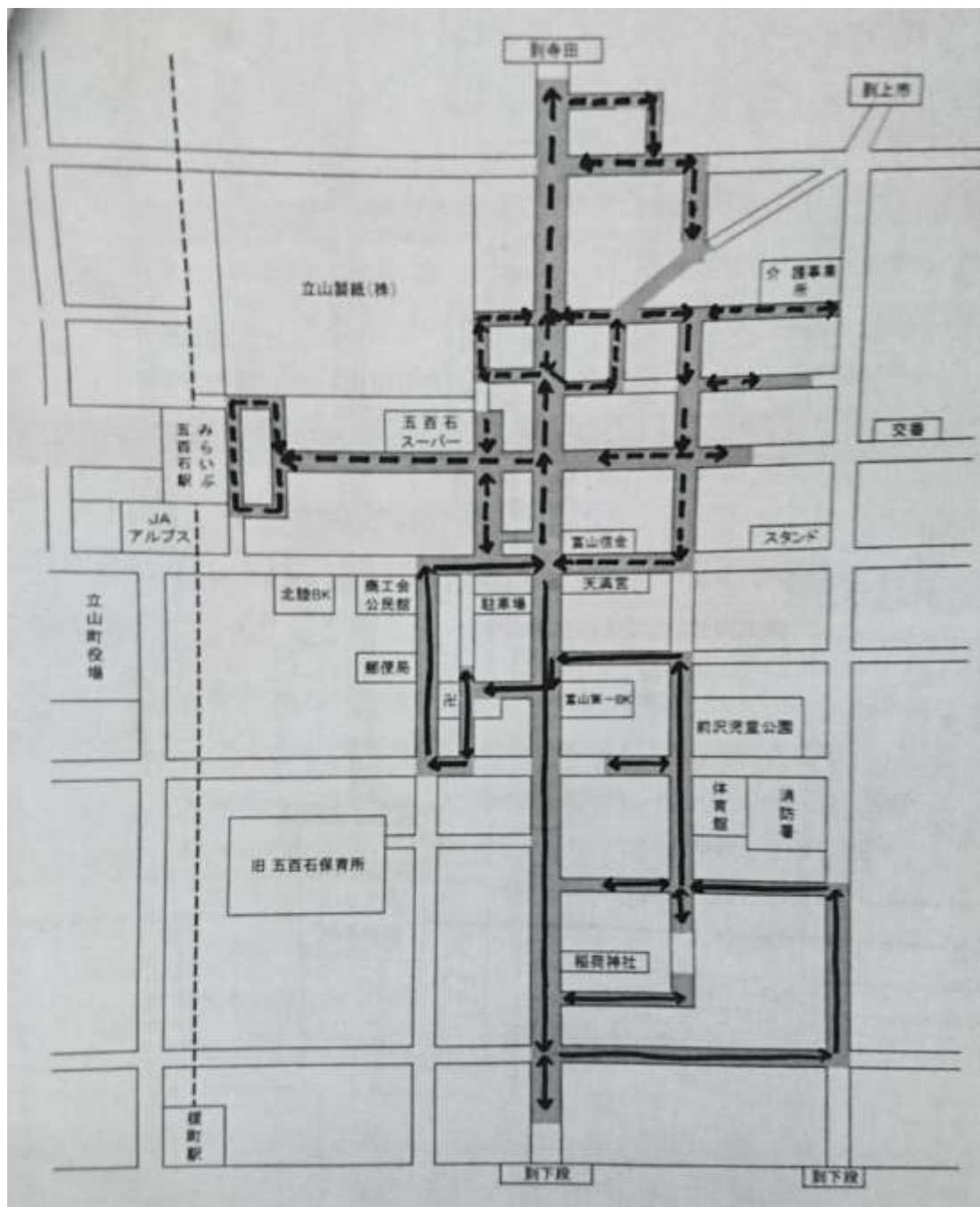
7-6. 五百石天満社秋季大祭¹³⁷

大正4（1915）年から始まった秋季大祭は毎年9月25日に行われ、平成29（2017）年で102回目を迎えた。夜店はなく、神輿と獅子舞が五百石地区の氏子の家を回る。氏子の軒数は年々減っているようで、今年は約430軒の家を回り、神輿は神饌米料を、獅子舞は花代を集める。神饌米料とは、神様に供えるために集めるお米のことだが、現在ではお米に代わり神饌米料と書かれた封筒にお金を入れたものを集めている。

秋季大祭の当日の主な流れは、8時半ごろから天満社で御神体を神輿に移し、その後、獅子舞と稚児舞を披露する。9時から神輿と獅子舞で天満社を境に上手（南側）と下手（北側）に分かれて、順路がぶつからないように氏子の家を回り始める（地図8）。今年は神輿が下手、獅子舞が上手からスタートしたが、回り始めは隔年で上手と下手を交代している。12時にお昼休憩を挟み、13時から上手と下手を交代して神輿が上手、獅子舞が下手を16時半

¹³⁷ 参考『五百石天満社秋季大祭役員資料』秋季大祭の役員の方がもらう資料で、順路やスケジュールなどが書かれている資料。

ごろまで回り続けている。このように、秋祭り当日は朝から夕方まで五百石地区全体を回っているため、歩行者天国のような交通規制はされていない。



地図 8. 五百石天満社秋季大祭順路地図（五百石天満社秋季大祭役員資料より）

7-6-1. 神輿

神輿は五百石自治会（氏子の会）という五百石全 7 区の区長を含む役員によって行われている。大正 4 年に 2 区から奉納された神輿を使っており、高さ 3.50 メートル、横 1.75 メートル、長さ 4.25 メートルある。御神体をどこからでも見られるように、六角形の形をしているのが特徴である。また昔は担いでいたが、20 年あまり前から台車に乗せて引いて歩くようになった。神輿引きは神輿の前に 3 人、後ろに 3 人、交通整備員が神輿の前・後ろ・右に 1 人ずつ配置されている。スピーカーから音楽を流している車が先導し、その後ろを神輿が必ず道路の左側を通行する。

神輿は本来ならば氏子の各家で止まるそうだが、時間内に全ての氏子の家を回れなくなってしまうため、時間の都合上止まらずにゆっくりと進んでいく。神輿には祭主の女性 1 人、男性 4 人の神主がいる。女性の方は天満社の宮司代理を務める禰宜^{ねぎ}¹³⁸で、神輿について回っている。その他の男性の神主は手伝いに来てくださっている方々で、手分けして氏子の各家を回り、玄関で大麻^{おおぬさ}¹³⁹を振ってから祝詞を唱えている。神主さんが祝詞を唱え終わったら、役員の方がソウケ（写真 18）という竹ざるで神饌米料を集めていく。



写真 17 神輿引きの方と女性の宮司



写真 18. ソウケ

7-6-2. 獅子舞

獅子舞は 1 区の下町¹⁴⁰公友会を中心に行われている。かつては春季祭礼の獅子舞を 5 区が担当し、秋季大祭の獅子舞を 1 区が担当していたが、昭和 45（1970）年ごろから 5 区の獅子舞の担い手が人数不足になってしまったためなくなり、現在では秋季大祭に行く 1 区の獅子舞だけとなった。1 区の獅子舞も人数不足の問題を抱えたこともあった。37、8 年程前に当初下町公友会という名で町技のソフトボールチームが結成され、現在は下町ブラザーズという名で活動している。このソフトボールチームに在籍している方の多くが、獅子舞を運営する下町公友会にも在籍し、獅子舞に参加していることや、子供のころに稚児舞

¹³⁸ 祭祀や祈祷を行う神官の位の名称のこと。

¹³⁹ 禰^ねの枝や白木の先に紙垂^{しで}（特殊な切り方をして折った和紙）をつけたもので、お祓いのための祭具のひとつ。

¹⁴⁰ 五百石を三分割した時の呼び名。1 区のあたりを下町、3 区のあたりを中町、5 区のあたりを上町という。

をやった方が大人になって獅子舞に参加していることで現在まで獅子舞を存続している。

本来は神輿の露払いとして神輿を先導する役割だが、スペースの問題や時間の都合上、獅子舞単独で回っている。獅子頭は3体あり、獅子の大きさは男性4人が入れる大きさである。しかし使用する獅子頭は基本的に1、2体で、男性3人が入って舞っている。獅子舞は12種の演目があり、一般の氏子の家では1曲を披露し、立山町役場や保育所、おめでたいことがあった家では稚児舞と一緒に数曲披露している。笛の音で12演目を聞き分けるのがとても難しいそうだ。9月に入ると平日は毎日19時～20時まで子供たちが練習し、20時～21時まで大人の方が集まって練習している。



写真 19. 園児たちの前で披露している獅子舞

稚児舞は中央小学校の1～6年生の男子で行われる。平成29（2017）年は5人の小学生が稚児舞に参加した。学校から認められているため、出席扱いで学校を欠席することができる。以前は中学生以上の男子も含まれていたが、囃子方の人数が減ってしまったため、中学生以上の男子は下町公友会の方たちと一緒に囃子方をやるようになった。しかし、平成29（2017）年は中学生の囃子方は参加していない。稚児舞は頭に花笠を被り、両端に色とりどりの飾りがついた筒を両手に持って舞う。一般の氏子の家を回るときは獅子舞と同様に稚児舞単独で回り、1曲を3人で舞う。獅子舞と一緒に数曲を披露する際には5人全員で舞っている。獅子舞の大きくダイナミックな動きに比べて、稚児舞は様々なステップを取り入れた舞でとてもかわいらしい。

囃子方とは笛や太鼓で獅子舞や稚児舞の祭囃子を演奏している人たちのことである。獅子舞や稚児舞が舞う時の他、移動している際にも祭囃子を演奏し祭りを盛り上げている。囃子方は大人の男性によって行われているが、4年前から子供の囃子方が誕生した。子どもの囃子方は主に笛を担当しており、稚児舞と一緒に街中を回っている。本来では小学4、5、6年生によって行われ、人数が少ないときは他の学年からの参加も募集している。平成29（2017）年は小学3年生が2人、6年生が2人、高校1年生が1人の計4人の女子が参加していた。この高校生の方は、子供の囃子方ができた初代メンバーのうち



写真 20. 稚児舞（右）と子どもの囃子方（左）

の 1 人である。女子だけという決まりはないが稚児舞が男子だけということもあり、その対照として女子がメインで構成されている。

おわりに

五百石は水利が不便だったことや土壌が水田に向かない腐植土であったことなどの原因により、開拓されてからまだ年月が浅い町である。それにも関わらず、明治期以降は地方商業都市として発展し、周辺の地域の生活の基盤を支えていた。半世紀ほど前には 100 軒以上の商店が軒を連ね、立山町全体から訪れる多くの買い物客で賑わっていた。現在、五百石中央商店街は時代の流れとともにその商店数は 20 軒ばかりまでに減少し、かつての栄えていた頃の様子とは大きく違うものになっている。商店街の衰退は全国的に当てはまることであるが、五百石の商店街は特に平成に入ってから衰退が著しい。

しかし多くの商店で賑わったかつての商店街と現在の商店街を比較してみると、商店街が地域住民の交流の場となっているということは変わっていないと感じた。1 日の仕事終わりに商店街の仲間と商店街にある居酒屋に行ったり、買い物に行ったつもりがついついおしゃべりして長居してしまったり、今もなおオリジナルな商品を求めてお得意先の商店を利用し続けたり。こうした地域交流を通して商店街独自の味が生まれ、活気につながっていくのではないだろうか。近所付き合いが希薄化し、メディア媒体のコミュニケーションが増加している現代で、地域住民の場の重要性は高まっている。商店街は衰退していても、地域住民の交流は変わらず行われている。様々な要因が考えられるが、その中でも地域交流の有無は今後の商店街の存続の鍵となると感じた。平成 30（2018）年度中にオープンされるまちなかファームは、こうした地域交流の拠点となり商店街の賑わい創出を担っていくことが期待される。

また、五百石では地元の方を中心とした多くのお祭りが行われており、その中心はすでに 100 年以上の歴史を有する。担い手不足、氏子の減少、資金難などで消滅していくお祭りがある中で、その規模は縮小傾向にあるものの、こうした多くの伝統あるお祭りが行われ続けていることは素晴らしいことである。春季祭礼には若者から高齢の方、家族連れまで多くの人が訪れ、立山祭りでは商工会や高校生、地元の方と触れ合えるいい機会となっている。風の盆踊りではみんなで一体となり一つの盆踊りを作り、秋季大祭では子供たちの一生懸命な様子を笑顔で見守る。こうしたお祭りという伝統行事を通した非日常的な地域交流が行われることにより、さらに地域のつながりを深め、現在まで多くのお祭りが継承されているのであろう。

私がフィールドワークの際に感じた五百石の方々の温かさ、日々行われている地域交流の賜物なのではないだろうか。またそれは風の盆踊りと秋季大祭への参加を通して、確信的なものに変わった。これまでフィールドワークで五百石を訪れた際に、地域交流は行われていたものの、それは個々に行われているもので、五百石全体でみると少し地域のつ

ながりにかけるように感じた。しかしお祭りに参加してみると、皆が一丸となってお祭りを盛り上げ、おしゃべりをし、楽しみ、地域のつながりや五百石への愛を強く感じた。これが本来の五百石の方々の地域交流であるのではないかと思われた。これからも豊かな地域交流が育まれ、賑やかな五百石中央商店街を願っている。

謝辞

今回調査を行うにあたり、ご協力いただいたすべての皆様に、心からお礼申し上げます。特に五百石中央商店会の皆様には、お忙しい中にも関わらず何度も丁寧に対応してくださり、数多くの貴重なお話を聞かせて頂きました。

また、風の盆踊りと秋季大祭に参加させて頂いた際には、突然の訪問にも関わらず快く受け入れてくださり、誠にありがとうございました。大変貴重な体験をさせて頂きました。私自身にとって忘れられない思い出となりました。皆様のご協力のおかげで、このような形で報告書をまとめることができました。本当にありがとうございました。

参考文献

- 立山町 昭和 59 年 2 月 15 日 『立山町史 下巻』
佐藤礒五郎、中川清邦著 昭和 19 年 10 月 10 日 『五百石郷土史』
立山町郷土資料館 『立山町郷土資料館企画展リーフレット』
立山町役場 『まちなかファーム完成予定資料』
五百石区域小学校長会郷土史研究部 昭和 10 年 12 月 8 日 『五百石郷土史要』
富山県神職会 大正 13 年 『富山県神社祭神御事歴』
戸部民雄著 平成 17 年 『日本の神がわかる本』
石原与作文責 昭和 46 年 4 月 『五百石開町百五十年奉祝記念』
石原与作原図 『安政年間の五百石町』、『文久開打立帳』
荒城良昭 昭和 57 年度富山大学卒業論文 『松本開の成立とその背景、及び機能に関して』

参考にしたウェブサイト

- 『統計たてやま』
(<http://www.town.tateyama.toyama.jp/tokei/index.html> 閲覧日 2017 年 12 月 29 日)
『立山町役場ホームページ』
(<http://www.town.tateyama.toyama.jp/pub/> 閲覧日 2017 年 12 月 22 日)

地域ブランドの現状と課題—立山ブランドの事例から—

藤原 倅太

はじめに

私が「立山ブランド」の存在を知ったのは、五百石駅にある立山ブランドのポスターを見かけたときだった。立山ブランドは平成 23 年に立山町が創設し運営を始めた取り組みで、立山町の名物を発信し町の活性化を図るものであると知った。創設から 7 年目を迎え、ブランドに認定された事業者の方は立山ブランドについてどのような思いを抱いているのか、と興味を持ち、立山ブランドの現状について調査することを決めた。

立山ブランドに認定されている事業者の方と、立山町役場の方への聞き取りを中心に調査を行った。また、認定品の紹介や過去の運営事業の推移は、立山町ホームページやチラシ、いただいた資料を参考にした。それによって、事業者の方が何を感じているか、立山ブランドに認定されることで何が変化したかを知ることが出来た。

以上の調査をもとに、本章では第 1 節に立山ブランドの概要を記述し、第 2 節に町の立山ブランドの方針を記述する。続く第 3 節では事業者の方からの聞き取り調査を基に、事業者の方の思いや要望を記述する。第 4 節ではこれまでの調査を通して、メリットや問題点について考察する。

1. 立山ブランドの概要

本節では、立山町の資料¹⁴¹を基に立山ブランドの形式や仕組みについて記述する。

1-1. 創設の背景

立山町には世界中から年間 100 万人もの多くの観光客が訪れる、立山黒部アルペンルート¹⁴²が存在する。立山黒部アルペンルートが大きな観光資源であるがゆえに、立山町の市街地や平野部は素通りされることが多く、経済効果の波及範囲が山岳観光地帯のみに限定されてしまっているのが現状である。

そこで、平野部も経済効果を享受可能なものとするため、観光客誘致に取り組まなければならない。誘致のためには観光地域としてのプラットフォーム（土台となる環境）が必要である。さらに、立山町には北アルプスから流れる豊富な水と味の良い米があるが、必ずしも観光の目玉として活用できているというわけではない。地域ブランド力の獲得、農

¹⁴¹ 『立山ブランド認定制度の概要について』「1 立山ブランド事業創設の概要の背景」より

¹⁴² 立山黒部アルペンルートは標高 3,000m 級の峰々が連なる北アルプスを貫く世界有数の山岳観光ルートである。富山県側の立山町「立山駅」から長野県側の大町市「扇沢駅」まで乗り物を乗り継ぎ、いくつもの景勝地を通り気軽に、立山黒部の雄大な自然を満喫することができる。

産物産地としての知名度アップ、米に代わる農産品及び加工品の開発、消費者と直接結びつく流通の仕組み作りなどにより、出荷価格の底上げを目指す必要がある。

これらのことから、農林水産業、商工業、町の連携により、地域の農産物・加工品をブランド化し、地域活性化への好循環を図る取り組みが進められた。そこで平成 23 年度に立山町によって創設されたのが「立山ブランド」である。

1-2. 立山ブランドの目的

上記の創設の背景になる課題を解消するために立山ブランドには 3 つの基本理念が設定されている。1 つめは「年間 100 万人が訪れる立山黒部アルペンルートの観光客をターゲットとする」。2 つめは「町の農産物・加工品を全国へ広め、立山町のイメージアップを図る」。3 つめは「農産物の生産者や加工品の製造者とも連携し、雇用促進などの町全体の活性化を図る」。以上の 3 つの基本理念により、課題解消とともに下図のように地域活性化への好循環サイクルを作り上げるのが目的である。

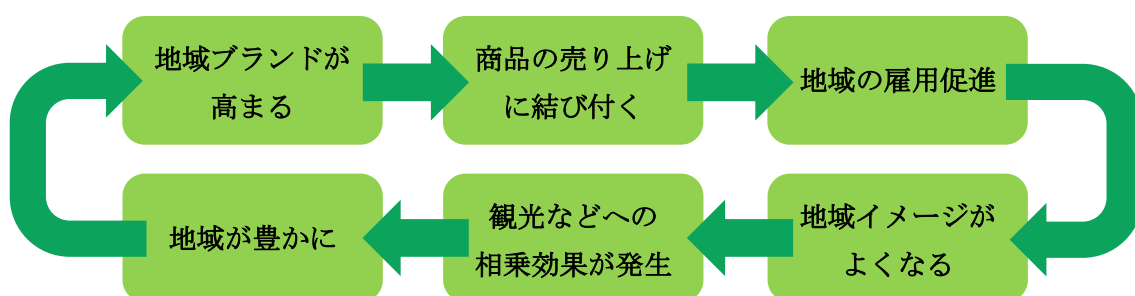


図 1. 好循環サイクルのイメージ

1-3. 審査方法

立山町では書類審査および必要に応じてヒアリング調査を行い、立山ブランド認定委員会が認定品を決定する。書類とともに見本または現物を提出しなければならない。

期限は認定された年から約 3 年間あり、有効期限が切れた場合、再認定を申請しなければならない。また、前例はないが、認定品が認定の基準に適合しなくなったと認められた際には、認定が取り消される場合がある。

1-3-1. 立山ブランド認定委員会

立山ブランド認定委員会は県内外の有識者で構成されている。氏名の公表は控えられているため、属性のみ記述する。学識経験者（観光・ブランド等を専門とする大学教授）、学識経験者（農林水産省 6 次産業化プランナー）、特産品アドバイザー（富山県アンテナショップ職員）、観光関連会社バイヤー経験者（立山黒部貫光（株）職員）、農業関係者（JA アルプス職員）・町職員（関係課長）が構成員である。

1-3-2. 審査基準

審査基準は以下の 5 つがある。

- ①立山の特産品の使用や食文化・伝統に根差しているというような「立山らしさ」。
- ②特別の製法や厳選の規格を設定するなどの「独自性・優位性」。
- ③自然由来の着色料や徹底した品質管理など食の安全についての「品質管理」。
- ④認定の付加価値による新規雇用の期待や、産地見学会・体験農業の開催などの「地域貢献」。
- ⑤認定の付加価値による生産・消費拡大が期待できる「ビジネスへの活用」。

これらを総合的に判断し認定を決定する。

1-4. 制度のメリット

この節では町の考える立山ブランドに認定されることの主なメリットを記述する。

まず第一に立山ブランド認定マークの使用が承認される。(図 2) これにより町が推奨する商品であることが一目でわかる。次に宣伝のために立山町広報・ホームページへの掲載がされる。立山町のホームページにて特産品・グルメのページで紹介がなされており、Facebook でも「ぜんぶ、立山。」¹⁴³というアカウントで立山ブランドの情報を発信している。3 つめに認定商品紹介チラシの作成がある。生産者の方の紹介がされており、どんな人が携わっているか知ることができる。また、認定のポイントが細かく掲載されており、認定品について詳しく知ることができる。そして最後に販路拡大の支援がある。複数の事業者と町ぐるみで新商品の開発に取り組んだ事例や、パッケージデザインの変更を支援した事例があり、東京で行われる町物産展への出品も支援される。



図 2. Facebook「ぜんぶ、立山。」



図 3. 立山ブランドマーク

(ホームページ「立山ブランドマークについて」より)

¹⁴³ <https://www.facebook.com/TateyamaBrand>

1-4-1. 支援の具体的内容 立山生まれの天然水の場合

現在町ぐるみで新しい立山ブランドのミネラルウォーター「立山生まれの天然水」の製造が始まっている。立山ブランド認定事業者でもあるミネラルウォーターを製造している3つの会社、「宝水株式会社」、「大観峯株式会社」、「匠美株式会社」と町が共同で主な観光客である台湾人の意見を参考に開発したものである。

1-5. 立山ブランド認定品

この項では現在の立山ブランド認定品を紹介する。この項の画像は立山町 HP¹⁴⁴にある画像を加工したものである。

● 立山のちから米 (株) たてやま

平成 23 年度第 1 回立山ブランド認定

立山のちから米は棚田が広がる中山間地域が産地であり、白岩川の清流と寒暖差の大きい気候が米の甘さを引き出している。また、地元東谷¹⁴⁵の和牛たい肥を使用した土づくりを行い、品質管理にも高い基準を設けている。

商品名の「ちから米」は、立山の「地から」、土地の「力」を感じて欲しい、との願いを込めて名付けられたもので、立山の風土と農家の志が結びつき誕生したお米である。5kg3600 円で「ぜんぶ、立山。」にて販売されている。(平成 29 年度 12/21 現在)



● 立山もも (プレミアム) 農事組合法人 たてやま営農組合

平成 23 年度第 1 回立山ブランド認定

雄大な自然が育くんだ立山ももの美味しさを、なんとかいろんな人に伝えたい。その思いから、樹上完熟で甘さを引き出し、販売は朝採れのものにこだわっている。立山ももには糖度 14 度以上、収穫から 2 日以内という厳しい規格を設定している。



¹⁴⁴ <http://kanko.town.tateyama.toyama.jp/stroll/index.html>

¹⁴⁵ 富山県新川郡立山町東谷地区を指す。東谷地区は古い民家、のどかな風景、大きな棚田など日本の原風景が広がっている。

● 乳酸菌発酵竹茶 福竹茶 (株) ビオロジックノザコ

平成 23 年度第 1 回立山ブランド認定

現在手入れの届かない竹が里山荒廃の原因のひとつとなっているとされる。その荒廃を防ぐため伐採した竹の有効な利用策として、竹を粉碎機で細かく粉状にし、乳酸発酵させたものを原材料とするお茶である。その乳酸発酵した竹パウダーには、体に必要な 20 種類のアミノ酸がバランスよく含まれている。カフェインが入っていないため妊娠・授乳中の方でも安心して飲むことができる。ティーバッグ 15 包入り 1,699 円で Bamboo Café¹⁴⁶ (ネットショップ) にて販売されている。



● 立山町四谷尾産 ラ・フランス ストレートジュース 上東果樹生産組合

平成 23 年度第 1 回立山ブランド認定

地元の和牛たい肥で行う畑の土づくりやラ・フランス (洋梨) の実のひとつひとつにかける 2 重のロウ付袋など、作り手が手間ひまを惜しまず丁寧に育てている。その努力が発色の良いラ・フランスストレートジュースを生み出しており、濃厚さを際立たせている。200ml ビン 10 本¥3,980 で「ぜんぶ、立山。」にて販売されている。



● 立山のナチュラルミネラルウォーター (株) 宝水 (株) 大観峯 (株) 匠美

水の王国 立山の清水 平成 23 年度第 1 回立山ブランド認定

立山四季の水 平成 27 年度第 5 回立山ブランド認定

立山に降り積もった雪が長い年月をかけ、自然のろ過装置の力によって良質なミネラルを含んだおいしい水となっている。加えて、採水地の近くには大規模な工場などが無く、水源付近の環境が守られている。立山町で農産物や加工品を生産する人の多くが、「立山の水でつくっている」という誇りを持っており、町民からの評価も高い。水の王国 2L×6 本×2 ケース 3,100 円で「ぜんぶ、立山。」にて販売されている。



¹⁴⁶ Bamboo Café <http://www.take-cafe.com/fs/bamboo/c/takecya/>

● 立山権現かんもち「紙風船」 立山権現「編みかんもち」

農事組合法人 食彩工房たてやま

立山権現かんもち「紙風船」 平成 23 年度第 1 回立山ブランド認定

立山権現「編みかんもち」 平成 25 年度第 3 回立山ブランド認定

暖房もつけない作業場の中、杵で餅をつき、山から吹き下ろす寒風で自然乾燥させる伝統の製法にこだわり製造している。着色はすべて自然由来のもので行われており、安心安全で昔ながらの立山の食文化を味わうことができる。



「紙風船」は、紙風船に通常の半分サイズのかんもちが 3 個入っており、風船ごと電子レンジで温めると、かんもちが膨らむ力により風船も膨らむというユーモアのあるお菓子である。紙風船はかつて富山の薬売りが、お客さんに渡していたことにちなんでいる。編みかんもち 20 枚 1,000 円 紙風船 3 袋入り 556 円 食彩工房たてやま（ネットショップも有）にて販売されている。

● かあさん漬け JA かあさんの店

平成 24 年度第 2 回立山ブランド認定

「ただの漬物ではなく、健康づくりにつながる食品であることが重要であり、本物の味にこだわり、野菜の力を借りて、みなさんの健康のお手伝いをしたい」という信念のもと製造されている。漬物を健康加工食品と位置づけ、化学調味料・保存料・着色料は使用しない、野菜が旬のうちに漬け込む、すべて自然由来の材料で漬ける、などかあさん漬けの製造にはいくつかのルールが存在し、安心安全へのこだわりがある。



様々な種類があり、きゅうりやみょうがの粕漬けやかぶの甘酢漬け、うどの味噌漬け、ぜんまいの醤油漬けなどがある。1 パック 200～300 円で JA アルプス立山 農産物直売所にて販売されている。

● 立山三六そば 立山そば推進協議会

平成 24 年度第 2 回立山ブランド認定

寒暖差のある立山町はそば作りに適した地域であり、自然に恵まれた環境の中で減農薬や有益昆虫に配慮した農法など、手間ひまを惜しまず育てたそばを使用している。

日本の北緯 36 度地帯にはそばの名産地が連なっており、「三六そば」というネーミングは「山麓」にかけているとともに、他のそばどころに負けないという自信を表している。200g×5 束入り 2,800 円で「ぜんぶ、立山。」にて販売されている。



● おかゆっこしろがゆ 有限会社 立山ファーストコーポレーション

平成 25 年度第 3 回立山ブランド認定

真心込めて育てた特別栽培米コシヒカリ 100%を、安心安全の無添加で、丁寧に立山の湧水で炊きあげている。良質のお米を作るため、30 年前に有機質の土壌作りから始めた。土づくりからの地道な努力が、あたたかくどこか懐かしい味を生み出している。24 食入り 3,600 円で「ぜんぶ、立山。」にて販売されている。



● 立山シフォン 米っ粉倶楽部

平成 25 年度第 3 回立山ブランド認定

立山町産のコシヒカリと卵を使用した、地元への愛着とおいしさがこめられた米粉 100%のシフォンケーキ。「子どもからお年寄りまで安心して食べてほしい」そんな願いが込められたシフォンケーキは安心安全の無添加で、製粉作業をはじめ焼き上げまですべて手作業で仕上げられている。



● 立山の農家が作ったみそ 農事組合法人いこいの杜

平成 25 年度第 3 回立山ブランド認定

このみその特徴は、原材料の大豆・米が自家製産品であることである。生産から加工まで農事組合法人いこいの杜で行われており、安心安全なみそである。伝統的な味を引き継ぐため、地元で評判の名人と若い世代が共に働いている。昔から立山町に伝わる伝統的な味を味わうことができる。



800g×2 2,000 円モンベルオンラインショップにて販売されている。

● 越中瀬戸焼 陶農館

平成 26 年度第 4 回立山ブランド認定

今から約 420 年前、加賀藩二代目藩主前田利長が立山町新瀬戸地域で採れる良質な粘土「白土」に注目し、尾張の瀬戸から陶工を呼び寄せて加賀藩ご用達窯として陶器を焼かせたのが、越中瀬戸焼の始まりである。現在でも 4 つの窯元、5 人の陶芸作家が積極的に活動している。各陶芸作家それぞれの個性は様々ながら、古来の釉薬の色や技術を忠実に受け継ぎ、質の高い器がそろっている。



1-6. 販売場所

平成 29 年 8 月時点での立山ブランド認定品販売取扱店を表で記した。立山町役場でいただいた資料を基に作成した。

表 1. 立山ブランド認定品販売取扱店

認定品	店舗
立山のちから米	①
立山もも	②
乳酸菌発酵竹茶福竹茶	①
立山連峰の清水他	①②⑩百選横丁（ネットショップ） ¹⁴⁷
水の王国他	①

¹⁴⁷ ほたるいか、白エビなどの北陸のご当地グルメを全国に発信するとともに、全国のご当地グルメを販売している通販サイト。北陸電力グループの企業である、(株)北電産業が運営している。 <http://hyakuyoko.com/>

ラ・フランスジュース	①②⑤⑫⑬⑱
	日本橋とやま館 ¹⁴⁸
	富山地方鉄道（車内販売）
立山権現かんもち	①⑥⑦⑰
	JA タウン（ネットショップ） ¹⁴⁹
	全農ギフト ¹⁵⁰
かあさん漬け	①③⑬
立山三六そば	①③
おかゆっこしろがゆ	①③
立山シフォン	①③⑧⑨
越中瀬戸焼	①④⑪⑮⑯
立山四季の水	①百選横丁（ネットショップ）
立山の農家が作ったみそ	①③⑦⑧⑩⑭
	モンベルフレンドマーケット ¹⁵¹

¹⁴⁸ 2016 年 6 月にオープンした。食文化や工芸品などの富山の魅力を首都圏へ発信し、観光やビジネスなど多方面にわたる交流の場となっている。

¹⁴⁹ 全国農業協同組合連合会（JA 全農）が運営する、通販サイトのこと。「もっと近くに美味しいニッポン」をテーマに、全国の農協・生産者などが、各産地で育まれた農畜産物や特産品を、インターネットを通じて消費者に直接お届けするサービス。

<http://www.ja-town.com/shop/pages/about.aspx>

¹⁵⁰ 富山県 JA グループが発行しているカタログ誌に「ふるさとギフト」として掲載されている。

¹⁵¹ モンベルグループが全国各地のこだわり商品を販売している通販サイト。モンベルグループは、アウトドアスポーツ用品の企画、製造、販売を行っている（株）モンベルをはじめとする 7 つの会社から成る。

<http://webshop.montbell.jp/goods/category.php?category=484>

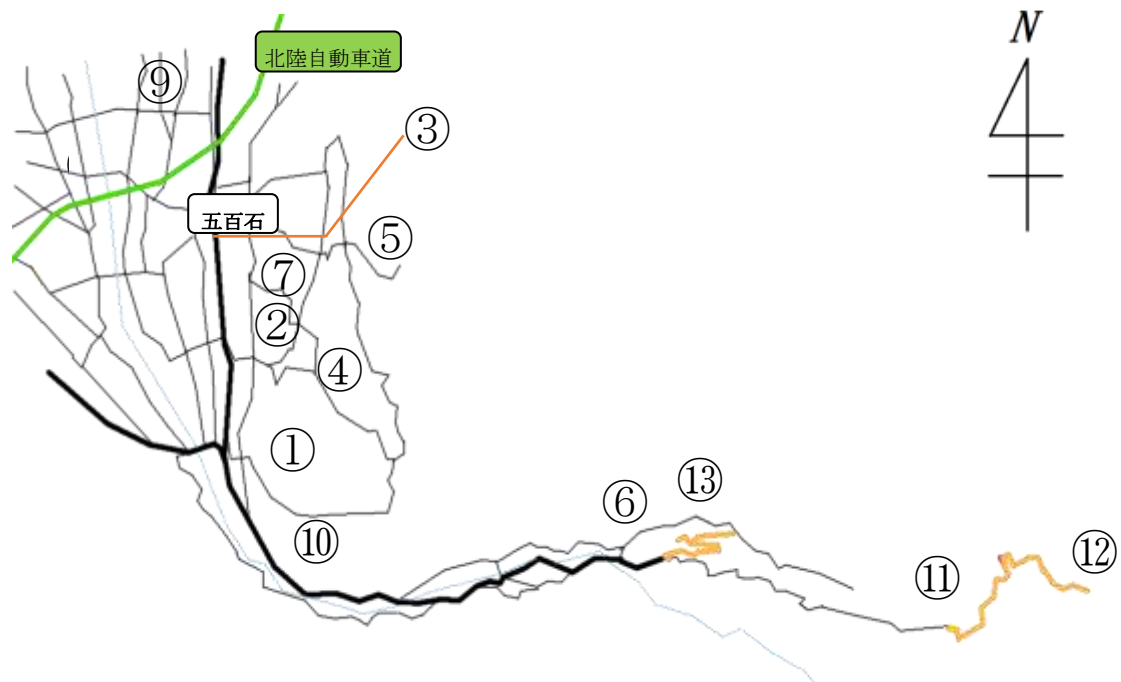


図 4. 五百石駅周辺地図

表 2. 五百石駅周辺の立山ブランド認定品販売取扱店

①グリーンパーク 吉峰	富山県中新川郡立山町吉峰野開 12
②立山もも生産組合直売所	富山県中新川郡立山町上金剛寺 596-2
③JA かあさんの店 (JA アルプス農産物直売所)	富山県中新川郡立山町前沢 1216
④越中陶の里 陶農館	富山県中新川郡立山町瀬戸新 31
⑤立山自然ふれあい館	富山県中新川郡立山町四谷尾 177
⑥グリーンビュー立山	富山県中新川郡立山町千寿ヶ原 1
⑦農事組合法人 食彩工房たてやま	富山県中新川郡立山町金剛寺 270
⑧そよかぜ農産物直売所 (藤ノ木店)	富山県富山市開 286
⑨モンベル立山店 (ハーベステラス)	富山県中新川郡立山町五郎丸 350-1
⑩立山あるぺん村	富山県中新川郡立山町東中野新 143-1
⑪弥陀ヶ原ホテル売店	富山県中新川郡立山町芦峯寺弥陀ヶ原
⑫アルペンルート ホテル立山店	富山県中新川郡立山町芦峯寺室堂
⑬立山駅	富山県中新川郡立山町千寿ヶ原

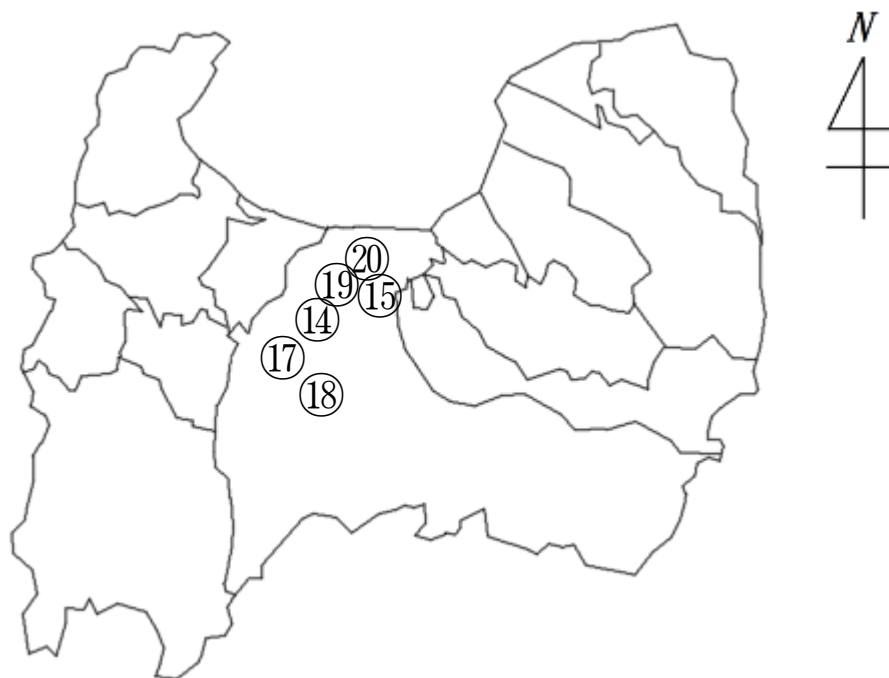


図 5. 富山県地図

表 3. 五百石駅周辺以外の立山ブランド認定品販売取扱店

⑭そよかぜ農産物直売（掛尾店）	富山県富山市今泉 172-1
⑮富山大和	富山県富山市総曲輪 3 丁目 8-6
⑯富山クラフト（JR 富山駅「とやマルシェ」内）	富山県富山市明輪町 1-220
⑰富山空港ターミナル	富山県富山市秋ヶ島 30
⑱リバーリトリート倶楽部	富山県富山市春日 56-2
⑲寿屋 業務用卸部	富山県富山市下赤江町 2-5-38
⑳ホテルパークイン富山	富山県富山市桜町 2 丁目 6-7

1-6-1. 「ぜんぶ、立山。」

「ぜんぶ、立山。」とは、富山県立山町の自慢の特産品を販売しているショッピングサイトである。facebook にて立山町のブランド「立山うまれ」をはじめ、地域特産品や、原材料が立山町産のものを中心に紹介している。（図 6）facebook の更新は月に一、二度ずつされており、旬の食べ物のレシピや観光物産展の紹介も行われている。外国人観光客の半分以上を占める台湾の観光客を対象とした、中国語の繁体字を使った紹介も見られる。運営は（株）たてやまが行っている。



図 6. 「ぜんぶ、立山。」販売の様子

1-7. ふるさと名物応援宣言

ふるさと名物応援宣言とは、中小企業庁が地域経済の活性化を進めるために行っている取り組みである。立山町は平成 28 年 8 月 27 日に全国で初めて、ふるさと名物応援宣言を発表した。

1-7-1. ふるさと名物応援宣言の概要¹⁵²

この節では、ふるさと名物応援宣言の目的、メリットを記述する。

地域資源あるいはこれを活用した商品等のブランド化により、地域資源を核とした地域産業の付加価値が高まり、地域経済の自律的な好循環をもたらすことを目指す。

こうした好循環を実現するために、市町村において、地域を挙げて支援を行う「ふるさと名物」を特定し、「ふるさと名物応援宣言」として、積極的な情報発信及び地域を挙げた取り組みを牽引することを促進する活動である。

応援宣言を行うことで、関連する地域資源活用事業について国の補助金を優先的に受け取ることができる。



図 7. ふるさと名物ロゴ

1-7-2. 立山町のふるさと名物応援宣言の概要

「立山の風土(F O O D)を器(越中瀬戸焼)で味わう、うまい米と水 応援宣言」と銘打ち、富山（立山）米、立山の名水、越中瀬戸焼の 3 つの地域資源が紹介されている。立山ブランドや米粉メニューの開発などの立山町の取り組みの他に、台湾向けの商品の開発など今後の展開についても発表されている。

1-8. 立山ブランド運営事業の推移

この節では立山ブランド創設からこれまでの主な事業内容を表で記す。◇は海外へ向けた活動を示している。

表 4. 立山ブランド運営事業の推移

年度 (平成)	事業内容
23 年度	立山ブランド認定制度創設 ◆ 第 1 回立山ブランド認定...応募品 12 品うち 6 品 ◆ 立山ブランド認定委員会設置規定作成 ◆ 認定マーク作成/マーク管理取扱基準作成

¹⁵² ミラサポ ふるさと名物応援宣言

<https://www.mirasapo.jp/shigen/information/support.html>

	◆ 各種認定品チラシ作製開始
24 年度	◆ 立山ブランド認定委員会として運営開始 第 2 回立山ブランド認定...応募品 3 品うち 2 品 ◆ フェイスブック「ぜんぶ、立山」運営開始 ◆ 首都圏物産展での販売 ◆ かあさん漬ラベル作成
25 年度	◆ 第 3 回立山ブランド認定...応募品 4 品うち 4 品 ◆ ひかりネット（通販）登録案内
26 年度	◆ 第 4 回立山ブランド認定...応募品 1 品うち 1 品 ◆ 「広報たてやま」裏表紙に立山ブランド特集記事を掲載し、町民へのブランド認知度向上を図った ☆ 越中瀬戸焼ほか、台湾物産展出店 ◆ ブランド全体のポスターを作成 ◆ ラ・フランス果実を県内百貨店フルーツショップへ出荷
27 年度	◆ 第 5 回立山ブランド認定...応募品 6 品うち 1 品 ◆ 「ふるさと名物応援宣言」を公表 ☆ 越中瀬戸焼ほか、台湾物産展出展 ☆ 海外販路開拓支援（ナチュラルウォーター、おかゆっこ白がゆ）
28 年度	◆ 第 6 回立山ブランド認定...再認定のみ ◆ 大学と連携した特産品開発（米粉菓子、包装としての風呂敷開発）
29 年度	◆ 第 7 回立山ブランド認定...再認定のみ

（出典 「立山ブランド認定制度の概要について」 H29/6/22 立山町商工観光課）

ブランド創設から年が経つにつれ、認定応募品が減少している。27 年度まではブランド認定が行われていたが、28 年度と 29 年度は再認定のみとなっている。役場の方によると、平成 28～29 年度は新規の受付をいったん休み、既存のものの販路開拓の取り組みに注力する方針で進めているようだ。例としては、「平成 28～29 年度 ラ・フランスジュース新商品開発（開発案：サイズダウン&ラベル更新）」や「平成 28 年度 米粉商品 ラ・フランス加工品開発（プチギフトとしてのお菓子開発）」を行っている。

来年度以降は新規受付を行う方向で検討中となっている。

1-9. 予算

立山ブランドは基本的に町が財源となっている。基本的にというのは首都圏観光物産展への出品といった、立山ブランドを販売するイベントに補助金がおりの場合がある。補助金を利用する場合は、様々な制限がかかる場合があるため、できるだけ利用はしない方針

であるそうだ。

平成 29 年度の予算は 51 万円であり、年々減少傾向がみられる。予算のない訳はリーフレットやシールなど印刷代がほとんどで、PR 費に重点を置いている。

1-10. 立山町インターカレッジコンペティション

立山町インターカレッジコンペティション（以下、立山コンペ）は、立山町の地域内だけでは解決できない課題を、学生の持つ知識やアイデアで解決し地域活性化を図るとともに、大学には立山町という生きた学びの場を提供する。学生の優れた提案を実証実験することで、提案内容の実効性を検討できる機会を作ることを目的として平成 24 年度から開催されている大学生を対象としたコンペティションである。もっとも優秀なアイデアは翌年に、立山町が実証事業として取り組む。

全国的に見て、このようなコンペを 6 年間継続しているケースは珍しく、遠方の大学の参加もみられる。これまでの参加大学は、跡見学園女子大学、桜美林大学、近畿大学、神戸国際大学、昭和女子大学、千葉工業大学、東海大学、獨協大学、富山大学、富山国際大学、明治大学、武蔵野大学、山口大学、琉球大学、流通科学大学、金沢大学、石川県立大学、帝塚山大学、立教大学の 19 大学である。

コンペの提案では、立山ブランドの活用法を提案する内容のものが多くあり、立山ブランドが町をアピールする要素の 1 つであることがよくわかる。

表 5. 最優秀賞を受賞した大学一覧（立山町ホームページより）

年度 (平成)	大学	発表タイトル
24 年度	獨協大学 外国語学部交流文化学科英語学科	100 万人を魅了する町、立山 ～アルペンルートのゲートウェイタウンを 目指して～
25 年度	山口大学 経済学部経営学科 藤田ゼミ	「マーケティングタウンをめざせ！ ～ 立山町マーケティングのプラン提案～」
26 年度	獨協大学 外国語学部交流文化学科・経済 学部国際環境経済学科 米山ゼミ・遠藤ゼ ミ合同チーム	「次世代の若者が作る立山 MOVEMENT ～町民がまちづくりに本気参戦～」
27 年度	跡見学園女子大学 マネジメント学部 観 光マネジメント学科 村上ゼミ 2 年生	「きときと再生プログラム～「学び」で広 がる絆と愛～」
28 年度	明治大学	「文化体験の町～立山～ 山岳信仰と立 山曼荼羅を巡る」
29 年度	桜美林大学 ビジネスマネジメント学群 渡邊ゼミ	Produced by 女子大生 立山ブランド大 変身！～お土産でまちなかから山村支援～

2. 町の方針

この節では、立山町役場の商工観光課の方に伺ったお話を基に、立山ブランドに関する立山町の方針を述べる。

町の立場としては、事業者に口を出したりするのではなく、あくまで事業者の自主性を重んじており、何か相談がある際に町を頼ってほしいとする立場という。普段はPRに徹しており、町は事業者から何か意見があれば対応するとし、事業者の自主的な活動を重んじている。立山シフォンを製造している「米っ粉倶楽部」は自主的に折り込みチラシを作成し、北日本新聞の物産を斡旋する取り組みに選ばれた。そんな「米っ粉倶楽部」のように自ら積極的に活動し、販路を拡大してほしいというのが町の考えであるようだ。

2-1. 事業者の方への要望

事業者の方に対する要望を伺ったところ、2つ話していただいた。

1つめは、認定事業者が集まって協議会を作り、代表を設定してほしいという意見である。現在は各事業者がバラバラに町と関わっている状態であり、効率が悪いと統率を図るべきなのではないかという考えである。

2つめは、認定当初のころには事業者の参加した立山ブランドに関する勉強会が催されており、それを再び開催して盛り上げてほしいという意見であった。

「1-9 予算」でも述べたように、予算も限られていることもあり、認定事業者による自主的な活動を奨励しているという印象が大きかった。

3. 事業者の方の思い

立山ブランドについて私が最も重要だと考えていたのは、認定事業者の方たちの考えである。認定事業者の方たちが感じている思いについて、話していただいた内容をもとに記述する。

3-1. 申請した理由

多くの事業者の方に共通していた理由としては、「町の後ろ盾を得られるから」というものであった。立山ブランドに認定されるということは、町のお墨付きを得るということの意味し、北アルプスを望む立山町からの認定はアピールポイントとなる。また、認定されれば町が行う展示会などに参加でき、貴重なPR活動の機会を得て、販売ルートを拡大できるのではという期待もあった。そして、町をあげての取り組みに参加し、町の活性化に協力したいという地元愛も少なくなかった。

その一方で、申請に消極的だった事業者の方もいらした。立山権現かんもち、ブランド認定以前から伝統的な食文化として有名であり、毎年新聞社やテレビ局から取材が来て

いる。富山空港でも販売されているほどである。そして、「富山県ふるさと認定商品」¹⁵³にすでに認定されており、「E マーク」をもらっているため、今さら立山ブランドに認定されなくてもと考える従業員の方もおられた。しかし、せっかく町から立山ブランドに申請しませんかと声をかけていただいたのだから申請しようという意見でまとまった。

こうした例外はあるものの、多くの事業者の方が認定により生じるいくらかのメリットを期待して申請したことがわかった。



図 8. E マーク

3-2. 感じているメリット

私がまず最初に知りたいと思ったのは、立山ブランドに認定されたことでどう売り上げに影響があったかであった。「3-1 申請した理由」にあるように、実際に販売ルートの拡大や知名度向上の効果があったのか伺った。

ブランドを立ち上げてまだ間もないということもあり、期待に反し売り上げにはあまり関係がないのではないかとする意見が多かった。認定を受けたからと言って売り上げに大きな貢献をしているわけではないが、売り上げアップの一つの要因になっているかもしれないという程度であるようだ。中には、認定当初に立山ブランドのポスターを見たお客さんや、商品開発の相談に訪れたお客さんがいらっしゃるなど、認定された最初の期間だけではあるが効果を実感できたという事業者の方もいらした。

一方お話を聞く中で、最もメリットとなっていると感じたのは、売り文句に使えるという点であった。営業で認定商品を売り込む際に、立山ブランドに認定されているという情報は、相手に安心感を与える効果が期待できるため、セールスポイントの一つとなっているという。

他には、認定されたことでブランド認定品を製造している業者同士が情報交換をできるようになり、横のつながりができたという意見があった。例えば、他所で出店するからいっしょに店を出さないか、というように認定前よりも協力できるようになったという。また、審査の段階で立山ブランド認定委員会から様々なアドバイスがなされ、そのアドバイ

¹⁵³ 県内で生産される良質な農林水産加工食品について基準を定め、この基準を満たした食品に認証マーク（通称 Eマーク）を付けることにより、県産特産品のイメージアップを図り「とやまの特産品」として全国に情報発信する。主要原材料は富山県産100%であり、製造された工場等が富山県内にある、などの認定条件がある。このマークは「優れた品質」Excellent quality 「正確な表示」Exact expression 「地域の環境と調和」Harmony with Ecology のそれぞれのEを「品」の形にしたものであり、「良い品」であることを表現している。富山県農林水産企画課・市場戦略推進班が行っている取り組みである。みそ、もち、漬物など313商品が認定されている。立山ブランド認定品の中で、Eマークが付いているものは、立山の農家が作ったみそ、立山権現焼かんもちがある。

http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1600/kj00007051.html

スがかなり有益であったという意見もあった。

想像していたより売りに上げに効果はないが、一定のメリットはあるとしている事業者の方が多い印象であった。

3-3. 感じているデメリット

デメリットについても聞いてみたところ、認定されたことの悪影響はないが、やはり効果がないと感じてしまうという意見が多かった。すでに紹介した「富山県ふるさと認定商品」とは別に、「明日のとやまブランド」¹⁵⁴というものに認定されており、立山ブランドよりもそちらのほうがアピールになるとしている事業者の方もいらした。

3-4. 現在の立山ブランドについてどう思うか

この節では現在の立山ブランドに対する意見・要望を記述する。

お話を伺う中で比較的多かった要望は、立山町にもっと大々的に宣伝をしてほしいというものであった。小さな事業者が宣伝に力を入れるというのは困難であるため、町が主導するイベントを多く開催してもらえないかという要望である。そして、イベントを運営する費用がないのならば、イベント開催のために立山ブランド認定事業者で年会費を徴収してもいいのではないかという提案があった。

イベントの際に立山ブランドを販売する機会があるが、販売している事業者はそれぞれであり、服装がバラバラであるからお揃いのハッピを作るなどして統一感がほしいという意見もあった。そしてハッピだけでなく袋、のれんもあると立山ブランドを前面に押し出すことができ、知名度向上が期待できると考えている事業者の方もいらした。

次に多いと感じた要望は、町から事業者へ意見を発信してほしいというものであった。ブランド認定の申請以外ではやり取りする機会がなく、自分たちには何が足りないのか教えてほしいという。つまり立山町からのフィードバックによるアドバイスが求められているとわかった。

最も深刻であると感じたのは、後継者問題を解決してほしいという要望である。立山権現かんもちを製造している食彩工房たてやまでは、後継者づくりに頭を悩ませているという。立山町の特産品という名前をもらい応援してくれるのは光栄だが、作り続けることが大変だと苦勞を語ってくださった。かんもちを作る作業は朝4時からで湿度は90%、暑い時は気温が35度にもなる。しかも作業は一日あたり5時間ほどのため、あまり給料は多くなく、生計を立てるのには向いていない。そのためやりたい人がおらず人を雇うのが大変

¹⁵⁴富山県では、「富山県推奨とやまブランド」認定に向けて、意欲的に取り組む事業者とその県産品を「明日のとやまブランド」に選定し、ブランド力向上に向けた取組みへの支援等を行う「明日のとやまブランド」育成支援事業を実施している。富山県観光・地域振興局 地方創生推進室 地域振興課が行っている。かまぼこ、しろえびせんべい、漆器、ガラスなど33商品が認定されている。

明日のとやまブランドホームページより <http://www.toyama-brand.jp/?tid=100046>

であり、後継者を育てることもできない。現在働いている方は全員 60 歳以上であり、作り続けていくには後継者が必要だが困難であるため、町に後継者づくりを協力してほしい。それが一番伝えてほしいという意見であった。

最後に当然のことのようであり質問するまで出てこなかったが、立山ブランドの取り組みはずっと続けていってほしいという意見は共通していた。立山ブランドを維持してくれることが一番であり、われわれ事業者もついていくからぜひ続けていってほしいと、取り組みの継続には肯定的な印象であった。

4. 考察

ここまで、調査を通してお話していただいたことや資料をもとに報告してきた。この節ではここまでの成果をまとめつつ、立山ブランドについて自分なりの考えを記述する。

4-1. 情報の発信

調査を終えてデータを整理して最初に感じたことは、役場と事業者の考えにすれ違いがあるのではないかというものであった。「2 町の方針」にあるように立山町としては、事業者の自主性を尊重するとともに、予算に余裕がない状況から事業者の積極的な活動に期待している。一方で、事業者の中には立山ブランドを宣伝できるイベントを開催するなど、大々的な宣伝をする機会を期待していたり、旗振り役としての役割を町に期待していたりする。

つまりは、どちらも互いに過度に期待しあっているというのが現状ではないかと思う。なぜこのような食い違いが起きてしまうのだろうか、それは事業者と立山町の話し合いが足りず意思疎通が十分でないからではないかと考える。「3-4 現在の立山ブランドについてどう思うか」で述べたように、事業者の方は町からの立山ブランドに関する指摘や提案を望んでいることがわかった。その要望を伝えられていないということは、事業者から町に対しての意見の発信も十分でないと考えられる。中には町と関わる機会は、立山ブランドの再認定の申請をする時ぐらいであるという事業者もいた。

町は立山ブランドに関する様々な意見を有していると思う。例えば私も参加した立山インターカレッジコンペティション（以下、立山コンペ）では、立山ブランドについての発表があった。立山町の魅力を伝えるうえで重要な要素の一つになっていることは間違いなく、立山ブランドを活用した案が多くあった。つまり立山コンペは立山ブランドについて多くの意見が出される機会となっている。そこで挙げた提案や改善点などを、事業者に伝えるのが、まだ不十分かもしれない。実際に、立山コンペで発表された提案をもっと詳しく紹介してほしいと言う事業者の方もいた。

事業者によって様々ではあるが、「かあさん漬け」を製造している JA かあさんの店では、売り上げを伸ばすために工夫を行っている。平成 28 年度から若者に受け入れられるような

新しい漬物の開発に取り組み、28年度は新しくセロリの漬物を販売した。また、ホテルに卸す際にもっと大衆受けする味にしようと甘めの味付けにするなど改良を重ねたという。そうした工夫には、やはり情報が必要であると考えられる。フィードバックのためには、改善点などの情報共有が必要であり、事業者の方も町にそれを期待している。

以上のすれ違いをふまえると、事業者と立山町との、年に一度程度の意見交換会を開催するといいかもしい。現状では、両者の意思疎通が十分でなく一方的に期待しあっている状況である。町の予算も限られるのであれば、町主催のPRイベントは多く開催できないが、町から事業者へ商品の展開の仕方について直接意見をもらうことは十分可能だと思う。

立山ブランドは県が行うような大規模なブランドとは違い、規模や事業者数が小さいものである。したがって、県のようなブランド力としての強みをもつことは容易ではない。しかし、県などとは違い、町と事業者、お互い顔の見える信頼関係を築くことは難しい。事業者の相談に積極的に耳を傾け、事業維持などにアドバイスや協力をするができる。地域ブランドといっても、それぞれの規模や状況などに応じて目標や取り組み方は様々なものがあるのではないかと思う。

4-2. 事業者・地元の人々の協力

前項「4-1 情報の発信」で述べたのは、町が事業者の方に対してもう少し働きかけが必要だとする内容であった。しかし、私の伝えたいことはあくまで率先して動くべきは地元の人々・事業者であるということだ。確かに立山ブランドは町主導で取り組んでいるものである。舟橋町長と役場でお会いした際に、立山ブランドは本来宣伝する余裕がないような小さな事業者を応援するために作られたと言及していたように、支援するためという意味合いが大きい。しかしだからといって、行政の活動を頼りにしているだけでは販路拡大や知名度の向上は成し遂げられないのではないかと思う。

町に旗振り役としての役割を望む事業者の方がいらしたが、事業者の中からもリーダーを選出するべきではないかと思う。「2-1 事業者の方への要望」で述べたように、町は事業者の協議会を設立し代表の選出を希望している。まず事業者の協議会を組織することで、情報の共有が容易になると考えられる。立山町ならではの他のブランドとはちがう部分を、関係者全員で認識を共有し、今ある資源をより磨きあげることが重要である。また、ブランド設立当初にはブランド事業者が集まり勉強会を開催していたという話を役場の方から聞いたが、協議会を設立すれば勉強会のように意見を出し合い立山ブランドをより展開していけることも考えられる。

そして次は地域に精通している情熱ある強いリーダーが必要となる。リーダーはその組織を引っ張っていく力だけでなく、他の関係機関や団体と連携をとることも重要である。協議会を作るにあたり、円滑な運営のためにも指揮する人物は必要である。

次に地元の人々の協力も必要であると考え。立山ブランドの目的のひとつに「地域を

豊かに」があり、より多くの地域住民が参加することが望ましい。直接に立山ブランドの製造に関わっていなくても、地元の人の協力は大きな力となる。例えば、売り上げがあるかどうかに関わらず立山ブランドを店頭に置いてもらうなどである。飲食店を中心に聞き取り調査をした際に、立山ブランドについて肯定的な印象を持っている方は少なく、否定的か無関心といった様子だった。例えば、他の地域のものと比べて代わり映えしない、贈答用に使おうとは思わないというような意見である。

なぜ否定的な印象を与えてしまうのか、それは立山ブランドについて詳しく知らないからではないかと思う。立山ブランドに選ばれているものはどれも認定委員会の審査を経て、審査基準を満たしたものであると判断されたものである。チラシや立山町のホームページには明快な理由が掲載されており、認定が納得できるような立山らしいストーリー性や信頼性を知ることができる。地元の人ならば、認定の背景を詳しく知るだけで受け入れることは容易いと思う。

地元の人々に知ってもらう努力はすでに『広報たてやま』で宣伝したり、Facebook で紹介したりと町は行っている。周知してもらうことは難しいが、新しくできる「まちなかファーム」¹⁵⁵での宣伝などといった地道な活動が大事だと思う。地元の人々へ積極的に情報を発信するとともに、フィードバックのための住民からの意見を伝えられる機会もあるとさらに質の向上につながる。

一方で、外部からの評価で地域の人々の意識が変化していくこともあり得ると思う。現在立山町は台湾人を主なターゲットに取り組んでいるが、台湾での好評価が地域内に返ってきた際に地域の人々の意識が変わるきっかけになるのではないかと考えられる。

地元の人々の協力・応援が大きな力となることは間違いない。ぜひ地元の人々には立山ブランドに興味を持ってほしいと感じた。

4-3. メリット

これまで課題にばかり焦点をあててきた。この項では、事業者の方が述べた立山ブランドに認定されるメリットの他にも、メリットがあるのではないかという考えをもとに記述する。

事業者の方からは、売り上げにあまり影響がないという意見が多くあった。確かに右肩上がりになっていないかもしれないが、売り上げが下がったわけではない。とすると、現状維持という点においては一役買っていると言えるかもしれない。

次に PR 効果であるが、売り上げに直結していなくとも認知度は相当上がったのではないかと思う。立山ブランドという一括りでまとめられていることで、一覧として見ることができわかりやすい。一方で、認定されていないものは認知されづらくなるため、認定され

¹⁵⁵ 町商工交流館「休んでかれや」を耐震性のために取り壊し、その跡地周辺に建設予定の施設。地元農産物や加工品を販売できるまちなかステーションとして整備する予定で、観光バスツアー客に加え、一般町民も立ち寄るような「まちの駅」を目指している。

ているか否かの違いは大きい。実際に私も立山ブランドは立山町ホームページで知ることができたが、地元の方の話を聞くまで知らなかった地元の人気商品があった。そして前述したように、立山インターカレッジコンペティションでも取り上げられやすくなる。

以上は十分なメリットでないと感じられるかもしれないが、立山ブランドがなかった場合を考えると意義のあるものだとは再認識できるのではないかと思う。

おわりに

立山ブランドは平成 23 年度に創設され、平成 29 年度に創設 7 年目を迎えた。設立時に比べ勢いが衰えたとはいえ、取り組みは依然として継続している。立山ブランドについて考察する中で、もしかすると継続させることが一番重要なことなのではないかと感じた。事業者の方もできる限り取り組みを続けてほしいという思いはあるものの、後継者不足などによりどこまで続けられるかという不安も感じていると思う。しかし、継続すればするほどブランドの歴史が長くなり説得力は増していき、認定され続けている信頼が高まり付加価値がついていくだろう。

もし廃止になった場合は「失敗」と言えるだろうし、継続できている状態なら「成功」と言えるだろう。維持し続けることが何よりも大事であることを念頭に置きつつ、事業者、行政、住民一体となって立山ブランドに磨きをかけていくことが立山ブランドのさらなる飛躍を生むことにつながるのだと思う。

今回の調査では、立山ブランドの現状をテーマに、立山町役場や各事業所へお伺いさせていただき、お話を聞かせていただいた。事業者の方は、自分の生産している商品に誇りと自信を持って取り組まれているのがよく感じられた。それと同時に立山町のことを大切に思い、町の発展を願っている気持ちもよく伝わってきた。そんな真剣な事業者の方たちと交流させていただいた経験は貴重なものになると確信している。

立山町の自然に育まれた魅力あふれる立山ブランドが、これからも続いていくことを願うばかりである。

謝辞

今回の調査にあたって、立山ブランド事業者の皆様には、本当にお世話になりました。調査にご協力いただいた皆様に感謝の思いで一杯です。

お忙しい合間を縫って聞きとり調査にご協力いただいた、農事組合法人いこいの杜 西村美秋様、JA かあさんの店の皆さま、(株)大観峯 伊東晋太郎様、農事組合法人食彩工房たてやまの皆さま、(株)宝水 竹内正和様、立山町役場 新山陽子様に、この場を借りて厚くお礼申し上げます。皆様のご厚意で調査を行うことができました。心からお礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

参考にしたウェブサイト

「Bamboo Café」

(<http://www.take-cafe.com/fs/bamboo/c/takecya/> 閲覧日 2018 年 1 月 10 日)

「立山黒部アルペンルート」

(<https://www.alpen-route.com/about/> 閲覧日 2018 年 1 月 10 日)

「立山ブランドマークについて」

(<http://kanko.town.tateyama.toyama.jp/stroll/logomark.html> 閲覧日 2018 年 1 月 10 日)

「facebook 「ぜんぶ、立山。」」

(<https://www.facebook.com/TateyamaBrand> 閲覧日 2018 年 1 月 10 日)

「富山県ふるさと認証食品制度」

(http://www.pref.toyama.jp/cms_sec/1600/kj00007051.html 閲覧日 2018 年 1 月 10 日)

「明日の富山ぶらんど」

(<http://www.toyama-brand.jp/?tid=100046> 閲覧日 2017 年 12 月 11 日)

「ミラサポ ふるさと名物応援宣言」

(<https://www.mirasapo.jp/shigen/information/support.html> 閲覧日 2018 年 1 月 5 日)

「モンベルフレンドマーケット」

(<http://webshop.montbell.jp/goods/category.php?category=484> 閲覧日 2017 年 12 月 11 日)

「百選横丁」

(<http://hyakuyoko.com/> 閲覧日 2018 年 1 月 20 日)

「JA タウン」

(<http://www.ja-town.com/shop/pages/about.aspx> 閲覧日 2018 年 1 月 10 日)

暮らしから見る立山町の大きな魅力

富 奈緒

はじめに

本章で私は、立山町への移住と立山町の持つ魅力について調べたことを記述する。私がこのテーマに興味を持ったきっかけは、立山町役場が運営している「立山暮らし」という定住支援サイト¹⁵⁶を見たことだった。地方では人口流出が問題となっており、空き家が増えるなどの影響を及ぼしているということは、耳にしたことがあった。その問題に対して、立山町では実際にどのような取り組みがなされているのか。また、暮らしの拠点を置く場所として立山町を選んでやってくる方はどれほどおり、どのような思いを持っているのか。それらを調べて聞きとり、立山町の魅力を改めて考えてみたいと思った。

調査では、移住・定住の支援にあたっている立山町役場企画政策課で現在の取り組みについて伺い、住民課やそのほか町の広報などの資料から移住・定住に関する情報収集を行った。さらに、県外からの移住者の方々を中心に、立山町での暮らしについてお話を伺った。本章では、1 節で立山町の人口動態と立山町が行っている具体的な取り組みについて述べ、2 節・3 節で実際の移住者の方々のお話をまとめる。

1. 立山町の人口動態と移住・定住の取り組み

1-1. 富山県全体の転入・転出について¹⁵⁷

まず初めに、富山県統計年鑑（平成 27 年版）のデータをもとに富山県全体の転入・転出と立山町の現状を見ていく。

人口の増減を、転入・転出の動きだけに注目してみると、平成 27 年に富山県全体では転出者数が転入者数を 897 人上回っており、人口は流出している。市町村別では、全部で 15 ある市町村のうち転入者数の方が多いのは、富山市、黒部市、砺波市、射水市のみとなっている。一方、立山町では転入・転出の動きによって 73 人の人口減少がみられる。

これらのデータから、平成 27 年の富山県全体の転入・転出による減少数に占める立山町の割合は、約 8%であると分かる。立山町の人口は 26,317 人（平成 27 年）で、富山県の人口の 1,066,328 人（平成 27 年）のうちの約 2.5%であるのに比べると、このパーセンテージはやや大きい。富山県全体のほとんどの市町村で転出者数の方が多いという現状があり、それを抑えていくという意味でも、市町村ごとの取り組みや対策は大切となる。

¹⁵⁶ 立山町定住支援サイト「立山暮らし」（<http://www.town.tateyama.toyama.jp/teiiryu/>）

¹⁵⁷ この項の記述は、「統計年鑑 - 富山」

（<http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/lib/almanac/index.html>）に基づく。

1-2. 立山町の人口動態

次に立山町役場住民課が記録している立山町人口動態のデータをもとに、平成 12 年から平成 28 年（2000 年から 2016 年）までの 17 年間の転入・転出の動きを立山町に絞って見ていく。

表 1. 立山町の人口動態〔転入〕（統計たてやまに記載されているデータをもとに作成）

	総数		県内から		県外から		その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女
H12年	416	467	307	384	101	81	8	2
H13年	414	453	309	366	100	76	5	11
H14年	371	426	267	341	96	79	8	6
H15年	368	397	266	301	97	89	5	7
H16年	361	369	258	272	102	93	1	4
H17年	332	346	232	272	92	66	8	8
H18年	309	335	219	263	86	68	4	4
H19年	355	343	246	241	98	87	11	15
H20年	293	354	187	238	92	95	14	21
H21年	205	254	155	171	45	73	5	10
H22年	233	239	162	174	64	52	7	13
H23年	269	289	179	209	77	66	13	14
H24年	217	247	134	179	70	62	13	6
H25年	277	278	172	189	82	62	23	27
H26年	285	300	194	229	75	56	16	15
H27年	285	287	196	203	76	59	13	25
H28年	297	294	176	175	85	96	36	23

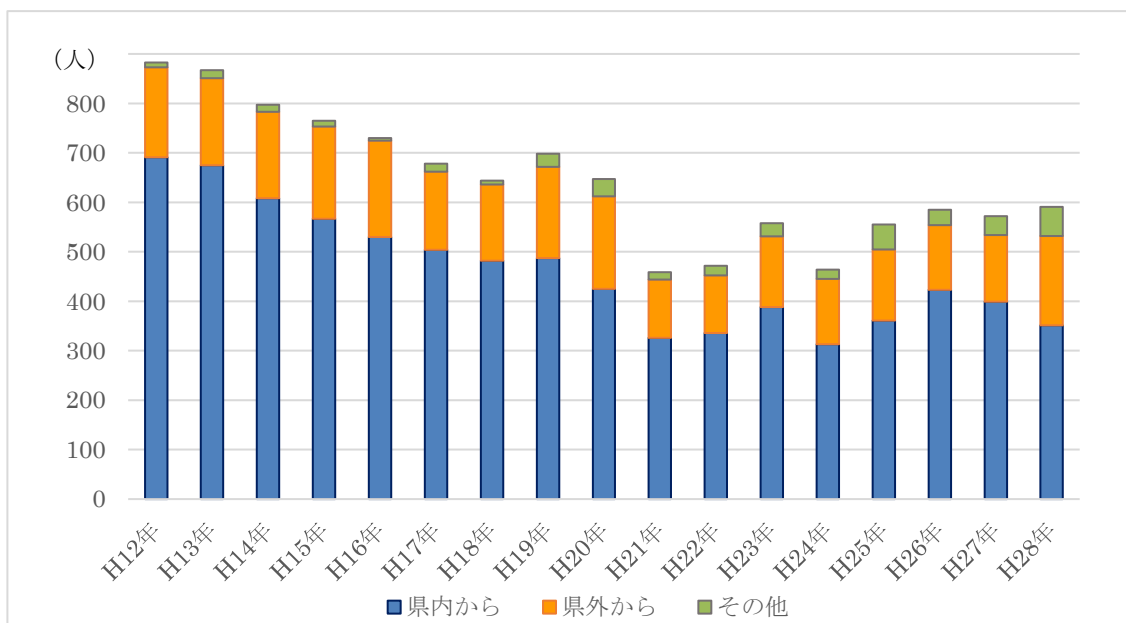


図 1. 立山町の転入による人口動態（表 1 をもとに作成）

まず、転入のデータ（表 1）を見ると、県外からよりも県内からの転入者数が一貫して多い。県内からの転入者は、職場近くの郊外に家を構えるために転入してきている場合が多い。統計たてやまに掲載されている「従業地、通学地市町村別就業者数、通学者数（15 歳以上）」（平成 22 年）のデータを見ると、立山町から富山市へ通勤、通学をしている人の割合は、町内外に通勤、通学をしている人全体のうちの 77%を占めていた。このことから、富山市へのアクセスの良さが主な理由となり、立山町はベッドタウンとしての役割を果たしていることが分かる。アクセスの良さを目的として家を構える人々は、富山市に近い立山町中心部の五百石地区などに多い傾向がある。

また、平成 20 年から 21 年にかけての転入者数の落ち込みは、平成 10 年代に利田地区など多くの地区で積極的な宅地造成が行われたことが関係している可能性がある。立山町は富山市に比べて土地が安く、当時新しい家が次々に建てられ、たくさんの人が入ってきていた。しかし、平成 18、19 年頃になるとそれらの需要もある程度満たされ、宅地造成が落ち着いたため、転入者の数も徐々に減っていったと考えられる。

立山町では、立山町における転入者の U ターン（県内出生）と I ターン（県外出生）の内訳の調査は行っていないが、平成 28 年に厚生労働省が行った人口移動調査によると富山県に現在居住する方のうち U ターンが 27.3%、I ターンが 13.6%となっている。役場の方によると、立山町も県全体の動向と大きくは変わらず、U ターンの方が多いのではないかという。

次に、転出について考える。

表 2. 立山町の人口動態【転出】（統計たてやまに記載されているデータをもとに作成）

	総数		県内へ		県外へ		その他	
	男	女	男	女	男	女	男	女
H12年	348	407	229	279	119	126	0	2
H13年	348	369	220	280	123	89	5	0
H14年	346	434	228	318	111	113	7	3
H15年	323	367	199	263	116	93	8	11
H16年	318	355	204	259	105	90	9	6
H17年	295	359	176	228	112	116	7	15
H18年	325	374	211	251	107	113	7	10
H19年	328	372	198	248	120	114	10	10
H20年	314	387	206	249	98	117	10	21
H21年	267	346	176	254	85	82	6	10
H22年	243	287	176	214	57	59	10	14
H23年	280	319	184	223	86	84	10	12
H24年	227	243	157	187	57	49	13	7
H25年	291	355	181	240	76	97	34	18
H26年	313	314	201	223	83	79	29	12
H27年	323	322	186	211	103	86	34	25
H28年	283	300	181	188	74	86	28	26

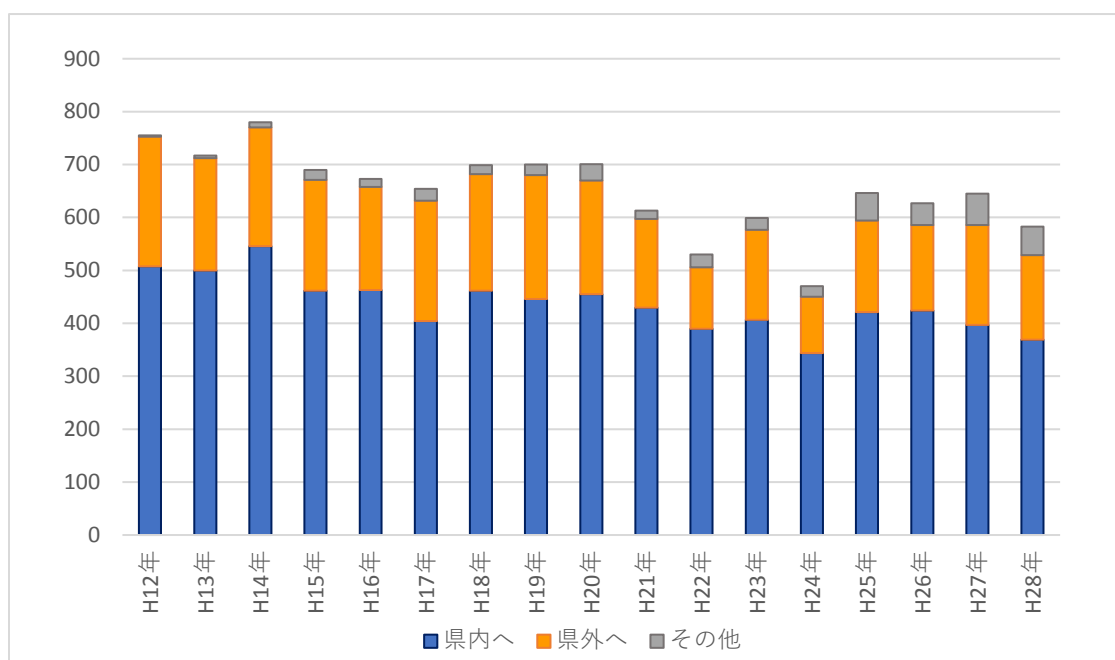


図 2. 立山町の転出による人口動態（表 2 をもとに作成）

転出のデータ（表 2）を見ると、男性女性共に 1 年で平均 300 人～350 人と多い。役場の方のお話では、特に 18 歳～20 代後半までの年代で、進学や就職を理由とする転出が目立つという。それに対して、待機児童が 0 であることや子育てへの補助制度があることを立山町に住むメリットと考え、30 代前後の子持ちの夫婦が転入してくる場合がある。そのため、30 代以降の転出者数は年齢層が上がるにつれて減少する。また、その他の数字が近年増えているのは、外国人の数が増えていることが背景にあるようだ。外国人は、出稼ぎにやって来て約 1 年で戻っていく場合がほとんどであるため、近年は出入りが激しくなっているという。

転入のその他には、同じ世帯から世帯分離した人の人数、立山町を離れて暮らしていたが何らかの理由でもう一度立山町の住所を取り直さなくてはなくなった人の人数、外国から出稼ぎに来ている人の人数が含まれる。また、転出のその他には、出稼ぎに来ていた外国人で転出届を出していなかった人の分や、立山町に住所はあるものの住んでいないという情報があつたものを、役場側が削除した人数なども含まれる。そのため、転入・転出ともにその他の部分は単純な引っ越しによる出入りとは切り離して考える必要がある。

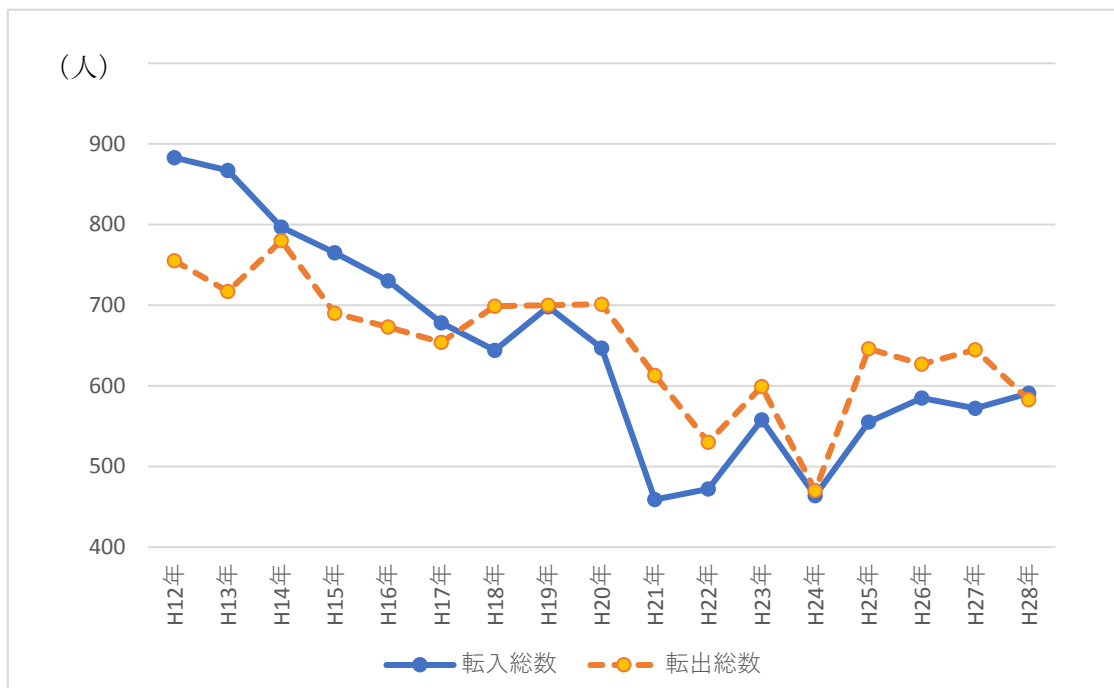


図 3. 立山町の転入転出総数の推移（表 1、表 2 をもとに作成）

立山町の人口動態を転入・転出の両面から合わせて見ると、平成 17 年までは転入が転出を上回っていた（図 3）。しかし、平成 18 年からは全体として転出の方が多くなっている。決して転出者数が増え続けているわけではないが、転入者数が転出者数を下回る状態が続いている。総数を見ると、転入も転出も女性の動きの方が大きく見えることについては、もともと立山町の住民の男女の割合が女性の方が 1000 人ほど多いことが関係している可能性がある。統計たてやまに記載されているデータによると、平成 2 年の時点で男女の人数の間に約 1000 人の差があり、それ以降一定の比率が続いている。ただし、年齢別で見ると、特に女性人口が多いのは 65 歳以上であり、女性の人口の方が多いたことが転入・転出の動きの男女差にどこまで関係しているのかは、はっきりとは分からない。

また自然増減のデータを見ても、平成 11 年から平成 27 年までマイナスを示し続けている。過去 17 年間で、立山町の出生数は、1 番多い時で平成 14 年の 243 人となっており、平成 27 年には 145 人と 1 番低い数となっている。一方で、死亡数は 300 人前後の状態が続いており、少子高齢化の影響が表れているといえる。

人口を維持するには、特に若者の流出を防ぐとともに、転入者が継続して定住することが大切になる。そんな中、平成 28 年（10 月 1 日時点）は転入 591 人・転出 583 人となり、11 年ぶりに転入が転出を上回った。後述する取り組みや、子育てしやすい環境を整えるなど暮らしやすい町をつくる制度の継続が、このような成果を生み出しているものと思われる。

1-3. 立山町の移住・定住に関する取り組み

ここでは役場側が行っている移住・定住の取り組みについて、立山町役場企画政策課・地域振興係主任の大崎喜孝さんに詳しく伺ったお話をもとに記述する。

立山町の移住・定住に関する取り組みは、国が平成 26 年 12 月に閣議決定した「まち・ひと・しごと創生長期ビジョン」をきっかけに作成された「立山町人口ビジョン」、「たてやま総合戦略」の中で掲げられている評価指標（県外からの転入・転出者の差数が 0 人）と施策計画に基づいて進められている。立山町は、先にも述べたように転入者よりも転出者が多く、出生数よりも亡くなる人の方が多いため、人口は減少していつてしまう傾向にある。

そうした人口の減少を抑制し、地域の活力を維持していくための取り組みの一つとして、移住・定住の支援が行われている。立山町役場では、立山への定住を支援するサイト「立山暮らし」を運営しており、そこでは、立山町の魅力や、移住者の声などが紹介されている。さらに空き家情報や、補助金制度についても掲載されており、暮らしに関するさまざまな情報が得られる。

その他具体的な取り組みとして、立山町の地域おこし協力隊¹⁵⁸に「立山定住コンシェルジュ」という役職を設け、移住を考えている方々への対応を役場で行ったり、地域の活性化などにつながるイベントの企画を行っている。平成 27 年 8 月には、立山町の食材を使った料理教室と絡めて、移住希望者と実際の移住者たちが交流するイベントを開催した。役場の方々は、移住者の移住後のサポートをすることも大切だと考えており、これらのイベントは、移住者が地域住民や同じ移住者同士の繋がりをつくるための貴重な機会になっていると感じているという。

また、同サイトには「空き家情報バンク」というページがあり、そこに町内にある空き家の情報を登録して、物件の有効活用や景観の保全、町への定住を促している。空き家自体は、役場によると平成 28 年 10 月の調査時点で 500 軒ほどあることが分かっているが、登録されているのはわずか 20 軒前後に留まっているのだという。大崎さんの話では、一人で住んでいたお年寄りが入院してしまったり、もとは両親が住んでいたが子供は町外に出ていて家財だけがそのままの状態になっていたり、簡単には空き家登録できない状態の家も多いそうだ。また、調査は行っているものの、個々の空き家がどのような状態であり、空き家の活用の際にどんな課題を抱えているのかを把握しきれていないという問題も抱えている。現時点での空き家の利活用は、あまり上手くいっているとは言えないとのことだった。

その他に、「家財情報バンク」というページも設けられている。これは家庭や事業者など

¹⁵⁸ 人口減少や高齢化が進む里山地域の、地域力の維持・活性化を図る活動を行うことを目的とした制度で、平成 21 年に総務省によって制度化された。立山町では、平成 22 年 4 月からこれまでに 10 名が任命されている。基本任期は 3 年である。平成 29 年 4 月現在、立山町では 4 名の方が、地域資源の開発や情報発信、里山地域の活性化等につながる活動をそれぞれ行っている。

から使わなくなった家財（テーブル、食器棚、ソファ、冷蔵庫など）を提供してもらい、立山町で新しく生活を始める際の移住者の負担を軽減しようとできたもので、役場には少しずつ家財が集まってきている。これらの家財は、役場での保管費用なども加味して、欲しい人に 1000 円で譲るという形をとっている。ただ、利用実績はまだ少なく、課題も多い。PR がうまく出来ておらず取り組み自体があまり知られていないという点や、家への運搬までは請け負っていないため、必要としていても大きな家財は引き取りづらいという点で、改善が求められている。

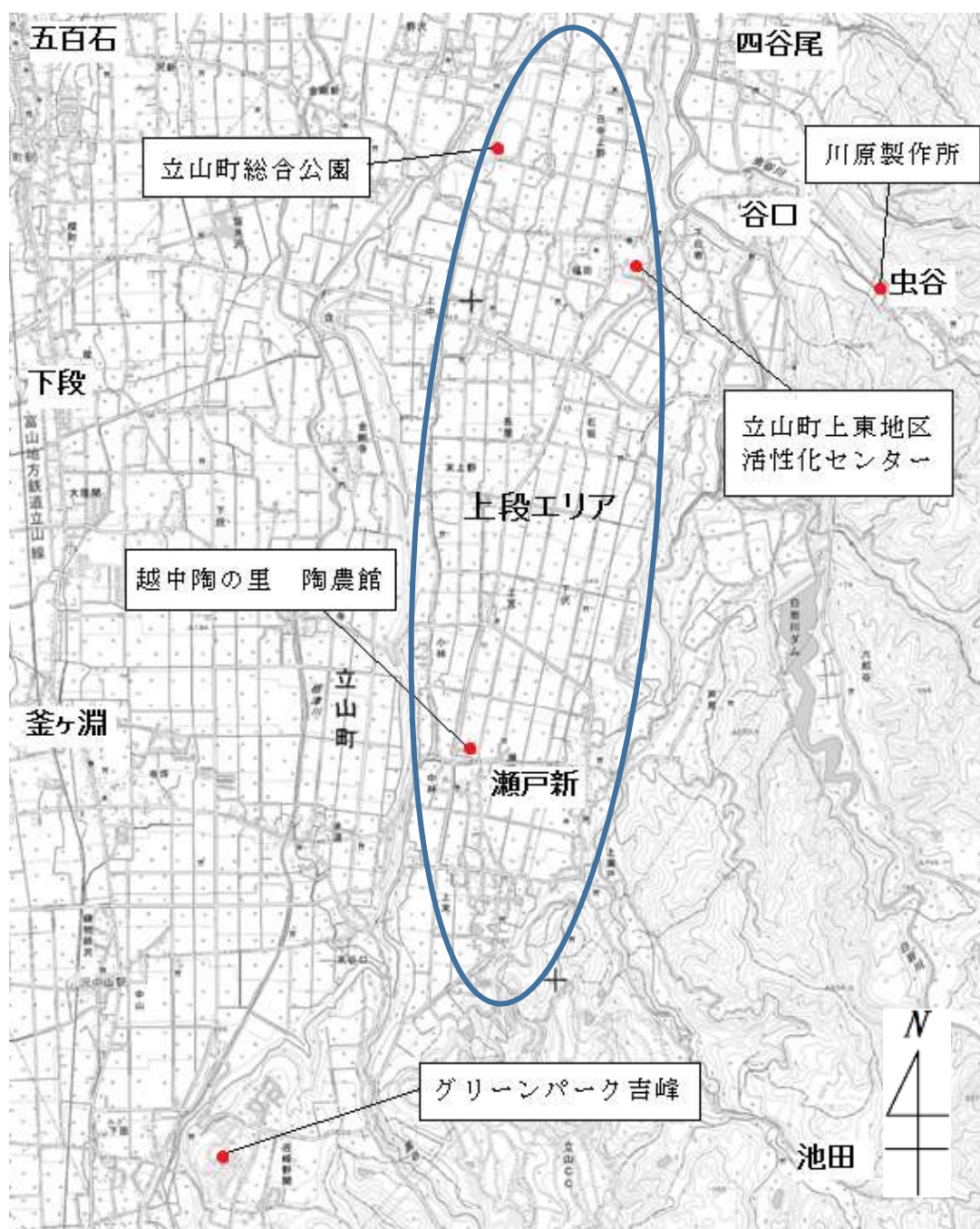


図 4. 2 節・3 節で紹介する地名、施設の位置（地理院地図より作成）

2. 立山町で輝く人々

本節からは、立山町へ実際に移住してきた方々のお話をまとめる。私は、特に県外から移住してきた方に焦点を当て、県外の方から見た立山町とはどういうものなのかを探った。また、主に立山町東部の自然豊かな地域に住み、その環境を活用した仕事や暮らしを送っている方を対象に聞き取りを行うことで、暮らしの面から見た立山町の魅力を考えて。

2-1. 越中陶の里 陶農館スタッフ 山田智子さん

陶農館のスタッフである山田智子さんは、東京都で生まれ横浜で育った。中学生の頃から千葉県で暮らし、高校卒業後には、日本デザイン専門学校で陶芸やガラス、木工などを学んだ。その後、一度東京の会社に就職し、企画開発の仕事をしていたが、陶芸をしたいという思いが段々と強くなり、仕事を辞めた。そこから京都で3年間、陶芸の専門学校に通い、作家の清水保孝氏に弟子入りして陶芸を学んだ。さらにその後、日本デザイン専門学校の非常勤の助手としても勤務していた。

そんな中、たまたま立山町の越中瀬戸焼の研修生募集の広告を見つけたことがきっかけとなり、また、立山町の環境の良さにも惹かれ、立山町へ移り住むことを決めた。初めの3年間は、陶農館で研修生として過ごし、研修が終わってからさらに3年住み続けて、現在移住して6年になる。研修生であった3年間は、立山町から斡旋された場所に住んでおり、家賃は町が負担してくれていた。それ以降は住む家を探し、山田さんはこの春、陶農館がある瀬戸新から車で5分ほどのところにある空き家を購入した。状態がとても良く、ほとんどリフォームの必要がないほどだったという。探していた条件と合う物件を見つけたので、これからはこの場所に住んでいきたいと話してくださった。

立山町は空き家が増えているという現状があるものの、空き家を探している人でも、条件に合う物件はなかなか見つからない場合もある。そうすると空き家に住む人も簡単には増えず、空き家の解消には繋がりにくいという面もあるのだと、お話を伺う中で感じた。

富山県には知り合いも友達もいなかったという山田さんが、どうして立山町を選んだのか。その理由の一つに薪で焼き上げるという越中瀬戸焼の特徴があった。山田さんがそれまで使ってきた電気窯は、電熱線で窯の温度を上げて窯内の温度を均等に保つため、頭の中で大体想像した通りの作品が焼きあがる。それに対し、越中瀬戸焼の薪窯はアカマツなどの薪を燃やして窯内の温度を上げていく。火の当たり方や温度の上がり方が窯内の場所によって違うため、焼き上がりが変わってくる。さらに、薪を燃やした灰も出て、それが



写真 1. 陶芸をしている山田さん
(山田さんご本人より提供)

窯内の空気の流れで舞い、作品に付着することもある。灰が作品に塗られている釉薬とくつつくと、色が変わることもあり、雰囲気も大きく変わる。作品が焼きあがって取り出すまでどう仕上がっているのか分からない、薪窯にはそんな楽しみがあると山田さんは語る。

薪窯は煙が出ることから都会ではなかなか導入できないが、立山町は薪窯で焼ける環境が整っているということが、山田さんを大きく惹きつけるものになっているようだった。また、越中瀬戸焼は自分たちで土をとってきたり薪を用意したり、周りで手に入るものはすべて自分たちで調達してまかなうという“地産地消”が成り立つものであることも決め手となった。ここでしかできない陶芸が出来るというような、“ここにしかないもの”は立山町に人を惹きつける大きな力を持つものなのだろう。



写真 2. 山田さんの作品
(山田さんご本人より提供)

2-2. 石川昇さん

石川昇さんは、昭和 9 年生まれで現在 83 歳である。三重県桑名市の出身で、大学で一度東京に出た後、名古屋で就職した。広告代理店の仕事に就き、テレビや新聞などのマスコミとスポンサーの間に立って、宣伝の仕方を提案するなどの仕事をしていた。

石川さんは、退職したら、自然に囲まれて暮らしたいという思いを持っており、65 歳で定年を迎えてから自然豊かな立山町にやって来た。愛知県からこちらに来て 17、18 年ほど経つ。当時は、いまのように移住に関する情報も十分あったわけではなく、石川さんは新潟県や長野県などさまざまな場所に赴き、家を探した。奥さんも、移住に前向きで、一緒に探そうという気持ちで共に考えてくれたという。そうして、不動産屋に条件を直接持ち



写真 3. 石川さん宅の外観

込み、候補として挙がってきた家をしらみつぶしに見て回る状態が 2 年半ほど続いていた。その最中にたまたま、立山町の隣にあった大山町の職藝学院¹⁵⁹に立ち寄る機会があり、縁あってその学院の生徒と専門の大工に、古い材木を使った新しい家を建ててもらえることになった。石川さんのお宅は、漆喰の白い壁で、薪ストーブもあり、落ち着いた雰囲気の木造 2 階建てである。自然に囲まれた景色にも溶け込む外観で、家の中も木のぬくも

¹⁵⁹ 大工・家具・建具および造園・ガーデニングのプロ（職藝人）育成を目的に、全国でも珍しい専門学校として、平成 8 年に富山市東黒牧（旧富山県上新川郡大山町）に開校。

りが感じられる素敵な造りだった。家が完成してから現在の家に住み始め、16 年ほどが経つ。

移住して長い石川さんが、当初の暮らしからの変化を感じていることがある。それは、第一に地域の方々とのコミュニケーションや関係がどんどん密になったという事である。地区の班長や、係を任せてもらえることも徐々に増え、そうしたことに携わることで、さらに地域の人々との繋がりを感じられるようになったという。

そして、農業の良さや素晴らしさは年々増して感じているという。無農薬の有機栽培で食物を育てたりする中で、毎年新しい発見や楽しみが見つかるそうだ。現在、畑ではブルーベリーを育てていて、季節になるといろいろな所から人々が収穫をしに訪れる。地域内のみならず、地域外の方々との繋がりも広がっており、コミュニケーションの場となっているという。また、奥さんはそのブルーベリーを使ったジャムも作っている。

広告代理店に勤務していた石川さんは、いろいろな方とコミュニケーションをとり、細かな話し合いを重ねることが多かった。そのため、こちらに来たばかりの頃は、様々な意見を率直に出し合う場が設けられていない環境に慣れなかったそうだ。しかし、そうした場がなくとも協力体制が出来上がっている地域のコミュニティを素晴らしいとも感じたという。だからこそ、石川さんは周りの方々とどういう風に関係を築いていくかということを大切にしてきたと語ってくださった。



写真 4. 石川さん宅の薪小屋

2-3. 川端里枝さん

川端里枝さんは、大阪府出身で現在 42 歳である。6 年前、上のお子さんが小学 6 年生、下のお子さんが保育園の年長の時に家族で立山町に移住し、上段地区に住んでいる。初めは、里枝さんの両親の仕事を継ぐ形で大阪で仕事を続けて行こうと夫婦で考えていたが、結局両親の代でその仕事を辞めることとなり、移住するなら今だと、決心したという。年をとったらいずれ田舎に暮らしたいという思いをずっと持っていたそうで、さまざまなタイミングが合い、移住することとなった。

移住する場所を探しながら、大阪から少しずつ離れた場所を見に行き、たまたま立山町に来た時、立山連峰がはっきりと見える美しい景色と自然の豊かさに魅力を感じ、家族全員が立山町に対して良いイメージを抱いた。このことが最終的に立山町を選んだ大きな理由となった。小学 6 年生の上のお子さん、ご主人と話し合いを重ね、全員が前向きな気持ちで移住への準備を進めていったということもあり、移住に対する不安も全て良い方向に

考えていったと、川端さんは笑顔で語ってくださった。

地元に関わることをしたいということで、現在川端さんは、立山町上東地域活性化センター¹⁶⁰の地産地消加工施設で働いている。元立山町立上東中学校¹⁶¹の給食室で、こんにゃくや漬物、味噌など立山町産の加工食品を作っており、その施設で 35 名ほどの会員と共に仕事をしている。

都会で周りに多くの人がいる中で生活をしていても、その全員と関わりを持つわけではない。立山町に来て、集落の方全員と関わりを持つようなコミュニティに混ざり、一から人間関係を作っていくのも、初めは心身ともに大きなパワーがいることであるという。そのため、移住しようと思うのであれば、若いうちの方が確実によいということに、川端さんは実際に移住してみて気が付いたようだ。川端さん自身も、考えていたより若い年齢でやってきたが、それが立山町での暮らしを始める際にプラスに働いたという。

2-4. S さん

S さんは、九州出身で 30 代の男性である。立山町に来る前は、東京都文京区に住んでいた。現在は釜ヶ淵地区に住んでおり、保育園に通う 2 人のお子さんがいる。こちらに家族で移住してから、約 1 年半が経つ。

東京での会社員生活はいろいろな面で恵まれていたものの、お子さんを自然環境で育てたいと考えていたこともあり、奥様の勤務先の拠点があった富山県への移住を決めた。富山県ではいろいろな場所を移住先として検討していたが、最終的に立山町への移住を決めた。立山町にはこれから変化が起きそうであるという可能性を感じ、また、S さんは仏教系大学院で密教を専攻し、半僧半俗で仏教を探究する市井の行者として日本三霊山の一つである立山や芦峯寺に縁を感じ、直感的に選んだ。

S さんは会社員時代に、不採算事業の人員整理の現場に身を置いた経験があり、会社員生活は必ずしも安定的なものではないと考えるようになり、次第に独立自営の道を志していくようになった。移住するにあたって会社勤めも考えていたのだが、やはり自分で事業をしたいという気持ちから、幼い頃からの夢であった農業に挑戦することにしたという。もともと農業経験はなかったため、とやま農業未来カレッジ¹⁶²で 1 年間農業のいろはを学んだ。現在は、もとは農家の家だった空き家にお住まいで、小さな畑で作物を作りつつ農家の立ち上げに取り組んでいる。

S さんは、学生や会社員時代に国内外含めてこれまで多くの引っ越しを経験されているため、移り住むこと自体に不安はなかった。その一方で、農業や自営業の経験はなく、事業

¹⁶⁰ 立山町福田にあり、立山町勤労青少年ホーム、立山町地産地消加工施設、立山町上東交流サロンから構成されている複合施設。

¹⁶¹ 平成 16 年に立山町立雄山中学校と統合。

¹⁶² 富山県が主体となり設置しているもので、農業の担い手を育成するため、就農希望者が富山県の営農条件に即した知識や技術を習得できる研修を行っている。平成 27 年に富山市吉岡に開校。

の立ち上げには難しさや苦勞を感じているという。その中で、新たな環境や挑戦は自分を磨くために与えられたことのひとつとして取り組んでいる、と語ってくださった。

2-5. 籠橋理恵さん

籠橋理恵さんは、池田地区にお住まいで現在 41 歳である。この地区には現在 3 軒しか家がなく、1 軒は年配の女性の一人暮らし、もう 1 軒は以前池田に住まっていたという方が、立山町の町中にある現在の住居から、以前の家と仕事場がある池田へ毎日通っている状態だという。住民が少ないこともあり、籠橋さんは平成 23 年度から 7 年間、池田地区の区長を務めた。籠橋さんのお宅も、もともと空き家で、9 年ほど前から少しずつ改修をしながら住んでいる。富山県に来る前は群馬県に住んでおり、富山県に来てからもう 13 年ほどになるという。立山町だけで考えると 9 年目だということだった。富山県に来たきっかけは、ご主人の家族が先に富山県に住んでいたことと、米作りがしたいという思いがあったことだという。現在、理恵さんは米作りを中心に行っており、他にも棉を育てたりしている。ご主人は、庭木の剪定・伐採などを中心に庭や山の木を切る仕事をしている。

以前住んでいた場所は、今より駅も近く公共交通機関も整っていた。しかし、今は山奥であるため車がないとまず生活が難しく、また冬の寒さや積雪にも苦勞するという。お子さんたちの通学時には、必ず車で下まで送り届けている。それでも、お子さんたちを育てる環境としては最高だと、理恵さんは笑顔で語ってくださった。周りの集落の方も優しく、子どもたちは子どもたちだけで山の中を元気に遊びまわっているという。

お話を聞く中で、自然いっぱい環境で、町では経験が出来ないような新しいことをたくさん吸収し、のびのび育つというお子さんたちのことをうらやましくも感じた。

3. 立山町をより輝かせる人々

3-1. 地域おこし協力隊 高橋秀子さん

高橋さんは、地域おこし協力隊の定住コンシェルジュとして、移住・定住のサポートを中心に活動している。現在 44 歳で、2 年前に就任し今年で 3 年目になる。もともと東京に住んでいて、富山県へ何度か遊びに来ているうちに知り合いが増え、ネットワークができていった。その頃は、こちらに住むとは全く考えていなかったが、情が厚く良い人ばかりで、食べ物も水もおいしいという立山町の魅力に引き込まれて、移住を決めた。移住してくることに對して不安はなく、どちらかというワクワクした気持ちでやってきたという。実際に住んでみて、富山市へのアクセスの良さや自然豊かな景色、近くに見えるきれいな立山連峰も立山町の魅力だと感じている。

高橋さんは以前、東京でライターとして取材したことをもとに記事を書く仕事をしてた。しかし、富山での出会いを通して、地域に貢献したいという思いが芽生え、ちょうど立山町が定住コンシェルジュを募集していることを知り、仕事を辞めて移住した。“言葉”

で魅力と情報を伝える経験が、今の仕事にも生かされているようで、定住コンシェルジュとして精力的に活動している。

高橋さんは、平成 27 年 4 月から活動をはじめ、主に役場で立山町への移住を考える人々の相談にのっている。実際の相談数は、月に平均 2~3 件ほどで、県外からが 2 割、県内からが 8 割くらいの割合だという。県外は東京や神奈川などの関東圏からが多く、県内は隣の市や町からが多いそうだ。他にも、東京で開催される移住フェアなどに立山町として出展し、その相談員として、興味を持つ人に向けて説明を行ったりしている。移住ブームなどもあり移住に対するハードルが以前に比べて下がっていることを感じるそうだ。また同時に、U ターンをすることが既に決まっていた家を探したいという人から、漠然と立山町（田舎）に住みたいという人までさまざまな人が相談にやってくるが、移住する目的が明確であるほうが具体的なアドバイスや紹介をしやすいということも、よく感じるという。

高橋さんはこれまで、何度かイベント（移住者の体験談を聞くイベントなど）を企画した。これらは、地域の皆さんがこういった場を求めているのではないかということから、行われた。平成 28 年 6 月に行われた『芦峠寺 de ワールドカフェ』は、“住みたい町とはどんな町か”など 2、3 のテーマについて 4~5 人で一つのテーブルに座り、意見交換をするというイベントで、20 人ほどの参加があった。各テーブルで話し合いをしながら 10 分ごとに席を移動していく、ワールドカフェと呼ばれるワークショップの手法を用いて、多くの人と話が出来るようにした。「まずは地元の住民が、地元の良さや魅力を知る必要がある」などの意見がたくさん出てきたという。

同じく昨年 8 月に行われた『食べて、学んで、恋して立山！T ターンはハッピーターン』は、移住者が中心に集まり、芦峠寺の郷土料理を食べながら話をするイベントだった。“T ターン”は I ターンと U ターンになぞらえて考えられた言葉で、県外に住む人の帰省時期であるお盆の時期を選んで開催した。芦峠寺で開催したのは、高橋さん自身が千垣地区に住んでおり、芦峠寺が比較的近い場所であることや広いスペースが確保できること、芦峠寺の郷土料理も一緒に広めたいという思いからだったそうだ。会場では、芦峠寺の人々が作



写真 5. 芦峠寺の郷土料理(高橋さんより提供)

った、ごごみなどの山菜や里芋を煮た「つぼ煮」や、よもぎ餅のなかに味噌が入った「やきつけ」、「ふきのとう味噌」、じゃがいもを甘辛く煮た「かつつる」などがふるまわれた（写真 5）。これらは昔、霊峰立山に登拝する人が食べた精進料理で、肉や魚は入っておらず山菜や根菜などが中心の料理となっている。高橋さんは、こうした料理の文化も途絶えさせずに守りたいという考えも強く持っているそうだ。

また、東京や大阪などで開催される移住フェアについてもお話を伺った。ここ数年、富山県は移住を考える人に向けた移住フェアを東京で開設している。立山町は、そうした県が行うものに年に 3 回程度参加し、立山町の相談ブースを開いている。会場には、富山県を移住の候補地として考えている人々がやってくるといった感じで、情報収集を目的としている人が多い。その後、メールや電話でやり取りをしていくうち、立山町に移住したいという人が出てくる場合が多いため、相談相手として、一人一人に丁寧に対応していくことが求められるという。これらは、立山町をより多くの人に知ってもらうための大切な活動となっている。

3-2. 佐藤みどりさん

佐藤みどりさんは元地域おこし協力隊で、任期中に「立山 Craft」というイベントを立ち上げ、現在は NPO 法人立山クラフト舎を設立し、運営を行っている。佐藤さんは、平成 26 年 4 月から 3 年間、新瀬戸地区担当の地域おこし協力隊として活動していた。出身地は兵庫県神戸市で、その後愛知県、埼玉県に住み、富山県にやってきた。阪神淡路大震災を小学 6 年生で経験し、また、東日本大震災直後から埼玉県で暮らす中で、家や人が集中した場所で水や食料の供給がストップした時のことや、小さな子供を抱えた中での災害に対して、さまざまな不安を感じたという。

もともと移住ツアーに参加するなどして移住先を探していたが、立山町のツアーに参加した際に役場の方に陶芸をしていることを話したところ、後日、新瀬戸地区で活動して欲しいという電話を受け、ご主人の転職のタイミングも重なったことで、最終的に立山町に来ることを決めた。来てから半年の間は、さまざまな後悔や不安があったという。しかし、暮らしていく地盤を整えていく中で、この場所に移り住んできて良かったと思うようになったそうだ。お子さんは、ご主人と山登りをしたり畑の野菜を収穫したりして過ごし、地域の方にも見守られながらのびのびと育っているといい、この場所で子育てが出来て良かった、これ以上ない環境だとも語ってくれた。



写真 6. 立山 Craft2017 のチラシ

今回お邪魔させていただいた佐藤さんのお宅も、もとは空き家だった。来て 1 年目に見つけたお宅で、比較的状态が良かったため自分たちで壁や床をリフォームしたという。また、隣にある納屋は、佐藤さんが陶芸をする場所になっている。1 階部分に駐車スペースと窯があり、2 階部分は工房で落ち着いた空間となっていた。

佐藤さんが立ち上げた「立山 Craft」は、平成 27 年に始まったイベントで平成 29 年で 3 回目になる。平成 27 年は来場者が二日間で約 8000 人、平成 28 年は約 1 万 4000 人、平成 29 年は約 1 万 5000 人と確実に規模が拡大している。会場は立山町総合公園で、公園内に、陶磁器・木工・ガラス・革・金属・布などでオリジナルの作品を作る作家が全国から集まり出店するクラフトブースと、フードブース、地域紹介ブース、子どもたちが遊べるコーナーなどが開かれる。規模が大きなものになるため、NPO 法人立山クラフト舎を設立し、イベントを運営している。

このイベントは、豊かな自然が広がる地で、工芸文化がより根付いてほしいという思いで始められ、交流人口を増やし、中山間地域の活性化につなげることを目的としている。「立山 Craft」には、全国から出店者が集まり、全国から人がやってくる。佐藤さんは、「立山 Craft」を開催してから県内・県外の両方の人々とながりが出来たことに喜びを感じている。さらに、この地に足を踏み入れたことのない人が立山町に来て立山町を知ることになり、その内の 1 %でもこの土地に興味を持ってもらえたら、という思いもあるそうだ。そして、立山町を離れた若者に少しでもこのイベントのことが耳に入って、“立山町でこんなことをしているらしい”“立山町頑張っているな”と、また戻ってきってくれるきっかけになればもっと嬉しいと語ってくださった。



写真 7-8. 2017 年の立山 Craft の様子（立山 Craft Facebook より引用）

お話を聞いていて、地元の人ばかりが集まってしまいがちな地元のお祭りとはまた少し違い、こうしたイベントは全国から人が集まりやすく、たくさんの交流が出来るということに、私もとても魅力を感じた。佐藤さんがおっしゃっていたようにこれから先もこのイベントが 5 年、10 年と続いてほしい。

3-3. 蛭谷和紙職人 川原隆邦さん

川原隆邦さんは昭和 56 年生まれで、現在 36 歳である。立山町東部の虫谷地区で、蛭谷和紙の唯一の職人として和紙を製作している。

蛭谷和紙は、富山市の「八尾和紙」、南砺市の「五箇山和紙」とともに「越中和紙」と呼ばれる伝統的な和紙である¹⁶³。かつては県東部の朝日町蛭谷で盛んに作られていたものだったが、継承問題に直面し、存続の危機となった。川原さんは、その伝統的な技術と製法を朝日町で学び、守り続けている。現在は立山町の虫谷地区に、拠点となる川原製作所を構え、和紙作りをしている。また、川原さんは平成 18 年より「富山県伝統的工芸品コンクール」などの数々の賞を受賞し、平成 29 年には「第 30 回人間力大賞」¹⁶⁴でグランプリ、「U・50 国際北陸工芸アワード」¹⁶⁵で最優秀賞を獲得されている。

川原さんが、蛭谷和紙作りをする場所として立山町の虫谷地区を選んだ理由の一つは、この地域では、家を買うと納屋などがついてくることも多く、そのスペースを作業場として自由に使えるということだった。

そこに釜などの和紙作りに必要なものをゼロから作り、作業場を作り上げていくことが出来るため、その活用できる土地の広さもポイントとなったという。また、燃料となる薪の調達や、和紙の原料となるトロロアオイ、コウゾなどを近くで育てることが出来る、自分の手で何でもできる自然豊かな環境に魅力を感じたそうだ。



写真 9. トロロアオイの畑 (宮内七生さんより提供)

これから何かを始めようとする人にとっては、何もない土地は逆に言うと資源となる。そして、チャレンジの地にもなる。例えば、ある土地を畑として使おうとした時、そこがもともとは田圃であったという場合、そのままだと土がやせた状態であるため作物が育たないため、土壌改良が必要となる。この地で何が育つか、川原さんは、後で紹介する農業女子の宮内さんと共に、試験的に一つの畑で複数種の作物を育てて、何を育てるのに適した土壌であるのかを探っているという。ミニマム（最小限）であるからこそ、失敗しても何も問題はなく、何事にもチャレンジしやすいというのがこの地の良さだと、川原さん

¹⁶³ トロロアオイとコウゾを原材料に作られる和紙。特徴として、原材料の栽培から全て行うこと、優れた保存性、強く柔らかな紙質などが挙げられる。

¹⁶⁴ 科学技術、文化芸術、国際交流、環境、スポーツ、教育など様々な分野で活躍する 20～40 歳の若者を称える賞。公益社団法人日本青年会議所が主催している。

¹⁶⁵ 50 歳以下の工芸に携わる作家や職人を対象とし、一人ひとりの工芸に対する考えや取り組み、実践、未来への展望などを総合的に評価して奨励する賞。富山県が主催する「国際北陸工芸サミット」の中心的なイベントの一つ。

は語る。

川原さんとのお話の中では、虫谷という場所、周りの人々、自然環境などすべてが蛭谷和紙作りにプラスとなっていることを強く感じた。そして、川原さん自身に人を惹きつける大きなパワーがあることを感じた。

3-4. 横谷和子さん

横谷和子さんは、現在 40 代で、東京都品川区出身である。現在、立山町の釜ヶ淵地区に住んでいる。娘さんが中学校に上がるタイミングを見て、平成 28 年 4 月に立山町にやって来た。私が取材をさせていただいたのは、移住して 1 年 5 か月経った頃だった。

横谷さんが移住を決めた大きなきっかけは、蛭谷和紙の後継者不足の話題をテレビでまたま見かけたことだった。そこで自分が蛭谷和紙の後継者としてチャレンジしたいという思いを抱き、和紙職人の川原さんのもとへやってきた。お子さんがいるため、生活が安定することを重視し、引っ越し前にまず雇ってもらえる場所を探すことから始めたという。それが、現在働いているグリーンパーク吉峰¹⁶⁶である。和紙作りの手伝いがあるため、正社員ではない形で、その合間を縫ってグリーンパーク吉峰内の食堂で食事を作る仕事をしている。

立山町へやってきて、買い物がいつでもどこでもできる、交通の便の良さなどの、ずっと当たり前だと思っていたことがそうではないと、東京に住んでいた頃には気が付かなかったことにたくさん気が付いたという。横谷さんは、新たな環境に置かれて生活も少しずつ変わっていく中で、お裾分けで野菜をもらったり、お米は近くで作っている方から直接買ったりといった、人とのつながりを楽しみ、大切にしている。もらった野菜の美味しい食べ方や料理の仕方を聞き、そこから会話を広げてどんどん仲良くなれる。また、分からないことはなんでも素直に聞けて、会話の中に地域の情報がたくさん詰まっているのは、この地域に住んでいるからこそだという。人々とのつながりを忘れない生活をしている横谷さんは、立山町の魅力を日々肌で感じているようだった。

昨年は、川原さんのもとの和紙作りのお手伝いを始めた 1 年目にあたる。そして蛭谷和紙の材料の性質上、紙漉きが冬場に限られるため、紙漉きに携わるのはまだ難しいだろうと横谷さんは考えていた。しかし、川原さんの配慮で立山町に来て 6 か月目の昨年（平成 28 年）



写真 10. 川原製作所で和紙作りをする横谷さん
(横谷さんより提供)

¹⁶⁶ 立山町吉峰にある、立山吉峰温泉を中心とする施設。宿泊やキャンプ、バーベキュー、パークゴルフなどのアウトドアが楽しめる。

11 月に紙漉きの技術を教わることができ、自分の紙を漉く経験をすることが出来たという。自分の作品を「立山 Craft」などに出店することも体験し、次に創りたい作品のアイデアが増え、どう実現するか日々考えを膨らませているそうだ。

3-5. 奥野真理子さん

奥野真理子さんは、現在 40 代で、もともと富山市に住んでいた。立山町には平成 29 年 7 月にやって来た。長年実践している自然農¹⁶⁷を基盤とした、里山の暮らしを体験したいという思いがあり、どこで暮らそうかと考えている時、立山町の虫谷という場所を見つけ、川原さんをはじめ、虫谷地区の方々に出会った。

奥野さんは、頭で思い描いていた里山にぴったりの景色が広がる虫谷に縁のようなものを感じ、引っ越してきた。現在は、和紙作りをしている川原製作所のすぐそばにある家の 2 階を間借りする形で住んでいる。取材させていただいた当時は、まだ住み始めて 1 か月余りであった。今は畑で何か育てながら、それを生業にしたいと考えている。また、和紙作りのお手伝いをすることもあり、川原さんや横谷さんと共に新しい生活を送っている。

虫谷という場所の紹介を受けたのは平成 28 年の 12 月で、冬の間ずっと通い続け、人間関係をつくりながら移住までの準備をしたそうだ。虫谷の人々はみな、目をキラキラさせて毎日の生活をととても楽しんでいるのが魅力的だと、語ってくだった。

3-6. 地域おこし協力隊 宮内七生さん^{ななみ}

宮内七生さんは、埼玉県出身で現在 27 歳である。宮内さんは、平成 29 年 4 月から立山町に住み始め、地域おこし協力隊の一人として活動している。取材をさせていただいたのは、移住して 4 か月の頃だった。

宮内さんは現在、地域おこし協力隊の「農業女子」として活動している。「農業女子」とは、立山町が人口減少と高齢化で不足する農業後継者を確保するために募集したもので、立山町の農業の活性化を図るものである。宮内さんは、男性に比べて体力や腕力がない女性が入れる世界なのかという不安もあったため、女性であることを前提とした農業女子の募集には、応募しやすいと感じたという。

現在宮内さんは、^{びるだん}蛭谷和紙職人の川原さんのお手伝いや農事組合法人「四谷尾」のラ・フランスの袋掛けなどのほか、地元の方から畑を借り、トマトやナスなど



写真 11. ラ・フランスの袋掛けをする宮内さん
(宮内さんより提供)

¹⁶⁷ 耕さず、農薬や肥料を用いず、草や虫を敵としないことを 3 原則とし、田畑共通で自然の営みに添うことを主眼とする農法。川口由一氏が提唱。

の野菜を育てている。

宮内さん自身は、もともと農業をしていたわけではなく、民俗信仰や自然に関する信仰に興味は持っていたものの、郷土博物館に展示されている犁などの道具は実際に使ったことがなかったため、それらの信仰の切実さも実感できない状態で見えていたという。そうした中で、自分で実際に農業をするようになれば、それらの信仰や道具の使い方に対する理解をより深められるのではないかということを経験していた。そして、祖母が富山市に住んでいるということも立山町の農業女子に応募するきっかけとなった。祖母のおかげで、富山県（の名前）になじみがあったため、農業女子の募集が富山県から出ていることを知り、すぐに応募することを決心したという。

立山町で農業をすることとなり、立山町に住むことが決まった宮内さんは、現在、谷口（川原製作所のある虫谷地区から少し下りたところ）でもう一人の農業女子である玉榮明奈さんと共同生活をしている。家具などもすべて用意されており、玉榮さんが宮内さんよりも早く住み始めていたという事もあり、住む所に関しての不安はなかったという。宮内さん達の住む立山町の谷口は、五百石などの町からさほど離れていないため、車さえあればすぐ買い物にも行けるので、住む場所としての不便さは感じないそうだ。

立山町の山間地域は、和紙の原料を栽培したり、土を使って陶芸をしたりと、自然が生活の一部に取り入れられている。この地にいると、人は自然と密接に関わりながら生きているのだということが強く感じられる。宮内さんをはじめ、横谷さん、奥野さんも口をそろえて、太陽や水などの自然の恵みのありがたさをきちんと知っている人々と暮らしたいという思いがあると語る。

宮内さんは、移住する先ではその地域と繋がりを持ち続けることが大切だと考えている。住む環境だけでなく、人と人の繋がり方も地域によって少しずつ異なる。お話を聞いて、自分の住んでいる地域の人々のことを知り、コミュニケーションをたくさん図りながら、地域の一員となって宮内さんが活動していることがよく分かった。また、この地区の人々の優しくオープンな雰囲気が、宮内さんの支えとなっていることも感じられた。

4. まとめ

1 節で述べた通り、立山町は転出が転入を上回る状態が続いており、さらに少子高齢化も影響し、人口の減少が見られる。このことは、立山町の将来にも関わる問題であるだろう。しかし、調査を進めていくと、立山町は多くの働く人々を支えるベッドタウンとなる町であり、子育てしやすい町でもあることが分かってきた。実際に、自然豊かな環境の中でのびのびと育つお子さんたちを見て、最高の子育ての場だと実感されている方々の声もあった。統計などの数字のデータだけでは分からない、立山町の良い所を見つけることが出来たように思う。

今回の調査では、立山町に暮らす 11 名の方にお話を伺った。お会いした方々は、暮らし

自体を楽しみ、充実した毎日を過ごされていると強く感じた。私は、人生で引っ越しというものをほとんどしたことがなく、住む場所を変えることは大変で勇気のいることだという印象ばかりを持っていた。ところが、調査を通して立山町へ聞き取りに伺う度に、立山町で暮らす方々の前向きで大きなパワーに刺激を受けたことで、その考え方は大きく変わった。

お話の中で、多くの方が日々の生活で周りの地域の方々との繋がりを感じ、それを大切にしていると語ってくださった。現代は、近くに住んでいるにも関わらず、話をすることも挨拶をすることもないことがしばしばある。隣に住んでいる人の顔すら知らない場合もある。そうした中で、このような温かい人間関係を築き、生活を楽しむことの出来る立山町は、守るべきとても素敵な環境を持つ町なのではないだろうか。私は、これが立山町の一番の魅力であると感じた。そして、それを笑顔で語ってくださる方々に出会えたことも、全ては人との繋がりを大切にする立山町で調査を行えたからだったのではないかと感じている。

また、立山町の良さを広めるために、立山町を盛り上げていくために、活動をしている方々からも沢山のお話を聞くことができた。移住者全体の中で見ると、県外出身者はまだまだ少数派ではあるものの、豊かな自然に囲まれた環境だからこそできる生活や仕事を始めている若い年代の方々が多くいらっしゃるということが分かった。移住者の方々が、立山町に新しい風を吹かせ、変化をもたらしているということも、私自身とても惹かれる部分だった。

田舎は何もない、遊べるところがない、楽しくないと感じる若い人々が、立山町を出ていく状況が続いてしまうと、これから先も若者の人口流出は止まらない。しかし私は、取材を通じて、立山町は可能性を秘めた大きなパワーを持つ人や土地、環境に囲まれた場所であると感じた。今も変化し続けている立山町がさらにこのパワーと“立山町にしかないもの”を生かした町となり、この町で暮らすことに魅力を感じる人が増えていってほしい。

そして、国や町の様々な制度を利用し移り住んできたという方が多くいらっしゃったことも印象に残っている。国や町の取り組みは、少なからず立山町を知るきっかけや立山町に住むきっかけとなっているのである。平成 28 年には、立山町での転入・転出による人口動態が 11 年ぶりにプラスになったということもとても嬉しく、大きな前進だと思う。これから先も、このような活動や取り組みが立山町内外の方に知られ、多くの人に届いていくことを期待したい。

謝辞

今回、調査を行うにあたって、多くの方から貴重なお話を聞かせていただきました。お忙しい中お時間を割き、聞き取りに協力して下さいましたすべての皆様に深く御礼申し上げます。初めて会う私に、沢山のお話や思いを聞かせて下さった皆様のおかげで、拙い文章ではありますが、このような形で報告書をまとめることができました。温かく受け入れてく

ださり、本当にありがとうございました。

参考資料

立山町（発行） 平成 11 年 3 月 『統計たてやま 1998』
立山町（発行） 平成 15 年 3 月 『統計たてやま 2002』
立山町（発行） 平成 20 年 3 月 『統計たてやま 2007』
立山町（発行） 平成 28 年 10 月 『統計たてやま 2016』
立山町（発行） 『広報たてやま』平成 21 年 1 月号～平成 29 年 12 月号

参考にしたウェブサイト

「統計年鑑 - 富山」
(<http://www.pref.toyama.jp/sections/1015/lib/almanac/index.html> 2017 年 11 月 26 日
閲覧)
「立山暮らし」
(<http://www.town.tateyama.toyama.jp/teiiju/> 2017 年 11 月 26 日閲覧)
「立山町」（立山町ホームページ）
(<http://www.town.tateyama.toyama.jp/pub/> 2017 年 11 月 30 日閲覧)
「統計たてやま - 立山町」
(<http://www.town.tateyama.toyama.jp/tokei/toukeitateyama2017.pdf> 2018 年 1 月 20
日閲覧)
「総務省 地方行財政」
(http://www.soumu.go.jp/menu_seisaku/chiho/index.html 2017 年 11 月 30 日閲覧)
「蛭谷和紙 とやま観光ナビ」
(<http://www.info-toyama.com/s/spot/60036/> 2017 年 11 月 30 日閲覧)
「立山 Craft - Home Facebook」
(<https://www.facebook.com/tateyamacraft> 2017 年 12 月 5 日閲覧)
「とやま農業未来カレッジ - 富山県農林水産公社」
(<http://taff.or.jp/nou/college/> 2017 年 12 月 11 日閲覧)
「大工と庭師の専門学校 職藝学院」
(<http://www.shokugei.ac.jp/> 2017 年 12 月 12 日閲覧)
「立山吉峰温泉 立山グリーンパーク吉峰 公式ホームページ」
(<https://www.yoshimine.or.jp/> 2017 年 12 月 12 日閲覧)
「地理院地図」
(<http://maps.gsi.go.jp/> 2017 年 12 月 13 日閲覧)
「富山経済新聞 - 広域富山県のビジネス&カルチャーニュース」
(<https://toyama.keizai.biz/> 2017 年 12 月 16 日閲覧)

「第 31 回人間力大賞 - ニッポンサイコープロジェクト」

(<http://nippon-saiko.jp/ningenryokutaisyo/> 2017 年 12 月 16 日閲覧)

「国際北陸工芸サミット」

(<https://kogeisummit.jp/> 2017 年 12 月 16 日閲覧)

めっか 目桑集落での人びとの暮らしと地名

深井 美希

はじめに

私は、地名に興味があり、特に地名を通じて自然と人との関わりについても調べてみたいと考えていた。立山町を調査することが決まってから、いろいろな場所を見て回った。山村部に訪れたとき、車一台がやっと通れるようなぐねぐねと曲がった上り坂や、山奥の鬱蒼とした景観に圧倒された。現在、山村部に暮らす人は減少しつつも、そこに暮らしている人々がいる。この自然あふれる環境のなかで、人々が自然とどう関わりながら生活しているのかについて、調べてみたいと思った。そうであるならば、できるだけ奥山里の集落で調査してみようと、目桑集落を調査地にした。

また、目桑にはたくさんの小字¹⁶⁸が存在している。地名は、人によって名付けられたものである。たとえば、大阪の梅田は埋め立て地であることから「埋田^{うめだ}」という名がついた。しかし、「梅」という直接関係のない漢字が当てられ、「梅田」という地名になっている。地名はその土地の地形特徴から名付けられることがある。地すべりの起きやすいような危険な場所を示すこともある。つまり、地名はその土地の自然環境を知る、ひとつの手がかりであると言えるだろう。

また、自然環境だけではなく、文化的な要因も地名の由来となることがある。その土地を拓いた人の名前がついたり、地域の伝承から名前がついたり、神社やお寺から名前がつくこともある。そういった地名についても詳しく調べるため、前半部分では、地形をはじめ、目桑での生業や、歴史、神社、年中行事、伝承、昔の暮らしなどについて触れている。後半では、目桑の小字について、名前とその位置、名前の由来について考察などを行っている。

1. 東谷地区概要

1-1. 自然と地形

東谷地区は立山町の中心部である、五百石の南東部に位置しており、東谷地区西部では上段地区と、南部では立山地区に隣接しており、北部、東部は上市町に面している。図 1 の斜線部にあたる。

東谷地区に属するのは、四谷尾^{しだにお}、谷口、虫谷、白岩、六郎谷、目桑、谷、伊勢屋、小又、松倉、座主坊の 11 の集落である。塔倉山 (726.30m) や来拝山 (899.3m) 大辻山 (1361m) があり、白岩川、湯比谷川、虫谷川、和田川、中谷川などの川が流れている。

¹⁶⁸町や村の中の一區画の名（大辞林 第三版より）。



図 1. 立山町における東谷地区の位置

1-2. 歴史

立山町山村部には、古くから弓^{ゆみのしょう}庄と末^{すえのしょう}庄というまとまりがあった。聞いた話では東谷村内で、四谷尾、谷口、虫谷、白岩、六郎谷は弓庄に、目桑、谷、長倉、城前、伊勢屋、小又、松倉、座主坊は末庄に属していた。弓庄には^{なちじょう}館城¹⁶⁹、末庄には池田城があった。館城は白岩川東岸の台地上に築かれた平城で、池田城は池田集落南方の城山に位置する山城であった。

明治 22 (1889) 年の町村制施行により東谷村が誕生した。目桑、谷、長倉、城前、伊勢屋、小又、松倉、座主坊からなる村を東谷村と言った。昭和 29 (1954) 年 1 月に東谷村とほか 1 町 4 村が合併して立山町になる。それから「東谷地区」という名は使われているが、現在、城前と長倉には人が住んでいない。

¹⁶⁹ 下中 (1994) によると「弓庄城」と表記されており、聞き取り調査では「館城」と呼ばれていた。

2. 目桑集落について

2-1. 目桑の概要

図 2 の地図に、東谷地区に属する集落を示した。目桑は白岩川上流部の右岸に位置していて、北は六郎谷村、南東は谷村に面している。大辻山に連なる一帯の山麓に囲まれており、傾斜のある土地である。竹内(1979)によると、目桑村は白岩川の谷間の村のなかでは最大の集落であった。明治初期には 80 戸以上を数えたが、北海道の開拓事業に 20 戸余りが移住した。昭和初期には 50 数戸あったが、昭和 57(1982)年に 32 戸に減り、平成 21(2009)年には 20 戸となった。



表 1. 目桑の戸数の推移

(地元の方からの資料による)

明治初期	80 戸
昭和初期	50 数戸
昭和 57 (1982) 年	32 戸
平成 21 (2009) 年	20 戸

図 2. 東谷地区集落

2-2. 目桑の歴史

目桑集落は、立山への登山道(池田街道)にある集落として、古くから開発された。目桑から少し南に位置する伊勢屋は、神亀 3 (726) 年頃、つまり奈良時代から人が住んでいた模様¹⁷⁰である。目桑という名が無かった頃から、奈良時代、平安時代には既に人が住んでいたものと考えられる。

¹⁷⁰大正 15 (1926) 年に発行された『東谷村誌』によれば、伊勢屋は「今より千二百年前此の地に初めて来住したる中山縫之助の生國伊勢をとつて名づけられたるものなり」とあるように、村史が書かれた年から 1200 年前には伊勢屋に人が住んでいたことが分かる。そのため大正 15 年から 1200 年遡ってみると 726 年であった。

戦国時代には、池田城主である寺嶋^{もとさだ}職定が支配していた（金森中務という説もある）。池田城落城の際に、何人かの武士が目桑の地へ帰農、定住したと伝えられる。

2-3. 「目桑」の地名由来

『立山町史』によれば、目桑の地名の由来は、「いつころからか定かではないが、桑の栽植が行われ、生育がはなはだ良好で、まゆの品質も良く、さかんに養蚕が行われたことにより「芽桑」と名づけたが、のち目桑と改められたと伝えている」とのことである。

目桑の地には現在も伝わる「目桑ちりめん節」というものがあり、この地の絹織物生産が、かつて盛んであったことを示している。「目桑ちりめん節」の由来は、戦国時代、越後の上杉勢によって落城した池田城主の家臣、鈴木兵助が目桑にのがれて帰農し、村の娘たちが副業として織っていたちりめん織法に改良を加えて教えたといわれ、機織りしながら口ずさんだ歌が「ちりめん節」で、のちに踊りも加えられた」と『立山町史』に記載されていて、昭和46年（1971）には、立山町の無形民俗文化財にも指定されている¹⁷¹。踊りについては徐々に変遷があったそうで、現在と昔のものとは違いがある。どんな時に披露されるのかというと、定期的ではなく、何か催しがあるときに行われていた。ただし現在、唄を継承する人はほとんどいないという。

また、中葉（1998）によると、「目桑」の「桑」はクエ（崩れ）の崩壊性の意が含まれており、自然災害に関する地名であるという。たしかに目桑は地すべり防止区域に指定されており、昔から目桑の地は自然災害が起こりやすいとされてきたのかもしれない。自然災害に関する地名には、植物に名を借りて語呂合わせ的発想で、崩壊地形を示し自然災害の「音」を予知したり察知させるような地名も多々見られるという。ただ、そのような話を聞き取り調査のなかで聞くことはなかった。

3. 生業

目桑の生業として古くから、主に稲作が行われていた。地名の由来となっている桑を用いる養蚕もずっと昔は行われていたようだが、80代の地域の方が記憶にある頃には、すでに多くはなかった。米作りの片手間に、小遣い稼ぎ程度の副業として行われていたようである。蚕のエサとなる桑は、水田の縁に植えていた。桑が一番さかんに作られたのは江戸、明治ごろであった。目桑は桑を育てるのに良い環境だったようだが、人手不足であまり育てられていなかった。また、稲作と時期が重なることから、水田耕作面積が増加するのに伴い衰退していった。

また、木炭の生産も行われていた。木炭は火持ちの良いことで定評のある白炭であったが、家庭用燃料の灯油・プロパンガスの普及とともに衰退し、昭和29（1954）年には生産皆無となった（越野 1999）。

¹⁷¹ 動画サイト You Tube にも目桑チリメン節の映像がアップロードされている。

4. 伝承

4-1. 目桑の伝承

目桑にはいくつかの伝承がある。以下、地域の方からお借りした文献資料や、『立山町史』、地域の方への聞き取り調査によって得られた話を紹介していく。

(1) 機を織る大蛇

これは地元の方からお借りした資料にあったものである。目桑集落には、「機子池」(図 6 を参照) という自然池がある。この池に住んでいた大蛇が、ある日娘に化けて、村のある家へ機子(織物をつくる手動の機械)を借りに来た。その娘が美しく見かけない子だったので、不思議に思った家の人は針に糸を通して、娘の着物に刺しておいた。糸をたどると、池の縁にまで続いていた。耳を澄ませると、池の中から機を織る音が聞こえたようだ。それからというもの、夕方になると池の中から機を織るパタンパタンという音を、村人たちは「子どもを育てるために、池の蛇が機を織っている」と噂した。また、五百石の町から連れだってこの池尻までくると、突然その娘が姿を消したともいう。子どもを育てるために畔で機を織っているのではないかと噂した。この池の主と目を合わせると生きていなかったとも伝えられる。



写真 1. 血の杉

また、機子池の大蛇があるとき怪我をして、娘に化けて北山の湯へ行って傷を治した、という伝承もある。

(2) 血の杉 (写真 1、および図 6)

昔、杉が立っていたところを田んぼにするため、その木を伐採しようとした。すると、杉の木から血がふき出したという。気味が悪くなり木を伐ることができなかったようだ。その杉の木は形も大きさも変わらず、絶対に枯れないのだそうだ。これも地元の方の資料に記載されていたものである。

(3) 白岩、目桑両村の山争い

安永年間頃(1772~81)、目桑村民が白岩村八幡宮裏赤谷あたりまでが目桑村領であるとして山に入ったので、白岩村はそうではないことを主張して長い間争っていた。遂に奉行へと訴え出て、両村の代表者を招いて様々に仲裁したものの、聞き入らない。そこで奉行の實地見分となった。赤谷より峯傳いに湯比谷川上流の山嶺、目桑村背後にある黒壁あたりにつくと、奉行が急に「水を一口飲みたい」と言ったため、両村の代表者は水を汲みに行った。目桑村代表は、直ちに谷底の湯比谷川に下って行だったが、白岩村代表者は程近い螢が池の水を汲んで奉行に差し上げた。奉行は「これは美味しい」と数口飲み、戻ってきた目桑村

代表に「この争いはすでに決まっている。この深山で水を谷底まで汲みに行った目桑村よりも、近くに汲みに行った白岩村の方がこの山の事情をよく分かっている。よって白岩村の申し出を受ける」と言った。こうして 20 余年の長きにわたる山の争い事は幕を閉じたということである。

以上は、『東谷村誌』による話であるが、戸田スミ子さん（81）のお話にこれと少し似た内容の話があった。昔、白岩村と目桑村で領土争いがあり、朝早く起きてスタートし、より早く目的地に着いた方が領土を決められるというやり方での領土決めもあったそうである。

4-2. 城前の伝承

目桑の伝承ではないが、戸田スミ子さんから城前（図 2 を参照）^{じょうぜん}の不思議な話をお聞きした。スミ子さんの親は城前という、目桑よりも長倉よりもさらに奥まったところにあった集落で暮らしていた。スミ子さん自身は目桑で生まれ育ったので、スミ子さんの母親が城前から、目桑に嫁いで来たのだろう。今となっては、城前に住む人はいなくなってしまうが、母親からの話で覚えているものをお聞きした。

(1) 五色の旗

ある日、スミ子さんの母が田植えをして帰る途中、空が曇り雷も鳴って、天候が怪しくなってきた。そしてふと後ろを振り向くと、空に五色旗¹⁷²が立ち昇っていた。五色旗というのは城前にある神社にあったものだという。

(2) 山の横穴

城前とはその名前からも分かるように、戦国時代の山城である池田城の前にあった集落であった。そのため、山には横穴のあいているところがあり、入っていくと細い通路が続いている。そして奥に進むとまた横穴があって通路があって、という構造になっているところがある。敵から身を隠す場所になっていたのではないと言われる。昔、誰かがろうそくに火をつけたものを持って、その穴に入ってしまった。その人はのちに病気になり、死んでしまった。それからその横穴に入る人はいなくなった。

(3) 「シロエモブツ」での出来事

スミ子さんの叔父が、白岩川上流にある城前の「シロエモブツ」という川の底の深い場所で釣りをしていたことがあった。この辺りでは川の底の深いところ、つまり淵のことを「フツ」とか「ブツ」と呼ぶ。そこで大きなイワナを釣った。魚を持って帰ってきて、水

¹⁷² 五色旗とは日本古来の宗教である神道において、その葬儀の際に飾られる五色の旗（吹流し）のこと。五色は青（緑）・赤・黄色・白・黒（紫）。

槽に井戸水を溜め、しばらく泳がせていた。するとその釣った本人の足が悪くなり、病院に行ったが治らないとのことだった。すぐさま大きなイワナをもとの場所に放すと、足は徐々に良くなり、治った。ちなみに『東谷村誌』には「四郎右衛門淵」と呼ばれる淵が城前にあると書かれており（立山町史には別名、魚止淵^{うおどめふち}とも）、スミ子さんが言う「シロエモブツ」とはこのことではないかと思われる。

また、四郎右衛門淵について、『東谷村誌』のなかに、ある話が載っていたので紹介したい。四郎右衛門淵の由来は、四郎右衛門という人の名にちなんだものである。江戸時代のころにあった話だそうだが、ある日、四郎右衛門が富山へ買い物に出かけた帰りに、常願寺川付近で子供たちが亀を殺そうとしているのを見かけた。哀れに思った四郎右衛門はお金を出してその亀を買い取り、川に逃がしてやった。しばらくすると、四郎右衛門のところへ若い娘がやってきた。一晚泊めてほしいと言うので、泊めてやると、とても働き者で、性格はしとやかで優しく、美人であったため、四郎右衛門の家族も気に入って嫁にした。それからその嫁が作る料理はとても味が良く、魚を入れずとも魚の味がした。不思議に思った四郎右衛門はあるとき、病気にかかったと嘘をついて家の二階で寝ていた。食事の頃に台所を覗くと、彼の嫁は腰巻をめくって汁鍋の中でお尻を洗っていたのだった。四郎右衛門は驚いて汁物を食べることが出来なくなった。数日を経て、嫁が洗濯物をして帰って来ると、「下の川に行ったら小蛇がいたから殺して岩の上に置いておきました。お前さんら行ってみてください。」と言った。それを見に行ってみると、長さ 2 丈（およそ 6.06 メートル）ほどもある大蛇が引き裂かれていた。人々は四郎右衛門の嫁が普通の人ではないことを恐れた。その後の夜、四郎右衛門の夢に嫁が出てきて、これまでお世話になった、と礼を述べ、必要なものがあつたら淵へ手紙に石をつけて沈めるよう言って姿を消した。夢から覚めると嫁がおらず、行方不明になってしまった。数日して言われた通りにしてみると、翌日望みのものが淵の岩の上に揃えてあつた。人々は喜んで四郎右衛門淵と呼び、永く物を借りては返して不自由ない生活を送ったという。ところがあるとき、借り物の膳（食器を載せる盤のこと）1 枚を失くしてしまうと、それきり物を借りることは出来なくなったということである。

このような膳貸伝説に似た話は「稚児塚」、日中集落の「肩掛地藏」、池田集落の「夫婦岩」にある。望んだものが貸してもらえて、ある時返すのを怠ると二度と貸してもらえなくなったという話になっている。

他にも、城前にある家の隣に生えていた立派な木を伐ったところ、真っ白な大蛇が出てきて山のほうへ逃げて行ってしまった、という話など、なかなか信じがたいような不思議な話を聞いた。しかし、その話はスミ子さんの身近な人の話であつたりもするので、ただの作り話と片付けるには難しそうだ。

5. 神社について

目桑には昔、5つの神社があった。昭和2年に合祀され、現在は目桑神社と呼ばれている（立山町1977）。元の5つの神社それぞれの名前は、火の宮、草木宮（草木社）、若宮（八幡社）、祇園社、水神宮（水神社）である。地元の方から提供していただいた資料に詳細が載っていた。現目桑神社は元火の宮があった場所である。火の宮は、安永3（1774）年に創建された。草木社は天文2（1533）年に創建され、堂村に祀られていた。若宮（八幡社）は、永禄5（1562）年に創建、宮谷川を下ったところにさざれ石が2塔現存するという。祇園社は、天文年中（1532～55）に創建されたと考えられ、疫病払いで八幡社の末社として建てられた。水神宮の創建は享徳年間（1452～55）で、宮谷川の水源地に祀られていた。なお、図3は地元の方に教えていただいたことをもとに作成した地図である。



図 3. 目桑にあった5つの神社の位置

6. 年中行事

目桑では、年にいくつかの祭りが行われている。平成29（2017）年度の目桑の祭事・行事予定表を見せてもらった。括弧の中はその年の日程を示す。火祭り（3月19日）、春祭り（4月16日）、祇園祭（7月9日）、秋祭り（9月17日）、本秋祭り（10月8日）、歳旦祭（平成30（2018）年1月7日）が行われている。聞いた話では、水神様の祭りというもの

も9月に行われる。

『立山町史』によると、現在の目桑神社の祭りは、4月21日と9月21日に行われる。今の目桑神社の祭りが春祭りと秋祭りだと考えられる。火祭りは火の宮にちなむ祭りだと考えられ、祇園祭も祇園社に由来がある祭りだろう。残るは草木社の祭りだが、本秋祭りだろうか。歳旦祭を除き、どの祭りもおそらく神社に由来するものだと考えられる。

祭りの内容としては、現在だいたいどの祭りも目桑神社で行われ、神主さんが来て祝詞をあげて終わり、というシンプルなものになっている。ただし、祇園祭は以下で述べるような内容が行われている。歳旦祭、春祭りについては、昔の様子を記した。以下、戸田国一さん(84)、スミ子さんの語りから、昔や今の祭りの様子を記述する。

(1) 歳旦祭

鏡餅をお供えし、歳旦祭後、公民館で新年会が行われ、餅が振る舞われる。

(2) 春祭り

主に集落の男性がお祓いの場に参加する。昔は、親戚の人びとが集まり、お祓いのあと、女性たちは各々の家でごちそうを振る舞った。ゼンマイやタケノコ、ワラビなど地域で採れた山菜の煮締めなどである。水橋の魚屋さんが目桑まで来られたときはその魚も出したという。今の若い人が思うようなごちそうとは違う、と話していた。

(3) 祇園祭

ゲンドウサマのお祭り。ゲンドウサマとは目桑の入口付近、松の下に置いてあった地蔵のことである。県道を広げる工事の際、道の反対側に移動して、今では石でできた箱の中に入れられている。昔、赤痢や伝染病が流行ったときに、目桑の入口に地蔵を建て、目桑にはそれらの病気が入ってこないようにしたのだという。なお、ゲンドウサマとはどんな漢字を使うのかは不明である。『東谷村誌』によれば、次のような話も載っていた。おそらくゲンドウサマと深く関係があるのではないと思われる。

天文年間(1532～54)に、目桑で悪疫が流行し、大勢の人が亡くなったという。そこで、^{うぶすな}産土神に悪疫退散を祈願したところ、櫓の大木の根元に「蘇民蘇来」と書いた石が埋まっているからそれを掘り出し「池の山」というところに祀るようお告げがあった。その通りにすると、お告げ通りに石があり、八幡社の末社¹⁷³として社を建てたのだという。それが今の祇園社である。

「蘇民蘇来」と書かれた石について、京都の祇園社のちまき¹⁷⁴についている文字と似ているので紹介しておきたい。「蘇民将来」という文字が祇園社—八坂神社が勧請した、牛頭

¹⁷³ 本社に付属する小さな神社のこと。

¹⁷⁴ 厄除けのお守り。「蘇民将来之子孫也」の文字が入っている。

天王^{てんのう}¹⁷⁵にまつわる伝承に出てくる。牛頭天王が南海に旅したとき、日が暮れて、蘇民将来、巨豆^{こたん}将来という二人の兄弟のところへ泊めてもらおうとしたところ、富んでいる弟の巨豆はことわり、兄が歓迎した。数年後、この神はふたたびそこを訪れ、蘇民将来の家族に茅の輪を腰につけさせ、つけていない者をその夜殺してしまった。そして「吾は速須佐雄の神なり、後の世に疫気あらば、汝、蘇民将来の子孫と言いて、茅の輪をもちて腰につけたる人はまぬがれなむ」と言ったという。これが、祇園祭のちまきについている「蘇民将来之子孫也」の文字の由来と言われる。八坂神社は疫病を除いて福を招く神社と言われる。目桑で発見された「蘇民蘇来」と書かれた石も、悪疫を食い止める効果があった。このことから、「蘇民蘇来」は「蘇民将来」と同じ意味と捉えて良さそうである。ただ『東谷村誌』にはゲンドウサマに関する記述はなく、地蔵と「蘇民蘇来」の石との関係性は掴めなかった。

また、祭りの内容についてであるが、松倉にあったが今は五百石に移ったお寺の住職が、目桑神社にやって来る。他の祭りでは神主が来るところだが、この祭りはお寺の住職によって執り行われる。一人ひとり分厚いお経の冊子から風を受けて、両肩を冊子でポンポンと叩いてもらう。また、当番の家が米を持ってくる（お祭りの時は神棚に区長が供え物をする。酒、米、海のもの(スルメなどで、昔は魚)、大根、寒天、塩を供える）。米は一度洗って、干したものを用意しておき、当日神棚に供える。この米はお祓いを受けて、小分けの袋に分けられ、地域の方々の手に渡る。その米は、家で普通の米と混ぜて炊く。それは厄除けになり、それを食べると病気になると言われていた。

また、昔は太い柱に旗をつけた旗竿を目桑神社にたて、お祭りが行われたそうだが、今では旗竿は処分されてしまったという。現在では、金属製のポールが使われている。

他の祭りが簡易化されている中、祇園祭は他と異なる内容が行われており、興味深いところであった。

7. 湧水について

目桑集落内を歩いていると、農作業で使ったのであろう衣類をバケツに入れ、そこに川の水を流し込んで浸していたり、ホースが川から地上に出ていて、川の水を利用していることが窺えた。夏に訪れたときには、湧水は透き通っていて冷たかったことを覚えている。集落内を流れる宮谷川という川の水源が、水神宮にあり（図 3）、そこでは水が湧き出ている。近くには水神さまと呼ばれる御神体が安置されていて、そのあたりから各家に湧水が届けられるようになっている。食事に使うのに足りるだけの量の湧水をまず確保しており、残りは宮谷川から流れていく。その川から用水を引き、田んぼに利用している。湧水は目桑のどの家にも行きわたっているわけではなく、水道だけの家があり、湧水だけの家もある。

¹⁷⁵ 天竺の祇園精舎の守護神、あるいは新羅の牛頭山の神とも言われる。日本ではスサノオノミコトにあたると言われる。

り、水道と湧水を使っている家もあるそうだ。昔は水が大切なもので、水をめぐってトラブルも起きたそうである。たとえば、一方の家で洗濯に水を使えば、他方の家に水がまわってこないというものである。

7-1. 暮らしを支える水

高畑^{みつぐ} さん（85）のお話では、山奥に湧水があって、川に流れている水は飲料水としても使われるほどきれいで透明である。冬は温かく夏は冷たい。湧水は水田にも使われ、残ったものは白岩川へと向かう。

戸田国一さん（84）、戸田スミ子さん（81）のお話では、湧き水が水道の水になっている。立山町の管轄下にあり、山から出ている湧き水を水槽に貯めて、そこから各家に届けられる。法律上、浄水する必要があるためしているが、薬を使わずとも飲める。食事やお風呂に利用している。スミ子さんは、目桑の湧水がおいしくて、町で飲む水はまずくて飲めないという。目桑の水で作った米はおいしいので、高値で売れることもあるという。これとは別に、浄水されていない湧水があり、こちらも利用しているそうだ。水道に使われているのとはまた違う場所から出ているらしく、この湧水を使用しているのは目桑では5、6軒である。水と一緒に砂も流れてくるため、利用は手足を洗ったりする時くらいだという。また、昔は水神宮のあたりに、清涼な水を好むという特徴をもつワサビが生えていたそうだ。採り過ぎにより、今はなくなってしまったそうだ。

高畑洋子さんのお話では、目桑の湧水は、各家庭でタンクに貯められ、ポンプで汲みあげられる。洗濯や食事に使用している。使った水はそのまま川へ流れる。日常で使われる水はすべて湧水で賄えているわけではなく、水道使用料金の方も支払っているのも、水道も使用している。



写真 2. 水神様



写真 3. 集水槽

7-2. 水神さまについて

昔、目桑の地には神社が 5 つあった。それが現在は 1 つに合祀されているが、その 1 つに、水神宮という神社があった。そこに祀られる「水神さま」に関する次のような伝承がある。およそ室町時代のある年に、連日晴れが続いたときがあった。人々は渇きに苦しみ、作物なども枯れてしまう寸前であった。そのときに、目桑の開墾者の一人である市左衛門という人が、水神さまに日夜祈りを捧げた。市左衛門は昔京都にいた人で、目桑に移ってきたのだが、昔から水神さまを信仰していた人だった。すると「上窪」と呼ぶ山から湧き水が出て、人々も作物も助かったということだ。それから水神宮が建てられたというのが始まりである。水神宮が建てられた辺りは、小字で「水神」という名前がつけられ、今でもそのように呼ばれている。

水神祭りといって、目桑では 1 年に一度、水神様のお祭りが行われている。戸田スミ子さんのお話によれば、今から大体 20 年ほど前に、水神祭りを取りやめようということがあったそうだ。一度それで祭りを行わなかった年があったそうだが、それから出てくる湧水の量が減ってしまったのだという。水が絶えては困るということで、すぐに祭りを復活させたところ、湧水の量は元通りになり、それ以後、水神祭りは続けられているという。このお祭りも、現在行われている様子は、神主が来て祝詞をあげるというものである。

8. 昔の暮らし

ここでは、地域の方からお聞きした、昔の暮らしを記述する。

8-1. たかはたみつぐ 高畑 賦 さん(85)

高畑 賦 さんは、目桑尋常高等小学校を卒業した後、17 才のころから家業の炭焼きを手伝った。賦さんの親の世代では、炭焼きをする家が 5、6 軒あり、その他の家は百姓をしていた。当時、目桑で炭焼きをしていたのは 8 人ほどだった。林道はまだなく、山林をかき分けて山中に入り、一日かけて約 45 キロの炭を焼いた。夜明けから日暮れまで長い時間をする仕事だった。木を焼いているときは、ずっと煙の状態をみて火の加減をされていて、目が離せない。作っていた炭は白くて堅い備長炭で、黒炭よりも高度な技術が要求される。家庭で使用される燃料が変わり、電気やガスが普及してくると、炭は売れなくなって、炭焼きに従事する人は激減し、賦さんも炭焼きの仕事をやめた。そして歩荷ほっかと呼ばれる荷物運びの仕事に就いた。しかしその荷物運びの仕事も、やがてヘリコプターなどに代わられてしまった。その後は会社で働いたそうだ。

ちなみに賦さんは、会社を定年退職した後、60 才から趣味で再び炭焼きを始めた。このときは、自宅のすぐ近くの窯で炭焼きをしていた。できた炭は近所の人に配った。80 才まで続けたが今はやめてしまった。KNB から取材を受けてテレビに出たり、新聞にも何度か賦さんの姿が載った。5 年ほど前には農林水産省から炭焼きについて問い合わせの電話が来

たことがあるとのことだった。



写真 4. 自宅に飾って
ある賦さんが焼いた炭



写真 5. 立山温泉へセメントを運ぶ賦さん
(当時 25 才)

8-2. ^{たかばたけ}高畑稔さん(67)

稔さんの両親は豆腐屋を営んでいた。父親が目桑生まれで、12 男 3 女の 15 番目、つまり末っ子だった。大人になると埼玉の川崎重工で働き、そこで知り合った女性と結婚した。太平洋戦争が始まり、埼玉に空襲が来るようになって焼け出されると、目桑へ戻ってきて、豆腐屋を始めたそうだ。昔は目桑、伊勢屋、小又、座主坊、長倉など六郎谷から上の集落に、合わせて 150 ほどの家があって、行商していた。稔さんも手伝って、背中に豆腐を担いで自分の足で歩いて各集落を回ったという。車がない時代で歩くほかなかった。現在、五百石に暮らす孫の送り迎えをしている稔さんは、あの頃、体が鍛えられて丈夫でいられたことは、昔の時代の良いところだった、と話していた。また、朝は油揚げを揚げてから学校へ行っていたそうである。学生服で揚げていたため、学校へ行くと油臭いとよく言われた、と笑って話してくれた。

稔さんの家では豆腐屋を営んでいたが、他にもお店を営んでいるところがあった。駄菓子屋があって、塩やタバコを売っていたり、酒屋もあつたり、東谷農協の伊勢屋支店ではいろんなものを売っていて必需品はそこで揃えられた。野菜は自給自足で賄い、スイカなども植えていた。現在では収穫する前に、野生動物¹⁷⁶に食べられてしまうため、スイカは

¹⁷⁶目桑では、イノシシや、サル、シカなどが出没し、田畑を荒らしている。筆者も調査中、サルやシカを目撃した。集落内では至るところに罠を仕掛けるなどして対策が取られてい

植えられないという。

学生の頃、夏休みは毎日川で魚を獲っていた。アユ、イワナ、ヤマメ、サクラマスなどが海から白岩川へ遡上してくるのを、水中メガネでもぐってヤスで突き、獲ったりしていた。また海の魚は水橋¹⁷⁷の魚屋が持ってきてくれた。魚屋が持ってくる魚は、サンマ、ニシン、バショウカジキ¹⁷⁸、タラなどだった。昔は冷蔵庫がなかったので、塩気のある魚や干物が売られた。

家畜は馬(農耕用)、牛(食用として育て肉屋に売る)、鶏(卵を食べる)⁵、6羽を飼っていた。一部ではヤギを飼っているところもあった。今のようにペットは飼っていなかった。犬はいたが、放し飼いにしていて、野生鳥獣(クマなど)を追い払う役割を果たしていた。犬は放し飼いで噛みつきたりしてこなかった。呼べばやってきて撫でてあげたりして、なついていた。

炭焼きは冬に行われていた。炭焼きをする目的は、山の管理をするため、あるいは出稼ぎに行かずに稼ぐためである。戦後、植林の動きが各地に広がるが、それは目桑でも同じであった。それまでの雑木を伐って炭を作りながら植林活動を進めていった。炭焼きする木は、ミズナラ、コナラ、カシ、高級ではあるがケヤキである。伐った場所にはスギの苗木を植えていった。

葬式について興味深いことを聞いたので、それも記述する。稔さんが小学生の頃は、葬式は自分たちで執り行うものだった。村に火葬場(図6)が2つあり、稔さんの祖母が亡くなったときも棺を火葬場まで持って行って燃やしたそう。夜、親戚の人が火の番をしていて、その人たちに食料などを届けた思い出がある、と話していた。今では葬式となれば、業者に頼んでいろいろとお世話になるイメージがあったが、昔は身内で行うものであったそう。このように、身内で、棺を担いで火葬場まで行き、遺体を焼くという行為は、野辺送りと呼ばれ、昔行われていた葬式の方法であった。

8-3. 戸田^{くにいち}国一さん(84)とスミ子さん(81)

国一さんは富山市の堀川大泉で生まれ、昭和20(1945)年の大東亜戦争時、空襲がひどく、両親の出身地であった白岩へと移り住んだ。その後25才のとき目桑に来たそう。ちょうどそのころ、トラックが登場した。国一さんが20才のときは木炭車¹⁷⁹というものがあった。それがだんだん重油や軽油を燃料とした車に変わってきたのだという。また白岩川

るようだが、地域の人は困っている。

¹⁷⁷ 富山市の中にある町。富山湾に面しており、白岩川下流に位置する。

¹⁷⁸ スズキ目マカジキ科の海産魚。名はバショウの葉に似た大きな背びれをもつことに由来する。熱帯から亜熱帯の海域に広く分布し、カジキ類ではもっとも岸近くに姿を現す。西部太平洋では日本近海から台湾、フィリピン、ニューギニアなどの島寄りの海域に生息し、産卵もこの海域で行われる。全長2m以上、体重60kgに達する。剣のように突出した上あごをもち、背びれが体高の1倍半もあるのが特徴。(世界大百科事典 第2版より)

¹⁷⁹ 木炭ガス発生炉によって発生するガスを燃料にして走る自動車。第二次大戦末期から戦後の一時期、日本で用いられた(大辞林 第三版より)。

ダム建設に伴い、狭くて車の通れなかった山道が整備された。目桑に住んでいた人々は山の木を切って町のほうへ下りて行ってしまったそうだ。切り倒された木は神社にあるような百年くらいのスギだったと振り返っていた。

また、スミ子さん自身の幼いころの話もお聞きした。小学3年生のとき、芦峯寺へヤミ米を運んでいた。芦峯寺のほうでは米が穫れなかったので、目桑で穫った米を運んだ。警察に見つかりと捕まってしまうので、深夜23時頃にカンテラ¹⁸⁰を下げ、米を背負って目桑を出発した。芦峯寺に着くのは朝方で、まだみんな寝静まっていた。お米を届けると、芦峯寺の人に「よく来たな」と頭を掻きなで回された。目桑と芦峯寺の間には山があり、その山のことを芦峯寺の人は「外山」と呼んだ。また、目桑に住む人のことも「外山の人」と呼んでいた。ヤミ米を運ぶ仕事は貧しい家がやっていたもので、多くの家がしていた仕事ではなかった。スミ子さんの家は百姓をやっていたが、父親があまり体の丈夫な人ではなく、一家で協力してお金を稼ぐ必要があった。ヤミ米を運ぶ以外にも、学校を休んで仕事をするのがしばしばであった。それも許された時代だった。スミ子さんは、隣に住む大人の人と一緒に芦峯寺まで歩いていったそうだ。

また、目桑と呼ばれる由来となった桑の木についても話を聞いた。目桑の桑の木は昔、重宝された。水橋から目桑に上がってきた魚屋さんに頼まれて茶壺に使う桑を伐ってあげたことがあった。床の間の柱には立派な木が使われるのだが、桑の木はツヤがあって適材である。今も戸田さんが管理する水田には何十年も前に植えられた桑が残っており、幹がとても太くなっている。スミ子さんが小学4、5年のときは宝前坪で養蚕をしていた。昭和56～61年(1981～86)に行われた基盤整備によって宝前坪の桑の木は伐られてしまったという。

9. 目桑の変遷

目桑集落では、人口減少によって土地の「まとまり」が変化していった。以下、記述していく。

地元の方からお借りした資料によると、目桑ちりめん節が唄われ始めた頃（およそ安土桃山時代）から目桑は、^{とうげつぽ}峠坪、^{たにつぽ}谷坪、^{ほうぜんつぽ}宝前坪、^{どうむら}堂村、^{にしつぽ}西坪、^{おもてつぽ}表坪、^{うらつぽ}裏坪の七谷七村からなっていた（図4）。目桑より上方に位置する、現在の伊勢屋地区、谷地区も含めて目桑と呼ばれており、新川郡の主要地域となっていた。宝前坪、谷坪、西坪などについている「坪」が「まとまり」を表しており、地名であるという認識はない、とのことだった。ちなみに、地域の人々の話を聞いていると、谷坪のことを「タンツボ」と呼ぶ人が多かった。中葉(2009)によれば、支谷のことを富山県では「タン、ダン(谷)」と呼ぶそうである。

その後、人口減少により、7つの「まとまり」は4つへ減少する。この頃の呼び名は、西、表、裏坪、谷坪であった。つまり、峠坪と宝前坪が無くなったことになる。宝前坪は昭和

¹⁸⁰ 携帯用の石油ランプ。

50(1975)年頃になくなり、峠坪は宝前坪よりだいぶ前に無くなった。今、峠坪や宝前坪の場所には、水田のみが広がっている。元々7つに分かれていた頃も、水田が広がっているなかに宅地があるという景観だったようだ。図4は高畑稔さんに覚えている範囲で書き込んでいただいた区分けをもとに作成した地図である。



図4. 地元の方の話をもとに作成した目桑のおおよその区分け

それからさらに人が減って、目桑公民館付近を流れる宮谷川を境に、2つの「まとまり」に統合された(図5)。それぞれ1班、2班と呼ばれている。1班は、表坪、裏坪をまとめたもので、2班は、西坪と谷坪をまとめたものだという。

人口減少の要因としては、災害と、時代の変化にあると考えられる。聞いたお話では昭和38(1963)年と昭和44(1969)年に起こった災害があったそうだ。昭和38(1963)年は積雪による被害、昭和44(1969)年は大雨による大洪水により長倉集落が陸の孤島状態に陥ったそうだ。昭和44(1969)年のほうでは、長倉集落の用水が洪水により使用できなくなった。そこで、これ以上長倉に住むことを諦めた人々が、五百石に移り住んでいった。長倉から人が消え、小学校は統合され、山村からは遠い場所になった。バスの本数も減り、不便になった。また、仕事も稲作をするより、町の方で仕事をする人が増えていった。それらが要因となり、昭和35～40(1960～65)年頃、目桑でも人が移住して行って、人口減少が起きた。



図 5. 現在の目桑

目桑の変遷について戸田さんにお話を聞いた。戸田スミ子さんは目桑で生まれ育ち、幼少期は今住んでいる場所よりももっと上方にある、宝前坪というところに住んでいた(図 4 を参照)。当時の目桑は 7 つに分かれており、50 軒もの家があった。宝前坪から現在の場所まで下りてきたのは、スミ子さんが 34 才の時である。冬になると降雪がひどく、娘が学校へ通うのに大変だったからだという。それでもスミ子さんは他の人たちが次々と下へ移り住んでいく中で、ギリギリまで宝前坪に残り、一番最後に下ってきたのだという。残った家は壊さなかったが、自然災害で壊れてしまった。また、蔵を持っていたそうだが、それも壊れてしまった。「今住んでいるところもまた出ていかななくてはならないだろう。人がいなくなってどんどん山になっていく」と話していた。

スミ子さんが生まれた頃、堂村に人が住んでいたかどうかは不明だという。しかし、そのあたりには茶碗の欠片など、生活の跡をうかがわせる物が落ちていたりしたようで、人が住んでいたかもしれないとのことだった。そのあたりにあったかもしれない家のことを「ヅマのヤシキ」と呼んでいたそう。ただ、そこに今はないが、火葬場があり亡くなった人が弔われたという。それと、畑もあったそう。

スミ子さんが小学校の頃、お年寄りに聞いた話では、宝前坪では機織りが盛んであったという。お年寄りの方の時代、宝前には 7 軒ほど家があり、機織りをしていたのだそう。他の坪でも行われていたかもしれないようだが、宝前ではそういった家が特に多かったようだ。

10-1. 小字一覽

[illegible]

次に、『角川日本地名大辞典』と立山役場から得た目桑の小字についてのデータを以下に示す。ゴシック体になっている小字は読み方が異なっていることを表し、太くなっている小字は、小字の表記自体に違いが見られることを表している。また、『角川日本地名大辞典』には、滝ノ口が 2 つあり、役場から入手したデータには、面山が 2 つあり、また辞典の方に載っていなかった「川原」という小字名が役場のほうには載っていた。読み方の違いや表記の違いは若干のものであるので、誤って表記されたというだけである可能性も考えられる。

230

表 2. 角川日本地名大辞典と立山町役場の小字リスト

図 6	角川日本 地名大辞典	読み方	役場からの データ	読み方
○	赤坂	アカサカ	赤坂	アカサカ
	赤谷	アカタニ	赤谷	アカダン
	池ノ上	イケノウエ	池ノ上	イケノウエ
○	石向	イシムカイ	石向	イシムカイ
○	池ノ山	イケノヤマ	池ノ山	イケノヤマ
○	一枚田	イチマイダ	一枚田	イチマイダ
	入り谷	イリタン	入ノ谷	イリタン
	入元奥	イリモトオク	入元奥	イリモトオク
	上窪	ウエノクボ	上ノ窪	ウエノクボ
○	右近谷	ウコンダン	右近谷	オコンダン
	梅木谷	ウメキダニ	梅木谷	ウメキダニ
○	大柏山	オオガスヤマ	大柏山	オガスヤマ
	大岸	オオギシ	大岸	オオギシ
	大平	オオヒラ	大平	オオヒラ
	奥ノ畑	オクノハタ	奥畑	オクノハタ
	伯母屋敷	オバヤシキ	伯母屋敷	オバヤシキ
	釜谷	カマタン	釜谷	カマタン
○	上五十苅	カミゴジュウカリ	上五十苅	カミゴジュウガリ
○	川原割	カワラワリ	川原割	カワラワリ
	北浦	キタウラ	北浦	キタウラ
	越登	コエト	越登	コエト
○	後妻林	ゴケバヤシ	後妻林	ゴケバヤシ
○	越宮	コシミヤ	越宮	コシミヤ
	小林	コバヤシ	小林	コバヤシ
	堺ノ谷	サカイノタン	堺ノ谷	サカイノタン
○	三小川原	サンコガワラ	三小川原	サンコガワラ
○	下大平	シタダイラ	下大平	シタダイラ
○	下五十苅	シモゴジュウカリ	下五十苅	シモゴジュウガリ
○	蛇手	ジャデ	蛇手	ジャテ
○	定林ノ上	ジョウバヤシノウエ	定林ノ上	ジョウバヤシノウエ
	丈風石	ジョウブイシ	丈風石	ジョウブイシ
	定夫越	ジョウブゴエ	定夫越	ジョウブゴエ

	丈風越	ジョウブゴエ	丈風越	ジョウグゴエ
	定夫屋敷	ジョウブヤシキ	定夫屋敷	ジョウブヤシキ
	高ノ山	タカノヤマ	高ノ山	タカノヤマ
	高峯	タカミネ	高峰	タカミネ
○	滝ノ口	タキノクチ	滝ノ口	タキノクチ
	滝ノ谷	タキノタン	滝ノ谷	タキノタン
	峠	トウゲ	峠	トウゲ
○	峠割	トウゲワリ	峠割	トウゲワリ
	堂村	ドウムラ	堂村	ドウムラ
	中鉤	ナカツル	中鉤	ナカツル
○	中鶴	ナカヅル	中鶴	ナカヅル
	長峯	ナガミネ	長峯	ナガミネ
○	辻山	ニケヤマ	辻山	ニケヤマ
	西ノ上	ニシノウエ	西ノ上	ニシノウエ
	橋爪	ハシヅメ	橋爪	ハシヅメ
	林上	ハヤシノウエ	林ノ上	ハヤシノウエ
	東割	ヒガシワリ	東割	ヒガシワリ
	深瀬	フカセ	深瀬	フカセ
	深谷	フカタン	深谷	フカタン
○	二坂	フタサカ	二坂	フタサカ
○	宝前	ホウゼン	室前	ムロマエ
	窓向	マドムカイ	窓向	マドムカイ
○	丸山	マルヤマ	丸山	マルヤマ
○	万田	マンタ	万田	マンタ
	万田割	マンタワリ	万田割	マンタワリ
○	水神	ミズカミ	水神	ミズカミ
○	水上	ミズカミ	水上	ミズカミ
	猪ノ尾	ムジナノオ	猪ノ尾	ムジナノオ
○	村巻	ムラマキ	村巻	ムラマキ
	面山	メンヤマ	面山(2つ存在)	メンヤマ
	割詰	ワリヅメ	割詰	ワリヅメ
			川原	カワハラ

小字の読みについて、お話を伺っている中では、個人差があった。辞典に載っていたものとは必ずしも一致しない。「定林ノ上」という小字は「^{はやしべ}林上」と呼ばれている。また図 1

には載っていないが、辞書にあった「水神」は「スイジンノミヤ」と呼ばれている。また「宝前」は「ホウゼン」と読む人もいれば「ムロマエ」と読む人もいた。

10-2. 小字の由来について

小字の由来について、文献および聞き取り調査から可能な範囲で考察していく。

赤坂 あかさか 地形図で見ると、緩やかな坂になっていて、稲作が行われている場所である。鏡味・鏡味（1977）によれば、「アカ」の意味として考えられるのは、(1) アイヌで、魚の背線の意から山の尾根、山稜、崖、岬。(2) 赤。赤土や辰砂の産地。(3) 田畑。の三つに可能性が絞られそうである。稲作が行われていることから、ここでは「アカ」に(3)の意味が込められ、坂はその名の通り、緩やかな坂であることから「赤坂」の名がついたのではないかと吉田（1981）によると、「アカサカ」は多くの場合、赤土のある坂道の意とするのが適当だと述べている。

赤谷（アカタニ、またはアカダン） 新潟県新発田市の南部にある赤谷鉄山で知られるように、鉄分の多い川谷に用いる地名。『吾妻鏡』寿永元（1182）年に越後国赤谷がみえる（吉田 1981）。目立った谷の様子の色がそのまま地名となったと考えられる。なお、「赤」がつく地名は富山県のなかでも数多く見られ、地名総数の約三割を占める。赤色は、血の色であり、興奮しやすく、情熱の色ともいう。また、祝いや喜び、非日常性を表す色でもある（中葉 1998）。上市町の山奥には、「赤谷」という地名が存在する。何かしら関係があるのかもしれない。

池ノ山 いけのやま 図 6 をみると、低い山となっており、近くには伝承にあった機子池がある。この池の近くの山、という意味だろう。

石向 いしむかい 「石」関係の地名は、小石や礫の多い扇状地堆積物の構成を的確に表現した地名とみることができる（吉田・糸井 2004）。岡山県赤磐郡吉井町の地名に「石」というものがあるが、天神山上に祭祀用の立石があるという。また、字義通り石の意にもとれる（吉田 1981）。

一枚田 いちまいだ 大分県で散見される。一枚つづきの田の意味で、大きな田地のある所をいう（吉田 1981）。

大柏山（オオガスヤマ、またはオガスヤマ） この字があてられている場所は山である。この近くにかつて、若宮（八幡社）という神社があり、その祖先が大柏八衛門という人であった。その名字からとって、大柏山と名付けたのではないかと鏡味・鏡味（1977）によると、「カシワ」には、(1) 傾斜地。(2) 堅し岩（カタシイワ）の意。が考えられる。人名から付けられたと考える方が自然であるように思われるが、山であるため、傾斜地という形状から名付けられた可能性もある。

大岸 おおぎし 「岸」は、本来水ぎわや崖を表す言葉であるが、落差のある水田と水田との間に設けられたやや背の高い畦畔（耕地間の堺、水田の機能を保持するため田地との間に

土を盛った箇所)についてもよく用いられる(水田には、イネの生育期間を通じて水を張り巡らせておく必要があるが、その水を長時間維持するためには、一筆の水田は当然のことながら水平であらねばならない)。(吉田・糸井 2004)

奥山 おくやま 小野市の阿形町にも「奥山」という小字名の付けられている土地があるが、ここは、集落から一番遠い北西端にある山のことを指すそうだ。目桑を案内してもらった時にも、「奥山」は目桑集落の一番奥に位置する場所であった(吉田・糸井 2004)。

上五十苅・下五十苅 かみ しも (ゴジュウガリ、またはゴジュウカリ) 「カリ」には、(1) 山裾の草地、山畑、焼畑 (2) 狩猟、の意がある(鏡味・鏡味 1977)。「苅」という漢字から見たところ、(1) の意味が近いように考えられる。地形図で見ると、この地には水田と荒地がある。(1) の草地という意味でとると自然である。

川原割 かわらわり 「カワラ」には、礫地、川床の意があり、川そのもののことを指すときもある(鏡味・鏡味 1977)。付近を白岩川が流れており、礫地が広がっていることから、川や、礫地といった意味を示していると考えられる。

小窪 こくぼ 「窪」は、扇状地上の微高地と微高地との間の低地や、周辺小河原によって形成された自然堤防背後の低地などを含む微地形を反映した地名と考えられる(吉田・糸井 2004)。

越宮 こしみや 「コシ」には (1) ふもと、側、(2) 崖、(3) 越、といった意味がある(鏡味・鏡味 1977)。辺りに崖のようなものは見当たらない。神社は日本全国に数多くあり、神社にちなんだ地名も多いため (3) の意味である可能性がある。やや近くに火の宮があり、その宮を越えるとあることからつけられたか。

蛇手 (ジャヂ、またはジャテ) 田の間の道を意味する「縄手」という地名が存在する(吉田・糸井 2004)。「手」の文字に何かしらの共通点があるのではないか。縄が道を意味するとしたら、手は田地を意味している可能性もある。

丈風石・定夫越・丈風越 じょうふうし じょうぶごえ (ジョウブゴエ、またはジョウグゴエ) この種の地名が山谷に散見されるが、いずれも「ショウブ(菖蒲)」の当て字とみられる(吉田 1981)。中葉(1998)によると、丈風石・丈風越は、目桑と伊勢屋との峠にあり、風の吹き越す意から命名された地名ではないか、と書かれている。立山町では、山沿いや谷間の集落に「風」に関する小字が多く、白岩には正風谷、城前には嵐谷という小字が残っている。富山県は、北に富山湾があり、平野部を中心にして三方は山に囲まれているため、海陸風や山谷風が発生しやすい地形となっている。そして、「風に関する地名」は、県内では風の発生しやすい、山沿いと海岸沿いの二つの地域に分布している。山沿いでは農作物を育てる農民、沿岸沿漁業者や海を利用して物を運ぶ船舶航行者など、風向・風速状況が、直接、生活に影響を及ぼす人々によって地名が生まれたのではない(中葉 1998:403)。

水神 みずかみ 目桑で日照り続きになったときに、お祈りを上げ続けていたところ、その場所から湧き水が出てきたことから名付けられたそう(越野 1999)。神社の名前がそのま

ま地名となった。地域の方からはスイジンと呼ばれている。

^{たきのくち}滝ノ口、^{たきのたん}滝ノ谷 岳（タケ）、竹（タケ）の転化、高城（タカキ）の約化。「タギタギシ道」で、道が曲がり歩きにくいところをいうのかもしれない。

^{なかつる}中鉤・^{なかづる}中鶴 「ナカ」は（1）中間（チューカン）、「ツル」は（1）水路、水路のある低地（中国の中部に少ないが、全国的に分布する）（2）鶴、という意味が考えられる（鏡味・鏡味 1977）。「ナカ」については、何の「中間」なのか、思いつくものがなかった。「ツル」の（1）の意味で当てはめてみると、確かに、目桑の中で低地に位置していると言える。また、近くに機子池という池が存在し、高地にある田んぼを潤してきた用水が流れ込んできて、また別の水田へと流れていく水路が存在している。（1）の意味が由来している可能性は大いにありそうである。吉田（1981）によると、「ツル」の地名は九州に著しく集中分布している。「ツラ（連）」の転化で、川流に沿った小平地をいう地名である。

^{にけやま}迹山 やや強引だが、「ニケ」を「ヌケ」と読むと、「ヌケ」は山抜け、山くずれの跡（鏡味・鏡味 1977）を示すが、この地では稲作が行われており、山崩れしたかどうかわからない。香川県坂出市の地名に「迹田（ニゲタ）」というものがある。「ニギタ（和田）」の転化とみられ、開発が容易で、良田の地をいうのであろう（吉田 1981）。

^{にしやま}西山 図 6 を見てのとおり、目桑の西の方にある山の近くに位置していることから名付けたと考えられる。

^{ひとつや}一ツ屋 「ヒトツヤ」は一軒屋という意味で、東日本によく見られる名前である（鏡味・鏡味 1977）。この小字がある辺りには人家がなかったという。一ツ屋のあたりを越えていくと芦峠方面へと向かうことから、立山への登山道の途中の休憩場所であった可能性がある。

^{まるやま}丸山 目桑を案内してもらったとき、丸山の場所を確認してきたが、その名の通り丸い形状を成す山があった。

^{むろまき}室前 「ムロ」が表す意味としては、（1）朝鮮語の *mu ru, maru*（山）より、山で囲まれた所で、小さい入江や河谷の小盆地のこと、（2）神社またはその森（プロ・ムロ）、（3）古墳の石室、竪穴住居（北海道以外の全国に多い）がある（鏡味・鏡味 1977）。（2）の意味でとってみると、確かに近くに八幡社がある。しかし、室前とその神社の間には上五十苅があり、神社と深く関連しているという根拠とするには弱いようにも思われる。

^{ほうぜん}宝前 「宝」の意味として考えられるのは、（1）本当の宝、（2）「本（ホン）」が「宝（ホウ）」に転化したものである（吉田 1981）。

^{まどむかい}窓向 山の尾根の切れ目のことを「窓」と呼ぶ。その土地から、尾根の切れ目が見えたのかもしれない。

^{まんた}万田、^{まんたわり}万田割 「田」のつく地名はたくさんある。荒地や山野が開墾されて田になり、それが地名として残っているのだろう。山に囲まれ、平坦ではない土地ではあるが、

目桑ではたくさんの米が生産されていた。たくさん米がとれたことを「万」と表し、万田と名付けたのではないか。島根県平田市の地名にも存在した。この場合は「マロタ（円田）」の転化で、丸い形をした地形からとみられる（吉田 1981）。

^{みづかみ}
水上 この地の付近を白岩川が流れている。それよりも高地に位置することから名付けられたか。

^{むかやま}
向山 図 6 を見ると、向山の近くには山がある。山向かいの土地であるから、そう名付けられたか。また、兵庫県小野市の阿形町にも「向山」という小字目の土地があるが、ここは集落や東側にある塩ヶ山という山に対しての向山、という意味である（吉田・糸井 2004）。

10-3. 現在における小字の意義と役割

小字は昔から使われていたが、現在使われることは少なくなっている。それでも全くないわけではなく、使われることもあるようだ。具体的には用水管理の際、小字を用いて「林上」用水や「二坂」用水などというように呼ぶ。田の場所を指すときにも使われる。昭和 56 年（1981）から 61 年（1986）にかけて行われた基盤整備を経て、田には名前ではなく番号が振られている。しかし、それではわかりにくいため今でも小字を使って場所を示すことがあるそうだ。

他の使われ方としては、現在、小字は固定資産税を納めるときに使用されている。もっとも、今自分がどの土地を所有しているか小字の名前を聞いてもわからないという人もいる。

11. まとめと考察

目桑を調査して、湧水や、多くの神社、年中行事、伝承などに特徴のある集落であることがわかった。そして、その特徴は少なからず、地名にも反映されていることがわかった。

まず、「目桑」という名の通り、桑の生長に適した土地であり、稲作が主だったとはいえず養蚕も行われていた。機子池の伝承は、蛇が機を織っているという不思議な話だったが、これは目桑で機織産業がさかんだったことを示していると言っているだろう。

また、湧水の存在は、水神という地名を生み出した。他にも神社の近くにあることから、越宮と呼ばれる小字もある。八幡社を建てた人の名前にちなんだ「大柏山」という地名も存在する。その他では、自然地名から成るものが多かったが、田や谷、川を表したものがあつた。田地を表すものとしては、「一枚田」や「万田」である。川は「川原割」や「三小川原」、「水上」などがある。谷は「赤谷」や「梅木谷」などがある。一方で、推測すらたてられなかったものもある。貉ノ尾や蛇手など、動物の名前が入っていて気になるが、今回明らかにすることはできなかった。

目桑の中で大きく区分けが存在することも、調べてわかったことの一つである。最初は 7

つに区分けがされていたものが、だんだんと人口の変化により 4 つになり、現在では 2 つになっている。だいたい人の住んでいるところにまともりは集中しており、普段その区分けが必要になるのも、人の招集や連絡のために使われているからではないだろうか。

また、昔の暮らしを何人かの人にお聞きしたが、現代と異なることがたくさんあった。大きく異なることと言えば、昔は、川の氾濫などが多い平野部よりも山の方に住む人が多かったということと、昔は身の回りのことを自分達で行っていたということではないだろうか。昔、山村に住んでいる人は大勢いて、お店も何軒かあった。食べるものは、田畑で作り、川で魚を釣ることもあった。葬式は身内だけで執り行っていた。燃料も、炭焼きをすることによって手作りである。身の回りにある資源をうまく利用し、豊かな暮らしをしていたことを窺うことができた。

小字は、行政が固定資産税を納めてもらうために使われたり、地元の人は、田んぼに引く用水の名前を呼ぶとき、田の場所を示すときに使っている。私が最初に話を伺ったとき、地名といって小字の名前が出てくることはなかった。現在、小字を使うことはあまり見られなくなってきているのだろう。

ではなぜ、昔は小字が利用されて人々の間に根付き、現在、小字が失われつつあるのか。それは山に住む人が少なくなっていることが原因なのではないか。昔は、山村で暮らす人が多く、広範囲にわたって人の利用する土地が存在していた。それだけに、場所を示す言葉が必要だったのだろう。しかし、現在は人が減り、利用する土地も減ってきている。目桑のまともりの変遷で見てきたように、人が住まなくなった土地の名前は消えてしまうか、統合されて区分けの数は減っていった。これと同じように、呼ぶ必要がなくなった小字たちは、徐々に忘れられていくのだと思われる。

現在、目桑集落だけに限らず、山村では少子高齢化が進み、人口も減り続けている。今住んでいる人の中には子供や孫のいる人も多いが、若い人びとは町のほうに家を持ち、暮らしている。長きにわたって人が暮らしてきた跡を守り、これからに残していったほしいと思った。

謝辞

今回の調査をするにあたって、ご協力いただいたすべての皆様に御礼申し上げます。特に、目桑集落の方々には、度重なる訪問にも快く応じていただき、大変お世話になりました。いつも温かく迎え入れてくださって、目桑はいささか不便なこともあるかもしれませんが、自然が豊かで人も温かく、来る度いいところだなと感じていました。本当にありがとうございました。

参考文献

鏡味完二・鏡味明克（1977）『角川小事典—13 地名の語源』角川書店

「角川日本地名大辞典 16 富山県」編纂委員会、竹内理三（1979）『角川日本地名大辞典 16

富山県』角川書店

越野豊山（1999）『郷土の伝承 第八話 目桑水神様御由来』

松村明（2006）『大辞林 第三版』三省堂

下中弘（1994）『日本歴史地名体系 16 富山県の地名』平凡社

立山町（1977）『立山町史』

中葉博文（1998）『北陸地名伝承の研究』五月書房

中葉博文（2009）『越中富山地名伝承論』クレス出版

東谷村役場（1926）『東谷村史』

吉田金彦・糸井通浩 編（2004）『日本地名学を学ぶ人のために』世界思想社

吉田茂樹（1981）『日本地名語源辞典』新人物往来社

米山俊直（1974）『祇園祭』中公新書

（1998）『世界大百科事典 第2版』平凡社

参考にしたウェブサイト

「統計たてやま」

（<http://www.town.tateyama.toyama.jp/tokei/toukeitateyama2013.pdf> 2017年12月12日閲覧）

あなたの立山新発見！ 「フォトラリープロジェクト」

富山大学人文学部 文化人類学研究室 藤本ゼミ 3年

北原拓実 佐藤宏子 富奈緒 迫間唯 伴聡一郎

深井美希 福田響介 藤原倭太 山浦裕稀 山本卓也



目次

1	プラン概要	1
2	提案理由	2
2-1	立山町における自転車アクティビティの活性化	
2-2	サイクリングマップの再活用	
2-3	世界的な SNS の流行	
3	先行事例	4
3-1	「阿蘇んではいよフォトラリー」	
3-2	氷見市のレンタサイクリング	
4	実施案	6
4-1	立山町サイクリングマップとは	
4-2	レンタルサイクルについて	
4-3	フォトラリーの参加方法について	
4-4	撮影スポット	
4-5	景品について	
5	メリットとデメリット	12
5-1	メリット	
5-2	デメリットと改善策	
6	まとめと今後の展望	13
6-1	まとめ	
6-2	今後の展望	

1.プラン概要

立山町は、山村部・平野部ともに自然が豊かで、立山信仰をはじめとする歴史ある文化の感じられるまちである。そこで私たちはそうした立山町の魅力を、実際にその場所に足を運んで直接感じてもらい、さらに広く発信していけるような取り組みを考えた。

まず町の住民たちが立山町の魅力を（再）認識、（再）発見していくことが重要だと考え、今回の「まちなかから山村支援」というテーマのもと、まちなかに拠点を置きながら、立山町を盛り上げていく取り組みとして、フォトラリープロジェクトを提案する。幅広い年齢層をターゲットとし、より多くの方に気軽に参加してもらえることを目指す。本プロジェクトでは、近年、絶大な影響力を持つようになって来ている SNS¹⁸¹をうまく活用し、参

¹⁸¹ Social Networking Service。社会的なネットワークをインターネット上で構築する環境を提供するサービスのこと。LINE,Facebook,instagram などがよく知られる。

加者に写真を添えて SNS 上に投稿してもらうことで、立山町の魅力を参加者以外の人にもより広く知ってもらおうという狙いがある。

現在すでにある立山町サイクリングマップにはいくつもの撮影スポットが掲載されている。このスポットで撮影された写真でスタンプラリーならぬフォトラリーを実施する。指定された数だけ写真を撮ると、立山ブランド¹⁸²の商品や五百石の商店街¹⁸³の商品など、ご当地商品を景品としてもらえるというものである。車では一瞬で通りすぎてしまう風景や里山の暮らしを、サイクリングを通じてゆったりと肌で感じてもらい、かつ写真を撮ることで SNS への投稿の増加が期待できる。また景品獲得という目的を置くことで、サイクリングへの意欲を高め、景色とはまた違った立山町の魅力も感じてもらえると考えている。

近年の SNS による情報の拡散力は大きく、20 代以下の若者を中心に、年代問わず活発な情報拡散が行われている。サイクリングに関しても、若者から年配の方まで広く行われており、このことは立山アルペンヒルクライム¹⁸⁴の参加者からもうかがえる。そのため、フォトラリープロジェクトは幅広い年齢層がターゲットとなる。そしてさらなるターゲットの拡大を目指し、自転車の貸し出しも併せて提案する。自転車の貸し出し場所を新たに設置し、誰でもサイクリングができる状態を整え、フォトラリーへの参加やサイクリングマップの利用促進を目指す。

2.提案理由

現在の立山町では、室堂、雪の大谷、弥陀ヶ原、黒部ダムといった、立山町の平野部と山村部が直接関わるのが難しい観光スポットばかりが町のホームページその他で宣伝されている。

しかし、規模は小さくなるとはいえ、“山村部”にも観光資源は確実に存在する。ただ、それらは外部の人々にはもちろん、平野部に住む人々にも存在が十分認知されていない。立山ブランドも同様で、著名ないくつかの商品に関してはよく知られ、観光客が購入してい

¹⁸² 「立山生まれ」の知名度の向上と販路拡大に向けて、2011 年から認定が始まった地域ブランド。立山シフォン、立山権現かんもち、越中瀬戸焼、立山のちから米など現在 14 品が認定されており、どれも「安心安全」「環境への配慮」「立山らしさ」にこだわった、作り手の誇りが詰まった品ばかりである。

¹⁸³ 五百石の天満宮前交差点を南北に走る通りに位置し、おおよそ五百石 2 区から五百石 3 区までを指す。50 年以上前には食料品、日用品、衣類など、100 軒以上の商店が並び立山町の中心商店街として繁栄していた。近年、高齢化や後継者不足のため、現在約 20 軒に店舗数が減少している。

¹⁸⁴ 過去 2 回、2013 年 6 月 23 日と 2014 年 6 月 22 日に行われた自転車の大会。美女平から室堂ターミナルを走行するタイムトライアルで、募集人数が過去 2 回で 200 人から 350 人と増加するなど人気を博している。

くこともあるとはいえ、地元の人が存在の認知と消費を十分できていないと考えられる。
それらの現状を踏まえ、今回この提案に至った理由を大きく分けて3つ挙げる。

2-1 立山町における自転車アクティビティの活性化

2013年と2014年に行われた『立山アルペンヒルクライム』は盛況で、それに伴ってか、モンベルヴィレッジ立山¹⁸⁵では自転車製品が積極的に取り扱われている。また、外部のサイクリスト向けに立山サイクリングマップも制作されている。このように、現在立山町は“自転車の町”という属性が徐々に付与されている過程にある。

2-2 サイクリングマップの再活用

“自転車の町”という新たな観光資源をさらに発展させていくには、地元住民がその価値を認識し、積極的に発信することが重要となってくる。ただ、サイクリスト向けに制作されているサイクリングマップは一般の町民が実践するには少し敷居が高い。また、何の特典もなくは、興味のない町民はほとんど乗ってくることはないだろう。

そこで、チェックポイントを設け、その場所で写真を撮って各チェックポイントを回り、その写真を提示することで景品が貰えるというシステムを組み込むことによってこの懸念の解消を見込んでいる。

そしてサイクリングマップを活用することで、大きな利点となるのはコストの小ささである。立山町にはすでにサイクリングマップがあるが、昨年発行されたところでまだ十分活用されていないという印象を受けた。そのサイクリングマップを今回のフォトラリーのマップに活かし、サイクリングコースの参考にできるのではないかと考えた。そうすることで、一からマップを作成する手間がいらず、現在あるものを活かすため費用が抑えられる。コストの小ささは実践のしやすさへ直結するものである。

2-3 世界的な SNS の流行

スマホでの簡単な写真撮影やアプリの進化に伴い、写真や動画が容易に共有できるようになった。また、SNSには良い記事だと思ったらそれを表現できる「いいね」¹⁸⁶や「シェア」¹⁸⁷「リツイート」¹⁸⁸などの機能があり、爆発的な拡散力を発揮する。それらにより、これまで文字中心だったコミュニケーションが、写真や動画というよりビジュアルなコミュニケーションに変化していった。そしてビジュアルコミュニケーションが広まり、より

¹⁸⁵ 立山町五郎丸所在の大型アウトドア用品店。立山 IC から比較的近い立地で山岳観光の拠点になることを目指し、2015年9月18日に県道6号線沿いに開店した。

¹⁸⁶ Facebook に存在する自分が良いと感じた他のユーザーの投稿に肯定的な意思を示すことができる機能。

¹⁸⁷ Facebook に存在する自分が良いと感じた他のユーザーの投稿を再投稿できる機能。

¹⁸⁸ Twitter に存在する自分が良いと感じた他のユーザーの投稿を再投稿できる機能。

リアリティーのある体験を共有することがユーザー間で「自分もこうありたい」という憧れ、興味関心、消費意欲を相互に喚起しており、購買や参加行動のきっかけとなっている。

“写真を撮る”という行為は、上記のような昨今の SNS ブームからのアドバンテージを見込むことができる。特に若いアクティビティ参加者が SNS 上にタグ付¹⁸⁹をされた写真を投稿することにより、参加者の生の声を見つけやすくなり、実施における不満を早期に解消できるようになる他、行政のアカウントがその投稿を共有することができれば、広報としてそのまま利用することも可能である。

したがってフォトラリーに取り組むことで、その参加者に立山町の名所を SNS に投稿してもらい、立山町の知名度向上・宣伝に活用するというのが狙いである。SNS 利用者には若者が多いことから、若者の誘致にも効果があるのではないかと考えられる。

立山町にある観光資源の数々を地元住民、特に富山市へのベッドタウンとして居住する平野部の比較的若い人々が認識することによって、立山町の内部からそれらの資源の保護および活性化をアクティビティとして今回この自転車と写真を組み合わせた、『立山新発見フォトラリープロジェクト』で行ってもらうことがねらいである。

3.先行事例

3-1「阿蘇んではいよフォトラリー」

フォトラリーの取り組みの事例として「阿蘇んではいよフォトラリー」を紹介する。熊本地震から 1 年が経ち、甚大な被害を受けた熊本県阿蘇市にも少しずつ観光客が戻りつつある。しかし、まだまだ震災の爪あとは残っており、苦しんでいる人も大勢いる。そんな阿蘇において、阿蘇を多くの人に知ってもらい地域振興につなげようという思いで企画されたのがこのフォトラリーである。

2017 年 5 月 20 日から 6 月 30 日に開催され、参加者は Facebook、Twitter、instagram のいずれかの公式サイトをフォローして、各 SNS に所定の ハッシュタグを付けた写真を公開表示で投稿することでイベントに参加することができた。公式サイトにはおすすめスポットがまとめられたマップが用意されている。期間内に投稿された写真から無作為抽出で景品が当たるというものである。フォトコンテストのような阿蘇らしい写真ではなく、参加者が見つけたとおきの 1 枚を SNS で発信することによって、皆に知ってほしいという思いが込められている。



< 参考リンク > くまきゅー

<http://kumaque.com/events/8091>

¹⁸⁹ instagram や Twitter などの SNS の投稿時に特定の人物、場所、モノの名前などの言葉そのものをリンクにすることで検索・共有を容易にすることができる機能。

3-2 氷見市のレンタサイクリング

富山県西部の氷見市で行われているサイクリングツアーについて紹介する。このサイクリングツアーは氷見市が貸し出しているレンタサイクルを利用して氷見の自然豊かな名所や食事ところを巡るのを市が提案するものだ。

氷見観光協会に問い合わせたところ、過去 5 年間のレンタサイクルの利用者数を教えていただいた。利用者数は 2017 年の 950 人から右肩上がりに増加しており、昨年度は 1975 人、今年度は 10 月 31 日現在で 1590 人に達している。利用者は老若男女、幅広い世代が利用しているようだ。月別の利用者数の推移については 5 月、8 月が多い傾向にある。月 320 台くらい貸し出しがある。また秋の行楽シーズン（9、10 月）は月 250 台貸し出されているそうだ。

レンタサイクルは氷見駅構内にある氷見観光協会と道の駅氷見、JR 雨晴駅の 3 ヶ所で借りることができ、返却もその 3 ヶ所で行うことができる。一般の自転車と電動アシスト付き自転車の 2 種類が用意されており、それぞれ 200 円と 500 円で貸し出されている。レンタサイクルの営業期間は 4 月から 12 月中旬までで、1 月から 3 月までは冬季休業に入る。電動アシスト付き自転車は普段運動しない方でも簡単に乗ることができ、遠出する際はお勧めだそうだ。

紹介されているモデルコースには植物園や神社、絶景を眺めることのできる公園などバリエーション豊富な見所が用意されており 1 日遊べる充実したものだ。立山町で巡ることのできるような場所と類似しており、おおいに参考になるのではないだろうか。

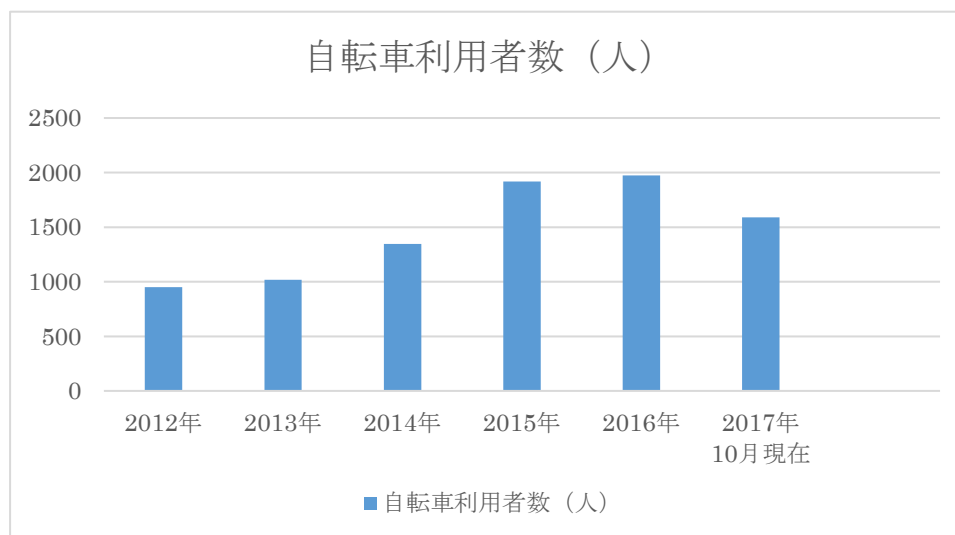


図 1 氷見市の年度別レンタルサイクルの利用者数

< 参考リンク > きときとひみどっとこむ

<https://www.kitokitohimi.com/site/tanoshimu/modelcourse2.html>

4.実施案

4-1 立山町サイクリングマップとは

立山町サイクリングマップは、立山山麓の大自然を、自転車に乗りながら体感してもらえよう 2016 年に株式会社たてやまにより作成された、自転車で巡るためのマップである。初級・上級コースがあり、それぞれに 2 つずつの回り方がある。

このサイクリングマップには、撮影スポットや入浴スポット、グルメスポットやお土産スポットなどもあわせて掲載されている。さらにこのマップには QR コードがついており、スマホ



写真 1

立山町サイクリングマップ

で読み取ると詳しく便利なマップも出てくるようになっている。そのためサイクリストだけでなく、もっと幅広く一般の人が活用できるようにしなければもったい

ないと感じられた。まちおこしのためにまったく新しい案も必要だが、今、立山町にある資源をベースにして、賑わいを創出していくことも大切だと私たちは考える。フォトラリープロジェクトを実施することで、サイクリングマップをより多くの人の手に取ってもらい、地元の人にはもちろん、それ以外の人にも、立山の魅力や大自然をより感じてもらう。

4-2 レンタサイクルについて

自転車の貸し出しを行う場所の候補として、五百石駅とグリーンパーク吉峰を挙げる。五百石駅は町の中心地として利用している人が多く、また立山町のサイクリングマップにも記載されているためである。また、グリーンパーク吉峰では、レンタサイクルを実施しているため、グリーンパーク吉峰からも自転車の貸し出しができるようにする。五百石駅で借りた自転車は、グリーンパーク吉峰で返却し、逆にグリーンパーク吉峰で借りて五百石駅で返却できるようにする。

自転車の貸し出し数は 10 台ほどで、電動自転車 3 台、ロードバイク 4 台、シティサイクル 3 台を提案する。これは家族で借りに来た場合でも対応できるようにとの考えからである。貸し出しは 9 時～17 時までとし、自転車を借りる時に利用者は 1000 円支払い、17 時までに返却してもらえたら 500 円返すようにする。

表 1 レンタサイクルの購入コスト

	値段(1 台当たり)	台数	合計
電動自転車	80,000~	3	240,000
ロードバイク	30,000~	4	120,000
シティサイクル	20,000~	3	60,000
			420,000

(上記の予算表は、おおよその価格から算出したものである。)

4-3 フォトラリーの参加方法について

参加の手順（予定）

- ①五百石駅とグリーンパーク吉峰でフォトラリー参加の申し込みをする。
- ②サイクリングマップに載っている撮影スポットを自転車で巡りながら、写真撮影をする。
- ③撮った写真は SNS で「#たてやま新発見」のハッシュタグをつけ、投稿する（任意）。
- ④巡った撮影スポットで撮った写真を、フォトラリー参加申し込みした場所で確認してもらい、景品をもらう。

フォトラリーに参加するにはフォトラリー参加申込書に記入してもらう。申し込みは上記にもあるように、五百石駅とグリーンパーク吉峰で行う。レンタサイクル利用の人は貸し出し場所と一緒の場所で、フォトラリーの申し込みが行える。自分の自転車をもっている人も、同じ場所に参加申し込みをする。また、レンタサイクルとフォトラリーいずれも、前日までインターネットでの申し込みを受け付ける。その場合でも、当日、受付には来てもらう。後述するが、参加者には不正防止のためのカードを手渡すためである。参加の受付は回る時間を考慮し、上級コースは 13 時まで、初級コースは 14 時までの受付とする。

また、フォトラリーの申し込みをした際に、係りの人が自転車の安全確認を行う。安全にサイクリングを楽しんでもらうため、ブレーキは効くか、ライトはしっかり点くか、タイヤの空気は入っているかといった確認項目を用意する。安全確認の終了後、日付の書かれた立山町登録カードを渡す。日付の書かれたカードは、撮影スポットの写真を撮る際に一緒に写してもらう。このカードが写った写真を五百石駅かグリーンパーク吉峰の受付に提示してもらい、4ヶ所以上のスポットの写真で、景品が獲得できる。日付の書かれたカードを渡すことで、予め撮られた写真やネットからの引用写真の提示などによる景品の不正受け取りを防ぐことができる。

景品はフォトラリー終了時に受付でもらうか、後日受付に来てもらえるようにする。後日受け取る場合は、参加した際にもらった日付の書かれたカードを受付に渡して景品と交換する。

4-4 撮影スポット(数字は地図上と一致)

- | | | |
|------------------|-----------------|------|
| ①大観峰自然公園 | ⑥雄山神社（岩峠寺・前立社檀） | ⑪称名滝 |
| ②岩室の滝 | ⑦横江頭首工ダム | |
| ③白岩川ダム | ⑧千垣鉄橋 | |
| ④富山地区クリーンセンター展望台 | ⑨雄山神社（芦峠中宮） | |
| ⑤雄山神社 踏切大橋 | ⑩立山大橋 | |



① 大観峰自然公園



② 岩室の滝



⑥ 雄山神社(岩峠寺・前立社壇)



⑨ 雄山神社(芦峠中宮)



⑪ 称名滝

これらの場所では、立山の歴史や、大迫力の自然を感じることができる。写真を撮るためのカメラやスマホは手放せないスポットばかりである。

コースは全部で4つあるため、参加者の体力や気分に合わせて選ぶことができる。

☆初級 A コース



☆初級 A' コース （提案者からの提案）

初級 A コースのスタートを五百石駅とした場合、③白岩川ダム、⑥雄山神社（岩嶺寺・前立社壇）、⑤雄山神社踏切横鉄橋、④富山地区広域圏事務組合グリーンセンター展望台の順に撮影スポットをめぐる事が出来る。

☆初級 B コース



富山地方鉄道で自転車を乗り入れて立山駅からスタートし、五百石駅でゴールするコース。⑩立山大橋から始まり、⑨雄山神社（芦嶺中宮）、⑧千垣鉄橋、⑦横江頭首工ダム、⑥雄山神社（岩嶺寺・前立社壇）、⑤雄山神社踏切横鉄橋、④富山地区広域圏事務組合グリーンセンター展望台と 7 ヶ所の撮影スポットをめぐる事が出来る。

☆上級 A コース



昆虫王国立山自然ふれあい館をスタートとゴールとするコース。①大観峰から始まり、②岩室の滝、③白岩川ダム、⑦横江頭首工ダム、⑧千垣鉄橋、⑨雄山神社（芦峯中宮）、⑩立山大橋、⑪称名滝、⑥雄山神社（岩峯寺・前立社壇）、⑤雄山神社踏切横鉄橋、④富山地区広域圏事務組合グリーンセンター展望台と11ヶ所の撮影スポットをめぐる事が出来る最も長距離なコースである。

☆上級 B コース



立山グリーンパーク吉峰をスタートとゴールにしたコース。⑦横江頭首工ダムから始まり、⑧千垣鉄橋、⑨雄山神社（芦峯中宮）、⑩立山大橋、⑪称名滝と撮影スポットをめぐる事が出来る。

今はあらかじめ撮影スポットが決められているが、ゆくゆくは参加者から撮影スポットを募集する。参加した人それぞれの立山を「新発見」してもらうことで、サイクリングのリピーターを増やし、立山の山村に継続して賑わいを創ることにつながる。

4-5 景品について

サイクリングマップには 4 つのルートが載っている。撮影スポットの数に応じてもらえる景品を変える。4 ヶ所では 500 円分程度の商品、7 ヶ所では 700 円分程度の商品、11 ヶ所では 1000 円分程度の商品を選ぶことが出来る。また、時期によって景品を変えることでリピーターを増やすことを提案する。

参加者の人々に立山町の物産を認知してもらうため、立山ブランドや五百石商店街の商品をフォトラリープロジェクトの参加者にプレゼントする。立山ブランドは、立山らしさや安全・信頼性などの基準をクリアした立山ならではの商品である。しかし、今のところその知名度は必ずしも高いとはいえない。五百石商店街の品物も、そこのお店でしか売っていない、ユニークな商品がいくつもある。プレゼントという形で、今まで知らなかった立山のおいしい食べ物や魅力に気づいてもらい、まちなかに足繁く通ってもらうのがねらいである。具体的な案としては以下のとおりである。

◇立山ブランド

立山シフォンやかあさん漬け、福竹茶、ナチュラルミネラルウォーター、立山三六そば、ラ・フランスジュース、立山もも、立山のちから米、立山権現かんもち、立山の農家が作ったみそ、越中瀬戸焼、おかゆっこしろがゆなど。

◇五百石商店街の商品

立山とうふ、おにぎり地蔵(ながかわ)、らい鳥っこ、立山さんぼ道(北海屋菓子舗)、雄山最中、立山くる美(細川大日堂)などの商店街で売られているお菓子や、いしはら百貨店のハンカチやタオルなど。



ラ・フランスジュース



立山シフォン



立山とうふ



らい鳥っ子

<参考リンク>

立山ブランド <http://kanko.town.tateyama.toyama.jp/stroll/bland05.html>

和洋菓子ながかわ http://tateyamatofu.com/nagakawa/tateyama_tofu.html

北海屋菓子舗 <https://www.shokokai.or.jp/16/163231S0004/index.htm>

5. メリットとデメリット

5-1 メリット

今回のプロジェクトのメリットとしては、以下の点が挙げられる。

- ・低コストで実現可能であること
- ・既存のサイクリングマップや立山ブランドを活用することによりそれらの宣伝効果が見込めるとともに、実施がしやすい
- ・子供から大人、年配の方まで幅広い年齢層の誘致が見込める
- ・SNS を利用することにより、SNS に関心の高い若者層を多く取り込むことができる
- ・SNS による立山町の宣伝ができる
- ・これまで町民も知らなかった立山町の魅力を再発見できる、自分たちの町をより深く知ることができる
- ・貰える景品を立山町の特産物にすることで立山町の景色だけでなく食の魅力も伝わる

どのような層の人々の誘致が見込めるかについては自転車を利用することにより、サイクリングが好きな人はもちろん、ゆっくり自然を楽しみたい人、写真を撮ることが好きな人たちが訪れることが考えられる。また、フォトスポットをいくつか回ると景品が貰えるというスタンプラリーの要素を盛り込むことで、子供たちもゲーム感覚で楽しめることから、家族連れの参加も見込めるであろう。年齢層については、SNS 映えするスポットを設定することにより、より SNS に関心の高い若者層の集客が期待される。さらに、SNS に撮った写真を投稿してもらうことにより、参加者による立山町の幅広い宣伝になることが考えられる。

また、町民の方たちにとっては、自分たちの町の魅力を再発見できるいい機会になるのではないだろうか。まちなかに住んでいる人々は、山間部を訪れる機会がなかなかないと思うが、プロジェクトに参加することでその魅力を知ることができるのではないかと考える。

また、フォトスポットを巡ってもらい、立山の自然の魅力を知ってもらうだけでなく景品を地元の特産物にすることで、立山町の自然と食という 2 つの視点からの魅力を多くの人に伝えることができると考えた。

5-2 デメリットと改善策

今回のプロジェクトのデメリットとして挙げられるのは、コース内容が毎回同じだと飽きられてしまい“リピーターがつきにくいのではないかと”という点である。この問題の解決策としては、“季節ごとにフォトスポットの場所を変える”“一定期間で貰える景品を変える”などが挙げられる。定期的にコースの内容を変えることによって、観光客が何度きても飽きないものになることが考えられる。

また、他のデメリットとしては“住民の関心をそれほど高められないのではないかと”という点がある。この問題の解決策としては、新たなフォトスポットを住民から提案してもらうことで、住民のこのプロジェクトに対する関心も高めることができ、かつ定期的にコースの内容を変えることができる。このような対策によって、観光客が何度来ても飽きないものになることが考えられる。

6.まとめと今後の展望

6-1 まとめ

本プロジェクトは、SNS の拡散力とコストの低いレンタサイクルを組み合わせることで、立山町の魅力を町の人が再発見してもらうことを目的として提案した。また一度だけの企画ではなく継続して行うことで立山町の外からも山村に足を運んでもらえるようになれば、大きな山村支援につながる可能性が考えられる。

6-2 今後の展望

本プロジェクトによりサイクリングだけでなく、立山町の他の事業とも結びつけることができると考えている。例えば空家をフォトラリー参加者が休憩できるように改築すれば空家の再利用になる。また休憩施設としてカフェを開けばフォトラリー参加者がさらに増える可能性が考えられる。市街地から地元の人が山村へ集まってくるかもしれない。また移住希望者の中からカフェや飲食店経営を希望する人を募れば、立山町の移住者増にもつながる。



あなたの立山新発見！ フォトラリープロジェクト

富山大学 社会文化コース文化人類学分野
藤本ゼミ



立山町の観光スポット



室堂



黒部ダム

山村部の観光スポット



岩室の滝



雄山神社
岩嶺寺前立社壇

フォトラリー



フォトラリーとは

(スタンプラリー)

一定のテーマで
スタンプを集めて回る企画



スタンプを写真に置き換えたもの

フォトラリー事例

越前おおの秋のフォトラリー

福井県大野市

2017年10月21日～12月20日開催

- ・指定された6つの撮影スポットから
3ヶ所の紅葉の写真を撮影し応募。
- ・参加者には町中の飲食店で使える
100円引きのクーポン券
さらに応募者の中から10名に抽選で
30キロのコシヒカリを進呈。



(越前おおの観光ガイドホーム
ページより)

フォトラリープロジェクトの概要

サイクリング

立山の景色でフォトラリー

ご当地商品をゲット！

なぜサイクリングなのか？

- ・立山アルペンヒルクライムの開催
- ・立山グリーンパーク吉峰のレンタサイクル
- ・サイクリングマップの作成
- ・モンベルビレッジ

自転車の町



立山アルペンヒルクライム

・2013年と2014年に開催

・2つのコースが用意

・貴重な自然を堪能

2013年の参加者101人



2014年の参加者163人



(立山アルペンヒルクライム2014年
公式サイトより)

サイクリングマップとは？

サイクリングコースだけでなく...

- ・撮影スポット
- ・グルメスポット
- ・入浴スポット



他の情報も活用しなきゃもったいない！

なぜフォトラリーなのか？

①サイクリング
をより楽しむ
ことができる

②新たな立山
町の魅力を
発見できる

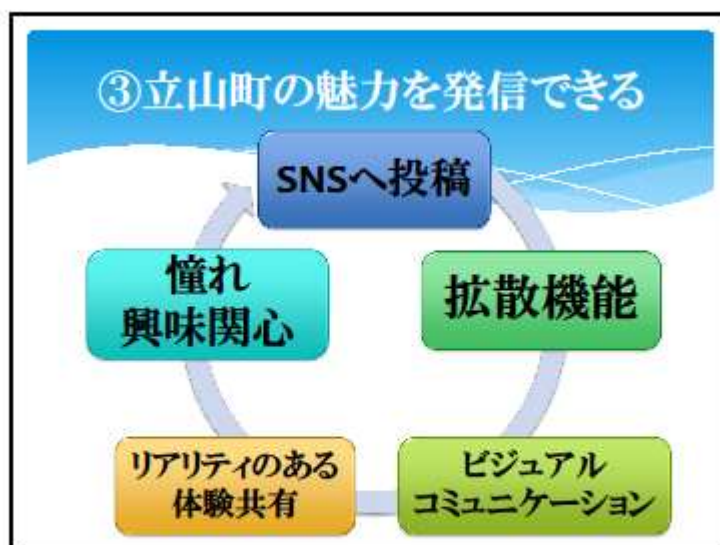
③立山町の
魅力を発信
できる

①サイクリングをより楽しむことが
できる

ゆっくりと自然を
楽しめる

ゲーム感覚

一般の人参加しやすい





SNSを活用した町おこしの先行事例


しんべし 後志フェイスブック祭り

Facebookに投稿すれば、温泉入浴や定食が無料

実施結果
約1/20の稼働と経費で
約20倍の情報発信

(後志フェイスブック祭りーSNSを活用した全国初の地域活性化イベントーより)

SNSでの宣伝は費用がかからないだけでなく、情報拡散力も大きい！



フォトラリープロジェクト詳細

- ・サイクリングコースについて
- ・景品について
- ・フォトラリーの手続き方法
- ・レンタサイクルについて
- ・収支見積もり

サイクリングコースについて

初級A・Bコース

Aコース

- ・走行距離 35km
- ・想定走行時間 2時間20分



初めて体験する方向け



上級A・Bコース

Aコース

- ・走行距離 84km
- ・想定走行時間 5時間36分



慣れている方向け

参加者の体力や気分に合
わせてコースが選べる！

・初級Bコース

富山地区広域圏事務組合クリーンセンター展望台

到達点: 五百石駅

雄山神社踏切横鉄橋

雄山神社 (岩峯寺・前立社壇)

横江頭首工ダム

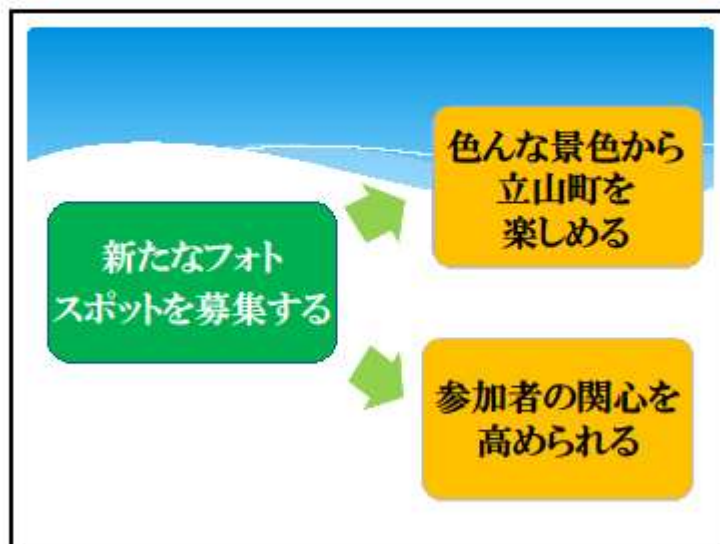
千垣鉄橋

立山駅

雄山神社 (芦峰中宮)

立山大橋

tateyama



フォトラリーでもらえる景品について

- ・4ヶ所…500円程度の商品
- ・7ヶ所…700円程度の商品
- ・11ヶ所…1000円程度の商品

時期によって景品を変える

↓

- ・景品のマンネリ化によるリピーターの減少を防ぐ
- ・より多くの商品を知ってもらえる

草餅 (食べログより)

立山もも
(立山町ホームページより)

景品① 立山ブランド

・立山生まれの商品の知名度向上と販路拡大に向けて、2011年から認定が始まった地域ブランド

・安全性や信頼性、立らしさなどの基準をクリアした立山ならではの商品



(立山町公式ホームページより)

立山ブランド



かあさん漬け



立山三六そば

(立山町公式ホームページより)

景品② 五百石商店街の商品



立山とうふ

(立山町公式ホームページより)



らい鳥っ子

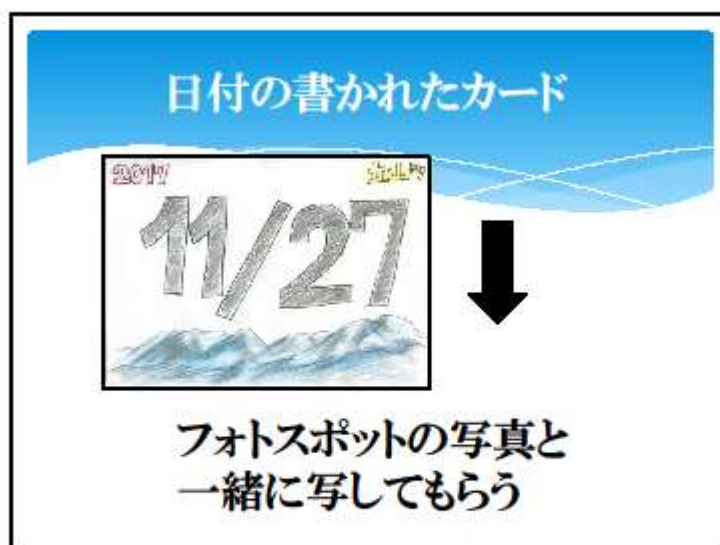
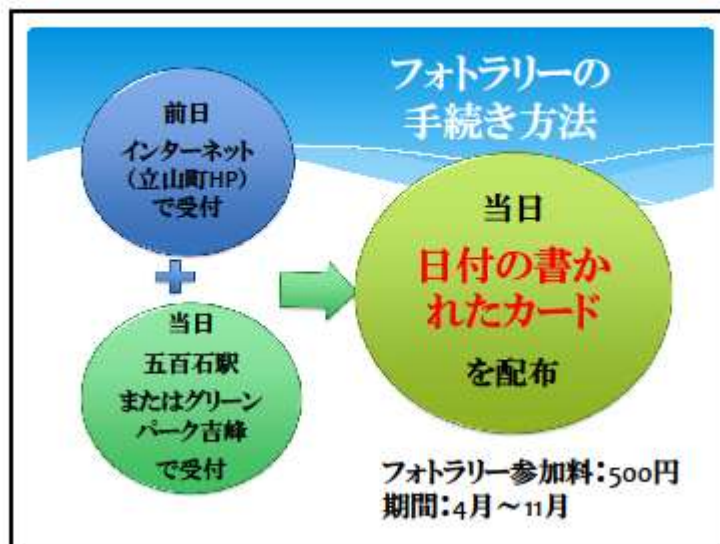
五百石商店街の商品



雄山最中



ハンカチ



景品の受け取り方法

写真を
受付に提示



景品を
受け取り

- 方法①: フォトライター終了後に受付で受け取る
方法②: 後日、受付に来て景品を受け取る

レンタサイクルについて

自転車の貸し出し場所候補地

- ・五百石駅
- ・グリーンパーク吉峰



※上記二ヶ所で相互に
貸し出し・返却することができる

自転車の貸し出し数

ロードバイク10台
ヘルメット10個



(PINARELLO JAPAN)より

表: レンタサイクルの購入コスト(上記の予算はおおよその価格から算出したものである)

	値段	数	計
ロードバイク代	¥50,000	10	¥500,000
ヘルメット代	¥4,000	10	¥40,000
		合計	¥540,000

収支見積み

支出

	値段	人数	計
ロードバイク代	¥50,000	10	¥500,000
ヘルメット代	¥4,000	10	¥40,000
農具代	¥500	60	¥30,000
	¥700	60	¥42,000
	¥1,000	60	¥60,000
		合計	¥672,000

収入

	値段	人数	計
レンタサイクル代	¥2,000	75	¥150,000
フォトラリー参加料	¥500	150	¥75,000
		合計	¥225,000

約3年間で支出を上回る

支出

	値段	人数	計
ロードバイク代	¥50,000	10	¥500,000
ヘルメット代	¥4,000	10	¥40,000
農産品代	¥500	60	¥30,000
	¥700	60	¥42,000
	¥1,000	60	¥60,000
合計			¥672,000

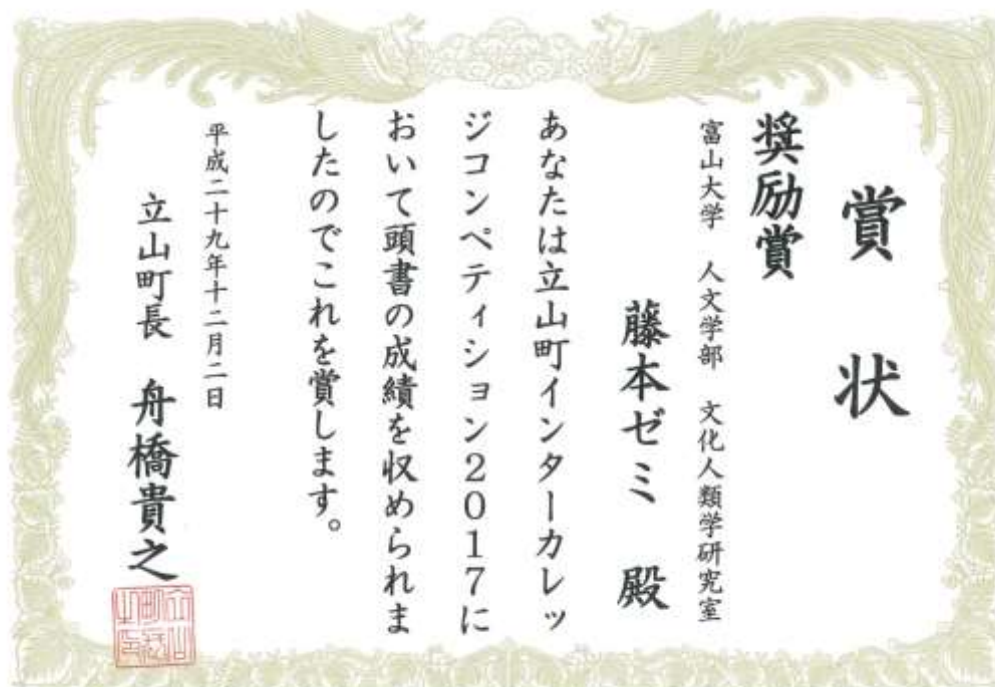
町全体の収入

	値段	人数	計
レンタサイクル代	¥2,000	75	¥150,000
フォトラリー参加料	¥500	150	¥75,000
農産・土産代	¥1,500	150	¥225,000
合計			¥450,000

約2年間で支出を上回る

まとめ

- * 山村部の魅力を再発見できる。
- * 「自転車の町」という新たな立山町のイメージを確立できる。
- * 一過性のイベントではなく、継続して行うことで長期にわたる山村支援ができる。





立山町の皆様、調査にご協力いただきありがとうございました！！

地域社会の文化人類学的調査 27
 霊峰に抱かれ生きる人々と伝統
 —立山町の調査記録—
 (電子版)

発行日：2018 年 3 月 15 日
 編集：藤本 武・野澤豊一
 発行：富山大学人文学部文化人類学研究室
 〒930-8555 富山市五福 3190
 電話：076-445-6186
 E-mail：anthro@hmt.u-toyama.ac.jp
 印刷：株式会社グラフ
 〒931-8453 富山市中田 45-63